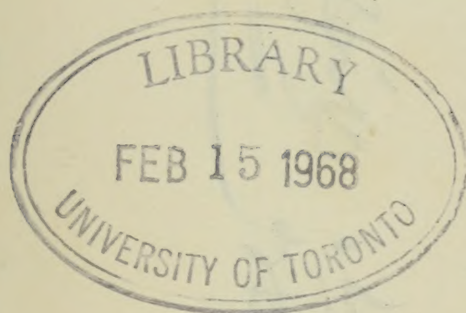
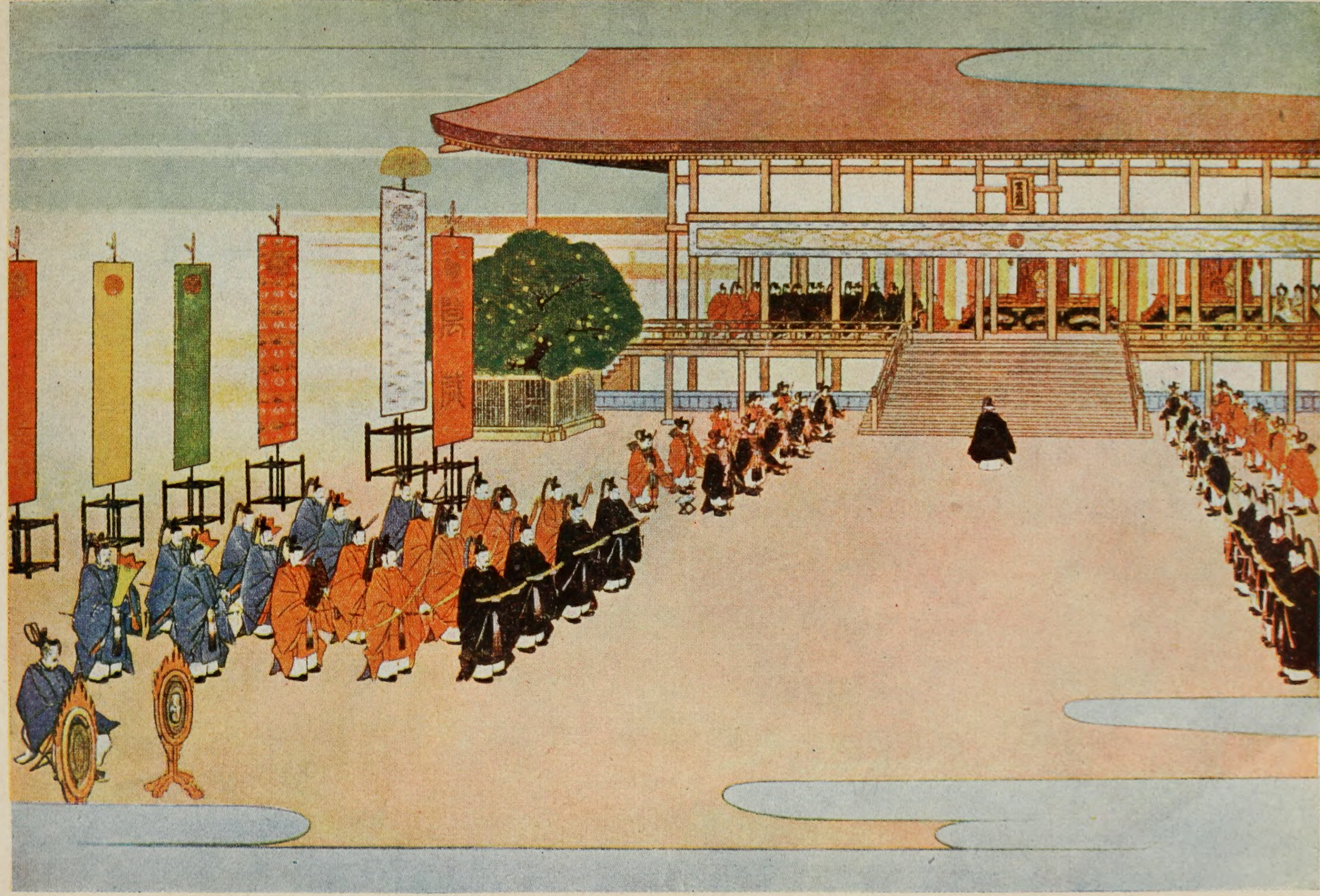
文学博士高野辰之著

歌舞伎演劇講話

東京宝文館発行


LIBRARY
FEB 15 1968
UNIVERSITY OF TORONTO

御即位禮紫宸殿之儀



○

此の書は私が大正十五年から今昭和四年にかけての講演筆記または新聞や雜誌に掲げたものの中から、歌舞と演劇とに關するものだけを取出して、それに多少の删修と補註とを加へたものです。書名に講話の二字を附けたのは、自己の研究を發表する場合の如くに、理路の井然と精確とを主目的にせず、聽者及び讀者にとつて、成るべくこれに對する興味の涌くやうにと心掛けて立案もし、執筆も致してあるからです。旣ち平易と趣味とに意は用ひてあるものの、一昨々年出した「日本演劇の研究」昨年出した「日本演劇の研究第二集」此の二書と同一性質のものでして、平易と申しても決して通俗を旨としたものではありません。所收の創造藝術・音樂と感化・萬葉集の遊女・歌舞演劇書追憶・能狂言の說明等には、涯分の熱誠と努力とをこめて、專門的な說述もした積りです。

「近松が世話淨瑠璃の初作」と「淺間淨瑠璃」とは往年刊行の「歌舞音曲考說」中のもの

です。遺憾ながら此の書は古書肆の店頭にも稀で、それで再版が出來さうもないので、此の講話の中に加へました。終の「第二の元祿時代」は大正の中年、國富頓に增大して、上下相共に奢侈に流れた時に、警告の意を寓して講演したものです。緊縮が必要視せられる現下にあつては、捨て難い心地がして之を附錄にしました。

歌舞又は演劇に關する書は、やゝもすれば故實澤山で、通といふに走り、樂屋落といふに墮し易く、然らざるものは、理論を逑立てる事に終始して、遂に歌舞演劇書をして面白かるべくして面白からぬものたらしめてゐるやうに思ひます。私は此の兩極端に馳せず、其の中間の興味も饒だといふ地帶を通ることに心掛けました。けれども豫期の如くには行きませんでした。

別段參考にした本もありませんが、「音樂と感化」の引例には、故神津仙三郎氏の「音樂利害」から借用したものが多いので、特に明記致して置きます。

昭和四年九月廿五日

高野辰之しるす

歌舞演劇講話

目次

第一　歌舞篇

一 御大禮の歌舞……一
　賢所の御神樂……大嘗祭……久米舞……風俗歌舞……五節舞……承安の五節舞……
　萬歳樂……太平樂
二 創造藝術……一九
三 音樂と感化……二六
　1 序說……二六
　2 音樂の利……三一
　3 音樂の害……四〇

4 音樂の種類……四七
5 受刑者と音樂……四九
6 結語……六三
四 日本佛教音藝……六五
五 佛教聖歌募集を賛す……八四
六 佛法僧鳥……九〇
七 短歌と民謠……九六
八 國歌歌詞の變遷……一一三
九 萬葉集の遊女……一一九
一〇 隆達の小歌……一四二
一一 歌謠の力……一四八
一二 江戸長唄略說……一六二
一三 異本道成寺繪詞……一八六

第二　演劇篇

一　能狂言の説明……二〇一
1　はしがき……二〇一
2　能狂言の意義……二〇三
3　能狂言の詩材……二〇八
イ　大名物……二〇九
ロ　出家・山伏物……二二三
ハ　すり・すつぱ・盗人物……二三一
ニ　低能者物……二四〇
ホ　不具者物……二四五
ヘ　醜婦物……二五四
ト　神佛・鬼畜・精靈物……二六三
チ　唐人物……二六九

4　能狂言の構造……二七三
イ　語り物……二七三
ロ　語り物に首尾を附したもの……二七五
ハ　一般構造……二八一
ニ　能狂言の終結……二八九
二　近松忌……二九二
三　近松の作品……三〇一
1　總說……三〇一
2　淨瑠璃……三〇五
3　歌舞伎脚本……三二四
四　近松が世話淨瑠璃の初作……三四七
——長町女腹切や淀鯉出世瀧德でない、やはり曾根崎心中——
五　淺間淨瑠璃……三五九

1 けいせい淺間嶽……三五九
2 奥州淺間嶽(外記節)……三六六
3 追善淺間嶽(一中節)……三六九
4 夕霞淺間嵩(一中節)……三六九
5 小夜中山淺間嶽(常磐津節)……三七三
6 妹脊塚松櫻(常磐津節)……三七五
7 其圖畫松楓(常磐津節)……三七八
8 名香淺間嶽(一中節)……三七九
9 姿見淺間嵩(一中節)……三八〇
10 留袖淺間嶽(常磐津節)……三八二
11 容觀淺間嶽(常磐津節)……三八四
12 卯華姿雪曙(富本節)……三八五
13 主誰戀山吹(富本節)……三八六
14 其俤淺間嶽(富本節)……三八八
15 戀櫻反魂香(河東節)……三九二
16 反魂香名殘錦畫(富本節)……三九二
17 初櫻淺間嶽(常磐津節)……三九三

8 けいせい淺間嶽(一中節)……三九四
9 初霞淺間嶽(清元節)……三九五
六　竹の屋劇評集……三九七
七　歌舞演劇書追憶……四〇一

〔附　錄〕

第二の元祿時代……四二五
1 元祿時代の意義　2 元祿時代と現代との類似點　3 元祿商人の驕奢と現代實業家の豪華　4 粗製濫造　5 現金小賣業者の成功　6 買占　7 轉業の危險　8 驕奢の後に來る勤儉時代

以　上

挿畫目次

賢所大前の神樂……二
久米舞……七
承安五節圖……一四・一五
五節舞圖……三
萬歳樂……一六
太平樂……一七
還城樂……三六
都風流トコトンヤレ節……四四・四五
洋樂器圖……四八
サイドドラム　パスドラム　チンパニ
ー　グロツケンスピール　フリユート
オーボエ　ワルドホルン　クラリネツ
ト　トロンペツト
ビオラ　バイオリン　ビオロンセロ
タブルベース　マンドリン　ギター
ピアノ
鳳來寺の景（錦畫）……九二
鳳來寺寫眞……九三
朗詠集古寫本……一一五
隆達の小歌寫眞……一四四・一四五
五大力繪表紙……一六五
隈取安宅松……一六八
道成寺繪表紙……一七〇
同上……一七三
奴丹前……一七四
英執着獅子……一七五
正札附根元草摺……一七八
異本道成寺繪詞寫眞……一九〇・一九一
釣狐……二〇四
二人大名……二一五

靭猿……二一九
路蓮坊……二二六
蟹山伏……二二八
末廣がり……二三三
口眞似聟……二四四
鞠蹴座頭……二四七
釣女……二五六
業平餅……二五九
金岡……二六一
蛭子大黑天……二六四
餌差十王……二六六
首引……二六八
茶盃拜……二七〇
牛馬……二七八
膏藥煉……二七九
茶壺……二九一
近松門左衞門肖像……二九八
國性爺合戰番附より……三一一
同繪入細字本挿畫……三一二・三一三
天鼓挿繪……三四二・三四三
けいせい淺間嶽挿畫……三六一・三六二
景政雷問答挿畫……三六四・三六五
傾城淺間曾我挿畫……三六八
夕霞淺間嶽繪表紙……三七一
妹脊塚松櫻……三七六
其圖畫松楓……三七九
其俤淺間嶽……三九〇
元祿人行樂圖……四三〇・四三一
元祿の呉服店……四三八・四三九

以上

第一歌舞篇

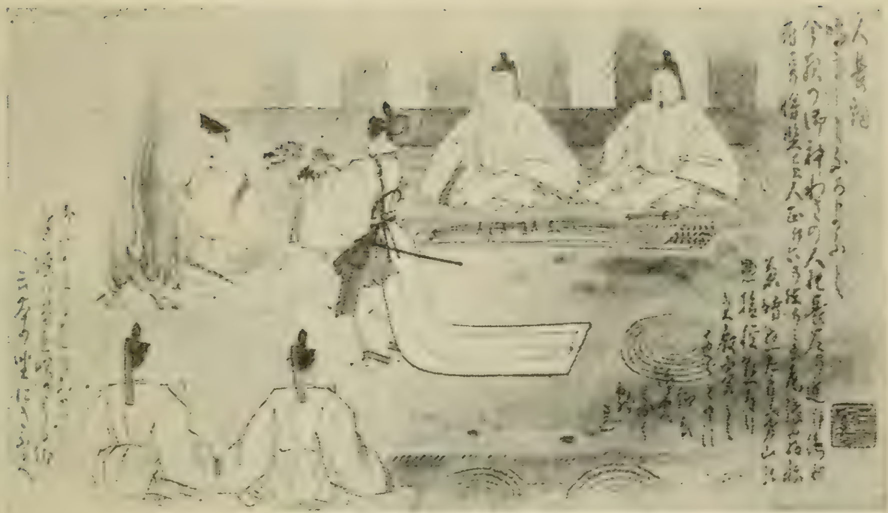
一　御大禮の歌舞

（昭和三年十一月六日東京放送所講演）

我が天皇陛下が御一代中の最大盛儀を擧げさせられます爲、宮城を出でまして、西の都に向はせ給ひ、都下幾百萬の民草が無上の歡びを以て御見送り申し上げました今日に當りまして、御大禮の歌舞に就いて申し上げることは、身に取りまして眞に光榮の至りに存じます。

御大禮中の歌舞は多端にわたりまして、短時間には其の詳細をつくすわけには參りません。よつて、歌だけで、舞が伴なはないものは、略述するといふ方針で說明することに致します。

さて生日（いくひ）の足日（たるひ）と申しませうか、無比の佳辰と申しませうか、來る十一月十日、此のよき日を以て、天皇陛下は紫宸殿に於て各宮殿下方や、高位高官の方をお側近く



(東京朝日新聞所揭)

並み立たせ、今しも黄金の實を結んで居りまする右近の橘、今しも紅葉をかざして居りまする左近の櫻、其の大庭に並み立つ御旗や裝ひ美しき威儀者の列立を前に見そなはしまし、軒廊には二千の參列者を居並べさせて、卽位の大禮をお擧げになりまするのでございます。めでたく此の御事のすみました翌日、春興殿へ奉安致してありまする賢所の大前に御拜禮あらせられますが、此の時に御神樂が奏せられまして、人長と申す、いはば其の日の樂長に當ります者が、巻纓の冠、白地青摺の闕腋の袍、下襲、黑半臂、單をかさね、赤大口の上に白地の表袴をつけ、石帶をして太刀を佩き、鏡に象つた輪の取りつけてあ

る榊の枝を持つて庭燎の前で舞ひまする。其の舞は採物の歌と申すものの終と、其駒と申す歌の擧拍子の處とに舞ふのであります。歌ひ手は本方と末方とに分れて居り、樂器は和琴・神樂笛・篳篥の三つでございます。其の歌の詞を申しましては甚だ長くなりますので、歌も舞も相共に極めて莊重森嚴なものであると漏れ承つて居ることだけを申し上げておきます。

次は十四日の大嘗祭の歌舞であります。當日天皇陛下が先づ悠紀殿へ午後七時半頃に進御遊ばしますと承りますが、其の前に、膳屋で樂官が悠紀の稻舂歌(註一)を謠ひ、女官は神饌を調理致しますが、これには舞がございません。天皇皇后兩陛下、皇族方諸殿下を始めまゐらせ、以下それ〳〵の官人が座に着きますと、國栖の古風と申すもの(註二)を奏します。これはもと應神天皇が吉野へ行幸遊ばした時、吉野川のほとりに住んでゐました國栖と申す一種族が、結構な酒を献上しまして、これは横臼をこしらへて釀した酒でございますが、どうぞうまく召上つて下さいま

し、私どもの父と仰ぐ大君さまよといふ意味の歌を謡ひ、謡ひ終つてからは口を撃つて、仰いで咲つたといふのでありますが、これが吉例となつて、おめでたい儀式の時には、參つて歌と笛とを奏したのでございました。　いつしか此の國栖は參らぬことになり、古い時代から樂人が代つて歌笛を奏することになりましたが、今回もやはりさう行はせられるのでありまして、舞といふ程のものはございません。　それが終ると、悠紀地方の風俗歌(註三)を謡ひます。

註一　御代祝ふ心こめつゝ三上山瑞穂の稻を舂きはじむらし(稻舂歌　子爵入江爲守作)

註二　白檮(かし)の生(ふ)に　横臼(よくす)を作り　横臼に　釀(か)める大御酒　美味(うま)らに　聞持(きこしもち)飲(を)せ　余(まろ)が父(ち)(應神記)

註三　民の業すゝめます代と五百穀の音ぞにぎはふ長濱の里(風俗歌　子爵入江爲守作)

これのあとに、天皇陛下は山海の珍味と悠紀の齋田の米で造つた白酒(しろき)黒酒(くろき)等の神饌を親しく捧げまし、御拜禮の後、御告文を奏せられ、次に御親らも新穀の御飯や御酒を聞召されます。　さて神饌を撤下されまして御儀の終りますのは十一時頃

でもあらうかと承ります。

主基殿の御儀は十五日の午前一時頃から行はせられまして、稲春歌や(註一)風俗歌(註二)や白酒黒酒等が主基のものに代るだけで、式の御次第は全く同一だとうかがつて居ります。此の主基の分は御歌所の寄人坂正臣さんの作であります。

註一
石清水勝山小田のおしね刈り清き心の里人ぞ舂く(稲舂歌　坂正臣作)

註二
みめぐみの風福岡は千萬の家のけぶりもうちなびきつつ(風俗歌　坂正臣作)

此等の歌の曲調は、大正天皇の御時には、其の地方々々の俚謠のフシを加味せられたと申しますが、今回の御盛儀にも其のあとを追はせられることとでございませう。これにも舞はございません。

大嘗祭のはこれだけでありまして、次は大饗と申して、俗な詞で申せば御披露の御饗應が來る十六十七日の兩日に行はせられ、歌舞は此の兩日に最も多く奏せら

れるのでございます。其の第一日に奏せられるのが久米舞・風俗歌舞・五節舞の三つでございます。此等はいづれも新に設けられました四十間四面の大饗宴場の中央に設けられた舞臺に於て演ぜられます。舞樂の舞臺は、普通は三間に三間といふ大きさでございますが、大正天皇の御大禮には、方二丈六尺一寸即ち方四間半ばかりでした。此の度のも恐らくはその程度の大きさでございませう。朱塗の勾欄に金色の金具を打ち、下の方には水引幕を張り、總角をとりつけた美しい物でございます。それで目も覺めるやうな裝束を着けた舞人が四人づつ出て、優美又は勇壯な伎を演ずるのでございます。年々代々木の明治神宮で演ぜられますのによつて、如何に其の舞樂なるものが花やかであり、上品であり、且つ奥ゆかしい限りのものであるかが御類推出來るでございませう。

これより此の三つの舞の由來と演ぜられる場合とを申し述べませう。十六日の饗宴に於て、天皇皇后兩陛下に、御膳と酒を供へ、次に參列の諸員に膳と酒とを賜はりますと、久米舞が始まります。此の舞は神武天皇が大和の國に入らせられま



久　米　舞

して、宇陀の高城で、此の地方の巨魁なる兄猾を打平らげてお酒宴を開かれました時に、「宇陀の高城に鴫わな張る。わが待つや、鴫は罹らず磯くはし鯨さやる……」といふ長い歌をお謠ひになります。これは、兄猾め鴫のやうな小鳥のつもりでわなを張つたのに、鯨のやうな巨大な御軍がやつて來たので、淺はかな計略は破れて自滅したではないか、どうだ云々と仰せられたのでありまして、日本書紀には「是を來目歌と謂ふ。今樂府此歌を奏するに猶手量の大小及び音聲の巨細有り。此古の遺式なり」とありまして、代代歌ひ傳へたものであります。古くは武人の大伴氏は琴を彈き、佐伯氏は刀を持つて舞ひ、蜘

蛛を斬る仕方を致しました。此の蜘蛛は彼の網を張る蟲ではありません。土蜘蛛といふ種族であります。稍後には、琴は二人、舞は八人で大伴佐伯の分ちなく勤めました。多く大嘗祭の記事の處に此の事が見えて居ります。盛大に行はせられた時には、二十人の舞手が二列に並び、琴は六人で彈いたと記してありますが、平安朝の中期から次第に御用ひにならないやうになり、遂に全く絶えてしまひましたのを、文政元年仁孝天皇の御時に再興せられまして、舞は四人、歌は二人、笛・箏・篥・和琴各一人といふことになりました。大正天皇の御時には、之を繼承せられまして、舞人はやはり四人で、何れも卷纓の冠に、赤抹額（あかまかう）と申して赤い鉢卷を致し、赤い袍（うへのきぬ）を着け、半臂（はんぴ）・下襲（したがさね）・大口・表袴（うへのはかま）・靴といふいでたちに、金作りの劒を帶して舞ひ、やはり劒を拔いて蜘蛛を斬るさまを致したと申します。此の度もこれと同一に舞はしめられると申します。

此の久米舞が終りますと、更に兩陛下に御殽物を奉り、參列の諸員にも御殽を下さいます。そして悠紀主基兩地方の風俗舞即ち其の地方風の舞が演ぜられます。

大正天皇の御時の例に則りますれば、此のたびは、入江御歌所長が仰を奉じて悠紀地方の名所、琵琶湖・水莖岡・志賀・沖白石(おきのしらいし)の四箇處を詠ぜられました短歌(註一)又主基地方のは、坂正臣さんが同じく仰を奉じて、伊岐の松原・高良山(かうらさん)・企救濱(きくのはま)・和刈布(めかり)神社の四箇處を詠ぜられた短歌、(註二)以上の八箇處は世に知られた名所ばかりでございますが、一箇處に一首づつ通計八首の短歌に、宮中の樂部でフシを附して謠はれ、それに其の悠紀主基兩地方の踊の振を加味した舞の手がつけてある筈であります。

註一

悠紀地方

參音聲(まゐりおんじやう)　　琵琶湖

萬代に綠たゝふる湖は八十氏川の源にして

破　　水莖岡

高御座のぼらす年のよろこびを水莖の岡しるしとどめよ

急　　志賀

山水にむかひくらせばおのづから心清けむ志賀の里人

退出音聲(まかでおんじやう)　　沖の白石

あま小舟近づくまゝに波ならで鷗立ちたつ沖の白石

註二

主基地方

參音聲　　　　高良山

千早振高良の山の神籠石(かうごせき)かけじくづれじ御代にならひて

破　　　　生の松原

うちわたす生の松原いき／＼と榮えむ御代の色ぞ見えたる

急　　　　企救濱

君が代はよきことのみを企救の濱命ながきがうれしかりけり

退出音聲　　　　早鞆

早鞆の宮のはふりがかるといふめでたき御代にあへる我かな

此の風俗舞が終ると、由緒に富む五節舞が奏せられます。久米舞以下此の五節舞迄すべて皆和琴・笏拍子・笛・篳篥に合せて、それ／＼の歌を謠ふものであり、それに合せて舞ふのでございますが、五節舞の歌は特に之を大歌と申します。すなはち

　わたつみの濱のまさごを數へつつ君が千とせのありかずにせむ。

　をとめどもをとめさびすもからたまをたもとにまきてをとめさびすも。

の二首でありまして、前の歌は聖壽無疆を壽ぎ奉る歌でございますが、あとの少女どもの歌には、古い所以(いはれ)がございます。さうしてこれが五節舞の起りを物語るの

であります。

今を去る一千二百五十年の昔、天武天皇が吉野の瀧の宮へ行幸あそばした時のことでございます。日の暮方にお琴を遊ばしてゐますと、向ひの山の岫から致して、珍しい雲が立ち上り、其の雲の下には神女の姿が現れて、琴の調べに合せて舞ひました。それが天皇の御目にだけ見えて、近侍の人々には見えなかつたと申しますが、神女は五たび袖を飜して舞ひ、天皇は前に申した、少女ども少女さびすもの歌を御詠みになり、其の舞の手をうつして御制定になりましたのが五節舞だとかう申し傳へて居りまする。此の少女どもの歌は奈良朝の歌人山上憶良の作りました長歌の中にも、

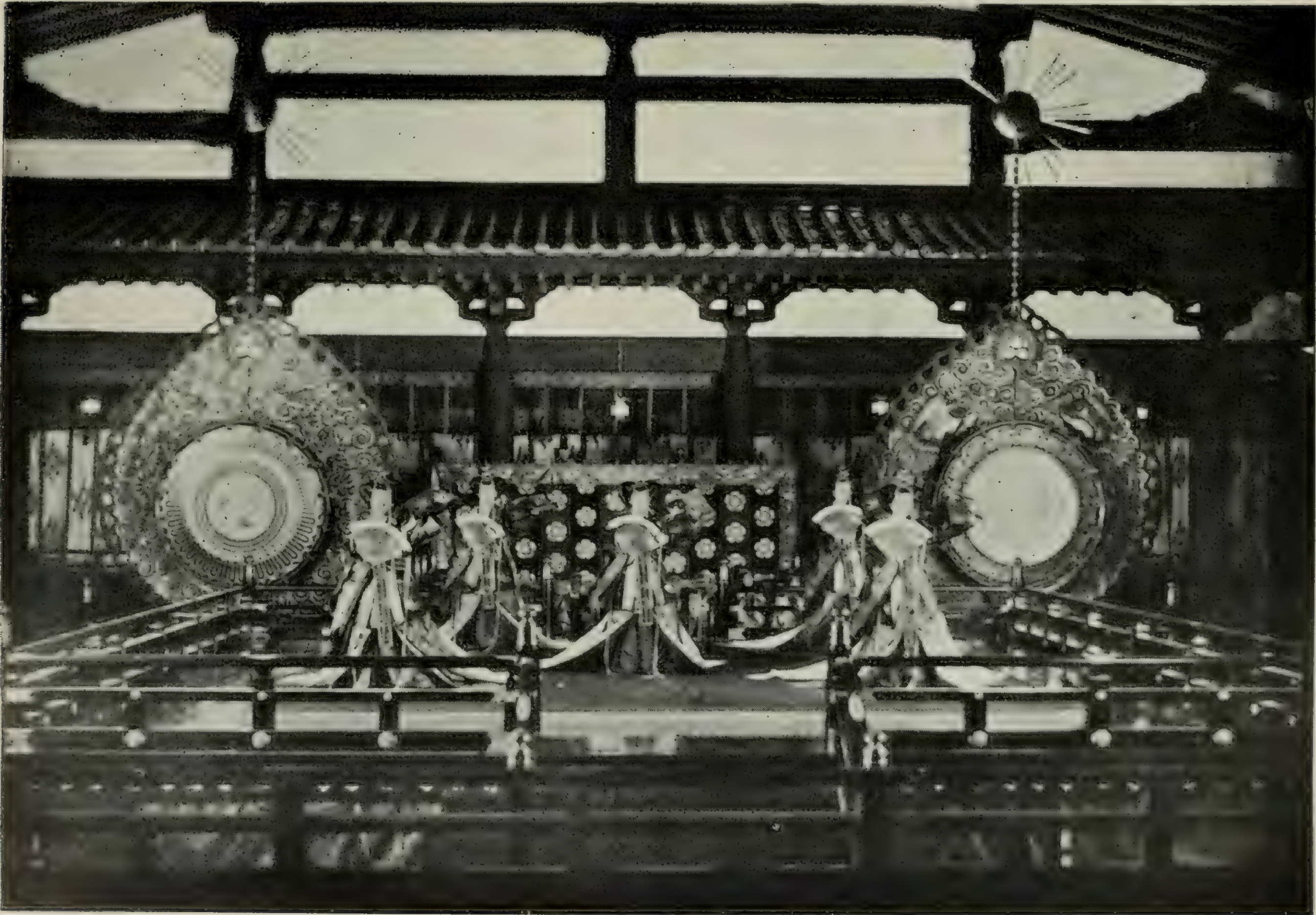
をとめども　をとめさびすと、　韓玉を　たもとにまかし、　白栲の　袖ふりかはし、　紅の　赤裳裾ひき……

と作り入れてあり、五節舞は天平十五年五月内裡に於て群臣に酒を賜りました時に、時の皇太子、後の孝謙天皇がお立ちになつて此の舞を遊ばしたことが續日本紀

に見えて居ります。皇太子は此の時に二十六歳でおありなさいました。かやうなわけで、古くから女の舞であつたのでございます。平安朝の頃には新嘗祭に奏し、大嘗祭には必ず之を奏する定まりでありました。舞姫は四人又は五人で、公卿方の子女及び國司の子女から特に選ばれたものが舞ふことになつて居りました。十一月の中の丑の日に、帳臺の試と申して、此の舞姫達が御所の北にあります朔平門から參入して、常寧殿で演じました。天皇は直衣指貫といふお忍びの姿で御下見を遊ばしたものでございます。正式の試は翌日の寅の日で、舞姫を御殿の廂へ召されて御覽になるのが年々の例でございました。かの百人一首の僧正遍昭の歌に、

天津風雲の通ひ路吹き閉ぢよ、少女の姿しばし止めむ。

とありますのは、此の五節の舞姫が美しい天津少女其のまゝの姿で現れるが、出たかと思へばすぐ引込みますので、如何にも惜しい心持がする。天吹く風よ、少女たちの通り路を吹き閉ぢてくれよ、もう暫くあの姿を見たいからといふ意味でござ



（三—一三）

五節舞

います。かう思つたものは遍昭ばかりでなく、拜觀者一同がさうであつたらうと思ひます。それにしても、僧正ともいはれる人が、女の姿に見とれたなどは、ちとどうもと思召すでもありませうが、そこは御心配に及びません、遍昭がまだ良岑宗貞と申してゐました俗人時代の作でございます。

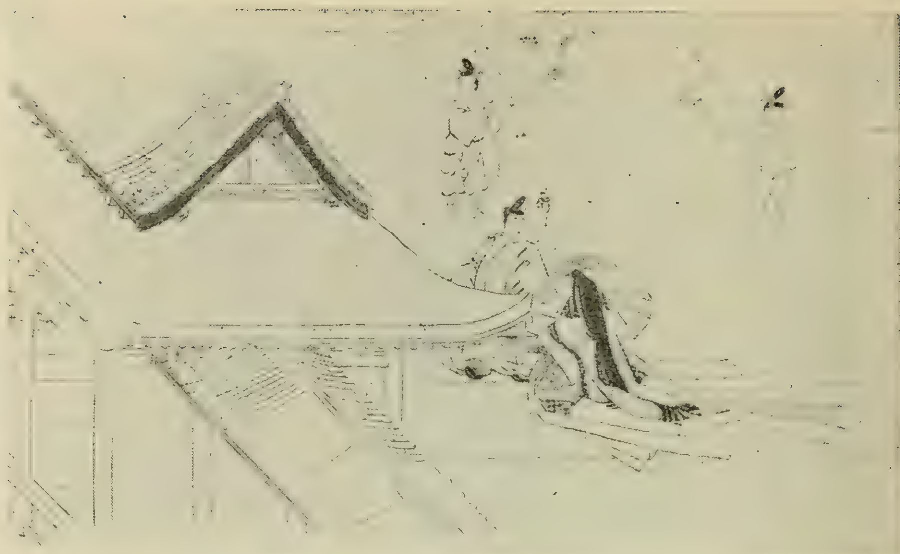
舞姫の御選擇や服裝の如何に麗はしいものであるかも順序としては述ぶべきではございますが、既に諸新聞にも掲げられてありますし、又明晩特に其のお話があると申すことでございますれば、一切省略致します。但大へんな費用を要したもので、三善清行の封事にも、舞姫の數を減じたいと述べて居りまする程でございます。自然其の時の模樣によつてお略しにもなることになりましたが、大嘗祭の時だけに限られるやうになりましたのは、凡そ建武の頃からであらうと申します。何に致しても、御儀式の中で、最も美しいもので、公卿たちも大きに騷ぎ立てたものであり、舞姫と知り合の若公達は、得意になつて姫の案内を致したものでありました。承安元年高倉天皇の時の五節圖卷を見ますと、何れも十三四から十七歲位迄



承　安　五

の若樣方が、舞姬一人に一人づつつき添うて、手を引かぬばかりにして居りまする。當時平家の嫡孫維盛は十三歲で、最も容儀が美しかつたと申しますが、第三番目の舞姬にそうてゐます。姬は何れも美しく描いた檜扇に顏を掩うて居りまする。如何に夜でも晴れがましかつたことでございませう。同時に此の姬たちの名譽は至大のものでありまして、大正天皇の時にも、此のたびも、京都在住の舊公卿華族の人たちから御選定になりました。これには、深い思召があつてのことと拜察致し、併せて、十六日の夜の御盛宴の有樣を想察致すのでございます。

大嘗第一日の舞はこれで終りまして、第二日



節圖

の十七日には、晝は洋樂があり、夜は舞樂の萬歳樂と太平樂とが演ぜられます。

凡そ舞樂は、左の樂・右の樂の二つに分れて居りまして、左の樂は唐樂、右の樂は高麗樂ときまつて居ります。さうして普通左右一曲づつを番はせて一番とすることになつて居ります。又其の調子の上から分けて、壹越調・平調・雙調・黄鐘調・盤渉調・太食調の五つにし、又曲の組織や長短等の上から、大曲・中曲・小曲の三に分ち、製作時代の上から見て、支那に於て隋以前に作られたものを古樂といひ、隋以後のものを新樂と呼ぶことになつて居ります。又持ち物の上から見て、太刀や鉾の類を携へて舞ふものを武の舞と

いひ、然らざるものを文の舞といふことになつて居ります。

萬歳樂は唐樂でありますから、當然左の樂で、前の類別上から申せば平調で、中曲で、新樂で、文の舞だといふことになります。名の如くおめでたい曲でありまして、行幸・大饗・大法會又は相撲節などによく出されたものであります。舞人は四人で、常裝束と申して、



萬歳樂

鳥甲　半臂　下襲　表袴　赤大口　忘緒　石帶　襪子　糸鞋　踏掛

等を一具としたものに、袍を着けて出て舞ふのがならはしであります。



太平樂

樂の作者は隋の煬帝でありまして、鳳凰が來儀して賢王萬歳々々と囀つた其の調を取つて樂を作り、其の鳥の舞ふ姿を舞に作りこめられたものだといふことになつてゐます。

次は太平樂であります。樂の書き物に於て太平樂と申せば、一名を武昌樂又は武將破陣樂だの項莊鴻門曲だのと申すもののことでございます。けれども當今演ぜられます太平樂はそれではなくて、唐の太宗の時の皇帝破陣樂から出たものらしいとのことでありまして、大正天皇の時の大禮紀要にもさう記されて居ります。大食

調の中曲で、新樂であります。　舞人は四人でありまして、各金色の甲冑を身に擐(まと)ひ長劍を佩びて出ます。　初には劍を拔いて舞ひ、後には鉾を振つて舞ひまする其の突撃のさまは殊に勇壯なものでございます。　申す迄も無く武の舞でございまして、撥亂反正の意を寓してあるものでございます。

さて前の萬歲樂は舞振が閑雅で氣品に富み、これは勇武壯麗で、一文一武眞によき配合であると存じます。　普通の組合せと違ひまして、唐樂ばかりで一番ひになされてありますが、これは特におめでたい物を文武の兩種類からお選びになつた爲でございませう。　大饗宴場の兩陛下のおん後ろには、とはに榮えますべき大御代をことほぎましたたけ高き松を描いた喬松山水の軟障(ぜしやう)が張つてあり、東北の隅には悠紀地方の景を描いた屛風、西北の隅には主基地方の景を描いた屛風が立てられてありまして、參列諸員の金光燦たる禮裝を致して着席致して居りまする中央の照輝く舞臺に於て、舞人の裝束のうるはしさが、笙・笛・篳篥・鞨鼓・太鼓・鉦鼓等によつて奏せられる音樂の調べの美しさと相合して、こゝに地上に於ける最大無比の

華麗莊嚴な光景が現出するのでありまするが、其の形容は到底筆舌のよくする處ではあるまいと存じます。大禮の歌舞は此の太平樂を以て終りと致します、此の舞が終ると更に酒を賜ひまして兩陛下がおはひりになり、各員が退下いたしまして、夜の宴も終りとなるのでございます。

（昭和二年四月稿）

二　創造藝術

創造と模倣とは元來對立する筈のもので、兩者の間には超ゆべからざる溝渠が存すべきである。けれども藝術上に於ては、創造と模倣との間に連繫を想定し得るであらう。

模倣はいふ迄もなく藝術衝動中最も大切なもので、文化の度の異る二國が交通を開いたとすれば、其の度の低い國は、高い國の文化に向つて、先づ驚異し、讃歎し、次いでそれに模倣をしたことは歴史がそれを證明してゐる。今之を藝術の上だけに限つて回顧と省慮とを試みるであらう。

模倣が何時迄も模倣追隨に終つたとしたら、それは憐むべき低能國の所爲として考へなければならぬ。それでなく、他の長を取つて我が短を補つたとしたら、それは融合會通の實を擧げたものであつて、それに對しては、よく同化し得たといふ讃辭を惜むべきでない。それが又同化以上に出でて、己れの特質を發揮して、他より入り來つたものは從屬の地位に立つの觀を呈したとしたら、それは模倣を蟬脫して尊むべき創造の域に到達したものとして稱譽すべきである。但其處にまだ模倣と創造との連繫が痕跡となつて存することは否み難いであらう。

更に他文化との觸接をまたず、全く獨自を以て終始して、他より常に景仰模倣せられる藝術を有するものがあつたら、これにこそ眞の創造を許すべく、無上に惡ま

れた民族、恵まれた國として絶大の敬意を表すべきであらう。

我が日本國民は其の恵まれたものであつたか。次級の創造を成就し得たものであつたか。それとも同化程度に止まつたものであつたか。はた又憐むべき追隨者であつたのであらうか。

眞に恵まれたものとしては、恐らく希臘を最第一として考ふべきであらう。それ以前の古文化が更に闡明されたなら、もつと其の先進文化であつたものに對して推賞の辭を呈すべきことになるかも測られないが、それはそれとして、我等は我が國の過去や現狀がどの情態にあるかを考へることを當面の問題としなければならぬ。



文學繪畫彫刻建築音樂等藝術の各方面に就いて、過去をふりかへり見て、我が國民が同化以上の創造能力を發揮したことを誇り得ると思ふ。たゞそれが長年月を要した事と、規模を縮小したこととは到底掩ひ難いことを憾としなければなら

ぬ。例を繪畫に取るであらう。唐繪の模倣を脫して倭繪を作り出し、繪卷物といふ特殊なものを生み、浮世繪を始めるに至つて眞の創造を許すべきことになつた。さうして其の浮世繪を板畫にした錦繪に對しては、渾圓球上の何人かこれに日本獨自の藝術を以て許し且つ稱へないものがあらう。更に綜合藝術の演劇方面に就いて考へて見るも、東亞大陸からの舞樂の模倣を平安朝の中葉迄に脫して、鎌倉時代から獨自の創案に努め、室町時代の能樂大成に到つて、創造の域に達し、江戸時代の歌舞伎劇の完成に及んでは、支那劇や西洋劇とは趣向を異にして、日本獨特な藝術美を遺憾なく發揮した。



近く明治維新後の推移に徵しても、わが國民は決して模倣に終るものでなく、同化以上の創造域に進入したもの、しかけたものを藝術の上に見出し得るのである。明治の二十幾年迄模倣追隨に憂き身をやつしたことは考へるだけでも苦痛極まるのであるが、それは歐米からの併呑や侵略を免れる手段として止むを得なかつ

たのである。日清戰爭より得た自覺が一般藝術の上にかなりの覺醒を與へて、日本主義といふ名を附して、やゝ獨自といふことに着目し、日露戰爭後からは自尊自重の下に、自主の態度を取ると共に、廣く海外文化を請け容れることになつて、文學殊に小說が大いに進んだ。繪畫も亦新境地を拓いて和洋畫の折衷も實現せられ、帝展の作品に最早日本畫西洋畫の區別を置く必要がないとさへ唱導されることになつた。さうして其の間に日本獨自として許さるべき創造を見出すに至るべき見込は十分にあるものとして考へられて來た。彫刻は木彫の上に於て同化以上の獨特美が光彩を放つてゐる。

憐むべき情態は建築の上にあるであらう。年が年中道路の掘り返されてゐる東京、五六尺掘れば水の涌き出るやうな地盤の上に立つ東京、それを首府とする日本に、地震の多い日本に、濕度の高い日本に、洋式の高層建築の適しないことは明瞭であつたが、歐化熱の繼續は何時迄も此の上に執拗であつた。大正十二年の大震災はこれに痛酷以上の鑒戒を下した。つまり日本の地盤には日本獨自の建築を

案出し、實用と及びそれ以上の美化も日本の創案に成るべきことが示されたのである。けれどもそれがまだよく理解されたとは思はれない。

更に憐むべく悲しむべき情態にあるものは音樂である。三味線樂は早く天保弘化時代に行詰つたのであつた。技巧を盡しての果に、何とか轉回策を案出しなければならぬ情態のまゝで明治に入つたのである。そこへ新に洋樂が輸入されて、歐化模倣熱の最高時に立てられた政府の對音樂藝術方針は、爾後五十年間一日の如くに變更されてゐない。換言すれば、舊來の邦樂は成行にまかせ、唯一の官立なる東京音樂學校に於ては洋樂のみを教授するといふ現狀は、新日本の新人が希求する新音樂をも現出せしめ得ず、昭和の御代に入つてもまだ全く以て模倣に終つてゐるのである。上古以來音樂に於ては殊に惠まれてゐなかつた日本民族である。聖德太子が其の當時輸入した東亞大陸の音樂に對して我が國民の傳習能力の薄弱を痛歎されたことは、同時に同化の上にも見込の無いことを豫告されたものであつた。大陸音樂の規模は漸次に縮小されて、島國式に改造されて、そこに

日本味が造り上げられたのであつた。大正以來文學や繪畫はどんなに進んでも、音樂方面は情無い狀態である。邦樂は舊型のみを追ひ、洋樂は模倣の上にのみ足ぶみしてゐる。明治より大正にかけて、假りにも創造を以て許し得るもの、人心を支配し得たものは添田啞蟬坊等の演歌や琵琶歌やの外に何があるであらう。或は浪花節を擧げる政治家や實業家があるかも知れないが、それをさう書くのに、私は氣恥しさを感ずるのである。



建築や音樂はかくの如く、他面に飜譯政治・飜譯制度の現存を否み得ず、服飾や器材より始めて、父母に對する稱呼に迄外國語を用ひさせて得意がるパパさんやママさんの多い此の時に當つて、『模擬ヲ戒メ創造ニ勗メ』と宣はせられた昭和新帝の勅語は、眞に時弊を指摘しつくされたものであつて、七千萬の同胞が背に汗して奮起一番しなければならぬ場合である。

三　音樂と感化

（昭和四年五月刑務協會に於て講演）

1　序説

音樂が人を感化せしむる上に至大の効果を擧げるものであることは東西兩洋の書に反復記述せられてゐることであるが、最も巧に之をいひ現してあるのは、シェクスピヤのヴェニスの商人の終なるロレンゾとジェシカの對話中に見えてゐる一節である。ジェシカは「おれは基督信者どもの仲裁なんぞを聞いて、頭を振つて、溜息をついて、我を折るやうな、そんな骨無しの、泣面の阿呆扱ひにされたくないのだ」と言ひ切るシャイロックの娘である。シャイロックはいふ迄もなく猶太人で、ベニスの商人バッサニオに金を貸したが、期限が來ても返さないので、證文の上にあるが如く、其の科料として借主の胸から一ポンドの肉を切取らうといひ張るのである。さうして

ベニス公爵の法廷に訴へ出る男で、「たましひにかけて誓言します、人間の舌の力ではわしの心を變へさせることは出來ません」と頑張る處の殘忍者である。此の男の娘だけに、ジェシカは情人のロレンゾが月下で音樂を聽かうといふのに對して、好い音樂を聽いたつても、ちつとも面白くないといふ。これに對してロレンゾが音樂の力を說いてかういふ。

あのあばれ盛りの家畜や、まだ馴らされてゐない若駒なんかでも、狂氣のやうに跳(はね)廻つて、吼えたり高嘶きしたりするのが、彼奴(あいつ)らの血氣壯んな證據でもあり持前でもあるのだが、あれらでも、若しふいとラッパの聲を聞いたり又は何か音樂の調を聞いたりすると、いつの間にか立止つて、其のあら〳〵しい目の色までもおとなしやかな目つきになる。それは全く音樂の魔力なんだ。それだから詩人が昔オルフュースといふ樂の名人があつて、音樂の力で、木をも石をも流れをも動かしたなぞと言ひ傳へたのさ。だつてお前、どんな冷淡な頑固な兇暴な者だつても、音樂を聞けば、一時は性質が一變せざるを得ないからね。

少しも、音樂の素養がなく、美しい調を聞いたつて、少しも感動しないやうな者は、きつと謀判したり、わるだくみをしたり、強盗をしたりするよ。そんな奴の感情は、夜のやうに遲鈍で、冥府のやうに暗黑なんだ。そんな男は信ぜられないよ…… あの音樂をお聽き。(坪内博士譯)

社會を觀察しても、其の底に透徹する眼光を有してゐた沙翁だけに、音樂の人を動かす力を述べて餘す處がない。

支那にあつては極めて之を簡明に叙してゐる。孝經に「移風易俗莫善於樂」とあり「導之以禮樂而民和睦」とある。又禮記では「禮樂不可斯須去身致樂以治心則易直子諒之心油然生矣」といひ、これによつて政治の可否をも判ずべきを說いては、

凡音者生人心者也。情動於中故形於聲。聲成文謂之音。是故治世之音安以樂其政和。亂世之音怨以怒、其政乖。亡國之音哀以思其民困。聲音之道、與政通矣。

といふ　極めて抽象的な說明であるが、理はこれに他ならない。殊に支那の如き

易姓革命の度々ある國に於ては、國朝の革まる毎に、事物を一新して以て前代の慣習を忘れしむる必要があつたのである。さうして音樂の改正なるものは事實に於て度々行はれた。最もそれは朝廷の樂のことであるが、之を下に及して上下和平の道に資せようとしたのであれば、其の目的は音樂一般の上に渉るものとして考ふべきである。彼の上代堯舜以來、周の世に至る迄禮樂を尙んだことは經書の上によく見えることで、大國だけに大仕掛な樂が行はれたのである。而して大規模のものは兎角荒廢し易いので、幾度となく恢復の途を講じなければならなかつた。すなはち梁の武帝は古樂を弘めようとして自ら攻究して雅樂を定め、唐の高祖は梁や陳の樂には南方吳楚の音が多く、周や齊の樂には北方胡虜の音が多いからといふので、南北を斟酌し、參へるに古聲を以てして、遂に唐代雅樂大成の基を確立した。今わが國に傳つてゐる雅樂には、此の唐から輸入したものが多いのである。又宋の代には、徽宗帝が博く知音の士を求めて新に大晟樂を制定し、舊來の淫哇の聲を禁じ、これを奉ぜざる者は、謠ふ者と聽く者とを問はず罪に坐せしめた。

明の太祖も亦前代の樂章が、諛詞を用ひて容悅をなし、鄙陋耳目にし難きもののあるを慨き、樂の大改正を斷行した。此等は皆治國要道の一として行つたのであるが、一面には前代の因襲から去らしめる必要があつたのである。

わが日本國にあつては、曾て一度も革命といふが如き忌むべく厭ふべきことは無かつたので、支那の如き意味に於ける音樂の大改正は行はれなかつたが、既に天平の昔に於て、禮樂尊重の思召を述べられた詔が出てゐる。すなはち天平十五年聖武天皇の御時に皇太子であらせられた阿倍内親王(孝謙天皇)が天武天皇制定の五節儛をお舞ひになつた。此の時に天皇が此の舞に關して、これは天武天皇が

上下乎齊倍和氣弖無動久靜加爾令有爾波禮等樂等二都並弖志平久長久可有登隨神母所思坐弖此乃舞乎始賜比造賜比伎

と仰せられてゐる。これより以後に於ても歷代禮樂を重んぜられたのであつて、中には御自身堪能にわたらせられたお方も多い。全く洋の東西や時の古今を問はず、名君賢相と稱せられた者は、皆音樂の風教上に於ける偉力を認めて、其の雅正

と善美とを庶幾つたのである。彼の一七九七年、ナポレオン一世が以太利征伐中、佛蘭西音樂院の總裁はナポレオンに書を寄せて、以太利の諸府に於て雅正善美の樂曲を採集して貰ひたいと申し出でた。ナポレオンは承諾の旨を報じて、其の返事の中に、「諸美術中に於て性情を淘冶し、風俗を移し易へることに最も大きな力を有するものは音樂である。故に音樂は立法官の最も保護奬勵しなければならぬものである。蓋し名家の作に係る雅曲は、性情を養ひ、人心を化するの神妙であることは、彼の理論ばかりに拘泥して、教化の實効力を缺く處の倫理書なんかと比べものになるものでない」といつてゐる。大英雄が空論を排して、施設上の經綸を說いたものとして傾聽しなければならぬ。こゝにいふ立法官は行政官の意をもこめてあるのであらうが、我等は思想善導の叫ばれる現代に於て、これ迄の謬まられたる音樂政策が悲しむべき現狀をつくり出す所の一因であつたことをも述べなければならぬ。しかしながら、これに先立つて、音樂の利害に關しての實例四五を擧げ、次いで音樂の種類と之を現代の感化事業の上に如何に使用すべきかの方策

を述べて見ようと思ふ。もとこれ識者の間に論議せらるべくして、まだ論議せられたことが尠いので、今其の方策として私の述べることも一場の空談夢說として葬られるかも知れぬが、私は其の然らざることを希望して止まぬのである。

2　音樂の利

由來音樂の人心に衝動を與へることは、强烈な作用を起す劇藥が人體に影響を及すと同一である。劇藥も其の極量以下に於て適度に服せしむれば、効能神の如くであり、音樂も亦時に應じ、場合に應じ、且つ人に應じて强弱宜しきに合ふ物を選んで、謠はせたり聽かせたりする時は、心に和平を導くこともあり、鼓舞激勵となつて活躍をなさしめることにもなる。これが利があり害がありする所以であつて、而して度を超えざる限りは、人心敎化に對する大妙藥として、之を推重しなければならぬ。

音樂が如何に生物の情を動かすかは、軍馬が樂隊の奏樂をきいて、勇ましい進行

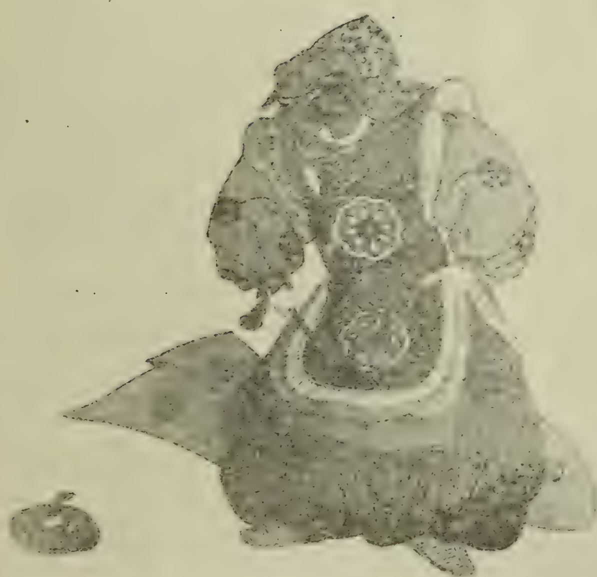
曲には眼の色を變じ、踴躍して敵中に突撃をも始むべき姿態をとり、哀みの曲には、首うなだれて歩むのも懶げに見える此の一事によつても判ぜられる。　鹿にも此の性情があるといふが、象は特に强い。　佛蘭西が共和政治を施いた第六年日のことだといふが、一日ルッソー兄弟や著名な音樂師達數十名が、植物園に會合して演奏を始めた。　樂は館の樓上で演じ、象は樓下にゐたので、音響だけを耳にしたのである。　所が音樂が始まると、牡象牝象共に食を止めて闖入り、相共に喜ぶものの如くであつたが、勇壯活潑な曲には、大いに感動して大聲を發し、柱に據り、欄を握り、時に手足を動かしたりして、疑もなく舞踏するものの如くであつた。　而して看守人にそれを喜んでのことか、怒つてのことか、はた恐れてのことかと問へば、固より歡喜してのことだといふ。　次いで優美閑雅な曲を奏すると、象の擧動は前と反對になつた。　節奏の緩急强弱を異にするが爲に、かう違つたのであつて、音樂の象に與ふる影響は、毫も人類に與ふると異る所が無いことが知られた。　犬に此の性情があり、鼠にもあり、又種類によつては蜥蜴や蜘蛛にもこれが具つてゐるといふ。

まして人類はあらゆる種族を通じて、音樂に對する感受性が強く、赤兒は單調な子守歌で眠に就き、三歳の兒童も、勇ましいラッパの音を聞いては、母の懷にありながら兩手を張り、肩を聳やかして活躍する。彼の小學程度の子供が見世物や輕業小屋に行きたがるのも、一つは其の囃子に呼びこまれるのである。葬儀に際して奏する笙と篳篥との音には、大人も腸にしみる思ひがする。子どもが之を聽いて泣出す事は誰もそれを目擊してゐるであらう。かの野蠻人は其の文化程度からいへば、文明人の子どもに當るものであるが、同じく吉凶何れの出來事にも舞踊をなして、歌も謡へば樂器をも扱ふのである。而して子どもは成長するにつれ、野蠻人は文化の度の進むにつれて、音樂に動かされることが、次第に强くなつて、遂には彼のピアノ又はバイオリンの如きものによつて演ずる複雜な器樂や、大仕掛な管絃合奏樂をも味ふに至るのである。

古へより將帥又は大政治家と呼ばれた者は音樂を利用して、鼓舞又は平和に向つての導きとなさしめた。又秀でた樂人はそれによつて身の難を免れた。二三

の例を示せば、古く希臘のピタゴラスは、一群の壯士が怒に任せて一貴族の家を襲はうとするを見て、歌媛に命じて嫺雅な、そして悔い改める意を含む曲を奏せしめた。 すると壯士達は立所に怒を鎮めて、平静に歸したといひ、同じく希臘の詩人にして學者であつたインペドークルス(Empedocles vc 455—395)も殺害の意志を抱く者に、琴曲を聽かせて其の心を飜さしめたといふ。 我が國にあつても、三重の采女は盞に落葉の浮かんでゐるのを知らずして、雄略天皇に捧げて天皇の御怒に觸れ、まさに天皇の御劍のさびとならうとする時、長い巧妙な歌を謠つ許されたことがある(古事記)。 又博雅の三位は、三とせの間逢阪山の蟬丸の許に通つて琵琶の祕曲を傳習したと傳へる篤志者であり、又造詣も深くて天晴斯道の達人であつたが、何事によつてか、式部卿親王の怨を買ひ、親王は壯士等をして之を殺害せしめようとした。 月明の夜壯士等は博雅の邸を襲うた。 折しも博雅は寢殿の西の廂の間に居つて、大篳篥を吹きすさんでゐた。 其の悽涼悲愴の音は、壯士等の心腸にしみ入つて、彼等は覺えず袂を濡し、遂に害を加へ得ずして歸つたといふ。 又一夜盜人が

博雅の家に入つた。博雅は物蔭に隠れて盗人の去るを待つて物を藏しておいた厨子を見ると、たゞ僅に篳篥だけを殘してあつた。そこで之を把つて之を吹くと、盗人どもは痛切な感傷氣分に誘はれ、それが激烈な悔悟心を呼び起すこととなつて、盗んだ物は途に棄てて去つたといふ。これは至極の名人が不逞な徒を征服した話であるが、其の程度の上にこそ多少の差はあれ、常人の吹奏や歌唱も均しく聽者をそれぞ



還城樂

れの程度於て動かすことはいふまでもない。樂人の助元は職務怠慢の廉を以て、

左近衛府の牢の中に幽閉せられた。此の牢の中には、蛇が捿んでゐると聞いてゐたので、蛇嫌の助元は戰慄してゐた。夜中果して一頭の大蛇が現はれて、鎌首を上げて、三尺許りの舌を出して近寄つて來た。助元はぞつとすると共に、氣がぼうつとしたが、腰の笛を把つて、還城樂の破の部を吹くと、蛇は首をたれて其の音に聽き入り、やがて引還して害を加へなかつたといふ。還城樂は見蛇樂で、印度に於て天から降つた白馬が毒蛇を退治する樣を模した舞の曲で、至極適當な曲を奏したといふべきである。支那にも此の類の話はいくらもあり、近くフィリップ、バーマーにもこんな話がある。此の人は舞ひ手としての大家であつたが、淸貧で借金を返し得ない。一日債權者が憤激してやつて來て酷しい催促をした。バーマーは閉口してハーピスコード(舊式のピアノ)を彈じ、感慨悲歎の曲を奏した。すると債主の怒りは忽ち散じて、債權を放棄したばかりでなく、他より催促せられた場合の用意にとて金圓を與へて去つたといふ話も傳つてゐる。もつと危い場合即ち刺客に窺はれた時にも、此の人の立琴に合せた歌が鬼神を泣かしめる程の絶妙さであつた

爲に免れたといふ話もあつて、東西共に音樂の偉力を稱へることに於ては其の軌を一にしてゐる。

但此等は個人又は小群集に向つての事であるが、ナポレオンは此の運用術に最も巧な人で、三軍指揮の間に於て、時に禁ずる曲もあり、最後の攻撃にばかり用ひる曲もあつて、戰績はこれが爲に著しく擧つたといふ。彼のアルプス越に於ても、難所に向ふ毎に、活潑な樂曲を奏せしめてよく成功したと傳へてゐる。

米國の國歌のヘール、コランビアも亦好適例となすべきである。其の曲は一七八九年にフヮイルズ(J. feyles)の作つたもので、ワシントンが大統領就任式を擧げる爲に紐育に入る時、トレントンに於て始めて之を奏し、名づけて大統領進行曲といつたものであり、歌詞は十年後(1798)に判事のジョセフホプキンソン(Joseph Hopkinson)の選んだものである。當時英佛二國の間に不和が生じて形勢が容易ならず、アメリカにあつても、英國に與する者と佛國に力を入れるものと二つに分れた。其の上英佛二國が合衆國の國權を冒したので、形勢はます／＼險惡を極めて、遂に

大統領も首府フィラデルフィヤに國會を開いて、和戰何れかに決することを定めなければならぬことになつた。けれどもワシントンの眞意は局外中立にあつて、而し之を主張したので、議はまとまらず、殊に佐佛黨を激昂させて、建國以來の大事變ともなりさうであつた。此の時フィラデルフィヤに、コックスといふ名高い歌ひ手があつて、此の形勢を輓回するには、大統領進行曲に愛國の歌を附けるより他に策はないと思つた。さうして之を判事のホプキンソンに圖つた。當時此の曲は國歌の如くに考へられて、それに歌詞を得たいとは何人も考へてゐたことであつた。そこでホプキンソンが試に一篇を草して之をコックスに與へた。コックスは之を民衆に廣告して演奏會を開くと、毎夜滿場立錐の餘地がなく、聽衆は反覆唱奏して、いつしか合唱部が成立つに至り、府民は夜な〳〵街頭に集つて、處々で之を合唱した。それがいつしか聯邦中に傳播して、民心を協和せしめて、自ら治安の維持となり、國家富强の基を確立することとなつたのであつた。これは衆人の心を支配して、よく國家を泰山の安きに置いたものとしての好適例であらう。

3　音樂の害

淫聲の國を害し、風俗を損ふことは、人の熟知する處で、支那に於て古く「鄭衛の音は亂世の音なり、桑濮上の音は亡國の音なり（樂記）といつたのも此の意であつて、今事新しく之を述べるにも及ぶまい。之を最近の流行歌に例を求めていはうなら、彼の壯士たちの演歌や、さすらひの歌や又は枯薄の歌乃至は、すととんに節に對して、官府から制裁の手の下つたことでも判じ得られるであらう。古くは宮古路豐後太夫の淨瑠璃が、江戸に於て嚴重に禁止されたのも此のよい例であらう。まことに風俗なるものは、破壞することは實に容易であつて、之を矯正することは非常に困難なのである。であれば、爲政當事者が時に禁止を命ずるのも又以て止むを得ないのである。此の豐後節といふは、京都で成立した一中節より出たものである。都一中の門人宮古路國太夫の創めたもので、一流をなしてからは國太夫節と呼ばれ、豐後掾と受領してからは豐後節と呼ばれた。江戸へ下つたのは享保十七

年であつたが、其の濃艶で、しかも感傷味たつぷりな曲風で、加賀の菊酒屋の娘お菊が奉公人と駈落をしたり、金村屋おさんが疊屋伊八と心中する其の道行といつた類を語つて聽かせたのである。武勇節義や古風な戀ばかりを語る江戸淨瑠璃に取つては、大いなる驚異、否脅威であつた。元和以來殊に元祿といふ太平時の美酒に醉つて來た江戸の町人、いや武士迄も、絶えず草萌え時の如き異性を慕ふの情を心の底に抱いてゐたのであれば、此の濡れ氣澤山な、さうして人間胸底の琴線に觸れなければ止むまいとする淨瑠璃節に引きつけられぬ者はなく、其の擴がる勢は實に恐るべきものであつた。遂に芝居に出ることも禁ぜられ、自宅で教へることも禁ぜられて、

　豐後米八斗二升と觸れられて菰をかぶるか宮こじきめら。

といふ落首も出た。此時豐後米は金一兩に八斗二升といふ高値で、士民が窮したが爲にかういつたのであるが、八斗に法度即ち禁止の意がこもつてゐるのである。

　しかしながら民の好むものは決して法令だけで禁止し得るものでない。宮古

路豐後椽は禁止命令に接して、旗を捲いて京都へ歸つたが、其の門人の位牌屋文右衛門が江戸へ下つて來て語つた時には、幕府はもう制裁を加へなかつた。これが常磐津節である。彼の富本節や清元節、及び新内節等は一切豐後節から出たもので、其のなまめかしさや、所謂劣情を挑發することは義太夫節や一中節や河東節などと比較にならぬ程に豐後椽の風を傳へたが、最早禁止は出來なかつたのである。全く時勢人心の好みが、其の禁止を認めさうも無かつたのであらう。

此等の例は其の歌詞及び曲風が淫らであつたが爲に、弊害が生じたのであつて、三味線といふ樂器が必ずしも淫らな音ばかりを出すといふのでは無かつた。即ち罪は樂器にあらずして、之を使用する者の行ひ又は曲や歌の上にあつたことは、容易に理解し得られるであらう。之を今行はれるものに例證を取るとしよう。江戸長唄の鶴龜や老松や勸進帳の類を良家の子女が三味線に合せて謠ふのに、何人か之を淫聲だと申しませう。又義太夫を語る場合に於ても、三曲合奏の際に於ても、誰が俗を害ふ聲だとして之を排斥しよう。もしさう考へる者があるなら、其

の人は音樂には全く無理解の人であるべく、それでなければ、坊主憎さに袈裟までを憎む所の人である。

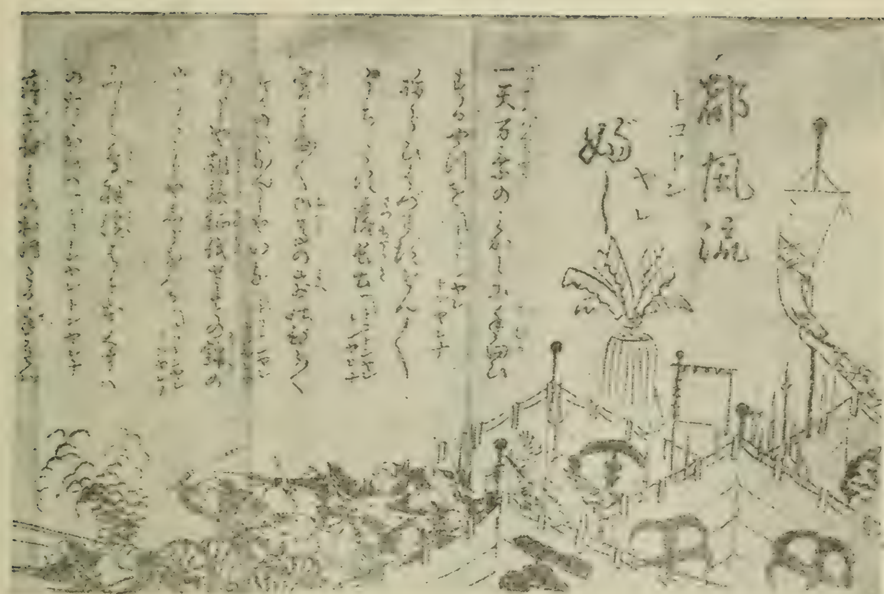
但これは消極的に人を墮落せしめさうな場合に就いての例であるが、積極的に强烈な刺戟を與へて、容易ならぬ事態を惹き起す場合のあることも忘れてはならぬ。當今過激な内容を有する勞働の歌を禁ずるのも此の趣意に他ならのぬである。玆に歌曲が極めて恐ろしい結果を來たした一例を語るであらう。ラ、マルセイエーズの曲がそれである。歌は六節より成り、其の後に兒童唱歌の一節が附屬するのであるが、其の第一節に、

行けや祖國の子、光榮の日ぞ來れる。

我等に對して暴虐の血染の旗は擧げられたり、血染の旗は擧げられたり。

聞かずや、横暴なる兵士は郊野に叫び寄りて吾等が抱ける子等を屠り、妻女を屠らんとす。

武裝せよ國民、陣立を作れ。進め進め。



都風流トコ

不潔なる血は我等の田園を染めんとす。
武裝せよ國民、陣立を作れ。　進め進め。
不潔なる血は我等の田園を染めんとす。

（芳賀村上兩文學博士共譯）

とある。　第二節以下も亦これに劣らぬ劇烈な內容を有する歌であるが、此の歌は一七九二年の四月、フランス革命の起り初めに當つて、ストラスブルヒ府の義兵六百人が、ラインの革命軍を赴援しようとした時、時の府知事が工兵隊長に囑して作つた一



トンヤレ節

軍歌である。それが日ならずして南方に弘まり、殊にマルセール人の愛唱する處となり、其處の革命隊は之を奏しながら巴里に侵入した。巴里の人はこれにマルセール隊進軍歌といふ意味で、之をラ、マルセイエーズと呼んだが、忽ちこれが全國に擴がつた結果は、古今未曾有の變亂を挑發して、遂に佛蘭西の王政を顚覆してしまつた。そこで佛蘭西では、これを叛亂を挑發する歌曲だとして嚴禁してしまつた。そのこれが、政府の允許の下に佛國の國歌となつたのは、今を去る五十年前即ち西暦一八七八年巴里に萬國博覧會の開設せられた時

からである。

進軍歌の恐るべき力を有することは、此の一事にも徴すべきであるが、軍歌必ずしも危険なわけでない。わが明治元年品川彌二郎によつて作られた都風流トコトンヤレ節や、後れては「四百餘州をこぞる十萬餘騎の敵」や「敵は幾萬ありとても」の唱歌や「日清談判破裂して、品川乘り出す吾妻艦」の如き欣舞節の歌が如何に士氣を引立てたかによつて、利の一面も知悉せられるであらう。しかしながら「國は六百八十里」に至つては何となく、歌に悲韻があつて、わが日本精英の軍隊に、何等かの厭ふべき影響を與へる虞はあるまいかと考へた者のあつたことは事實で、恐らくは今も諸人の耳に此の歌曲に對する記憶は新なるものがあるであらう。

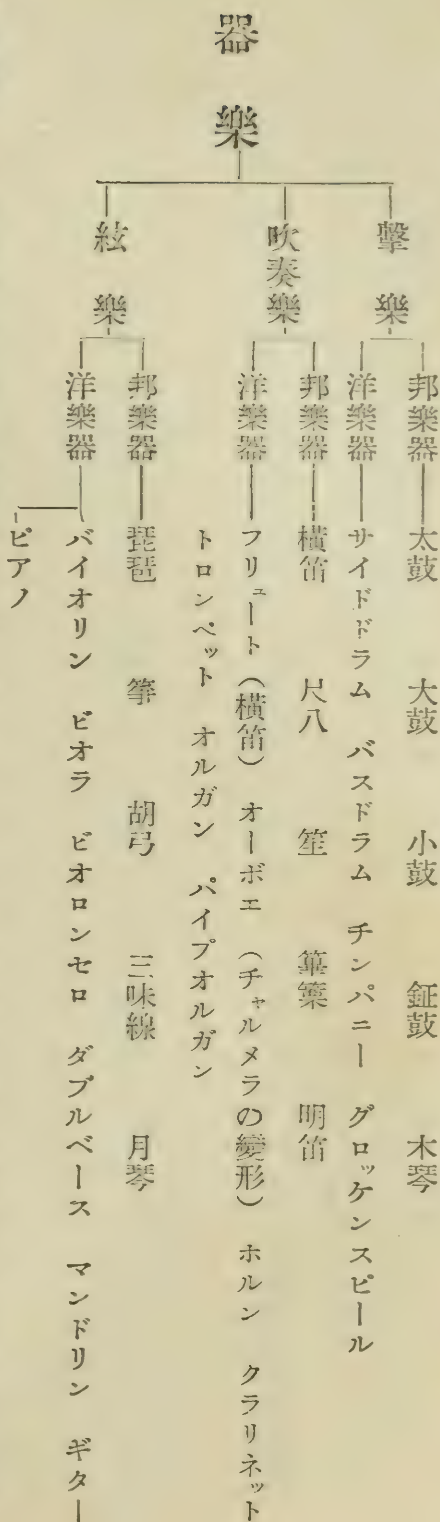
以上述ぶる所によつて、音樂の利と害とに關する一斑は略領得せられたことであらう。轉じて音樂の區分と主要な樂器の發する音の特質等に就いて說くことにする。

4 音樂の類種

音樂は之を使用する目的の上より分けて宗教樂·軍樂·劇樂·室內娛樂樂·舞踊樂等に分つことも行はれるのであるが、此處には其の性質上よりして器樂と聲樂との二つに分つ所の類別法に從つて說明するであらう。器樂はいふ迄もなく樂器で奏するもの、聲樂は人の肉聲によるもので、純正の器樂ならば樂器だけで奏すべく、肉聲はそれに加らぬものであり、又純正の聲樂ならば、それに樂器の伴奏がなかるべき筈である。

さて此の純正器樂は外國には少からずあるが、わが國にあつては上中古以來の雅樂の曲にだけは相當にあるが、近世に入つては、尺八や箏の曲に稀に存するだけである。さうして器樂にあつては、各樂器の發する音の性質が、曲全體によつて生ずる曲趣の上に大關係を有するものである。よつて取りあへず、器樂に使用する樂器を和洋兩方面より拾つて、其の主要なものを表にして示せば次の如くである。

而して器樂は必ずしも此等の樂器を單獨に奏するのではなく、二種三種を合奏する場合が多いのである、



聲樂にも肉聲だけのものがあり、これにピヤノ・オルガン又は琵琶・箏・三味線等の作奏の加るものがある。其の種類からいへば、西洋樂曲に模して作つた學校で課する處の唱歌、教會で唱ふ讃美歌、佛教寺院で稱へる和讃、此の他農工業に從事する者の勞作關係の歌、祝賀又は遊興の用に供する座敷向の歌、踊の歌等にわたつて、種類は隨分多樣多種であるが、便宜上こゝには唱歌・讃美歌・和讃の三は除いて、勞作歌

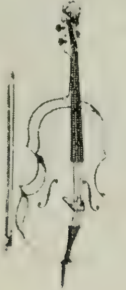

マンドリン


ギター

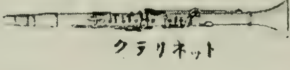

ダブルベース


バイオリン


ビオラ

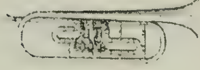

ビオロンセロ

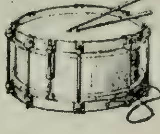

フリュート

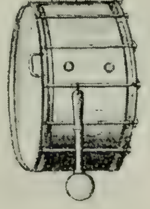

クラリネット


オーボエ

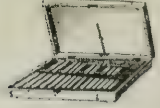

ワルド ホルン


トロンペット


サイドドラム

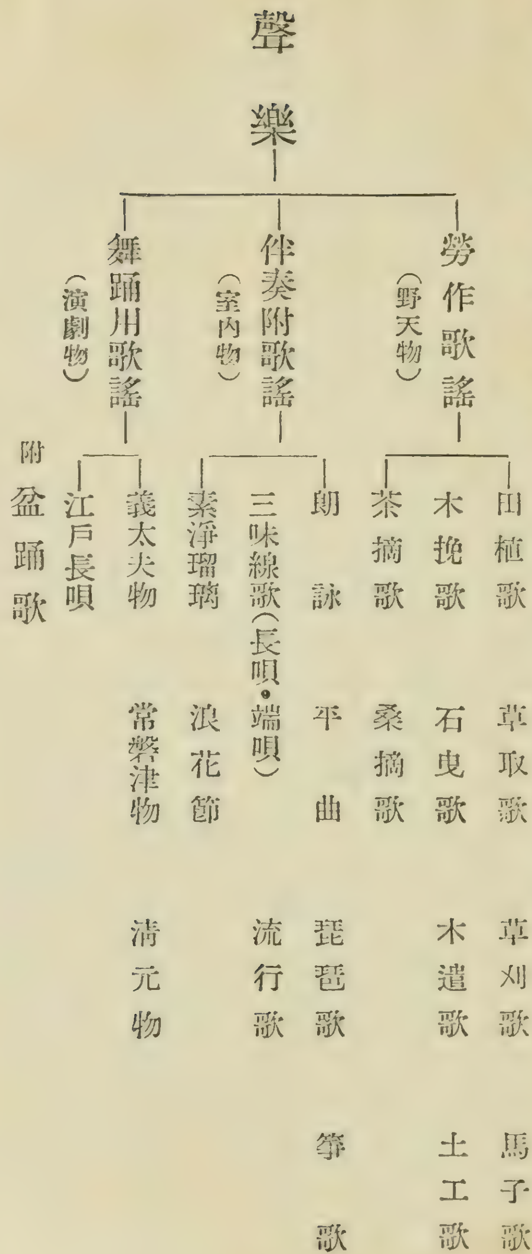

バスドラム


チンパニー


グロッケンスピール

（四八—四九）

謠・伴奏附歌謠・舞踊用歌謠の三種に分けて、我が在來の歌謠を區分して見るであらう。こゝでいふ歌謠は極めて廣義で、語り物の淨瑠璃や浪花節までをこめていふのである。讃美歌や唱歌を除く理由は後段に於ていふ。



5　受刑者と音樂

受刑者の感化に音樂を用ひることは、我が國に於てはまだよく考慮されてゐな

いやうに聞くが、彼等とても其の頑なること途に横はる石の如く、其の溫情を有せざることは氷塊の如くでなく、人間の性情は皆之を備へてゐるのであれば、音樂を聞いて刺戟を感じない道理はない。けれども音樂は兎角觀覽娛樂物に結びつけて考へられ易く、それが爲に贅澤物の如くに思惟せられる傾がある。勿論之を宗教上に用ひて感化を大ならしめようとしてゐる人たちは既に〳〵ある。感化院や養育院あたりにもオルガン位は備へつけてあつて、唱歌位は敎へてもゐようが十分なる考察を經て、それが行はれてゐるとはいへさうもない、音樂の人を感動せしむる力の如何に偉大なるかは前述の如くであるが、其の對手の人物如何をよく知つて後、これに適應する音樂に觸接せしめるのでなくては、乃ち十分なる考慮の後に施行するのでなくては、到底其の效果を見得るものでない。寺院、敎會、感化院等の音樂に就きても述べたいことは多々あるが、茲には特に刑務所内に於ける受刑者に良感化を及さしむべき爲に、音樂を使用する場合のみを考へて、如何にして之を實行すべきかの方策に就いて私見を開陳したいと思ふ。前に聲樂の種類

を說くに當つて、和讃と讃美歌と唱歌とは暫く除外することにしたのは此の爲である。此等は刑務所內で聽かせるのが惡いといふのではない。聽かせても比較的に効果が少からうといふのである。

先づ器樂の方面から檢討を試みて行くであらう、西洋器樂中に、受刑者の感化用に用ふべき適當の曲があるであらうか。それらは無いともいへまいが、西洋の器樂曲を味ふには十分の素養を要するのであつて、恐らくは現在の受刑者には聽かせてもさう効果はあるまいと思ふ。統計の示す處によれば、現在受刑者の年齡は二十歲より五十歲迄の間で、就中三十三四歲迄の者が最も多く、其の學力は凡そ尋常小學の三四年程度に止るといふ。此の程度の者は到底ピアノやバイオリン又はセロの絃樂を聽いて、それに感興を有しさうにも思はれない。稀に之を喜ぶ者があるとしてもピアノやバイオリンの曲は强烈な刺戟を與へ易く、動もすれば彼等に憤激や抗爭の情をそゝるべき虞がある。セロは其の音が低く、これで奏する樂は、人の心に和順の念を抱かしむべく、一向强き刺戟は與へない。よつて此の物

による曲だけは、素養のある者に効果のあることは信ぜられる。けれどもセロの曲は他に比して少く、既往のものからは之をといつて推せさうのものは尠からうと考へられる。それでも二十曲や三十曲位採ることは容易いであらう。

吹奏樂曲は絃樂曲よりも遙に人を和やかな氣分に導いて、人の心に平和の念を湧かしめるものである。此の吹奏樂器の第一位に立つものはオルガンである。けれどもオルガンだけの樂曲では、現在の受刑者にとつては高尙に失すべく、さまで、感興をば惹起しないであらう。オルガンの次にはフリュート(横笛)を擧ぐべきであるが、此のみで奏する曲も甚だ少い。此の次にはオーボエを擧ぐべく、これはチャルメラの變化したもので、其の音は高いが、最も人聲に近く、且つ哀調を帶びて人の心を沈靜惆悵たらしめるものであれば、其の樂曲如何によつては、採つて以て受刑者に聽かしめるがよいと思ふ。所がこれも其の樂曲は極めて少い。

擊樂には獨立した曲は殆ど無い。よしあつても、鼓舞刺戟の用にのみ供すべく到底刑務所に生活をなす受刑者に聽かしむべきものでない。

上述の樂器以外にまだ月琴に酷似するマンドリンがあつて、好樂者の遊興に供せられるが、金屬性の鋭い音を出すので、感化用にはどうだらうかと思ふ。　ギターはマンドリンより低い音を出すが、獨立させて用ひることは尠く、いはばマンドリンの伴奏用である。

かくの如くで西洋器樂には利用出來さうなものが無いではないが、其の樂曲が少くもあり、又概ね高尙に過ぎて、直ちに採用することは出來さうもない。　しかし樂曲の少いだけならば、新に適當な曲を作り出せばよいのであるが、これ迄器樂に慣れてゐない受刑者の耳には、これが面白くて、彼等の心に平和と慰安とを與へるかどうか甚だ疑はしい。　自然純正なる西洋器樂は現在の受刑者に對しては感化し得られさうもない。

翻つて我が國の器樂に就いて考へて見るであらう。　先づ擊樂から考へて見る。太鼓だけの曲はかのお祭に雇はれて來る葛西囃子はそれであるが、お祭氣分に鼓舞するだけで、受刑者に聞かせては却つて惡結果を招來するであらう。　大鼓や小

鼓や鉦鼓だけの曲はなく、木琴にはあるやうに思ふが、これが彼等に興味を抱かせて良感化を與へることにならうとは思はれない。　次に吹奏樂である。　刺戟的の音抑壓的の强烈な音を出す篳篥は危險視すべきであるが、他の横笛等は何れも樂曲を有するのであつて、其の曲は概ね甘く和やかな感じを與へるものである。　時に感傷氣分に誘ひ入れる曲調もあるが、しかし乍ら受刑者に聽かせて効果があるのではあるまいか、私は器樂としては管樂器の曲が最も適當であることを信ずる。
昨年東北行の夜行列車に乘つて行つた時、千住の彼方、久喜あたりだと朧氣に記憶するが、すれ違ふ汽車を數分間待つ間に、驛長の親切からして、附近にゐる横笛の名手を呼んで置いて、改札口で幾曲か吹奏させてくれた。　月明の夜であつた爲でもあらうが、祭禮の時に用ひる道行の曲、宮入の曲、獅子舞の曲といつたものが、何れも清涼甘和何ともたまらない好感を抱かせてくれた。　同乘の人は何れも一秒も向ふより來る汽車の遲れることを祈らないものは無く、幾人か之を口に發したが、汽車の交替は正確に行はれて、我等は次第々々に細く遠くなる笛の音に別れたが、そ

れが、ひどく惜しかつたことを記憶する。尺八で聽いた追分、明笛で聽いた清樂、又はやはり月夜に雅樂師の家の附近を通つて、雅樂の何曲か聽分けかねたが、悽涼無比な音にきゝとれて、思はず時を過したことなどが續々と思ひ起される。これは私が音樂に對する感受性が强い爲でなく、恐らくは普通常人である限りは、笛の音にひきつけられて、平和な念ひを起さないことは無いであらう。次には絃樂である。箏や三味線や月琴には極めて稀に歌のない純正器樂曲があるけれども、其の數は甚だ少く、三味線以外のこんな曲が彼等の興味を呼ばうとも思はれない。琵琶には歌のない曲が幾つもある。これは、雅樂に屬するもので、古調に失して徒らに欠伸を催させるだけであらう。三味線にしても曲だけのものは少くもあり、彼等に取つてはさう面白くも無いであらう。

かう說けば管即ち笛の類ばかりを擧げて、絃樂器を抑へるやうにも思はれようが、音樂にあつては甚だ變化を尙ぶものであれば、徹頭徹尾笛による必要はなく、便宜絃樂器を交へるがよい。さうして變化をつけて、聽く者があきないやうにすべ

きである。尺八と三味線と箏とは三曲と稱せられて昔より合奏してゐるが、これに横笛を加へて見るもよく、琵琶を交へ、胡弓を加へて見るもよく、西洋樂器のセロやフリュートを入れて見るもよい、オルガンをも參加させてよい。要は惡感化を與へないもの、即ち他へそれるやうな刺戟を與へるものでなければよいのである。

進んで聲樂の利用に入る。西洋諸國の民謠や聖歌や、技巧歌曲等を原語のまゝで謠つたとて、彼等には之を解すべき力がない。それに歌詞だけを邦語で附けるとしても、其の意味だけは理解するであらうが、其の曲趣を解して、これによつて良好の感化、即ち心に淨化作用を起さうとは考へられない、此の洋曲を解し得られないの一事は甚だ緊要なる大問題に觸接するものであり、同時に各種の藝術中、音樂が最も他國のものと融合し易くないことを物語るのである、わが日本人は、模倣の才に於ては優れてゐると稱せられるが、音樂だけには、此の模倣上手の民族も閉口したのであつた。聖德太子が亞細亞大陸樂の傳習を奬勵された時にも、手厚い保護の下に誘導を試みられたが、一向うまく行かないので、歎聲を發して居られ、

爾來大陸風の音樂演奏は、永く歸化人系の人々に支配せられた。否今まだ其の名殘を止めてゐるのである。奈良朝時代に盛んに入り込んだ大陸樂は、わが內國樂と融和するには二百年もの永い年月を要したのであつた。さうして內外樂融和の後に、平曲だの、能樂だの、淨瑠璃だの、箏曲又は長唄・端唄・琵琶歌等が作り出されて明治維新に入つたのである、以上列擧せる歌曲、殊に三味線曲の如きは發達が爛熟の極に達してゐたので、何とか轉廻策を講じなければならぬ處で、歐化主義の明治の世となつたのである。明治の中年迄は政治法律制度文物一切を歐米風に改造するのが國是の如くに考へられた。當然音樂もそれで、先づ以て學校に唱歌が設けられ、教會では外國の曲に邦語の歌詞を附して唱はせた。けれども彼と我とは全く音樂の組織を異にしてゐるので、一般社會はこれには更に耳を傾けず、兒童と基督敎信者とだけは教へ込まれるがまゝに、それを唱ひもしたが、その曲風は十年たつても二十年たつても、流行歌の如き國民の大多數が口にすべきものの上には影響を及さなかつた。而して近來に至つて、それに自國の音調即ち童謠又は民

謠の曲風を加味して作曲する者が出るに及んで、始めて、兒童もそれを謠へば、民衆もそれに耳を傾けて相和するといふことになりかけたのである。明治の初年から政府當事者は、音樂だけに對しては、自國製品保護助長の途を講ぜず、一切成行まかせにしたのである。しかしながら、わが國民性の發露である所の自國音樂は、政府の方針と施設と強制とに壓せられて永久に引込んでゐるものではない。國民一般は政府の奬勵する唱歌や唯一の官位音樂學校で授ける處の洋樂には背を向けてゐた。それが最近十年此の方になつて、青年子女に喜ばれて、流行歌の上にも其の曲風が混入することとなつた。これは外國歌劇の入り込んだ爲にもよるのだが、思想の上に大變動の生じた結果であることは、識者周知のことである。必ずしも政府の奬勵した洋樂が此の變動を起したのでない。世界に於ける新思潮が我が國に流入したのであるが、少くとも之を受け容れて、其の勢を逞しうせしめる上に、これ迄の謬れる音樂政策も參加してゐたらしいことを悲まねばならぬ。勿論それは消極的の參加で、其の宣傳や旗持をしたのではない。自國民の性情に合

する邦樂を考慮の外に置いたことが、因襲を打破し、舊型を脱出せしめることであつた。自國を愛する心の基礎となるべき國民的說話から離れしめることであつた。藝術に領域なしと考へしめた。其の結果は、箇人主義より直に世界主義人道主義に赴かしめることは當然である。此の悲むべき施設は近時に及んで漸く緩和せられ、邦樂の棄ておけぬことに、社會も政府も考へ直すやうになつたことを喜びとなし得るやうになつた。此の分で進んだなら、恐らくは幾十年かの後には、東西兩洋の音樂の融和に成る新音樂が作成せられて、新人と自稱する人達にも滿足を與へることとであらう。

受刑者は必ずしも新人ではなく、其の思想の貧弱なことに於ては眞に憐むべき人たちも尠くないのである。此等の人には、洋樂曲に附した難解な歌を聽かせても効果があらうとは思はれない。宜しく差向の處は彼等の胸の小琴に共鳴を呼び起すべき、わが國在來の聲樂曲を以てすべきである。しかして歌の內容と曲調とによりて、彼等の心に和順改悛の念を起さしむべく誘導すべきである。これが

感化上に於ける直通大道路であつて、其の効果は管樂器による吹奏樂の比ではないと思ふ。

先づ勞働に作ふ野天歌を考へるであらう。田植・草刈・馬子・木遣・土工等の謠ふ歌此等の歌はどうかすると勞働の苦を歌つたもの、例へば、

腰の痛さよ千町田の長さ、四月五月の日の長さ。

五月が來れば怨めしや、日はくれる、仕事は富士の山ほど。

といつた類がないでもないが、大多數は樂天的な想を快活な曲で謠ふもので、

娘やるにも木挽にやるな、仲のよいきを引きわける。

色の黑いのにおしろい附けて、お母見てくれつるし柿。

といつた類の輕い滑稽味を含むものが多い。今日本中より選擇したら、面白い曲、面白い歌の五十や百を拾ふに何の苦痛をも感じないことであらう。此等を蓄音機のレコードに收めて置いて、所定の休息時間に適宜之を聽かしめたら、必ずや少からぬ慰安を與へ、それが改悛悔過への導きとなることであらう。或者は論じて

「それもよいが、彼等はそれを聽いて娑婆が戀しくなるであらう。其の結果脫出を企てる者が生ずるに相違ない」と。かういふ人もあらう。ひよつとしたら、そんな方面にそれて考へる者もあるであらう。私が音樂を劇藥に譬へたのも實はこれが爲なのである。けれどもそれは百人に一人といつた程度に止るべく、如何に音樂が人を感動せしめるとて、それ程てき面に効果が擧らうとは思はれない。又効果があるなら仕合せで、宜しく其の調節によつて善用の案を立つべきである。ことに刑務官や敎誨師の看督補導の下に聽かしめるのであれば、さうした弊に惱まされるやうなことは萬々あるまいと信ずる。

次は伴奏附の歌謠である。朗詠や平曲の如きものは何の効果もなく、箏歌にしても同樣であらう。けれども敎訓の意を含む筑前琵琶歌や薩摩琵琶歌の中には聽かせて良感化を及しさうなものが多くある。必ずしも石童丸や小敦盛には限らない。赤穗義士の事蹟や楠公父子の誠忠や、日淸日露兩戰役に關する歌も數多あつて、此等は悲愴味に富むが、決して彼等に對して禁物と爲すべき處の刺戟は與

へさうに思はれない、浪花節にしてもさうで、選擇に注意さへすれば、何の危險もないことであらう。義太夫の語り物にしても

太閤記　先代萩　寺子屋

の類は之をレコードによつて聽かせたとて、決して横道へそれしめるやうなことは想像されない。其の選擇上によい參考となるものは、徳島縣教育會で調査した義太夫調査書であらう。江戸長唄の鶴龜や勸進帳にしても何の害もあるまじく、端唄や流行歌にしても、差支ない歌曲はいくらもあつて、それがもうとうにレコードになつてゐる。たゞ壯士連によつて起つた演歌だけは、やゝ考へ物かと思ふが、それにさへ無難な内容を有つ歌がいくらもある。

此の說明は同時に演劇用の歌謠にも利用すべきもののあるを說明することで、演劇物も亦映畫と共に感化上に利用すべきものである。而して此の舞踊歌の部類に入るべき盆踊歌は、甚だ平明純情な曲調に成るものが多く、すぐれた歌詞は各所に於て不足なく見出される。宜しくよきものを選擇してレコードに收めて之

を聽かしむべきである。

6 結語

以上縷述する所によつて、在來の器樂及び聲樂中に利用すべきものの尠少ならざることは知悉せられたであらう。わが國在來のもので、古い歷史を有する歌や曲は洗煉の上にも洗煉せられ、適者生存の理法の下に遺存するものであれば、これを聽かせて國民性の涵養を圖ると共に、受刑者の心に淨化作用を起さしむることは、申分のない事業として賛意を表して戴きたい。而して私はそれだけではまだ滿足は出來ない。更に進んで受刑者に聽かしむべき、はた謠はしむべき處の新しき歌、新しき曲を作り出すことが緊要であると思ふ。すなはち消極的に音樂の感化を求めようとせず、積極的に之を利用するやうにしたい。

此の事業は決して困難でない。二三萬圓の經費を以て實行し得ることである。當今にあつては、作歌者にも、作曲者にも適當な人がある。其の作をレコードに收

めることは極めて容易である。蓄音機で不十分だと思ふものは、ほんものを聽かせるがよい。それにしてもさう大した費用をかけずに行ふ方法がある。唯注意すべきは、

一、歌の用語はつとめて平明であるべきこと。
二、內容は成人向にして、決して强烈な刺戟とならぬやうにすること。
三、曲は必ず日本民謠に基いて、洋樂の臭味を附けないこと。
四、伴奏を附する場合は、笛が最もよく、これに次いでは三味線やオルガンやセロを使用すること。

の四點であらう。もし幸にして此の事が實行せられて、受刑者の性情を明るい方に導き得て、再犯三犯の者を減少せしめることにならば、必ずや聖代の美事として永く後代に記念せられるであらう。二萬三萬の金否二十萬や三十萬の金は決して惜むに足らないのである。重い犯罪者二三名の爲にも其の位の金はすぐに消費せられてしまふ。

四　日本佛教音藝

（昭和四年三月稿）

音藝は音樂關係の藝術の意である。　上古以來の我が學問藝術一切の文化は、東亞大陸から導かれたのである。　之を音樂歌舞の技乃至は演劇といふが如き範圍に局限して考へても、わが器樂と舞技とは大陸傳來の舞樂に導かれたものである。又わが聲樂は全く大陸傳來の佛教聲樂即ち聲明から生れたのであつて、換言すれば、聲明は日本聲樂の技巧を以て立つもの全部の母胎であつて、後の能も、幸若舞曲も、淨瑠璃も、歌說經も、歌祭文も、其の曲調から云へば、すべて皆聲明といふ廣く且つ深い池沼から流れ出したものに、他の幾つかの小川が流れ込んだものに他ならぬのである。　鎌倉時代に生れ出でた宴曲や平曲に至つては、其の骨子も皮肉もすべて皆聲明から出て、いはば佛家の偈頌唄讃の曲調の世俗化したものであつたので

ある。はじめて內外聲樂の融和したものとして認むべき平安中世の雜藝、即ち今樣の曲節も十に八九は聲明の系統に立つものであつたと考へる。白拍子はおそらく雅樂の方でいふ只拍子のことであるべく、これにしても佛家の稱呼であつたものとして考へたい。

〇

聲明の由來や流派は今更に說明は要さないであらう。けれども、これが佛教の日本化に參加したことに就いては、更に少しく述べる必要があらう。慈覺によつて創められた舍利讃歎や、天台大師供の教化や、又は引聲等は、天台聲明の礎石であり、巨柱であり、棟梁であり、且つ屋蓋であつた。さうして、源信即ち慧心院の僧都は、其の家に室內工事を施し、又四面に扉を設けて、道俗殊に俗人をそれに出入せしむる爲の道路をも開いた人であり、良忍は追補修繕と室內裝飾とを完成したものであつた。

而して此の慧心院の業績は主として欣求淨土の想を流布した點にあつて、それ

には此の人によつて作られた和讃が與つてゐることを述べたい。善導の創めた六時讃といふことは、此の人によつて日本に弘められた。かの長篇大作とも傑作とも稱ふべき極樂六時讃がそれである。此の人の往生要集は、中流以上に、此の人の六時讃は中流以下に至大の感化を及したことは到底否めない事實であるべく、御堂關白道長の法成寺建立は、此の要集と讃とに導かれたことが多からうと思ふ。それを證するものは榮花物語であつて、その音樂の卷に於て、文辭の瑰麗と情熱の包含とに於て、讀むべき處は、すべて皆此人の六時禮讃の句であることに眼をつけなければならぬ。特に「彼の六時讃にいひたるやうに夜の境靜かなるに。」と記して、六時讃の中夜和讃を長々と引用してある。從來の古典學者は此のあたりを善導の讃からとのみ解してゐた。自然いかに善導の文を引用して說いてあつても、それが物語の文の根據だとしては受取れず、他に何か日本人の手に成つたものが無ければならぬと私は考へた。さうしてそれを、源信の手に成つた日本文の極樂六時讃に於て見出したのである。道長が源信等によつて强く唱へられた淨土の有

様を此の世の目のあたりに現さうとしたのが、實にかの法成寺であつたと考へる。

往生思想の普及には、幾多の名僧知識を考慮の中に入るべく、前にしては空也、後にしては千觀や覺超または眞源をも擧ぐべきであらうが、我等はそれに後れて出た法然と親鸞と一遍との此の三上人によつて大成されたことを確認すべく、此の人たちの起した淨土宗・淨土眞宗・時宗の三は、唄や讃を世俗化せしめたもの、即ち和讃によつて、諸人を導き寄せたことは、掩ふべからざる事實である。殊に時宗はそれに踊躍を加へ、淨土宗も處によつてはそれを行つた。之を稱して、佛教の日本化と述べたい。由來一般には高遠な想を解すべき頭腦を惠まれてゐなかつた日本民族は、此の淨土思想に於て、始めてよく佛教を請け容れたのであつたと見る。さう見てから說くのであるが、恐らく當に許さるべき言說で、決して私の意見でなく、先覺にもさう見てゐる人がいくらもある。

○

凡そ諸般の儀禮には、必ず音樂の參加を要し、殊に信仰に觸接するものには、歌謠

の合唱を緊要事となすことは、事新しく述べずとも、過去の歴史が之を證するのであるが、此の明治大正の御代に於ける諸宗の唄讃偈頌は、果して道俗相共に合唱して、相共に歡んで、法の道に進む助をなしてゐるのであらうか。　俗人は之を謠ふことに於て、はじめてよく其の教へに融合することを感ずるのである。　然るにそれがかの基督教の信者の參集には必ず見ることであるにも係らず、佛教信者の會合に於ける合唱用の歌は、御詠歌の外に何がよく流布してゐるものとして推擧せられ得るであらう。　近年になつて、花祭りや、朝の祈、夕の歡びといつた類の歌が行はれ出したとはいへ、まだ〳〵定まつて謠はれる歌、弘く合唱される歌として認むべきものは甚だ稀少ではあるまいか。

○

「悉曇聲明愚僧の業」といふ考は、最早何人の頭腦にも宿つてゐないであらうが、政治問題に興味を有し、事業經營の上に手腕を示すを以て喜びとする僧侶の多い今の世には、まだ〳〵此の諺は傑僧と呼ばれる諸師の頭腦のどこやらに潜んでゐる

ことであらう。勿論分業で進むべき社會は、各その長所に向つて猛進するのに、何等反對すべき理由のあらう筈はない。或者は經營に、或者は篤敬行動に、又ある者は教理の研究乃至は感化事業に向つてといふが如くにすべきである。しかしながら或一隅のみが進んで、他の三隅が遲れてはならぬ。佛教界には、決してこんなことはなく、あつても恐らくは三隅が進んで一隅が遲れてゐるのが現狀であらう。さうして種々の感化事業は講ぜられてゐる。けれども寺院に於て道俗合唱用の新しい歌即ち感化の上に直接に參加する謠ひ物は餘りに作られてゐることが尠い。かの天理敎にはそれがあつて、それが如何に人々を吸收してゐるかに就いても、我等は決して冷笑や侮慢の態度に出でず、眞實に考慮を費すべきであらう。

○

時代順應は、その道、その事の永く存立する所以である。我等は佛教音藝の上にもそれを考へなければならぬ。而して新しきものと稱するものの多くは、其の大部分が過去の延長であつて、さうあつて始めて世に認められ、又請け容れられもす

るのである。音樂殊に聲樂には、それが緊要であることは、洋樂流布の遲々たることが之を證するのである。洋樂輸入以來六十年を經過したが、まだ精々で、其の通辯者が出たといふ程度に止つて、まだ〳〵國民の多數に慰安や怡樂を感ぜしめる迄には普及してゐない。

我等は今家庭に於て、大衆會合の席に於て、新日本の新人をして滿足せしむべき新音樂の出現を庶幾すると共に、それが佛教家の間に於ても、一日も早く寺院樂の作成に關して成功せられんことを切望するのである。その爲に過去の唄讃の價値を考査し、新に添加すべき曲調と歌詞とを選擇することは、決して輕んずべき事業でなく、よつて以て道俗の信仰上に新生命を附與することに成るのである。

當今の音樂界は、世界を擧げて行詰つてゐるらしいが、その行詰りは、日本の邦樂に於ても著しく、同時に聲明に於てもそれが感ぜられるのである。東西文化の融合は、宜しく一日も早かるべく、同時にわが長所を忘却しないことに努力すべく、殊に音樂に關しては、その聲を大にしてから言ひたいのである。現代の新人は洋樂

に關しては比較的に知識が豊富で、女學校の生徒もその一般樂理位は教へ込まれるのである。而して邦樂は更に顧られてゐないが、これは全く主客を顚倒したもので、歐米諸強國からの呑噬を恐れた時代の政策が、ひとり音樂の上にのみ遺存するのである。

○

天台や眞言や淨土、此等の如く聲明に特別な深い關係を有する宗派のみといはず、よろしく各宗相擧つて、新時代の人達を滿足せしむべき新和讃の出現に力を致すべきである。それには洋樂の知識を有すると共に、過去の聲明の價値をもよく知了してゐて始めて成功すべきことを考へて戴きたい。日本聲明には、實に印度の曲調も、支那のそれも、またそれを日本化して融合の實を擧げたものも今現に立派に存在してゐるのである。此處に一二年前遭遇した一事實を紹介致したい。それは佛教研究の泰斗と稱せられる佛國の碩學シルバン・レヴィー氏によつて、わが聲明の傳統と價値とが教へられた事である。

○

日佛文化交換會の理事長として一昨々年からつい近く迄わが國に滯在されたレヴィー老博士の周圍には、佛蘭西生れの少壯な篤學者が集つてゐて、それが皆東洋研究に思を潛めてゐるのである。此等の人はレヴィー老博士と共に、わが能樂に深い興味をもたれ、私に能の話をせよとの申込をなされたので、一昨昭和二年の二月に、一二回日佛會館へ同氏を訪ねて夜おそく迄話し合つたことがある。

その時同氏は、大正十五年の十月靖國神社の能樂堂で演ぜられた古樂古舞演奏會は實に面白く且つ有益であつたと語られ、就中聲明が最も傾聽に價するものとして感じたとの話であつた。能樂の中では翁が最も面白いといはれる程の老博士であるだけに、其の言說の非凡なのに驚かされたのである。此の十月のは啓明會の主催であつて、舞樂や朗詠や田樂の外に、奈良の法相聲明と、比叡山の天台聲明をも演奏して貰つたのであつて、法相聲明は訓伽陀と論義、天台聲明は散華、敎化、吉慶梵語讃及び六道講式をやつて戴いたのであつた。私が啓明會から一切のこと

を委任されて曲目を立てたので、當日此等に關して講演を致した。

此の關係上、最も面白かつたものは何、又最も面白くなかつたものは何といつたやうな感想を四方から攝受したのであつた。或者は舞樂の華麗を喜び、或者は田樂の珍奇をめで、又或者は朗詠に滿足の意を表したのであつたが、聲明を讃歎した者は甚だ以て少數であつた。然るに老博士は、あれを最も喜ばれて、もう一度聽きたいといふ希望を遠慮勝にいはれた。然るに折よく啓明會の演奏會に天台聲明を諷誦された多紀道忍君が、聲明の講師に聘せられて、比叡の山から東京に上つて來られた。よつて同君を煩して、我等兩人は大雪の夜に、日佛會館へ老博士を訪ねた。座には大使館の通譯官として著名な人、東洋研究の爲に、佛領印度や支那に永年滯在してゐられた人たち數名と老博士夫人、邦人では同館理事の他に古市公威男も待受けてゐられた。

多紀君は先づ吉慶梵語讃の拽怛懵識覽、都史多稱縛……を謠つた。此の讃は阿利沙伽陀(大日偈の意)であつて、未渡の經なる金剛起經の文を長々と謠ふのである。

專ら灌頂の時に用ひるもので、三段より成るのだが、其の第一段だけを謠つた。樂拍子に出來てゐて、行道に用ひるものであるから、足拍子に合ふやうに出來てゐる。それを謠ひ了ると、老博士は日本で此の歌を聞かうとは夢にも思はなかつたといひ、更にもう一度諷謠を求めて、門下生に命じて之を筆記せしめ、それに漢語の譯文を添へて示された。さうしていはれた、全く印度の曲である、今も之を彼の地の歌の上にきく曲調であるといはれた。永年印度に滯在された博士がさういはれ、印度支那にゐた人もさういひ、博士夫人も細かな點は違ふかも知れぬが、兎も角も印度情調に引入れられるものだと證せられた。示された漢語譯を見れば、爾吉祥天云々とあつて、吉慶漢語讃と略同一の文であつた。又博士は印度語で詩の形に寫取つて見せられたが、一二の裝飾音が添加されてゐるだけで、別に訛誤もないことが分つた。

こゝに私は、魏の陳思王が魚山の溪谷に於て、梵天の聲を聽いて作つたといふ唄や讃の曲節は、印度のそれであつて、梵天は疑も無く印度人であることを明らかに

し得たのであつた。

○

多紀君は、次に天台宗特有の大讃、阿婆麼左擺（アサマサラ）、薩但多婆齡（サタタサレイ）……を謠つた。これは慈覺の將來した曲である。その最初の少部分、洋樂譜で寫したら六七小節を謠つたかと思ふと、博士は低聲にシナと獨語をされた。これも一段落の處迄謠ふと、支那の歌曲であると斷ぜられ、同席の少壯學者も、一同に支那の旋律であると述べた。殊に其の一人は、浙江省に屬する舟山列島の普陀山に於て晨朝の歌に於て之を聽いたと述べた。普陀山は觀音の淨土として知られてゐる處、慈覺は此所へも巡錫したのであつて見れば、我等はそれに對して服從しなければならなかつた。更に多紀君を煩して、日本化してゐる講式や教化の曲を謠ひ、それに就いての感想をも聽きたかつたのであつたが、ひどく夜が更けたので、後會を期することとなつた。

大使館の通譯官ボンマルシャン氏をはじめ、居合せたもの一同は、東洋の島國日本に東亞大陸の古曲の遺存するを喜び、是非蓄音機のレコードに收めて貰ひたい、我

等は大陸方面の佛教關係の音曲をレコードに取つて、その交換を成し、相共に研究を成し遂げたいと述べられた。我等もそれに同意して先輩の方々にも打合せようと思ふが、博士等からも我等の先輩等に御相談をかけておいて貰ひたい、應分の力は致すといつて別れたことであつた。同席された古市男は多紀君の曲を聽き終ると、どうもヘンナモノダと述べて歸つてしまはれたので、交換研究のことについての御意見を聞くことが出來なかつた。

○

聲明に東亞大陸の古韻舊調の遺存することは、この一事でも知られるであらう。舞樂には器樂曲としての多くの古調を傳へ、又其の舞には隋唐の服裝舞容の遺風を見るべく、此等は世界中わが日本のみに存して、支那にも他の何處にも見得べからざるものである。將來の新佛教歌謠、即ち新人と共にすべき合唱用に供すべきものは、從來の此等と、日本の土から產れて力强く生きてゐる民謠と、少壯學徒の好んで學ぶ洋樂と、此等を合せて作り出すものでなければならぬ。換言すれば東西

の樂を渾融したものであらねばならぬ。

○

日本民族は元來音樂に惠まれてゐなかつた。推古朝の二十年に聖德太子は

供養三寶、用諸蕃樂、或不肯學習。或習而不佳。而今永業習傳、宜免課役。

（太子傳曆）

と歎聲を發せられた。爾來歸化人の手に音樂の權は掌握せられて、幾十百年の後に其の歸化人たるの臭味が薄らぎ且つ忘れられた頃は、既に平安朝の中世に近くなつてゐた。やつとその頃に內外樂は融和されたのであつた。さうして生れたものは、聲樂上では雜藝、即ち今樣類であつた。朗詠にしても、催馬樂や風俗にしても、多分融和味を示してゐたことであらうが、一度斷絕して後再興されたのが、今のそれであれば、これによつて古の渾融の樣は判じ得られさうもない。然るに和讚だけは中絕したことが無いので、內外の融和聲樂の標本として見ることが出來るであらう。西國順禮歌なども其の一つであるべく、あれは確かに古曲だと先哲も

說いてゐる。

〇

過去の平安朝に於ける日本化といふことは、大規模のものを縮小することであつた。樂器の種類に於て、樂人の數に於て、謠ひ方に於て、それであつた。隋唐時代の樂の大がかりであつたことは、今の西洋諸國の大管絃合奏樂に幾倍どころか、幾十倍するものであつた。當時の記錄が實に之を證する。さうしてそれは東西兩大陸樂の渾融樂であつたと思はれる。その幾百千人で演ずるといふ大がかりのものを、國の面積に於て、人口に於て、經濟の負擔力に於て、幾十分の一しかた有しないわが國が、そのまま踏襲し得よう筈はない。縮約は蓋し止むを得なかつたのである。鎌倉以降、平曲・能樂・淨瑠璃・長唄・箏歌の類は新に生れ出たが、その規模の大小は事新しく申す迄もあるまい。宗教上には新作の和讃が出來ても、それはひどく世俗化されたものであつた。歌念佛は出ても、弘く請容れられなかつた。さうして、邦樂の一切、其の中堅である三味線樂、これ等は一切行詰つて明治維新に入つた

のである。

○

明治維新後、政府は洋樂を奬勵して、邦樂は從來のまゝの個人教授に委せて、今に成行きまかせの政策を取つてゐる。寺院樂や民謠に對しては勿論一顧をだにも與へてゐない。宗教法案に於ても干渉されるを喜ばぬ宗教家諸君は、勿論寺院音樂に關しても干渉されるを喜ばず、放任されてゐるのを喜ぶのであらうが、放任しておくものには、崩壞と廢滅とを免れ難いことは、何人も熟知してゐることで、宗教家諸君は此の點に於て考慮される必要があらう。古調古韻の保存も極めて大切である。それは上に縷述した如くであるが、更にこれに新氣息を吹き入れて、時代順應といふことに努めることは、更に一層大切である。

今や日本の音樂界は、洋樂は模倣追從の域より脫し得ず、邦樂は舊型を去つて其の曲調歌詞一切を新日本の新人に滿足せしむべきものを作成しようといふ意氣込に於て大いに缺けてゐる事は爭へない事實である。三味線や箏の上に多少の

改良は企てられ、洋樂の味を幾分加味するといふ程度の進歩は、それはあるが、あつても其の道の者だけが氣づくといふ程度のものである。

○

回顧すれば、明治年間の音樂界に於ける新產物は、第一に學校の唱歌を擧ぐべく、第二には壯士によつて起つた演歌を擧ぐべく、第三に浪花節を、第四に琵琶歌を擧げなければならず、第五に最近に起つた童謠詩や流行歌を擧ぐべきである。音樂を利用して、感化を與ふべき立場にある教育界と宗教界とは、どこ迄成功してゐることであらう。先づ佛教界についていふ。新和讃の製作はあつたであらう。唱歌式の合唱用のものも案出されたであらう。それに舞の手を添へたものもあるやうに聞くが、天理教の歌と舞とに何程の距離を有するのであらうか。

私は日本音樂界が今東西兩大陸の樂を融合し得るや、西洋樂を學んでよく其の壘に迫り得るや、新樂曲の製作に於て對抗し得る迄に進み得るやの一大試金石の上に置かれてゐることを叫びたい。もはや流派の異同などは考の中におかず、鳥

の瞰下するが如き態度の下に、新音樂の作成に從事すべき時である。而して信仰を抱かしめようとする宗教音樂は、更にそれに某々條件の添加せらるべきを思うて、偏に宗教家諸君、特に少壯有爲の方に御發奮を希望したいのである。

昨年來佛教音樂協會が文部省宗教局の援助の下に、合唱用の歌詞を募集し、其の曲をも募つてゐる。これは極めて機宜に適ふものである。私は之をもう一段徹底的に遂行して昭和の御代に於ける一つの輝きとして、後代に於て景仰されるやうにありたいことを切望する。

○

佛教音藝といふ題目は、聲明の他になほ多くの藝術に亙るのであつて、私は略說を舞技や演劇にも及す考の下に、かう題したのである。近く室町時代の末迄、寺院は各地の文化中心であつた。觀覽娛樂は多く其の境內に於て催された。古き奈良朝時代の伎樂にしても、稍降つての世の舞樂にしても、宮廷や權貴の邸內に比して優らうとも劣ることなく行はれた。延年に至つては佛家獨特のもので、新古の

演藝が其の場に見られた。白拍子の舞も、風流と呼んだ低級の劇も寺に於て演ぜられた。鎌倉時代の末から室町時代に田樂や能樂が榮えるに至つて、演藝は寺院を離れて、武將の傘下に立つことになり、其の用に供すべき脚本も、多く演藝者自身が筆を執ることになつた。自然古說話や史譚を劇の材として扱ふにも、沙門よりは武將を採ることが多くなつた。それでも能の如きは宗教味が濃やかで、諸國一見の僧が多くワキになつてゐ、草木國土悉皆成佛の想を含まないものは尠いが、狂言に於ては、これに逆行して、無學非修の僧を扱つて、寧ろ信仰の妨をしてゐた。江戶時代に入つての淨瑠璃や歌舞伎には、何寺何佛の緣起や開帳に寄せて作ることは、かなりに行はれたが、それも目先の變化と奇巧とに努めて、決して信念を起さしめるのが目的でなかつた。飽く迄も娛樂本位で、人情味を見せるのが主であつた。道成寺物は其の適例であらう。稀に釋迦八相記などは演ぜられたが、面白くないものとして見られた。明治維新後になつても、大した宗教劇は作られてゐない。日蓮辻說法の類は出た。出たが、まだ〳〵少い。哲學的の冥想以上に信へ導く劇、

が作成されたら、それが最も感化力が强いであらう。少壯の宗敎家にして、文筆の才に惠まれてゐられる方は、此の方面に、向つて、手を延ばされてはどうであらう。近年に及んで、宗敎關係の大學は幾つともなく設立され、其處には文學の專攻部も設けられてゐる。自然、作者は此の間からも出ることであらうが、其の出るのを待たず、出るやうに促したいと思つて、かう申す。

（昭和三年五月一日稿）

五　佛敎聖歌募集を贊す

最近佛敎音樂協會は、佛敎聖歌の懸賞募集をはじめて、自分等もその選者に名を列することになつた。

聖歌とあるので、基督敎の讃美歌に眞似たのかと質問して來た人もあるが、決してさうでない。佛敎にも古くから讃美歌があつた。わが國から例をとれば、奈良

朝の昔、光明皇后が先妣追善のために、興福寺の西金堂を建てられた時だと思ふが、行基が作つた百石讃歎があり、法華經を讃美した法華讃歎も出來てゐた。讃歎は和讃といふに異ならず、和文で綴つたものである。

和讃は平安朝の初期に、慈覺が歸朝してから興隆して、惠心僧都の手に名篇が作り出され、曲調は良忍に至つて大成された。これは天台宗でのことであるが、眞言宗にも眞雅以下の名人が出て、その聲明道が榮えると共に、多くの和讃が作り出された。之を承けて鎌倉時代に時宗や淨土眞宗のあの和讃が出、西國三十三番の順禮歌も成立したのである。次の室町時代から江戸時代にかけては、教義釋明や宗祖讃仰以外に、賽の河原だの、刈萱だのといふ世俗的のものが續々と作り出されたのであつた。併しながら順禮歌即ち御詠歌以外のものは道俗相共に佛前において合唱するものでなかつた。來迎和讃の類には稀にそれがあつても、多くは眞宗和讃の如くに俗人はたゞそれを聽聞して隨喜するといふ行き方に終つてゐたのであつた。これでは道俗の融合が十分に行くものでない。參會の老若男女が師

の僧と相與に謠ふことによつて、はじめて會通和合の念を抱いて、信の道に歸入することになるのである。

合唱といふことが、佛教界に缺けてはゐないまでも、不十分であつて、基督教では遺憾なく行はれてゐる。この點で、眞似たと思はれたのかも知れないが、佛教でも往昔は行はれてゐたことであり、今も稀には行はれてゐることである。それを今改めて弘めようといふのであつて、模倣や追隨だとはいふべきでない。假に模倣であつても、同じくこれ人心を信仰の道に向けしむる宗教同志の間であれば、よいことは眞似ても更に差支ないと思ふ。

佛教の各宗、殊に淨土門の間には、それ〴〵現代式の新歌唱が作成せられ、題材も諸方面から選擇してあり、その曲も古今を酌量してつけてある。さうして中には相當に流布してゐるものもあるといふが、歌の内容が佛教各宗派に通ずるやうにといふ用意の下に作成されたものは少なさうである。さうして兎角慈悲忍辱想に傾いた歌が多かつたかに聞き、あきらめをすゝめて、やゝもすれば悲調に馳せた

ものもあつたかに聞く。今回の募集において「佛教の明るく力强き方面を成るべく取入れること」と註文を出してあるのは、前述の弊に顧みてのことであるべく、極めて機宜を得てゐると思ふ。

花祭りの歌　　三歸依の歌　　朝の歌　　夕の歌

この四課題も恐らくその當を得てゐるであらう。花の四月の灌佛會に營む行事は年一年と一般社會に親しまれて、屋外佛會の重要なものとなつた。季節はよし、謠ふべき事項にも富めば、必ずや親しみを以て、祝福の意をこめた明るい歌が作り出されるであらう。快き歌はこの題目の上に期待されるのである。

佛法僧、この三寶に歸依する心がなくて、どうして信仰の道に入ることが出來よう、どうして安心が得られよう。寶前集會の席に於て、先づ合唱せらるべきは、この歌である。篤敬の士でなくては作り難からうが、世にはその人が乏しくない。私は渴仰奉戴の、誠意のこもる歌が、この題下に提出されることを信じて疑はない。

朝の歌、夕の歌、この二つは同じ信仰を有する人達の共同生活所、例へば何々寄宿

舍といふあたりに最も必要が感ぜられてゐるものであらう。同時に効果のあるものであらう。一見した所では、朝夕の歌と一題にしてもよささうであるが、朝はわれ等が一日の仕事に手を下すべく、喜び勇んで起つ時である。夕は一日の仕事を了へて、爲すべき事を爲し遂げたといふ喜びと慰めとの下に、やすらひと眠りとに入るべき時である。かれに奮起と躍進とがありこれに儨退と安祥とがある。歌も曲も當然色彩を異にしなければならぬ。一題にせず、二題に分けてある所に、募集者の深意を汲まなければならぬ。

好題目はこの他にまだいくらもある。必ずしも教祖釋迦の行蹟讃美に限らず、われ等の日常生活に觸接したものにも數々ある。けれども第二回第三回と相續いて募集される計畫だといへば、第一回における題目としては、前記の四者は何れも好適なものとして賛意を表したい。

たゞ案ぜられるのは、これ等の歌に對する曲である。歌謠の人を動かす力は、歌よりも曲にあることは否むべくもない。けれどもその曲を案出せしむべき基と

なるものは歌であれば、その歌の內容と形式とは充ち且つ整つてゐるものであらねばならぬ。過去の和讃や御詠歌のフシは相類似したものであつた。近年の新作曲にはそれに基いて多少の新案を添加したもの、洋曲に近接せしめたもの等、種種あるらしいが、どれが最も現代人を感動せしめるのであらう。今六十歳の人は明治に入つて生れた人である。子どもの一人二人を持つて思慮を廻らさうといふ三十幾歳かの人は、日淸戰爭後に生れた人、丁年の者は日露戰爭後に產聲を揚げた人々である。この三差別者における考へと音樂感とは、白と黃と赤と位の相違は存するであらう。佛教聖歌の曲は、その何れを目ざして作成せらるべきであらうか。私は歌よりもむしろ曲について、多く考へさせられてゐる。

六　佛法僧鳥

佛法僧の鳥は高野、松の尾、河内の國高貴寺に限りて、夏中然も眞の闇に鳴くなり。此の聲たまさかに聞く人、心を淸まし、殊勝さも妥弘法大師の開基なり……（男色大鑑）

高野山で聞きたいと思つた佛法僧鳥は、この容では奥の院へ行つても見込がないとのことに、あきらめて、古聲明書の中に和讃を捜ね、宮野僧正の調聲を親王院の水原師の幽栖で聽聞して、鳥の音に幾倍する歡喜を抱いて下山した。

翌日は叡山の聲明道場大原に入つて、三千院の思出のある奥の間に一宿したが、山頂でない悲しさには、呂律の調は二つの川にきゝ得ても、三寶鳥の音は耳にし得なかつた。

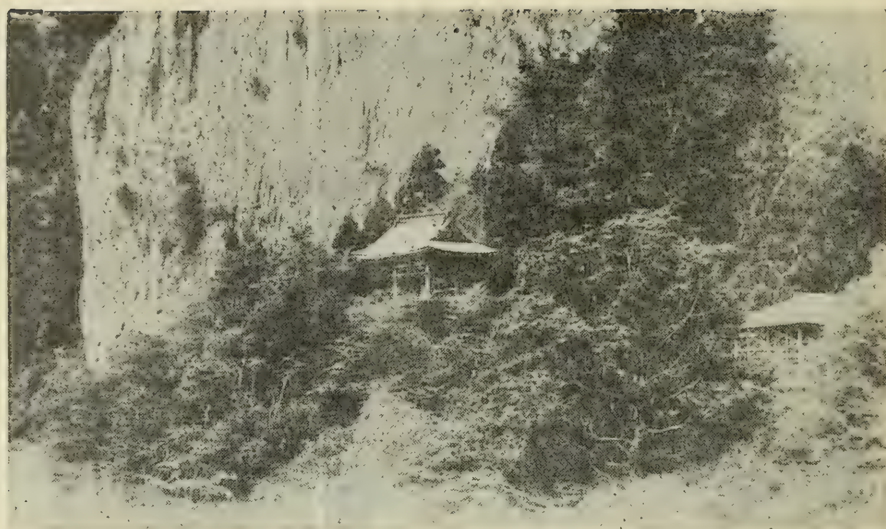
東坂本の聲明師の許に一宿して歸東し、豊橋から途を轉じて鳳來寺に向ふことにした。汽車から電車に乘換へる時、「佛法僧を聽きにいらつしやいますか、大分よ

く鳴きますさうで。」と赤帽がいつた。自分に取つては意外の報告であつた。鳳來寺は峰の藥師と稱して、早くから世に知られた靈佛のおはす所、淨瑠璃姬も此處の申子なら、德川家康もそれで、家光が建立した東照宮の立つ處である。自分がそれを訪ねるのは鳥のためでなく、申子のためでなく、此處に遺存する田樂の現狀について知りたいがためであつた。

七月十四日(大正十五年)紀伊の那智神社の例祭に、危くも絕滅の淵に臨んだ其處の田樂が大正十年かに八十歲近い古老から靑少年に授けられて、見事に再興されてゐるのを見て、驚喜と渴仰とに堪へず、著名な瀧の凉味よりも、名物の那智黑石や硯に對してよりも興趣を感じたのであつた。それより高野山に登つては、其處の天野社の田樂の退轉情態に、適者生存の理法は音藝の上に最もよく現れることを痛感し、那智からは十二日目の二十六日に鳳來寺へ着いたのである。不思議にも山の容といひ、谷間が何となく淺く感ぜしめることといひ、杉や松の繁茂ぶり、峻しい阪を八町か十町登つて寺社のあること、怪巖奇石の多いこと、硯を產することま



鳳來寺の景


鳳來寺寫眞

でが相類してゐる。たゞ大瀑布の無いだけが劣ることに數へなければなるまいが、その代りに遠望に連山を有するので差等は大きに減少する。

黄昏時に着いたので、田樂問題は明日のことにして、寺の廂の間の柱にもたれてゐると、尼さんが出て來て「今晩あたりは必ず鳴きませう、一昨夜は名古屋から紳商さんが十八人も見えましたが、意地惡く一聲も鳴かず、昨夜は客も無いのによく鳴きまして。」といふ時、假本堂の横手で「鳴く、鳴く。」と小僧君が自分を呼んでくれた。胡瓜畑の中に立つて耳をすますと、奥の院の方にカンカンと響くのが聞えて、それが佛法僧だと

いふ。成程佛法とは開けた。但大きに遠く且つ幽であつた。

二三日來無理な旅に胃腸を害つてゐたので、山寺の心盡しの素麵一椀に箸を着けて、床にもぐり込んだ。腹痛をこらへて、少しうと〳〵したかと思ふと、「申し〳〵。」と自分を搖り起すものがある。隣室のランプの明りで見ると、先刻胡瓜畑で念佛を唱へながら靈鳥に歡喜した、近い町の料理屋の主婦だとかいふ人であつた。「よく鳴きます。はつきり佛法僧と聞えます。」といつて親切に聞かせてくれようといふのであつた。ひどく疲れてゐたので、澁々起きて見ると、寺内一同が廂の間に集つてゐた。聞える――つひ近くの、那智なら瀑のあるあたりで叫び續ける。折から、そこの頂きの松から上つた十七日の月、莊嚴、幽遠、崇高、あらゆるこんな形容語を持出しても及びつかない絕景、赤星家の藏品に那智の瀑布を神體にした曼陀羅を見て、思はず頭を下げたことのある自分は、これも是非一幅の曼陀羅に描きたい光景だと思つて、また床中の人となつた。

田樂は確かにあつた。珍らしく歌謠も遺存してゐた。しかし、その服裝や調度

のみじめさには、涙をこぼさないわけに行かなかつた。此處の住持は經營の上に手腕を有する人で、雨漏も避けかねた寺に、巨萬の基本金を山林拂下によつて得て東京に常住する人である。此の人に逢つて田樂興隆の策を立てて貰はう。高野山では靈鳥が、滅法僧と鳴出したと某僧正がいはれたが、此處も用心しないと、佛飯僧と鳴出すかも知れない。

寺の二王門を出てからかう思つた。

追記

昭和元年の二月、自分は田樂の實演を見に行つた。其の模樣は文藝春秋に載せ、次いで日本演劇の研究第二集に於て報告した。なほ此の時此の寺の寶物に河内本源氏物語のあることを見出して「國語と國文學」の誌上に報告して置いた。特に此の方面に思を傾けてゐられる方は就いて御一覽になるがよい。

七　短歌と民謠

（昭和四年三月稿）

私の講演題目は古謠に就いてと題してあるが、古謠一班を說くことにすると、廣くて淺くて食ぱんの如き大味なものとなり、それに甘味を附ければ下等なカステラになるべく、自然珍し味もなく、聽者に對しても禮を缺く虞がある。よつて短歌と民謠といつたやうな意味に局限して述べることにする。

短歌が成立する迄には、もつと〳〵簡短な詩の形に成るものが、その以前から行はれてゐたことを考ふべきである。彼の諾冊二尊の天の御柱めぐりの時の

あなにやし　えをとめを
あなにやし　えをとこを

の應答の歌の如き五五だけのもの、また五七だけのもの、それが進んで五七調成

立後の五七・七形（片歌）例へば神武天皇が大久米命を作つて正妃を求めに出られた時の

やまとの　高佐士野を　七行く　少女ども　誰をしまかむ　（命）

かつ〳〵も　いや先立てる　えをしまかむ　（天皇）

あめつゝ　ちどりましとゝ　など黥ける利目　（伊須氣余理比賣）

少女に　ただにあはんと　わが黥ける利目　（命）

の内の五七・七に成る三首の如きは古い詩形のものとして考ふべきであらう。これが一段進んだ五七・五七・七の形の歌が即ち短歌であつて、短歌が出來上る迄には相當の年月を經過したものとして考へなければならぬ。かの八雲起つ出雲八重垣の歌の如きは、ずつと後世のものであらうと橘守部等は說くが、これは極めて有理な言であると思ふ。

而して此等の詩形上の變遷は、それを謠ふ曲節に支配せられた結果であると私は考へる。さうしてその詩形變遷は不思議な程に支那と過程を同じうする。　支

那の四言古詩は其の四言を分ければ、上下同長二言づつで、わが五五に該當し、次ぎに起つた五言詩の五言を分ければ、上短下長で、二言三言となる、これがわが五七調に合一する、

又彼に於て五言詩に次いで起つた七言詩の各句は、上長下短であつて、それはわが七五調に合致する、かやうな次第で、支那の方がいつも我に先立つて此等の詩形が次第に成立し、次第に盛行してゐるのであれば、自ら我が國のも彼に導かれたものとして考へたいのである。

これを以て、均しく進むべき人類が、當然通過すべき道であつて、それが爲に相類似した詩形を取つたとしても說明は出來るであらうが、絕えず支那文化に導かれた我が國は、謠ひ物のふしも彼から輸入し、それに支配されたことも考へて見たい。尠くとも、七五調の成立は輸入の結果であつた事は事實である。又その七五調を誘ひ起した支那の七言詩は、江南楚人の曲調より起つたもので、それには西域卽ち印度・波斯及び其の西方にかけた地方からの文化の浸潤を考へなければならぬの

である。他日必ず希臘・印度・支那・日本といふが如き關係次序の下に、わが七五の調が成立したことが證明せられるであらうと思ふ。

短歌は言ふ迄もなく五七調になるもので、それが後の七五調時代を通じて今日に至る迄わが日本詩界の優勢者である。又民謠は民衆多數人の間に於いて、誰が謠ひ出したともなく起つて、さうして擴がつたものである。すなはち民人の間から生れたものをさしてかういふのであるが、短歌が民謠であつた時代があるか否か、あつたとすれば、普通歴史の上で稱へる何時代のことであつたか、又今も民謠と手を握らしむべきか否かに就いて略述してみたいのである。

古事記や日本書紀所載の歌には、おほむね作者が明示されてゐて、民謠に對しては童謠といふ名で記してあるが、それはさう多くない。舒明紀に一首・皇極紀に六首・孝德紀に一首・天智紀に五首ほどが載せてあるだけである。

勿論他に民謠であつたものが、何天皇や何大臣の作といふ事に附會せられてゐるのも數多あるべきであるが、特に童謠と斷つてあるものには、短歌が多い、片歌

は僅かに一首、長歌の短いものが三首、他は皆短歌である。　これによつて、當代の民謠としては、短歌が最も優勢を有してゐた詩形で、それにいろ／＼な曲節が附いてゐて、それでいろ／＼に諷謠されてゐたことを考ふべきである。　さうして次の萬葉集時代に、短歌と長歌とがもつとも優勢であるべきことが、もう豫告せられてゐたとして考ふべきある。

萬葉集時代は、大陸の文化を模倣する最絶頂時で、此の點に於ては後の明治時代にも比すべき時代である。　此の時代の少し前よりして、長歌に反歌なるものが添へられることになつた。　これは先哲もいふが如く、楚辭の反や亂に倣つたもので、同時に目で見て味ふものになり、口に諷謠するといふ性質は、次第に稀薄になつたことを考へしめる。　萬葉集を通讀して見て、慥かに謠はれた證文のあるものには、一切反歌は添へてない。　それより推して、反歌なるものは、支那の詩賦に模して作つたもので、謠ふことを念がけてゐなかつたものと定めてよいと思ふ。　さうして、その反歌のないものは、概ね民謠又は民謠扱ひにすべきもののみである。

當時短歌は必ずしも謠はれたものでない。勿論謠はうとすれば、其の當時世に行はれてゐた節に合せて謠ひ得たものであつたが、特に謠ふ爲に作り出されてゐるものは、萬葉集の中にさう多くを收めてゐない。かの東歌や、正述心緒歌や、寄物述思歌といつた類は、それは確かに謠はれたもので、其の十の七八までは民謠であつたらうと思ふ。

玉川にさらす調布(てづくり)さら〳〵に何ぞこの兒のここだかなしき。

上つ毛野あその眞麻(まそ)群(むら)かき抱きぬれどあかぬをあどかわがせむ。

戀しけば來ませ吾がせ子垣内(かきつ)柳うれつみ枯しわれ立ち待たむ。

打日さす宮のわがせはやまと女の膝枕(ま)く毎にわを忘すらすな。

稻つけば皹(かか)る吾が手を今宵もか殿の若子(わくご)がとりて歎かむ。

人妻とあぜかそをいはむ然らばか隣の衣を借りて着なはも。

汝が母にこられあは行く青雲の出で來わぎ妹あひ見て行かむ。

此等はすべて皆東歌で、そのいふ處は露骨で本當に思ひ切つた表現であるが、これ

がまた東國一流の激越な曲調で謠はれたのが都の人たちの耳に珍らしく響いて記し留められたものであらう。

正述心緒歌は都附近のものとおぼしく、これはいひまはしが大きに上品に婉曲である。それだけ微温的で、熱氣人を魅せしむといつたやうな刺戟力を有して居ない。

支那の典雅な詩賦にまねたものばかりを採らず、全國各地に於けるこんな民謠が記錄されてゐたら、我等はどの位當代人の生活相を如實に知り得ることであらう。九州地方の民謠、北國地方の民謠、それ等は萬葉集の中にあることはあつても、數は少い。遊行女婦即ち行商式遊女の歌も、定住式遊女の歌もあり、糒を携帶行糧にして旅をした時の清水の邊に定住してゐた若い女に關する歌もあり、都からかへつた程のよい采女の謠つた歌もあつて、短歌が民謠であつた時代としては、いひかへれば民謠に短歌の形を取つたものの多かつたことは、奈良朝時代が最頂上であらうと思ふ。或はもう少し遡つた時代に於てもさうであつたかも知れぬが、そ

の時代の歌が蒐錄されてゐないので、先づはかう述べ去るべきであらう。
當時上古以來行はれてゐた歌垣の歌は勿論民謠であつて、それが上代の如き片歌式でなく、短歌の形であれば、やはり奈良朝期の民謠の優勢者を短歌と見て大差ないであらう。他に旋頭歌も謠はれた證跡はあるが、長歌は漸く凋落して、大陸からどし／＼輸入する新樂曲には、短歌又は旋頭歌を配して、奇異な反覆や奇異なハヤシコトバを挿入してゐた。催馬樂が其のよい例である。（註一）

註一　催馬樂　山城

一段　山城の狛(こま)のわたりの瓜作り、ナヨヤ、ライシナヤ、サイシナヤ、瓜作り、瓜作り、ハレ

二段　瓜作り、我をほしといふ、如何にせん、ナヨヤ、ライシナヤ、サイシナヤ、如何にせん、如何にせん、ハレ

三段　如何にせん、なりやしぬらし瓜破(た)つまでに、ヤライシナヤ、サイシナヤ、瓜破つま、瓜破つまでに。

こんなことをして迄も、長篇の謠ひものを形成してゐながら、古來の長歌は最早顧みてゐない。
此の形勢は平安朝期に引きつゞいて、遂に古今集を產ましめ、次いで後撰拾遺の

二勅撰集以下を成立せしめたのである。

○

此の時代にわが詩界の上に注目すべき勢力者が現れた。それは佛家の歌謠である。奈良朝時代にも佛に供へる歌、佛德又は經文を讃歎した歌は出て居たが、それは極めて稀であつた。それが新に有力なものとなつたのは、天台眞言の二宗に讃や偈を謠ふことが起つた爲である。最初は梵語又は漢語のまゝであつたが、やがてわが日本語をもつて綴り出されるに至つた。これが和讃である。さうして此等の梵讃・漢讃・和讃等一切を總稱して聲明といふ。寺院以外の俗人にも、此の聲明を謠ふことは喜ばれ、公卿の人達も、それを學んで聲明道の達人になつた者が尠くない、かの朗詠集の撰者である藤原公任は實にその名人であつた。此の佛家の漢讃には、七言詩と同形のものが多くて、それが我が七五調成立の上に最も有力な原因を爲したのであつた。此の調になる和讃は、天台の慈覺に始まつて、惠心に大成せられ、千觀珍海以下に繼承せられて、遂に我が歌謠の形式上に於ける最優勝者

の地位を占めることになり、短歌は次第に、歌謠界から離れることになつた。かの神樂歌や催馬樂歌や風俗東遊の類、此等には短歌又はそれに多少の添加をしたものが多く含まれてゐたのであるが、此の七五調の和讃が歌謠界に勢力を有するに至ると共に、これが民衆の共鳴をかち得て、遂ひに今樣又は雜藝といふ名の下に、遊君白拍子の人たちに迄喜び迎へて謠はるゝに至つた。さうして社會の實相に觸れて、廣く深く世人を感動せしめた詩は、和歌にあらずしてこれであつた。

女の盛りなるは、十四五六歲二十三四とか。
三十四五にしなりぬれば、紅葉の下葉にことならず。（塵梁秘抄）

見るに心の澄むものは、社こぼれて禰宜もなく、
祝（はふり）なき野中の堂の破れたる、子うまぬ式部の老いの果。（同上）

歌合せの流行は短歌をも盛んならしめて、其の勝負に敗けたが爲に、恨み死に慨き死にをした者もあつた程であつた。かの平兼盛と壬生忠岑との初戀といふ題に於ける歌の勝ち負けなどは、此のよい例の一つである。それが世の下ると共に

題材は次第に制限せられ、言語は古來襲用のもののみを典雅優麗と考へるに至つて、內容の上に最早萬葉集時代の如き情熱を見出し得ない事となり、古今集の如き優婉均齊の美を有するものも見られなくなつて、その果てには本歌取りといふが如き、あさましき方面に向つて降つて行つた。さうして全く生氣を缺くに至つて、當代民衆の實際生活とはかけ離れ、尙古主義の公卿又は僧侶の間に專ら行はれて、ややもすれば翫弄品の如くにもなつた。

私はこゝに詩の雅俗を論じようとするのでない、又その何れに價値の多く存するかを述べようとするのでもない。ただ民衆を背景とするものは、多數人を感動せしむる上により力强きことと、一部人士の間にのみ行はれるものよりは深酷味を包藏してゐることとを述べようとするのである。彼の佐佐木信綱博士によつて校訂刊行せられた梁塵祕抄の卷二を見られるがよい。如何に其の七五の句四つより成る今樣歌の類に、當代人の生活が如實に示されてゐるかに驚かれるであらう。信仰方面より始めて、民間の習俗や頽廢氣分の旺盛賭博の流行、武士の擡頭

よりして、生の不安の樣迄が鮮明に謠ひ出されてゐることに改めて喫驚されるであらう。けれども當代の和歌即ち短歌の中には、到底此の類は見出し得べくもない。短歌は相變らず四季の景物や旅や賀や愛情の上に感傷的氣分をこめて謠ひ古めかしい怨嗟味をくりかへして、人をして悲愴の念に堪へざらしむといつたものは出ず、なま溫いもののみが多く綴り出されてゐたことは事實で、樣によつて葫蘆を畫く、即ち古人に模して新意を出さなかつたことは爭へない事實である。

その間に民謠は、或は短歌形を取り、或は七五四句の今樣形を取り、その半分の形の七五七五を取り、更に種々の形の混和より成る雜體を取つて、中流以下の民衆の心を刺戟し、慰藉し、感奮せしめて、貴族の間に行はれる和歌とはます〳〵背反したのであつた。古體を保有する田植歌や踊歌や劇に取り込まれた小歌や又は流行歌の書留の上にそれの過程が明かに見出される。

和歌も亦連歌となり、民衆化しては俳諧となり、極度に縮小して、發句となりしたのであれば、展開をすることはしたが、それは國民の大多數の口にせらるべきもの、

卽ち諷謠せられるものでなかつた。俳諧や發句になる迄には、大きに遊戲氣分が混在してゐる時代を經たのであつた。

民謠にも勿論その氣分のあるものはあつたが、連歌や俳諧の如く其の一座だけで喜ぶといつたやうな樂屋落ちがなく、大多數人に喜ばるべきものだけが流布したのであつた。

かうして短歌は民衆生活とは離れてゐた處へ、三味線の渡來があつて、俄然七七七五形が代表的民謠詩形となつた。これは琉球歌の八八八六形に導かれたものと思ふ。これは私の考へであつて、此の說の當否は暫く此處にいはぬとして、ともかくも世にいふ都々逸形が民謠詩形の第一位に立つことになつて、短歌は全く民謠と絕緣することとなつた。三味線が輸入せられる以前にあつては、短歌はまだまだ謠はれてゐた。そのことは梁塵祕抄の神歌の類にも見らるべく、僧家の延年舞の歌にも見らるべく、室町時代の小歌集である閑吟集に就いても知られる。

わが國歌の「君が代」の歌の如きは、いふ迄もなく古今集以前に行はれてゐた民謠

で、それが當代民人の大君に對して寄する奉藏の誠意を最もよく現はしたものとして收錄せられたのである。

わが君は千代に八千代にさゞれ石の……………

といひ、又は古今六帖の如く、

わが君は千代にましませさゞれ石の…………

と謠ふのが古形で、朗詠にも古今集の通りに「わが君は…………」と載せて來た。それが何時頃からか君が代は……と變つたが、自分の見た古寫の朗詠には、皆わが君は…………とあり、漸く室町時代の長祿年間の寫である朗詠に至つて、君が代は…………とあるを見た。謠曲の弓八幡にも君が代とあり、やゝ下つて隆達の小歌にも君が代とある。最も興福寺延年舞式と題するもの、これは江戶時代の元文年中に張行した時のもので、それに延年用のいろ〳〵の歌謠を收めてあるが、それにもやはり君が代とある。此の他、地方の神社歌にも此の歌は保存せられて、やはり君が代は云々と謠つて來たやうであるが、此の變遷があることを申しただけでも、此の短歌が一千何百年來謠はれて來た

ことを御了知になるであらう。鎌倉時代にも、室町時代にも、短歌は少いながらも謠はれ、それに近い形の民謠も出て、四句に縮約された

めぐる外山に　鳴く鹿は　逢うた別れか　逢はぬ恨か。

木幡山路に　行きくれて　月を伏見の　草枕。

人をまつ虫　枕にすだけど　淋しさのまさる　秋の夜すがら。

といふ類が競爭的に行はれたが、三味線の盛行後は、此等の形は影をひそめた。恨之介草子などには、短歌も謠はれたやうに記してあるが、あつても極々尠い。

江戸時代に於ける短歌の復興、明治大正以降に於ける短歌の隆盛、それが士農工商などの區分や階級が撤廢された世の有難さには、都鄙の別なく、身分や職業の上にも何の差異もなく、全く平等に行はれてゐる。

歌風には種々の別異があつて、所謂萬葉張もあり、桂園一流もあり、俳味を入れるもあり、土に親しむを立て前とするもあり、深い意をこめることにねらひをつけるものもあり、童謠味を加へてみようと心掛けるもあり、何物をも詩化して、飽く迄も

强きに向つてといふもあり、甚だ以て多樣に見受けるが、其の向ふ處選ぶ處は、自ら民謠と異つてゐる。それは戀や道義の念をこめたものの上に最もよく現はれてゐると思ふ。

短歌に道義の念をうたふ必要は勿論ない。けれどもそれを謠ふことは、決して惡いことでなく、それが卑近適切な表現であれば、隨分人を感動せしめるのである。といつて、彼の稚拙と卑俗との標本となすべき心學者流の道歌などを希求するのでもない。叙景もよい、感傷味もよい、頽廢味を謠ふのもよいが、それ以外に民謠の領域に向つて、內容上の展開を求めることも一法であつて萬葉ぶりに心を寄せられる方は、必ずそれも考ふべき問題であるとして、請け容れて下さることと思ふ。强い歌、明るい歌を念がける方も、酸い歌や甘い味を作り出さうとなさる方も、恐らくは考へてもよいと思つて下さるであらう。私は民謠や芝居や淨瑠璃好きの樣に思はれてゐる。成る程止むを得ずして、額に皺を寄せながら見たり聽いたりしては居るが、むしろ古文學の上に多くの興味を有し、古書畫を愛好し、それと同時に

洋樂も面白く、油繪にも融けあひ得るといふ他の一面を有してゐる者である。
わが短歌界は、民謠よりして得べき何等かの新らしい展開法があるのではなからうか。と申す民謠は、かのお心意氣といつた樣な情歌を指すのでない。山間の盆踊歌や勞働歌や祝賀歌等の一切にかけていふのである。もうこの事を實行されて居る方も少しはあるやうに見請けるのであるが、もう一段突入抱和をなさることが、短歌に向つて、ある一新天地を開くことにならうと考へるのである。かういはば、直に江戸中世に出た諸國盆踊歌や何々俚謠集の類を想起されるであらう。さうして、其の特色について學ぶべきものを案じ出して下さるならば、幸甚の到りである。それが決して和歌の傳統を破る所以のものではなく、表現法の工夫によつては、決して卑俗味を輸入增大する所以にもなるまいと思ふ。民謠の中には萬葉集の歌以上に刺戟を與へるものがある。

○金が威光の太平づらも、昨日限りの三途川。

○後世を願やれ爺樣と婆樣、年より來いとの鳥が鳴く。

○寺の婆、名主の媽も襷かけやれ秋三月。
○今日の田の田主（たろじ）の息子はまだ寢てか、窓からお日がさすまでも。
といつた類はそれだが、こんな想を是非短歌に盛り込んで貰ひたいといふのではなく、やはり他の明るい・快い・滯らないものを希ふのである。此等の方面に於ける着想や表現に就いては諸君が、民謠から學び得られることは決して尠くあるまいと思ふ。

（昭和四年四月稿）

八　國歌歌詞の變遷

國歌君が代の歌は一千何百年前に於ける民衆の聲であつて、古今和歌集に作者不知として載せてあることが之を證する。これがもし紀貫之の作であり、凡河内

躬恒又は紀友則の作であつたとしたら、それは其の人一箇の言と爲すべく、決して國民の擧げた歡喜奉戴祝福等の誠意のこもつてゐる聲とは認め難い。自然國歌としてこれが採用せられたかどうか、わからぬと思ふ。此の作者の知れない處が尊いのである。

但最初の二句が、古今和歌集には「わが君は千代に八千代に」とあり、古今六帖には「わが君は千代もましませ」とある。相共に國歌の原形として認めらるべきものである。而して意の通じ易いことは六帖の方が優つてゐるが、その爲に之を以て最古の原形とも定め難い。何となれば、何が故にそれが古今和歌集所載の如くに改められたかが說明し得られさうもない。之を諷謠上の便否によつてなどと說くことは、少しでもわが日本歌謠を研究した者のいひ得る處でない。決して利便容易や刺戟力の增大といふ方面に向つて改まつたなどと說き得るものでない。隨つて今日にあつては、到底國歌の最古の形は知ることが出來まいと思ふ。

案ずるに古今和歌集撰定時代には、國民はあの所載の如くにも謠ひ、古今六帖の

所揭の如くにも謠つてゐたのであつて、各撰者が好む處に隨つて、各別な形のを採つたのではあるまいか。諷誦されるものは、元來記錄されるものとは違つて、二種

祝

嘉辰令月歡無極　萬歲千秋樂未央

長生殿裏春秋富　不老門前日月遲

朗詠（傳世尊寺行尹筆）

にも三種にも分岐すべき移動性に富むのである。

和漢朗詠集は往昔讀み方の教科書でもあり、書き方の手本でもあつた。然るに

行成本と稱する最古のものよりして、家藏の鎌倉時代の寫と認むべき寬正再修補本等には、一切古今和歌集の如くにあり、又家藏の傳世尊寺行尹筆の朗詠集には之を源順の作として歌の句一切は古今六帖の如くにしてある。此の事はたま〳〵以て、二形並存の時代があり、此の並存は永く後世の知識階級に認められてゐたことを物語るのである。而して相共に聖壽無疆を祈る意であつて、相共に國民の聲であつたのである。

ただそれ、わが君はの起句が君が代はに改まつた一事に至つては、談實に容易ならざるを思ふ。聖壽が聖朝に改まつただけだといへば、それだけの事であるが、何が故にさう改められたかに就いて考へて見なければならぬ。契沖景樹等先哲が朗詠には君が代はとあると說いたが爲に、かう改めることは和漢朗詠集に始まつたと斷じてゐる人もある。成程さう考へ得る理由もあるのだが、寫の古いものには決してさうは無い。自分の見た中では長祿二年の寫本にさうあるのが最古である。もつと〳〵古い時代の寫にもあるべきかと思ふが、まだ寓目してゐない。

又人によつては興福寺延年舞式の遊僧拍子歌の中に、君が代はとあるのを古くからさう謠つたといふ一例證にする。　それも認めてよい理由が無いでもないが、あの舞式なるものは、年代考定の上には極めて薄弱な史料である。　成程延年は平安朝時代から行はれて、鎌倉や室町の世にも盛んに張行はせられたけれども、彼の興福寺延年舞式は、江戸時代に行つた時の書留であつて、決して室町又は鎌倉の世に於てさう謠つたといふ確實な證左とはなし難いのである。　これよりも寧ろ謠曲の弓八幡や老松にもさうあり、義經記などにもさうあるといつて、引く方がよささうである。

　かくの如くで、君が代はと改まつた年代に就いては、鎌倉時代迄も遡り得るか否かさへ明かでなく、かう改まつた理由に關しては、說いて肯綮に中るものが無い。自分とても、聖壽といふも聖朝といふも同じ意味だと說くことに異議は無いが、同意義であるが爲に改まつたと說くのでは、理由が說明されてゐない。　そこでかう考へる。　わが君といふ語句に、天皇といふ意を含めないで用ひることの多くなつ

た時代にかう改められたであらうと考へる。　其の時代はいふ迄もなく武士の擡頭した後で、將と卒との間に君臣の如き關係が生じて、士卒輕輩の徒は、三代相恩といふが如き主家の主將の上に、至高の君卽ち天皇のましますことを意識することが稀薄となるに至つた時に起つたこととして考へる。　すなはち、わが君はの語が、やゝもすれば臣事する士卒より主將に對しての意に解せられるに至つては、廷臣又は僧侶たるものは、其の語を棄てて、古より聖代又は聖朝の意に用ひ來れる君が代はの句に改むべきである。　而して至高の君を念頭に置くことは、武將の步卒間にあつては如何に稀薄になつても、天皇は國の總家長におはしますことは、其の步卒の腦裏のどこやらに潛在すべく、祖先以來養はれて來た此の念は決して消え去るべきわけのもので無い。　こゝに誰しの人か、君が代はと謠ひ初めれば、誤解の虞なき此の變改に一人同じ、二人和し、三人相唱へて、遂にそれによつて統一されたものとして考へる。　此の意味に於て、君が代はと改まつたのを、早くて平安朝の末期、恐らくは鎌倉時代に入つてからと解して、和漢朗詠集又は延年舞曲歌から改まつ

たといふ說をも强ちに否認しないのである。請る處、的確な史料に出逢はずして、其の改まつた年代の考定は出來ぬが、改まつた理由に至つては前述の如くであると思考する。

國歌は永久に謠はるべきものである。これに關する史料は絕えず好學の士の眼をひくべく、其の改まつた年代と理由とに對して、もつと〳〵確實性に富む說明が下されることであらう。其の時の來ることが一日も早からんことを祈る。

（昭和二年二月稿）

九　萬葉集の遊女

養老五年五月太上天皇の御氣先が宜しからず、大赦を天下に行はせられた。此の時右大辨從四位上笠朝臣麿が御平癒祈願の爲、出家入道を願つて許され、次いで

筑紫の觀世音寺の別當に任ぜられた。此の人が美濃守であつた時に、彼の醴泉が出て、それで養老と改元されたのであつた。此の記念すべき人が彼の「世の中を何に譬へむ朝びらき」の一首に無常觀を詠ひ出した滿誓沙彌であつた。さうして此の歌が著名であるだけに、甚しい厭世家の如くに考へられたとしたら、それは全く違ふのであつて、入道後の歌に戀を詠じたもの、それも假設で無い眞實の愛情に基く歌が萬葉集の中に二三見えてゐる。凡そ奈良朝の僧侶には、女犯といふ語は考へられたことも無かつたかと思はれる程に、情事問題が萬葉集の歌に暴露されてゐる。

滿誓のゐた觀世音寺とは目と鼻の所に太宰府があつて、其所には大伴旅人卿が帥になつてゐた。彼の讃酒歌だけによつても、此の人がいかに大陸文化にかぶれてゐたかが知られるであらう。彼の隋唐二朝の風流韻事に模倣するを喜び、根が情熱家であつて醉泣きを大びらにして見せる人であつたから、遊行女婦を宴席に招いて特寵を加へることと位は何とも思つてゐなかつた。周圍の者も、それは大宮

に與へられてゐる自由であると思ひ、自分等も分相應な娯樂にひたる機會を逃すまいとしただけの事であつたと思はれる。天平二年十二月旅人が大納言に任ぜられて都に上る時、馬を水城の處に駐めて別を惜んだ。從つて來た者の中に兒島といふ遊行女婦が居つて、平時であつたらあゝもかうもしようが、今日此の場では「振りたき袖を忍びたるかも」といつたやうな歌を詠じ、旅人がこれに答へた歌は卷六に載せてあつて、極めて目につくものである。

此の遊行女婦は、平安朝でいへば貴族の邸へ推參した白拍子であり、江戸幕府時代でいへば、武家の長屋をねらつて入り込んだ歌比丘尼であつた。けれども上代に遡る程遊女に殊勝な逸話を遺すものが多く、文雅の道にも分け入つて居つたのである。萬葉集には此の遊行女婦の歌を卷四にも卷八にも一首づつ收めてある。又旅人の子家持が越中守となつて任地に居つた時、來賓饗應の爲、布勢の水海に遊んだ。恐らくは取持役にあてたのであらうが、土師（はにし）といふ遊行女婦が居つて、それが列座の詠に對して遜色の無い吟詠をして、卷十八に載せてある。此の他蒲生と

いふ遊行女婦が同じく家持の許でよんだ歌が一首卷十九に錄してある。自然大伴家の代々が特にそれを寵愛したかの如くにも見えるが、萬葉集は大伴家で輯錄したものであれば、自家關係のものは細大漏さず書き載せた結果、賤業者の歌も傳へられたものとして考ふべきであらう。

奈良朝時代は大陸文化を長短共に請け容れて、決して健全な時代ではなかつた。まだ〳〵上代以來の剛健味や眞實味は、武人や下層民の間には遺存してゐても、貴族や都會生活者は唐土の爛熟文化の頽風に染んで、華奢風流を事とするに傾いた。さうして京中に於ては、閭里集つて會宴することを禁ぜられたのであつた。しかし乍ら嗜好物殊に興奮劑が、官禁だけで實行されたのは、有史以來鴉片の他にはいくらもあるまじく、忽ち弛んで、立案者自身から犯したことであらう。元來ならば、國守の女寵なんども綱紀振肅の一項として數へらるべき譯のものであつた。しかし法の上では嚴禁されてゐても、其の法は唐土の制をまる移しにしたものであつただけに、大いに實行難が件つて居つたのである。それで別に問題とはされな

かつたのであらう。

萬葉集卷一の卷頭數頁を讀過した者は直に氣づくであらう。當代の才女額田女王は始め天武天皇の妃となつて一女をあげ、次いで天武の兄君天智天皇に召されて後宮に日を送り、天智崩御の後は直に又天武天皇の妃となられた。さうして天智天皇が春秋優劣論を歌で徵された時に、女王は「秋山我は」と主張されるが、それは兄君よりも弟君の方がよいといふ意であることや、此の女王を取合つたことが彼の忌むべき壬申の亂に關係あるべきことなどは見落さうとしても、落し得るものでない。當時の謀臣鎌足も亦剛の者であつた。入鹿の誅伐に參加して偉功があつただけに、此の道にかけても巧妙なものであつた。額田女王の姉君を夫人としてゐた上に、當代第一の美人として想像すべき、釆女の安見兒(やすみこ)をわが物として、諸人から羨望の標的となる程の辣腕を有してゐた。此等の人の行動を知るべき吟詠を載せてある萬葉集の卷一二あたりを通讀しては、どうしても大陸文化が先づ宮廷權貴を浸蝕して風紀問題を釀さしめたことを認めなければならぬ。或は我

が太古以來の國風は、婦女の貞操に關して寛大であつたともいひ得るであらうが、愛情事件を風流韻事といふ美名の下に、世評を緩和し得た隋以降の大陸の風習は、我が上流に藉口の方便を與へて、少からず頽廢味を增大せしめたことは否み難いであらう。さうして貴族間には額田女王以上に萍のそれの如き心情の所有者の多かつたことが、想像されるのである。自然大臣や國守が遊行女婦を相手にしても、それは問題視するには餘りに輕微に過ぎる事件だとするのが世情であつたであらう。

上の爲す處は下必ず之を爲す。天平感寶元年五月、家持配下の史生、尾張少咋が遊行女婦の佐夫流子を愛して昏迷を極めた。さすがの家持も棄て置けなかつた。そこで、七出例や三不去の文を引き、重婚は法の禁ずる處なることを說いて、舊きを棄つる惑を悔いしめようとした。さうして反歌の三首ある長篇の歌を送つた。其の反歌には、

里人の見る目恥かし、佐夫留子に迷はす君が、寢屋出後ふり。

紅はうつらふものぞ、橡のなれにし衣になほしかめやも。

の如き、皮肉なものと戒告の意を明示したものとあつた。これは五月十五日のことであつたが、少咋の夢はまだ覺めず、鳰鳥のそれの如くに佐夫留子と相並んで日を送つた。但其の歡樂は永續せず、越えて二日、同十七日、佐夫留子が少咋と夫婦氣取でゐる所へ、四邊を轟かして驛馬が下つて來た。それは少咋の妻が夫の迎を待ちかねてやつて來たのである。どうせ一悶着は免れ難く、結局は家持の人情味に富む仲裁で落着したであらうが、こんな事件は所在に續出してゐたに相違ない。

遊行女婦は後の平安朝時代に横行した白拍子であることは既に前にも述べたが、彼の更級日記の足柄山の條のあそびなるものもそれであり、山めぐりをした山姥は山深きあたりに需要者を捜ね廻つた低級なそれであつたと解すべきである。近江の草津で名高い姥が餅は遊行女婦の賣つた餅に起ることを意味し、南部地方で賣淫者を草餅と呼ぶのも、これと同一關係のもとに起つた名稱であらう。

○

轉じて一所に定住してゐた娼婦に就いて考案を試みるであらう。遊行女婦も決して全國周遊の壯擧を企てず、需要をたづねて、せい〴〵で州郡を範圍として遊行したものであらうが、此處には需要者の來訪を待ち受けたものに、定住娼婦の名を附して檢討に從事するであらう。固より明示した文字が並べてないので、多少奔放だといふ批難も出さうな程の想像を加へて考へなければならぬ。

先づ第一に風を俟つて發する渡海郵船の發着所たる濱地一帶を考ふべきである。山上憶良が大唐にあつて、本國をおもひ、

いざ子どもはやもやまとへ、大伴の御津の濱松待ちこひぬらむ。

と詠じた歌の濱松は、必ずや物いふ松であつたであらう。感情を反さしむる歌や思子等歌や貧窮問答歌の作者の詠であれば、濱松を故國の妻子と見る人もあらう。しかしながら少壯の徒に向つての言に、船着の松に妻子を譬へたといふよりも、それが濱邊に定住する娼婦と見る方が當るではあるまいか。天平八年の遣新羅船が歸航した時の某の歌に、

ぬば玉の夜あかし舟は漕ぎ行かな三津の濱松待ちこひぬらむ。

とあるのも、其の一證として見られよう。又卷三の金明軍の歌に、

しめゆひて我が定めてし住の江の濱の小松は後も我が松。

とある濱の小松も勿論憶良のいつた松であらう。

次は三津と濱續きの住の江に就いて適例となすべき歌の有無を說くであらう。卷一に長の皇子が詠ぜられた

霰打つあられ松原住の江の弟日處女と見れどあかぬかも。

と、處女のこれに答へた歌の

草枕旅行く君と知らませば、岸の埴原に匂はさましを。

を考へて見たい。萬葉集の全部に涉つて、處女とあるのに油斷は出來ず、確實に賣咲者であつたと認めたい者が少くない。それは次々に說くが、右の歌で埴原に匂はさましををどう解すべきであらう。埴原はいふ迄もなく赤土や黃土である。從前は此の句を解して、岸の赤土で表を摺つて色づけを致して置きましたものを

といふことにしてあるが、さあ其の摺り方に就いても、交情動作にひきつけて解し得るではあるまいか。今も鄙の山奥で行はれる野外情交が千二百年の昔住の江の岸で行はれてゐたと解してはどうであらう。此の歌の解釋には少くとも卷七の寄赤土歌、

大和の宇陀のま埴のさ丹着かば、其故もか人の吾を言なさむ。

が參考に供せらるべきであらう。赤埴土が着物に着いたら、其の爲に評判を立てられるであらうの意である。譬喩歌ではあるが、諸人の目擊することに譬喩を取つてあるので、喧傳されたものと解すべきである。

これより地を轉じて目を九州方面に移すべきであるが、それに先立つて、卷三にある角兒鷹の歌

潮干の三津のあまめのくぐつ持ち、玉藻刈るらむいざ行きて見む。

のくぐつを考へて見たい。玉藻を刈るとあるので、誰も〳〵藻で編んだ籠のやうなものと解いてゐるやうだが、くぐつは傀儡ではあるまいか。どうしても外來語

らしい韻きを有する語である。傀儡は大江匡房の傀儡子記によれば、大陸からの移住者で、天幕張の中に遊牧民式の生活をして、官の支配は受けない者であつた。さうして女は夫壻の默認の下に賣咲を營んだのであつた。或は此の傀儡子の持つ籠に模して造つたので、此の名が生じたのかも知れないが、三津に近い西の宮は傀儡子の根據地で、彼等の尊信する百太夫の祉が古くから此處にあることを思ふと、くぐつを木偶と解して一考するのも決して無用の業ではあるまいと思ふ。近く江戸時代の低級私娼、たとへば宿驛の出女と稱する飯盛女は、店頭で莩を績みながら客を呼んだのであつた。それを思ふと、玉藻刈るのは一の內職であると共に手足を露出し、赤裳を濡して、行客を誘惑するの一手段としたものであつたのではあるまいか。玉藻刈る女は兎角問題にされてゐる。卷九にも丹比(たぢひ)某とその處女との間に次のやうな問答歌がある。

　難波潟潮干に出でて玉藻刈るあま處女ども汝が名のらさね。
　あさりするあまとを見ませ草枕旅行く人に妻とはいはじ。

娼婦が殊更にかういつて、挑發を强めたのではあるまいか。

筑紫の北西部海岸は防人の屯する處、新羅や唐土への船の發着所であつた。自然定住娼婦を要する地帶であつた。其の代表者は何といつても松浦小夜媛であらう。小夜媛は夜活躍する女の意で、必ずしも一人の名では無いとすべく、彼の大伴狹手彥に對して別れを惜んだのは、其の内の一として考へるのが妥當であらう。宇治の橋姬は橋の邊りへ出沒した低級な娼婦と解すべきが如く、船着の松浦地方に大勢居つた媛どもがすべて皆小夜媛であらう。其の證左には卷五に憶良が詠じた領巾麾嶺の歌の他に、風流將軍旅人が松浦河に遊んで贈答した歌の八首がある。其の序に

往松浦之縣逍遙、聊臨玉島之潭遊覽、忽値釣魚女子等也。花容無雙、光儀無匹、開柳葉於眉中、發桃花於頰上、意氣凌雲、風流絕世。僕問曰、誰鄕誰家兒等、若疑神仙者乎。娘等皆咲答曰、兒等者漁夫之舍兒、草菴之微者、無鄕無家。何足稱云。唯性便水、復心樂山、或臨洛浦而徒羨王魚、乍臥巫峽以空望烟霞、今以邂逅相遇貴客、

不レ勝二感應一輙陳二欵曲一。而今而後豈可レ非二偕老一哉。下官對曰、唯々敬奉二芳命一、于レ時日落二山西一………

とある。とんだ仙媛で、風流將軍を釣り得て飜弄するさまが、躍如として紙上に浮ぶ。しかもそれが誘惑された者の誌したものであれば、あたまから信ずべく、これが定住娼婦であつたことには何の疑も無い。旅人等が

松浦なる玉島川に鮎釣ると立たせる子等が家路知らずも。

遠つ人松浦の川に若鮎釣る妹がたもとを我こそ枕(ま)かめ。

とよみかけると、少女等がかう答へてゐる。

春されば吾家の里の川門(かはと)には鮎子さばしる君待ちがてに。

松浦川七瀬の淀は淀むともわれは淀まず君をし待たむ。

宛然たる遊女の口吻ではあるまいか。釣りをする娼婦もあり、玉藻を刈る娼婦もあつた處に、上代の土臭さが窺はれ、それを仙媛だなどと詩化する處に、大陸風の自ら求めた陥入と陶醉とを認むべきではあるまいか。天平八年遣新羅使等關係の

歌が卷十五に百四十五首あるが、此の中に尋常一樣の處女でなかつた、少くとも立派な娼婦であつたらしいものの歌を併せ錄してある。其の中に船が松浦の狛島に泊つた時、或處女が

天地の神を祈ひつつ我待たむ早來ませ君待たば苦しも。

と詠じでゐるが、これも確實に此の一類であらう。此の船が對島の竹敷に泊つた時、玉槻といふ處女が、

もみぢ葉の散らむ山べゆ漕ぐ舟のにほひに愛でて出でて來にけり。

竹敷の玉藻靡かし漕出なむ君が御舟をいつとか待たむ。

と詠じてゐる。此の時の舟中水上の佳會に、玉槻のやうな列座の作に恥ぢない程の歌は作れなかつたにしても、男子擒縱術には手腕を有せる處女も大勢集つて來てゐたことであらう。先哲にも玉槻を遊女と解してゐるものがある。

此の磯臭い處女話は舟着きの到る處にあつた筈で、卷四に見える豐前の處女、大宅女の歌

夕闇は道たど〳〵し、月待ちていませ我がせこ其の間にも見む。

なども千古の絶唱として傳ふべく、併せて其の口前のよさ加減は到底素人の口吻でないことを察知すべきであらう。　なほ、拔氣大首が筑紫へ赴任した時、豐前の香春の處女の紐兒に結びとめられて、其の名通りにむちうになつた果には、

豐國の香春は我家、紐兒にいつがり居れば香春は我家。

だの、命もわれは惜しけくも無しだのと昏迷した話もある。

○

方面を陸上旅行に轉じて考察を進めるであらう。　當時は必ず草枕を旅の枕詞に用ひてゐる。　成程糒を携帶行糧にしてゐた時代である　ほんの掘立小屋程度の假廬は、山中や廣野に稀にあつた處で、大多數は草を束ねてそれを枕にして宿つたことであらう。　かうした旅路に最も大切なものは炊事用の清泉である、　此の意味の下に、先づ和銅五年四月に長田の王を伊勢の齋宮へ遣された時の、山邊の御井での歌、

山の邊の御井を見がてり、神風の伊勢處女と相見つるかも。（卷一）

を考へて見たい。見がてりは見がてらの古言で、清泉を見る以外に何か目的のあつたことは此の一言で知らるべきである。次の處女を從來は水を汲みに來てゐた少女だと解くが、私は人々に炊事の世話をした女として見ようと思ふ。炊事は男よりも女、さうして旅愁を散ぜしめるには、それがきめ細かな少女によつて營まれる方がよく、旅客が本能上の需要は此の女によりて滿足せしめられたことは自然の經路であらねばならぬ。其の供給も當初こそ餘義なくせしめられたであらうが、後には進んで提供したことが何人にも許される推定であらう。すなはち清泉に近く設けられた小家、旅人の休憩所ともなり、晝食所ともなり、どうかしたら一宿所ともなつたことであらう所の水屋、後世でいへば水茶屋の出來たことを想察したい。其の水屋の女はおほむね定住娼婦であつたことを同時に想定したい。これは次の相見つるかもといふ一句が之を證するのである。相見つるは尋常一樣の會見や、瞥見ではない。源氏物語の「見る」といふ語が引見や、のぞき見でなく、極

めて濃厚な接見であつたとしなければ意味の取れない場合のあることは、熟讀した者の知り悉してゐることであらう。此の相見るを其の意に解して始めて深意が汲まれると私は思ふ。さうして同時に水茶屋女の起原の古いのに私は驚かされてゐるのである。

此の想像を赤人等が追慕した下總の葛飾の眞間の手兒奈の上に及ぼして見たい。葛飾一帯は水質のよくない地である。眞間は恐らくアイヌ語か何かであらうが、此の語は懸崖又は急傾斜面等の意に於て今も諸方に用ひられてゐる。信濃尾張相模下總等東國地方に存する語だが、其の語意は上記の如くである。葛飾の手兒奈の住んだ處として傳ふる地帶は上古は入海であつたといふ。其の海岸によい水屋があつて、手兒奈は其處の名物女であつたのだと思ふ。卷九の此の人を詠じた長歌の反歌

葛飾の眞間の井見れば、立ちならし水を汲みけむ手兒奈しおもほゆ。

が之を證する。さうして此の人が如何に喧傳されたかは、此の長歌の一節に

麻衣に青衿つけ、　濃青を裳には織着て、
髪だにも搔きは梳らず、　沓をだにはかず行けども、
錦綾の中に包める　いはひ子も妹にしかめや、
望月の滿てる面わに、　花の如笑みて立てれば、
夏蟲の火に入るがごと、　水門入りに船漕ぐ如く、
よりかぐれ人の言ふ時、

とあるので、都風の赤裳もつけず、素朴な麻の衣に青衿をつけて、一向婉冶味の發揮に意を用ひなくても、人工の美以上に人目をひいたことが知られるであらう。また赤人の歌の一節に「古にありけむ人の、倭文はたの帶解きかへて、伏屋立て妻どひしけむ葛飾の眞間の手兒奈」とあるので、契りをこめた者の多かつたことも知られよう。此の海邊が斷崖であつたが爲に、眞間と呼ばれたのであるべく、この海岸に水屋があつたものと、かう解して始めて、煩悶の結果目前の海中に身を投じたといふこともよく了知せられるのである。上代文化の普及は凡そ此の地方迄が限で

あつた。アイヌの血は必ずや此の地方に遺存してゐたであるべく、混血兒には時時優秀、艶麗な姿色を見出すのであるが、手兒奈も其の一人であつたらうと思ふ。炊事用の水、慰渇用の水、其の水の所在地に休息所、そこに女といふことは、卷十四の東歌にある。

人皆の言は絶ゆとも、埴科の石井の手兒が言な絶えそね。（信濃國）

鈴が音の驛亭（はゆまうまや）の、包み井の水を賜へな妹が手ゆ直（ただ）。雜、國不知）

此の二首もよく之を證するのである。少し意を用ひて萬葉集を通讀したら、まだまだ證歌を見出し得るであらう。同じ卷の那賀郡の曝井の歌一首、

三つ栗のなかにむかへる曝井の絶えず通はむ、其處に妻もが。

の如きも、野中の曝井で、覆ひの設備もして無かつたのを詠じたのであるべく、世間並に水屋があつて若い女が居つてくれたならの意であることは爭ふべくも無い。此の若い女の居つた所は、たとひ星移り物變じしても、多感な詩人の胸奥には追懐追憶の情を涌かせたことであらう。彼の古今集の讀人不知の歌「古の野中の清水

ぬるけれど、もとの心を知る人ぞくむ」の如きも、かうした場合の情をうたつたものとして、始めて情味が濃やかになるのではあるまいか。

平安朝中期の雜藝歌に「男怖ぢせぬ人、賀茂女伊豫女、上總女、橋に明かせる女云々」とあるが上總女に情がないといふ諺の由來はこれだけでも其の遠い昔からのことであつたことが知られるのである。加之萬葉集卷九の上總の周淮郡の處女珠名を詠じた長歌が、早く此の地方に賣咲專門の婦女の存在を物語る。曰く、

梓弓周淮の珠名は　胸別きの廣き吾妹、
腰細の蜾蠃處女の　其のかほの美しけくに、
花のごと笑みて立てれば、　玉桙の道行く人は、
己が行く道は行かずて、　呼ばなくに門に至りぬ。
さしなみの隣の君は、　豫め己妻離れて、
乞はなくに鍵さへ奉し　人皆のかく迷へれば、

とを丶に寄りてぞ妹は　　たはれたりける。

反歌

かな門にし人の來立てば、夜中にも身はたな知らず出でてぞ逢ひける。

眞間の手兒奈と同樣、花のごと咲みて立つて人を蕩かした女であつたが、海に身を投ずる手兒奈程の純情は有せず、うか〳〵と日を送つて老後の身のやり場に窮したことであらう。

早く古事記の須勢理毘賣命が開拓家の夫に向つての歌に「あが大國主、汝こそは男に坐せば、うち見る島の崎々、かき見る礒の崎おちず、若草の妻持たせらめ、吾はもよ女にしあれば、汝を置て夫は無し」と上代女子の貞操觀を高唱してある。當代に入つても上古以來の此の良風は流行に驅られない婦女の間に保有せられて、

長ら降る雪吹く風の寒き夜に、わがせの君は獨りか寢らむ(卷一、譽謝女王)

神風の伊勢の濱荻折りふせて、旅寢やすらむ荒き濱邊に(卷四、碁檀越の妻)

の如く旅先の夫を思ふ歌は集中に散見するが、到る處に旅愁を慰める婦女が存在

し、男をして旅の恥はかき棄てといはしむるに至つた事情は、上述の間に慣習づけられたものなることは判じ得るであらう。萬葉集中の歌には、其の證左となるものは、上來の引用歌以外にまだいくらもある。此等とは反對に公私の用を帶びて帝都へ出て來る者の欝結を癒さしむべき設備の存在は、近古以來の記錄や現狀から遡つても推察し得る。例へば卷七の

西の市に唯一人出て、目並べず買へりし衣の商じこりかも。

にしても、決して唯の衣では、無かつたであらう。

當代遊女の服裝に關しては、集中の歌より他に說明は求め難い。然るに遊行女婦のそれをさへ記してないが、當時流行の「紅の赤裳裾引き山藍もて摺れる衣着て」ゐたことであらう。それには狛錦の紐の附いてゐたことも幾多の歌によつて知られる。まだ平安朝時代に月卿雲客をも迷はしめた江口・神崎・蟹島の娼婦の如くに群をなして扁舟に掉してゐたか否かは明め難いが、朱を施し粉を傅べて倡歌淫樂して以て妖媚を求め、行人旅客に一宵の佳會を歡喜せしめた傀儡女は最早各地

に放浪生活をなしてゐたことであるべく、珠名處女の如きは、或はそれであつたかも知れない。

一連の珠玉、それも青黄赤白さま〴〵の光輝を發するものの如くに見られてゐる萬葉集の中から、遊女關係のものを抽出して、しかも想像を交へて解說したとすれば、物數奇として視られることを免れまい。又無用の努力として侮られるでもあらう。けれども鑑賞と研究とは全く別の見地よりされるもので、所謂奈良朝の世相が如何に萬葉集の上に反映してゐるかの如きは、文化史的研究に從事する者に取つては、大切な題目であり、又それ〴〵の中の遊女を取つて題目として考査することも決して無用の業では無いであらう。萬葉集の古寫本や異本を書史的に研究することも極めて重要なことであり、歌の形式上より論ずることも、說話の上から見て說くことも、語義の釋明に努めることも、大切な業であるが、歌の上に社會相を判ずることが、現時の萬葉研究としては同じく有用であることを私は思つたのである。さうしてどうかすれば人に忌まるべき遊女を捉へて說述を續けてみたの

である。想像澤山で、創作氣分の下に說明をしたといふ批言が出るかも知れないが、私は止むを得ないこととしてそれを甘受する。

（昭和三年三月稿）

一〇　隆達の小歌

住まば都、捨てば都、あぢきなの身や。

轉變の世にも不易の相は宿つて、文祿の昔隆達によつて謠はれたこの小歌の如き岐路に惱む者は今の世にも多い。都落の慘苦は決して平家の上にのみ限られてをらぬ。

しのぶ身なれば色には出さぬ、あたゞ心を盡すよの。

死ぬる程ほれたるが、申しは出さぬ命限りにいつ迄も。

バーや舞踏場に赤い灯の輝く今の世に、もうこんな初戀心情に終始する者は無いであらうか。否、異性をつなぐ眞實の愛がこの世にあらん限り、小さき胸に悶えとあきらめの中間を行くこのやさしい思ひが充ち溢れるであらう。千古不變の情を高唱するのが一般歌謠の特徴ではあるが、近古から近世への過渡期に立つ隆達の小歌に、特にその著しさを見る。

文明の輸入口、富の汎濫地たる堺港に生れて、顯本寺に文字唄讃の敎養を受け、生家の藥種屋に歸つては生活の安定を得て、何不足無き生活を送つた隆達にも、人の言はうとしていへない苦惱を謠出してやるといふ惠まれた務があつた。

何としてがな忘りよやれ、思出されてやる瀨なや。

雨が降れがなはら〳〵と、獨り板屋のさびしきに。

かはす枕に淚のおくは、明日の別れが思はれて。

の類に近世調を響かせると共に、

宇津の山邊の現にも、夢にも人に逢はぬよの。

五條わたりを車が通る、誰そと夕顔の花車。

の如きに典雅を味はせることを忘らなかつた。時勢粧は固より鮮かで、

誰も浮世は假の宿、よや君しやらり。

隆達自筆小

杜子美山谷李太白にも酒を呑むなと詩の候か。

帶をやりたれば、しならしのおびとて非難をおしやる。おびがしならしならば、そなたのはだもねならし。

の如き小歌は五首十首に止まらぬ。最後の小歌の如きは「褐(かちん)帷子(かたびら)に四つ割帶を」と歌つた時

歌集（著者藏）

代をあり／＼とわれ等の目前に浮ばしめる。

流風は後續の新聲調に壓せられて、早く元祿の昔に絶えたが、歌は繰返されて今の世にも新しい。

そも／＼隆達の謠つた小歌は何百首あつたのであらう、百首五十首といふ傳授の卷子は數本を見た。集として見るべきものの二三冊にも接した。さうしてかのボストン博物館の風俗屛風圖のそれまでを加へて總計三百六七十首と定め、これを同好の士に捧ぐべき日本歌謠集成の近世篇の卷頭に置くことにしたのであつた。然るにそれが二分間の電話によ

つて崩されたのであつた。

「隆達自筆の小歌集が賣り物に出ました。それには三百首が收めてあります。」かう聞いては、どうしてくわつとせずにゐられよう。別種の卷や、別種の冊毎に十首二十首の新しい歌を見出してゐた私には、寸秒の猶豫をもなしかねた。すぐ屆けてくれ、自轉車で、自動車でと、せき立てて、その夜の中に入手した。卷首の一葉によつて既に疑ひも無く隆達の自筆なることが知られた。例の雅健ながら剌戟に富む小歌がかりの行草の字よ。狂言の小歌に見る墨譜の的確に施されてあることよ。この嬉しさには、物質上の後難襲來を強ひて忘れてわが物となすの決心をした。卷末を披けば、初代古筆了佐の古法に合する鑑定書があり、關白秀次が藤原惺窩を使に立てて贈つたといふ琴山の印は最終の行下に捺してある。傳書でない物に自庵隆達とあり、花押などのあらう筈はない。よし求めると答へて書齋に入り、息を靜めて、他の集に見なかつた七十九首を新にこの書から拾ひ得た。三百六十首の音順排列を訂し、通計四百三十九首にして、喜の眉を開いた時には、もう朝

日が庭の樅の木の頂に輝いてゐた。

新しい史料には、いつどこで出逢ふかわからない。學問には終結の幕が下ろされるものでないことをしみ〴〵と感ずる。

追記

昭和三年七月東北帝國大學の小宮教授は、此の隆達小歌集が、文化八年に巣兆の序と成美の跋とを附して刊行した「はいかい隆たつ」の原本であることを發見されて、山田教授を經て教へてくれられた。成程同大學藏、大野酒竹舊藏の書に引合せて見ると、此の三百首本の、そこここから二十四首を影寫して刊行したものであつた。此の一事は此の兩方の書の信用をます所以であれば、特に之を附記する。

二　歌謠の力

（昭和三年三月ラヂオ講演）

今夕は歌謠の夕とありまして、古い物では狂言の小歌、近い處では端唄や長唄、さうして此の間に御和讃もあれば、お箏の歌もあり、上方歌もあり、淨瑠璃の淸元もあるといふのであります。さうして明晩からは各地方の民謠があるとのことでございまして、今夕私は歌謠の力と題して少しばかり申し上げることに成りました。

歌謠には專ら屋內で用ひられるもの即ちお座敷向のものと、專ら屋外で謠はれるもの卽ち、馬子唄・舟歌・田植歌・盆踊歌の類とがございまして、前の方のは大抵技巧が加へられてあり、後の方のは自然のまゝで、さう面倒でないのが普通であります。但追分節などはもと馬子唄で、轉じて舟唄となり、それが再轉して、近年ではお座敷用にもなりました。さうして例外扱にしたい程に曲節のむづかしいものであり

ますが、人を感動せしめますことも亦多大で、すきとほる聲で朗々りん／＼と謠はれるのを聞くと、身はさすらひの子にあらずとも、一種口にいはれない哀しみの情がこみ上げて來るのであります。

おしよろ高島及びもないが、せめて歌すつ磯谷まで。

の歌にしましても、

西は追分束は關所、せめて關所の茶屋迄も。

の歌にしましても、又

坂は照る照る鈴鹿は曇る、あひの土山雨が降る。

にしましても、誰も／＼その土地に馴染のある譯のものではありません、けれどもあのフシで謠ひ出されると、すつかりひきつけられまして、息を靜めてお互に聽きほれるのでございます。これは全くフシの有つ力によるのでありまして、歌謠の人を動かす力は、其のフシによる處が多いのであります。といひましても歌の文句はどうでもよいといふのではありません。歌の內容とフシとがしつくり合つ

てゐる所に味ひも趣も出て來るのであります。

色の黒いのをなじみに持てば、烏なくたび氣にかゝる。

といつたやうな滑稽味のこもる歌や、

どうでするなら大きな事おやり、奈良の大佛屁でとばす。

といつたやうな歌は、決して追分節のふしや調子と調和するものではありません。凡そ人生何事におきましても調和は肝要であります。それが、夫婦の間や友人の間と同等歌謠の上には必要なのでございます。彼の西國順禮歌の悲しき調べ、物貰ひの歌の憐れみを誘ふに足る曲節、御和讃がうき立つ氣分を抑へて道に歸依するの心を起さしめる處には、何人も歌謠の力の偉大なることは察し得られるでございませう。

ひとり悲しみや信仰の念ひに誘ふ力ばかりではありません。人を浮き立たせる上にも、疲勞を調節しまする上にも、大いなる働きを有するものであります。酒のお座敷の陽氣さは、決して酒と三味線と三味線を抱いてゐる人とだけで生ずる

もので無く、三味線に合せて謡ふ歌によることが多いのであります、騒ぎに入る前のお心いきをといふ處のどゝいつや、呑みしこつた後の二上り新內が如何に人を動かすかは申さずとも御分りのことでございませう。また田植や地つきや、石曳といつたやうな勞働も、その作業を營みながら謠ふ歌によつて、力の浪費を防ぎ又疲勞の輕減をなすことは既に諸君の日常熟知せられてゐる通りでございます。ましてや彼の流行歌なるものが、世の人の好みに合して、嵐が廣野を吹きまくるが如き、恐るべく、驚くべき力を有することは改めて申す迄もあるまいと存じます。

以上は專ら今謠はれるものに就いて述べたのでありますが、フシは疾うの昔に絕えてゐても、其の歌の內容に於てすぐれたものがあるが爲に記錄されて、常に新しいものとして迎へられるものが尠からずございます。

古い處では古事記や日本書紀の歌も皆歌謠であり、萬葉集の歌に致しても、口に謠はれたものが相當に含まれてゐるのであります。まして平安朝時代に神事に

用ひた神樂歌、和歌の外に馬子唄類をも採用して、大陸から輸入した曲に合せて謠つた催馬樂、諸國の民謠を採つて貴族連中の謠つた風俗(ふぞく)、乃至はその世の流行歌であつた今樣、此等は誰が謠ひ出して、誰がそれをほめ立てて世に弘めたものか一切不明であります。しかしながら其の不明な處が尊さを示すものでありまして、詰る處は民衆がそれに共鳴した結果、弘まつて記載されたものであれば、國民が共同して産み出した共有物であつたのであります。彼の延臣や大官を罵つた歌らしい、

力なき蝦(かへる)／＼骨(ほね)無(な)きみゝず／＼。

の痛烈な皮肉も、誰か一人いひ出したのに、みんな同感を表して謠ひひろめた爲に遺つたのであります。横柄づらをして、大きな椅子によりかゝつて、丸膨姿でえらさうにしてゐるが、さて其の實力のなきは蛙の如く、又公であり、明るくあるべきことを忌み嫌つて、地の下をもぐつて、めゝしい泣言交りに實力のある人を中傷して、此の世全體に思はぬ大損害をひき起す蚯蚓、此の蝦と蚯蚓とのはびこることは千

年前の平安朝と、武家時代と、さうして今の世と、先づ以て變る處がありません。古けれど常に新しくと申すのは此處でありまして、未來永遠にかけて寸鐵殺人的の警めの歌として味はゝるべきであります。此の古くして常に新しき歌は、男女間の愛情や嫁姑の反目や主從間の不平を謠つたものの上に最も多くを見出すのであります。

にくい〳〵は可愛のうらよ、いやぢや〳〵は又其の裏よ、泣いておどすはそれ裏の裏。

といつたやうな歌もよく人情を穿つたもので、何時の世の誰にも成程とうなづかせさうなものであります。ほんの一刷毛あてるといつた程度のもの、例へば柳の下で戀しい人を待つといつたやうな歌は、萬葉集の東歌の中にも、室町時代の小歌にも、江戸時代の長唄の中にも出て來るのでありまして、もし人が疑つたら楊枝をとるのだとお答へなさいといふ風に謠つて居りまする。

思ひ出すとは忘るゝか、思ひ出さずや忘れねば。

は隆達の小歌であるが、かの高尾が人の許へ「忘れねばこそ思ひ出さず」といつてやつたのと同一の現はし方をしたもので、一寸考へさせる處に面白味が宿る。

文はやりたし書く手はもたぬ、ものをいへかし白紙が。

の如きは、教育の行渡つた今日にあつては、こんな事に思ひ悩む者はあるまいと考へる人もありませうが、書く手はあつても、熱烈な思ひを現すだけの筆の力を有せず。思ひつめてはいつそ白紙でといつたやうに考へる人がつひそこらにもあらうかと思ひます。こんな類の歌は、武家時代といはず、庶民時代といはず、形をかへ、姿を變じて謠ひ出されて居ります。時の上から申せば、此等は古い歌でありますが、いつ迄も之を見る者に刺戟を與へて、同感を叫ばしめるのであります。即ち常に新しきものとして傳へらるべき價値を有するのであります。これが眞理至情をいひ現した歌謠の力でありまして、教育ある者に對しては、記載された歌も、謠ひ出された歌に、さう劣らない處の刺戟と共鳴とを感ぜしめるのであります。

上下こゝに三千年、わが日本國に起つた流行歌だけでも、幾萬種類があつたこと

でございませう。それが後から〳〵と續々出る新しい者に追ひのけられて、曲節は消え去り、文句も忘れられて來たのでありますが、世の人々に深い印象を刻みつけたものは、幾分づつは記錄されて後世に遺つたのであります。流行歌以外のもの、たとへば勞作の歌、踊の歌、歌舞伎に用ひられる歌、此等は律的動作とでも申しませうか、一定の間隔をおいて、同一形式が反覆されるやうに出來上つてゐて、變改は許されなかつた爲に、比較的完全に遺留してゐます。

さて私が歌謠と申すのは廣い意味でありまして、小歌・端唄・長唄・流行歌・踊歌といふ類の他に、歌淨瑠璃とも稱すべき一中節や河東節や富本節や清元節・薗八節なども入れて考へてゐるのであります。宗教關係のものでは、和讃は固より敎化や御詠歌の類迄もこめて考へてゐますし、箏歌は勿論、月琴に合せたホーカイ節の類、錫杖を振つての歌祭文、鉦鼓を打つての歌念佛此等の一切を網羅して考へてゐます。近年行はれた演歌、あのバイオリンに合せて人の集まりさうな地を選んで、「紫の袴さら〳〵ホワイトリボン」と謠つたものでも、マックロケノケでも籠の鳥でも一切

を包含させて考へてゐます。

此の方針の上に、上古以來の歌謠を集めて參りますと、名高い書物だけでも七八十部はあり、歌も總計では十萬首をも越えさうです。さうしてその何れもが、我等祖先の眞實の聲であり、調べであり、又止め難い叫びであつたことを考へると、それに國民性が裕かに宿つて居り、世の實相も十分にうつし出されてゐるものとして取扱はなければならないと思ひます。他の論文の如く、歷史物語などの如くに、作者のねらふ處を明かに現して、それによつて、人々を自分の說に贊同せしめようといふのでなく、情の昂まりの頂點を一定の型にはめて表してあるのが歌謠で、其のフシは絕えてゐても、歌の文句に潛む精神即ち力は後代人を動かして、徐々に先へ先へと進むのであります。現在は過去に接續し、未來は現在に連つてゐるのである。ひとり音樂や詩にのみ限らず、あらゆる方面に動搖の來てゐる今日にあつては、情熱や至誠のあらはれであつた過去の民衆の聲に、我等は一先づ耳を傾けるか、目で見るかしなければなるまいと思ひます。

由來普遍性と滲透性とに於ては、諸の文學藝術中に於て、歌謠を其の最第一のものとしなければなりません。いひかへれば社會多數人の實生活に接觸してゐるもので、緊要な歷史の材料であり、生活の不安定に對してそれを慰める最もよい詩であつて、多くの敎育を受けてゐない者も之を味ひ得ると共に、謠ふことが出來て自分たちの共有のものだと感ぜしめるといふ諸の長處を有するのであります。

然るに此の歌謠は從來其の實價以下に評定せられまして、文學としての眞價や世相を物語る史料としては他に見られないものを有することが忘れられてゐました。歌謠は當然受くべき待遇を受けてゐなかつたのであります。もし歌謠を以てかたよつてゐるものと思つたら、それは確に誤解であります。和歌や俳句の如く、社會の一部人士間にのみ行はれたのでなく、一切の生業を助け、舞や踊と和し、祝儀不祝儀の席に於て謠はれました。又淨瑠璃系統のものは、歷史上の人物事蹟の外に、其の時代の出來事をも採つて、各種の方面から材料を求めてゐるのであります。フシも亦同樣でありまして、決して偏つては居りません。

歌謠は固より研究せらるべきものであるが、其の研究はまだ〳〵狹く且つ淺いのであります。今夕の曲目を見ますと、近世歌謠の主要なる流派から極めて適當なものを撰んでありまして、おほむね花見時の氣分に合するやうに致してあるやうです。と申して決して浮かれ氣分に導くものでなく、凡そは時代順にしてあるものの如くで、始の和讃では落ちつかせて信の道に耳を傾けしめ、次の狂言小歌では曉の明星・七つに成る子（註一）等に古雅を味はせ、次では箏の菜蕗組（註二）にもまだ古風を味はせることになつてゐるかと思へば「萍は思案の外の誘ふ水、戀が浮世か浮世が戀か」と出して「癪に嬉しき男の力、ぢつと手に手をなんにもいはず」と苦勞人同志の夕闇の所業、通人粹士にも、物堅い方にも微笑を禁じ得しめない上方唄のこすの戸（註三）に移り、次第にくだけて江戸端唄の、御所のおには・大津繪・とつちりとん（註四）どどいつ。轉じては清元の助六（註五）に江戸長唄の花の友（註六）意氣も澁さも細かさも、明るさも、もう一つ快さも味ひ得られることと思ひます。まことに民謠以外の技巧歌謠はよくならべてあります。此の中にこもる力は實物をおききに

なれば、すぐ感得されることでありますれば、私からは餘計なことは申しません。フシの流れに引き込まれて、歌の文句を耳に止められなかつた方は、後日それ〳〵の歌謠の書物について御覽になりましたなら、次から次へと曲調が浮び出ることでございませう。

註一

曉の明星

曉の明星は、西へちらり東へちろり、ちろり〳〵とする時は扇おつとり刀差いて、太刀の柄に手うちかけて、去なうよ戻らうよと、言うては袂に取りついた。去なうとも戻らうとも、何とも其方のお計らひと、言うては小腰に抱きついた、いとしには限無う、きり〳〵限無う、限無う、手も力も無いもの。

七つに成る子

七つに成る子がいたいけな事言うた。殿が欲しと歌うた。扨ても〳〵和御寮は、誰人の子なれば、定家葛か離れ難やの〳〵。川舟に乘せておじやろにや、神崎へ〳〵。そも扨ても和御寮は、踊堂が見たいか。踊堂が見たくば北嵯峨へおじやれの。北嵯峨の踊りは、つゞら帽子をしやんと着て、踊る振が面白い。吉野泊瀬の花よりも紅葉よりも、戀しき人は見たいものぢや。所所お參りやつて、疾う下向召され、科をばいちやが負ひ參らせう。

註二

茶壺

茱蕗(ふき)といふも草の名、茗荷といふも草の名。富貴自在德ありて、冥加あらせたまへや。
春の花の琴曲、花風樂に柳花苑。りうくわゑんの鶯は、おなじ曲をさへづる。
月の前のしらべは、夜寒を告ぐる秋風。雲井の雁が音は、琴柱に落つる聲ごゑ。
長生殿の裡には、春秋を留めり。不老門のまへには、月のかげ遲し。
弘徽殿の細殿に、たゝずむは誰たれ。おぼろ月夜の内侍の督、光源氏の大將。
誰ぞやこの夜中に、さいたる門を敲くは、たゝくともよもあけじ、宵の約束なければ。
七尺の屏風(へいふう)も、躍らばなどか超えざらん。羅綾の袂も、引かばなどかきれざらん。

註三

釣簾(こす)の戸

へ萍は、思案の外の誘ふ水。戀が浮世か、浮世が戀か、ちよと聞きたい松の風。合問へど答へず山ほとゝぎす。合月やは物のやるせなき。合癪に嬉しき男の力。ぢつと手に手を何にも云はず。二人して釣る蚊帳の紐。

註四

大津繪節

へオイ／＼爺どの、其の金此方へ貸してくれ。與一兵衛は吃驚仰天し、イエイエ金では御座りません、娘がしてくれた用意の握飯、ドレドレお先へ參じませう。ヤレ／＼しぶとい爺奴と、拔き放し、何の苦も無く一とゑぐり。金と命のほいない別れの二つ玉。

とつちりとん

へ可愛いさうだよ石童丸は、父を尋ねて、たど／＼と、高野の山へ登らるゝ。源氏節へ父上さまは在さぬか、今道心はましまさぬかと、聲を高野に張上げて、呼べど叫べど山彥の、谺に響く音ばか

り。石童親子の奇緣にや、思はず傍へ駈けよりて。詞へまうし御出家樣、此御山に、今道心がましまさば、どうぞ敎へて下さりませ。へこは興がる小兒かな、昨日剃つたも今道心、一昨日剃つたも今道心、只今道心では知れがたし、たつて又逢ひたくば、翌々日(あさつて)來られよ。へ逢はれまするか。へ高野の翌々日だ。なぜか咲かせた女郞花。道の千草を踏み分けて、逢ひに焦がれて來たものを、誰が賴んで父上を、なぜ墨染にしてくれた、全體こうやが分らない。

註五

助六曲輪菊(すけろくくるわのももよぐさ)

前ビキ 合へ鐘は上野か淺草の、名もなつかしき花川戶。合よしやかはせし越し方を、思ひ出見世や合清搔(すががき)の、音締めの撥に招かれて、間夫が名取の草のはな 出江戶ガカリへ思ひ染めたる五つ所、紋日待つ日の便さへ、子供がたより待合の カンへ辻裏茶屋に濡れて寢る、雨の三の輪の冴返る。詞へ此鉢卷の御不審か。へ此鉢卷は過ぎし頃、由緣の筋の紫も。合君がゆるしの色見えて、移り變らぬ常磐木の アゲブシへ松の刷毛先、透額。合堤八丁風誘ふ、日當の柳花の雪、傘に積りし山合は 合カンへ富士と筑波をかざし草。合草に音せぬ塗鼻緒。へ一ツ印籠一つ前。三下リ合へ急くな急きやるなサヨエ 合浮世は車サヨエ ナホルへ巡る日並の約束に、鐘へ立ちて音づれも、果ては口舌のありふれた、手管に落ちて睦言の、なり振床し君床し 詞へ君なら〳〵 へしんぞ命を揚卷の、是助六が前渡り、風情なりける次第なり。

註六

花の友

本調子へ下總や、武藏の間(あひ)の一ト流れ、心も隅田(すだ)の川上に、寄するは春の友なれや へつきぬ眺の花の香を、茶壺に詰めし初昔、かはらぬ色のいさをしに、あかぬ遊びのながしだて、立てし誓の行末

は其のうば口のふとん釜、二人しつぽり嬉しい中を、誰が水さしてかへぶくさ。 さばきかねたる中々に、思ひのたけの竹臺子、其のをりすゐの末までも、月と花との戯れに、すぐるすさびの面白や。 ヘ見渡せば流れに浮む一葉の、中の小歌の顔見たや。 櫻がものをいはうならば、さぞや悋氣の種であろ。 粹な隅田の水かがみ、こがれあうたる船の中、よその眺めのもどかしや。 一上り ヘ君をまつ、香の薫りのゆかしさに、戀の闇路の色深く、染むる柳の瀬にうつる、風の姿のいとしさに、いつか誠を明してそ・して、約束かたき女夫石。 はたで見る目のたのしさよ。 ヘ花のかず〳〵数ふれば、松は朧に櫻はゆかし。 すゐな山吹桃椿、藤たをやかに、風ものどけし。

二　江戸長唄概説

（大正十五年五月大阪放送局講演）

歌謠の方面を主にして見た江戸長唄の概説です。 夏の熱い時に、各放送局の曲目を見て、成るべくそれに觸れるやうにして説明して見ました。 爲にいくらか偏つたかも知れませんが、江戸長唄の概觀といふには間違つてゐないつもりです。

義太夫節が大阪町民がさしかけた傘の下に大成したが如く、江戸長唄は江戸兒の抱擁裡に生長したものであります。 一切の江戸文藝は、其の元をただせば、總べ

て皆上方で一たび圓熟したものでありまして、それを輸入して江戸前に化したゞけのものであります。江戸長唄も其の好適例の一つでございませう。

江戸長唄は江戸の歌舞伎芝居に用ひる長唄の意でありまして、寶永の頃から芝居番附の上に此の名が見えます。恐らく元祿年中に起つたものでございませう。江戸長唄系圖には、ずつと古く寛永の頃からあつたやうに記してありますが、何の證據もなくて、それは信ずることが出來ません。唯今迄の調査では、上方の三味線の名家、多分京都の杵屋が江戸へ下つて、劇場へ出勤して生み出した一流であらうと思ひます。

諺に「江南の橘、江北に植ゑれば枳となる」と申します。いふ迄もなく、無情の草木も氣候や風土によつてかうも變る、まして有情の人間に於てをや、人間は其の居る處の風俗の善惡によつて、其の性質が如何樣にも變化するといふ意でありますが、藝術品である此の江戸長唄だけは、江戸趣味の下に新方面に育て上げられて、京阪の枳が江戸で橘となつたのであります。

江戸趣味は御承知の如く、濃厚や堅實や品位といふやうなことは求めません。くわらつとしてゐる・寛濶だ・意氣だ・いなせだ・乙だ・澁い・細い・洒落てる・輕い・穿つてる・新しいといつたやうなことを覘つたのであります。此の趣味は音樂の上に現れて、意氣だ・いなせだ・輕いといつたやうなことは清元節となり、澁い・細い、乙だといふことは河東節となつて歡迎されました。さうして、大びらだ・くわらつとしてゐる・洒落てる・穿つてる・新しいといつたことは江戸長唄の上に最もよく作り込まれてゐたのであります。江戸長唄の特徴は、曲風の明快な點にあります。淨瑠璃の如くに澁滯することのない處にあります。飽く迄も明るく、どこ迄も陽氣にといふのが其の立場であります。唄の文句も亦文理の整不整をやかましくいはず、輕快滑走の間に、滑稽もあれば穿ちもあり、機智や頓才も振廻してあつて、十分江戸の特質が現れてゐるのであります。

但總計では一千五六百曲か二千曲もあらうといふ江戸長唄は、其の文章、其の曲が必ずしも一樣でなく、凡そ次に申す四つ位の種類に分れてゐるのであります。

どなたも御承知の「鐘に怨は……」の道成寺や「旅の衣は篠懸の……」と謡ひ出す勸進帳、「來るか／＼」や「すいた水仙、すかれた柳」の唄で歡ばれる越後獅子、普通此の流派で



五大力繪表紙

唄と稱へてゐる此の類が、江戸長唄の根をなし、幹をなし、枝葉をもなすのでありますが、他にまだ、めりやす・唄淨瑠璃・大薩摩の三種類があります。

めりやすは主として劇場の合方に用ひるもので、彼の五大力戀緘即ち小まん源五兵衛の芝居で、小まんが源五兵衛に賴まれて、三五兵衛から寶物を取返す約束を致し、三味線の裏皮へ五大力と書く處に、三味線の他には何の鳴物も入れず、間

を延ばし、撥數を少くして、

いつまで草のいつ迄もなまなか見え物おもふ。たとへせかれて程ふるとても、緣と時節の末を待つ。何とせう、互の心打解けて、上べは解かぬ五大力……

と獨吟で謠ふあの類がめりやすであります。俳優の科（しぐさ）に應じて、伸縮を自在にし得ることは、彼のシャツやズボン下に用ひます莫大小（めりやす）の如くで、此の名稱は至極其の實質に合してゐるのであります。他に其の名稱についてはいろいろな說も出てゐますが、私は樂屋中の隱語で、莫大小に模して附けた名であらうと思ひます。此の稱呼は享保以後に生れたもので、上方唄を江戸の歌舞伎歌に轉用してから後に生じたものでありますが、莫大小は德川の初世から輸入されて居つて、古く延寶洛陽集にも、

唐人の古里寒しメリヤス足袋

といふ句が見えて居ります。

めりやすの調子には本調子も二上りもありますが、普通は三下りで、沈潜の趣に

富み、江戸一流の明快味を缺いて居ります。　上方から江戸へ下つた女形の俳優佐野川千藏が、音曲の方へ身を轉じて富士田吉次と名乘りましたが、此の人が之を謠つた時代、年號で申せば寶暦明和安永あたりが盛時で、其の後は次第に衰へて、普通にいふ長唄が榮えることになつたのであります。

それでも明治の中年迄は「宵は待ち、そして恨みて曉の」だの（註一）「黒髪の結ぼふれたる思ひには、とけて寐た夜の枕とて」（註二）だのと謠ふのを聞きましたが、近年は劇場以外ではめりやすは聽かれなくなつてしまひました。

註一

宵は待ち　（明の鐘）

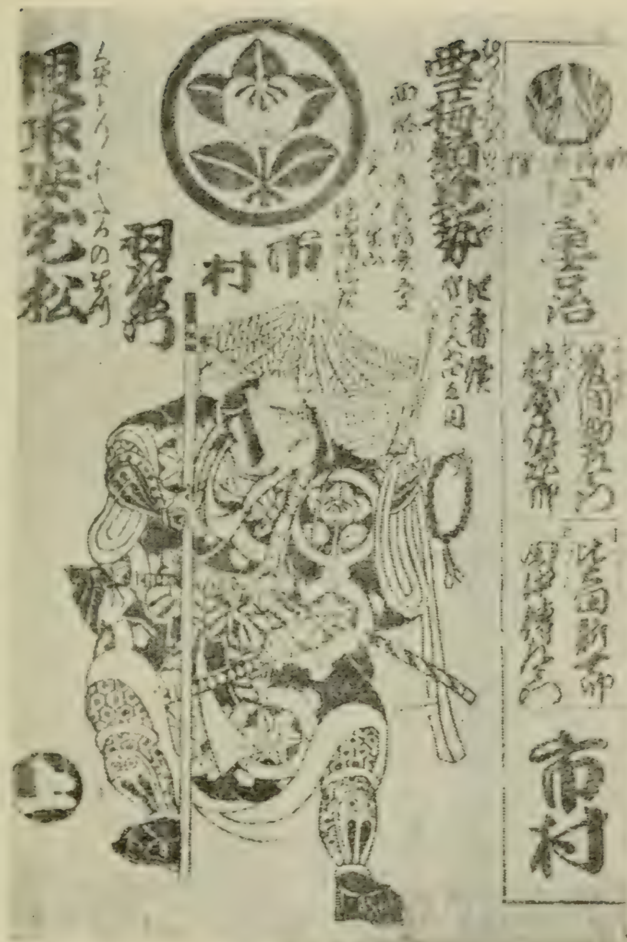
三下り　〽宵は待ち、そして恨みて曉の、別れの鷄と皆人の、合憎まれ口な、あれ啼くわいな合聞かせともなき耳に手を、鐘は上野か淺草か。

註二

黒かみ

〽黒髪の結ぼふれたる思には、解けて寢た夜の枕とて、一人寢る夜の徒枕、袖は片敷く妻ぢやと云うて、合方〽愚痴な女子の心も知らず、しんと更けたる鐘の聲、昨夜の夢の今朝覺めて、ゆかしなつかし遣瀬なや積ると知らで積る白雪。

唄淨瑠璃は淨瑠璃風の長唄の意であります。調子の上から申しますと、淨瑠璃は本調子を基調とし、江戸長唄は三下りを本體とするやうであります。ところが



隈取安宅松

此の唄淨瑠璃と稱するものには、本調子の箇處が多く、文句も叙情式でなく、叙事式に綴られて居ります。彼の隈取安宅松註三などがよい例でありまして、「旅の衣は篠懸の」と能の次第がかりで謠ひ出す處以下が本調子で、だん〴〵くだけて、「裏のナア裏の背戸屋の此年竹、笛にせうもの草笛に」の處から二上りに轉じ、役者が十分踊り得るやうにし、「神の鈴はシャング〴〵と」のあたりで拍子にかゝつて、

さて十分踊らせた後、「風かあらぬか其の姿見失ひ」で、三重のトメをひき「てぞ立ちにける」と淨瑠璃式に結ぶのであります。さうして唄の中間にコトバがはひるのでありまして、此のコトバのはひることは元來江戸長唄にはないことで、淨瑠璃に限ることであります。

註三

隈取安宅松

次第 〽旅の衣は篠懸の〳〵、露けき袖やしをるらん 合 都の外の旅の空日もはる〴〵の越路の末思ひやるこそ遙かなれ 合地カヽリ 〽東雲早く明け行けば、淺茅色づく有乳山、氣比の海 合 宮居久しき神垣や、松の木の芽山、なほ行先に見えたるは、合 杣山人の板取、川瀨の水の淺生津や、末は三國の湊なる、蘆の篠原波寄せて、靡く嵐 合 の烈しきは、花の安宅に着きにけり 合方木調子 落葉掻くなる里の童の、野邊の遊も餘念なく 合 こりや誰が目づき、ちつちや子持ちや桂の葉、ちんがちが〳〵ちんがらこ、走り〳〵走り着いて先へ行くのは酒屋のおてこ、後へ退るはおほかみ狐、尼が紅付けて父や母に言はうよ、言うたら大事かそつてくれよ、坊主坊主大坊主（後に「葉越しの〳〵月の影」と改む） 二上リシドリ 〽裏のなア、裏の背戸やの今年竹 合 笛にせうもの草笛に、笛になりたや忍ぶ夜の、笛は思を口移し、アヽしよんがいな〳〵 合 〽忍ぶ 合 忍ぶその身は安宅の松よ 合 雪の夜毎の汐風に、揉まれ〳〵て立盡し、ありして 合 これしてしよんがいな、面白や絶えずや 合拍子 絶えずや子寶一に千石米藏 合 常陸の國の角岡に黄金の花が咲いたよさ、につこり 合 はつこりホホヽヽ〳〵 合 お笑ひ召したは悉皆在所の、庄屋殿だんべい、いつかいいつかい、いつかい俵に酒

樽千倍萬倍 合萬倍萬々倍打つて置けしやん〳〵 合〽神の鈴はしやんぐ〳〵と、さつても揃うた子寶 合一度に問へば乙よけさよ 合辰松ゆる松だんだらいなごにかいつくばう 合ひつゝくばう、



道成寺繪表紙

かいつくひつつく〳〵しやん〳〵扇に馴染む風の子や、風の木の葉の散々に 三重里をさしてぞ セリフアリゆめゆめ疑ひ荒磯の、砂を飛ばす土煙、梢木の葉もはら〳〵〳〵、俄に吹来るはやち風、天地も一度に鳴動して、岩石古木ゆさ〳〵〳〵 合どろ〳〵どつと山颪の、風かあらぬかその姿、見失ひてぞ 三重立ちにける。

三下りを基調にする長唄に新生面を開かうとして、本調子を主體にし、文句も叙事式にすることは明治の中年以後に至つて盛んになりました。 彼の「鳥羽の戀塚」なども其の一例でありまして、(註四)これは明治三十

六年に、吉住小三郎氏が半井桃水氏の作に曲を附したものであります。例の遠藤武者盛遠が袈裟御前に無法な戀を致しまして、それから發心を致す迄の經過を叙したもので、文句の上では大分淨瑠璃に接近してゐるものであります。

註四

鳥羽の戀塚

前ビキ本調子〽去る程に、遠藤武者盛遠は、春も彌生の初つかた 合 霞がくれの花よりも、床しき 合 君が俤を、見初めし緣の橋供養 合 明くれ絶えぬおもひ川、戀わたる身はうつゝなや 合 〽武夫の山を拔くてふ力にも、たへぬは戀の重荷とて、世を鶯の春も過ぎ、夏來にけらし蚊遣火や、思の烟消えやらで、下燃えわたる螢より、いとゞ焦がるゝ身をいかにせん 合 〽秋は殊更わびしきに 合 誰まつ蟲やきり〴〵す、いたくな鳴きそ長き夜の、恨みまされる折柄に、あら嫉ましの女夫雁 合 〽いかに姨御前、盛遠にてさふらふぞや 〽誠に和殿は、甥の盛遠、無慙やな何として、斯ばかり窶れたまひしぞ、痛はしの有様よと、袖に露置く衣川 〽愚や姨御前、盛遠程のつは者が、姿形も痩枯れて憂目を見るは誰ゆゑぞ、いで〳〵仇を討たんずと、姨が立頸むんづと捉り、胸に刄を指しつくれば 〽こは物にばし狂ひ給ふか、姨に何の恨やある、仔細を語り聞えたまへ 〽さらば申候はん、我袈裟御前を妻にせんと、切に申し乞ひたるを、聽きたまはざりしに非ずや、戀には人の死なぬものかは、姨御前我を殺したまふ、所詮生き難き盛遠は、仇人を討ち果たし、我も死なんとこそ思ふなれ 〽なう暫し待ちたまへ、さまで娘を慕ひたまはゞ、今宵逢はせ參らせん 〽そは忝なき仰なり、さらば重ねて　るべし、約束違へたまふなと、言葉殘して立去つたり 三下リ 〽露に宿かる月影の、あるかなきかの世の中に、果敢なく物を思ふより、母と夫との命に代り 合 今宵の中

に亡きものと、覺悟を死出の袈裟御前、珠數なす涙押匿し月見の宴にことよせて、言はず語らぬ暇乞ひ　本調子　渡は夫と知る由もなく蟲の音のしほらしき、月の風情に興そひて、此の上に何がな一曲歌ひ給へと、勸むれば　一上り合　〽別れの殊に悲しきは、親の別れ子の別れ　合　優れて實にも悲しきは、女夫の別れなりけり　合　露深き、淺茅が原に迷ふ身の、いとゞ闇路に入るぞ悲しき　〽扨も忌はしき歌の心よ、天に在つては比翼の鳥、地にあつては連理の枝、何の別れのあるべきぞ、我は情の露深き、御身が閨に訪づれて、夢路に入るぞ嬉しきと、打戲れて立上る、夫を扶けて帳臺の、奥深くこそ入りにけれ　合　〽時刻をはかり袈裟御前、寢所をそつと忍び出で、戀にはあらで仇人を、まつの操の色變へぬ、みどりの髮を洗ひつゝ、死に行く身ぞ哀れなる　本調子合　〽斯かるべしとは白露の、草踏しだき庭傳ひ　合　忍び寄つたる盛遠は　合　月こそ冴ゆれ戀の闇　合　探る手先に黒髮の、濡れたるは渡ぞと、牒し合はせし言の葉を、たよりに首を討落し、悦び勇み立歸る　合　〽昨日の仇も經陀羅尼、せめては後世を弔はんと、恨も晴れし月代に　合　翳す首級(しるし)は無慙やな、渡にあらで袈裟御前　〽こはそも夢か現かと呆れ果てる盛遠も、忽ち悟る無常觀　合　淺ましかりける首級には、白毫の光輝き血汐に染める片袖も、攝取の袂と見えければ、あら難有や尊やと、誓ふつつと切拂ひ、菩提を弔ふ盛阿彌陀佛、名さへ高雄の文覺が、是れ發心の源と、語り傳へし鳥羽の戀塚。

大薩摩は全く、本調子を基本とする淨瑠璃の一派で、大薩摩主膳太夫(おほさつましゆぜんのたいう)といふ人の流風であります。其の三味線を江戸長唄の方で彈いてゐたのでありますが、大薩摩の家元が絶えて、文政年中から江戸長唄でそれを預るやうになつて、遂に長唄の一部の如くに考へられることになつたのであります。代表曲は綱館の段であり

ます。矢根五郎であります。羅生門・橋辨慶・筑摩川等何れ荒事めいたものに使用するのであつて、調べが雄勁で、詞の多いのが特徴であります。よく出す鞍馬山などは此の部類のものとはいひながら、半ば以上は前の唄淨瑠璃になつてゐるものであります。けれどもこれにはコトバはありません。そのわけは安政三年十一月江戸の市村座の顔見世狂言のダンマリの地に用ひる爲に作つたものであるからであります。九代目市川團十郎、當時の河原崎權十郎が牛若丸、僧正坊實は女盜賊お松が尾



道成寺繪表紙

上菊五郎で、木葉天狗實は盜賊袈裟太郎が市川小團次で演じたものであります。之を御記憶の上お聽きになりましたら一層興が湧くことでございませう。



奴丹前

さて數も多く、世に知られた曲も多いのは何と申しても普通うたと稱する處のもので、其の題材は隨分多方面に求めてありますが、之を類別して申せば、道成寺物・石橋物・草摺曳物・丹前物とでも名づくべき此の四つのものが目立つのであります。

道成寺物は御承知の如く能樂の道成寺から出たものであります。白拍子の花子にいろいろな踊をさせるのが目的でありまして、能のやうに、亂拍子や鐘入りばかりを主要部としては居りません。この道成寺ものには十幾種かありませうが、代表作はおなじみの京鹿子娘道成寺であります。鞠の段、花笠の段、戀の手習の段、山盡しの段など七段に分れてゐますが、所作の上にも、筋の上にも、一貫した趣意がないものであります。面白いものだが、どうもしまりがないといふ江戸長唄の短處をよく暴露して居るものであります。

英執着獅子繪表紙

石橋物も亦能から出たもので、專ら祝言に用ひられることは熟知せられてゐるが如くであります。これにも幾種かありますが、代表曲は英執着獅子・連獅子等の他にまだ二三曲あります。執着の如きは決して堅いものではありません。專ら男女間の愛着を敍したもので、蝶の舞ふ姿もあれば、櫻づくしもあり「人目忍べは恨みはせまじ」だの「朝な夕なに、うつす鏡のよい金性と、わしは水性でお前と深い。それを疑ふことかいな」さらりと柳にやらしやんせ」といふ口説もある至極軟かなものであります（註五）如何に面白くても、これでは御婚禮の餘興に出すわけには參りません。そこでそれには外記節石橋と稱する、謡曲通りの文句から成る至極無事なものを用ひて居るやうであります。

註五

英執着獅子

〽花飛び蝶驚けども人知らず〽我も迷ふや樣々に、四季折々の戯は、蝶よ胡蝶よ、せめて暫しは手に止れ、見返れば見えつ隱れつ羽を休め、姿優しき夏木立〽心盡しのな、この年月をえ、何時か思の晴るゝやと、心一つに諦めん、よしや世の中〽短夜の夢は文なしその移り香の憎て手折ろか主なき花を、何のさら〳〵〳〵〳〵、更に戀は曲物〽露東雲の草葉に靡く、青柳の絲しをらしく、

二つの獅子の身を撫でて、頭をうなだれ耳を伏せ、花に宿借る浮世の嵐、彼方へ誘ひ此方へ寄りつ、園の胡蝶に戯遊ぶ、己が友呼ぶ獅子の駒〽花にうつろふ戀の胡蝶の舞の袖〽戀すてふ比翼連理の可愛らし〽大宮人の庭櫻、檜扇翳す緋櫻の、地主の櫻や瀧櫻、月の影さへ明石潟、人丸櫻袖硯、筆の命毛墨櫻、誰が小櫻や憎からぬ姥櫻花櫻〽名取の里に彈く三味の、手毬櫻の彈みよし、思染めたよ絲櫻、君の名のみ菊櫻、二人が戀の山櫻、祈る誓も伊勢櫻、色も變らぬ紫の、江戸櫻家櫻面白や〽時しも今は牡丹の花の、咲くや亂れて散るは〳〵散來るは、散るは〳〵散來るはちり〳〵〽散りかゝる樣でお愛しうて寢られぬ、花見て戻ろ、花には憂さも打忘れ〽人目忍べば恨はせまじ、爲に沈みし戀の淵、心からなる身の憂さをやんれそれは〳〵え、誠憂やつらや〽朝な夕なに映す鏡のよい金性と、私は水性でお前と深い〽それを疑ふ事かいな、さらりと柳にやらしやんせ、柳に〳〵やらしやんせ、思廻せば昔なり〽牡丹に戯れ獅子の曲、實に石橋の有樣は、笙歌の花降り笙笛琴箜篌夕日の雲に聞ゆべき、目前の奇特あらたなり〽暫く待せ給へや、影向の時節も今幾程によも過ぎし〽獅子團亂旋の舞樂の砌〳〵牡丹の英匂滿ち〳〵大筋力の獅子頭、打てや囃せや牡丹芳〳〵、黄金の蘂現れて、花に戯れ枝に臥し轉び、實にも上なき獅子王の勢、靡かぬ草木もなき時なれや、萬歲千秋と舞納め〳〵獅子の座にこそ直りけれ。

此の他江戸長唄には能から出たものに、老松・鶴龜・木賊刈（とくさかり）・勸進帳・羽衣・汐汲等まだ他に多くありまして、それがうまく歌舞伎化されてゐるのであります。すなはち出から捌きに入り、それからシヌキ又は口說があり、續いて總踊があつて切のチラシになるといふ構造にしてあります。彼の端唄や流行唄をうまく取入れて、口說

の處で聽く者にうつとりさせるのが習はしであります。さうして面白いもの、受けるものは、實に普通にうたといふ此の部類に多いのであります。何といつても



正札附根元草摺

一番著名なのは勸進帳ですが、これは問答が多くて變化に富み、曲が拔群に面白い上に打上げがだれないといふ長所を具へてゐるのであります。

草摺曳物は幸若舞の和田酒盛から出たもので、朝比奈の三郎が、曾我の五郎の鎧の草摺を取つて和田一門酒盛の座敷へ引入れようとするが、大力同士の力爭とて、草摺三枚がちぎれても、五郎は其の居場所を動かなかつたなんぞと、甚だ强い

武張つたものであります。けれども何物をも軟化させなければ承知しない歌舞伎は、正札附根元草摺の如き代表作にも、鬼を欺くといふ朝比奈をして「これ申し、野暮な力は奥の間の浮氣らしさの辛氣ぶし」といはしめ、續いて「女子の愚痴な眞實が屆かぬことか待つ夜半も、布團重ねて敷妙の、枕の土俵化粧紙、間夫に逢ふ夜の力水」と世にも砕けたことを唄ふことになつてゐるのである。まして之を五郎と少將との間に行はれることにしてある「菊壽の草摺」に至つては說くにも及ばないでありませう。今其の際どい所は文句を變へて唄つて居ります。こんなことをすると、時代味が失せて大きに潤ひが無くなるのであるが、親子兄弟が膝を並べ、頭を寄せて聽く場合の謠ひ物としては、まことに止むを得ないことでございませう。

丹前物は全く江戶で生れた江戶長唄獨自のものであります。德川の初世に神田の松平丹後守の前の風呂屋に美しい茶汲女が居りました。當時そこへ通ふ人達がひどく派手な身なりをして、丹後守の前へ行くの意で、丹前へ行くと稱しました。さうしていつしか其の人達の風を丹前姿といひ、歌舞伎芝居に於てそれを模

して、六方を踏んで出るを演ずるに至つて、其の出端に用ひる長唄に、枕丹前だの、奴丹前だのと名を附けることになりました。長い刀に長脇差を十文字に差しほこらかした者が、槍踊の所作をやることを綴つたものが多いのであります。此の丹前物は近年全く廢れてしまつて、僅に女夫松高砂丹前が遺つてゐるだけでありま す。公娼制度の可否が論ぜられて、四疊半趣味の行き渡つて來た時代に、此の類の曲が忘れられるのに何の不思議もないといふべきでありませう。

以上述べた所に江戸長唄の輪廓だけは理解されたであらうと思ひます。もし添へて申すとすれば、用途の上から素唄物と鳴物入物と踊物即ち所作事物とに分けて考へることも一法で、菖蒲浴衣や鞍馬山や鳥羽の戀塚などは、普通素唄物として考へられてゐるのであります。

終りに一言したいのは、長唄の文句に關してであります。兎角謎や當込があつて、其の出來た當時でなければ理解しにくい文句がいくらも出て參ります。菖蒲浴衣(註六)などもそれで、これは安政六年五月五代目芳村伊三郎の名弘めに用ひた

のが最初であります。此の人と杵屋勝三郎と不和であつたのを、作曲者の杵屋正次郎が仲直りをさせて顏を合はさせたのでありました。唄の文句に「鬢のほつれを簪のとゞかぬ愚痴もほれたどし」だの「もつれを結ぶ盃の行末廣の菖蒲酒」などとあるのは全く其の當込であつたのであります。

註六

菖蒲浴衣

本調子〽五月雨や傘に附けたる小人形、晉子が吟も目のあたり、己が替名を市中の、西方の諸君へ賣り弘む、拙き業を身に重き〽飾り兜の面影映す　合今日の晴着に風薫る、菖蒲浴衣の白がさね、表は縹紫に裏紫の朱奪ふ紅も赤重ぬるとかや〽それは端午の辻が花、五つ所紋の影日向　合著さに　二上り作る雲の峰散して果は筑波根の　合遠山夕暮茂り枝を脱いで着替への染浴衣、古代模様のよしながき、御所染千彌忍ぶ摺　合小太夫鹿の子友禪の、朧に船の　三下り〽青簾、川風肌にしみじみと　合汗に濡れたる枕紙　合鬢のほつれを簪の、屆かぬ愚痴も惚れた同士、命と腕に堀切の、水に色ある　合花菖蒲　合彈く三味線の絲柳　合〽縺れを結ぶ盃の　合行く末廣の菖蒲酒これ百藥の長なれや〽廻る盃數々も、酌めや酌め〳〵盡きしなき、酒の泉の芳村と　合榮ふる家こそめでたけれ。

總じて江戸長唄の文句はあまり學問の無い狂言作者の手に成つたものが多かつたので、當込がないにしても、前々に於て受けのよかつた文句すなはち當り文句

を寄集めて續けた迄で、筋の通らないものが尠からずある。彼の吉原情調を述べた吉原雀などは其の不統一不分明の好標本であります。しかし此の類はいくらでもある、いや概ねさうだと申しても宜しいのでございます。坪内逍遙博士が之を評して寄木細工である、美しい寐言であると申されたのは、如何にもよく當つて居ります。けれども其の寐言の節が無類に面白いので、世人が之を歡迎したのでありました。さうして其の寐言には役者が踊の上の伎倆を示すのに至極都合のよいものが多くあつたのでありました。筋は通つてゐなくても、唄手に其の咽を十分發揮せしめる上に、都合のよいものが多くありました。教養の程度の低かつた當時の聽衆や見物は、出典の正しい堂々たる文句に成るものよりも、朦朧式のあんな作品を迎へたのでありました。詰る處、歌も曲も時勢があゝあらしめたといふことになります。

時勢がさうも歌曲を動かすものと致す以上は、明治には明治、大正には大正らしい作品が出づべく、それでなければ新時代の新人が滿足すべき筈がないことは申

す迄もありません。是が坪内博士の手に新曲浦島以下の新作が多く公にされた所以であります。博士の作は、あるものは壯大で雄渾であり、或作は輕妙で滑稽味を包藏し、又あるものは哀れな艶めかしい情味が溢れて居ります。「お七吉三」の如きはあり過ぎる程情味裕なものでありまして、坪内博士が西鶴の五人女から材を選んで、例のトゲをぬく銀の毛拔の處に力を入れて書かれたものであります。「時を待てとはそりや氣が長い、……盛り一時眞夏の晝を、燃ゆる緋罌粟と散ろずもの」と切なる戀を歌つてあるもので、それに六四郎小三郎の兩氏が曲をつけたものであります。坪内博士の作は、一言にすれば程加減に新しいものであつて、其の文辭の絢爛は日本の歌謠界に於て前代無比であると稱しても、恐らく過褒の議を受けることがあるまいと思ひます、彼の列子の湯問篇から採つて、

夫れ渤海の東幾億萬里に際涯も知らぬ壑あるを名づけて歸墟といふとかや、

八紘九野の水盡し空に溢るゝ天の河…………

と書起してある浦島の前曲の如きは、實に堂々たる大文字であります。此の一段

は故杵屋勘五郎と其の兄の今の寒玉との二人の手に曲がつきました。作曲者にはちと荷が勝ち過ぎたとでもいひませうか、文辭が雄大に過ぎたとでもいひませうか、恐らくは三味線だけの伴奏では、あの大袈裟な景を聽く者に想ひ起させることが困難なのでありませうが、聞く時に讀んだ時程の刺戟を感じないかと思ひます。さうして聽く者は終りの方の舟唄、

雨よ降れ〳〵風なら吹くな、うちのおやぢは舟乘りぢや。

風が物いや言づてしよもの、風は諸國を吹廻る。

を待焦れ、こゝへ來て始めてほつとすると申します。これには從來の長唄を聽いた習慣性が支配するといふこともありませうが、他にもう一つの原因があると思ひます。すなはち語り物や謠ひ物を聽いて容易に理解し得るやうに文句を綴るといふことが必要條件の一つなのでありますのに、それが少々缺けてゐるのであります。元來馬子唄や舟唄又は木遣などの類は其の曲全體を和らげて、きく者にひどく好感を與へるものであります。これによつて古來江戸長唄の文句が、隨分

砕けたものであつて、其の中には大抵俗謠類の挿まれてゐる理由は氷解し得られるであらうと思ひます。

凡そ曲は歌が出來た後に附けるものであるが、それが出來上つてから後は歌の意味なんかはどうでもよいとして、其の曲節だけを喜んできく場合が少くないのであります。此の歌と曲との關係に就いて委しく述べることや、將來の邦樂はどう變つて行くべきか、又江戸長唄が其の場合に如何なる地位に立つべきか等は、一切他日の問題といふことに致します。しかし、新邦樂の大成には江戸長唄は一般民謠と共に極めて重い要素として參加するであらうといふことだけは述べて置きたい。近世日本樂のあらゆるフシの寶庫である義太夫節も當然それには參加すべく、其の參加の模樣は必ずしも同一でないと思ふが、兎にも角にも地方民謠と義太夫と江戸長唄とは其の場合の最も有力者であることには、何人も異論をさしはさまないことでございませう。

一三　異本道成寺繪詞

——日高川雙紙——

（昭和四年六月稿）

私は先年、紀州道成寺に傳つてゐる同寺の緣起は、日高川雙紙一名賢學雙紙から出たことを說いた。さうして其の雙紙の起首に缺文のあるを遺憾に思ひながら、昭和三年刊行の拙著「日本演劇の研究第二集」の道成寺藝術の展開中に、本文の遺存するもの全部を紹介した。これは續群書類從の中にも收めてあるが、謄寫原本が餘程劣惡であつたと見えて、驚くべき程誤謬に富んでゐて、やはり起首が缺けてゐる。其の後搜索の手を伸して藤井乙男博士の許に奈良繪本の「日高川」と題したものがあると傳聞し、てつきりそれに相違あるまいと思つて、拜借して見ると、まさに賢學雙紙であつた。驚喜して直に謄寫し、同博士の許を得てこゝに日高川の全文

を紹介する。

ひたか川

すみなれし三井のふるでらたちいでゝ、やがてもすそをしぼりつつ、大津やあはづうちすぎて、せたのながはししのはらや、ゆけばほどなくかがみ山、こよひはこゝにたびねして、あさたちくればうねののに、たづなきわたるけしき、まことにいにしへの心あらん人のたびのそら、いかばかりぞとおもひやられて、

繪　笈を負ひて修行者の行くところ

いにしへの人もかくこそながめけん
　ところがらなるとりのなくねに。

とくちずさみつゝすぎゆくほどに、こゝかしこにてさと人には、めいしよきうせきたづねゆくほどに、どこの山いさや川我ながらさしもなにゆへかと、かことがましくて、その夜はをのと、いふところにやどりして、

いとひしなさぞなたびねのかりまくら

たゞふきかはせとこの山かぜ。

すぎゆくまゝに、みののなかやまふわのせき、をはりのくにゝきこえつるあつたのみやへさんけいし、なにになるみのはまづたひ、おもはぬうらになくちどりのこゑきくにつけても、あだなるゆめの一ふしも、ちぎりをかまし(本ノマヽ)あさましさに、つましあれば、はる〴〵きぬるとおもふもしらざりしうき世のむくひのほど、おもひつゞけてゆくほどに、なにのみきゝし、はしもとへこそつきにけり。　ある屋にたちより、これはあふみのくに三井でらのほうしにて候が、とうごくあんぎやの心ざしありておもひたちて候。　一夜のやどといひければ、なさけありし人にて、やどをぞかしたまふ。　さてあるじにあひ、このところはなにと申すぞととひければ、はしもとと申候。　いますこしへだてゝ、はまなのはしと巾とところこそ、ゆふしほにさゝれてのぼるすてをぶねとながめ侍しあとにて候へと申せば、けんがくきこしめし、そのところのゆふじよとやらん、このうたをきて(本ノマヽ)さゝれてのあらそひは

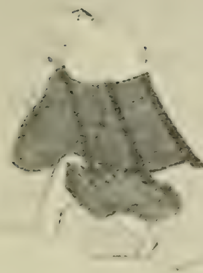
んべりけると申つたへて候。やさしき御事にて候。その人々のゆくすゑ、いまものこり候やらんととひければ、いまも此ところのちやうじやにて候。ことに一ふし(本ノマヽ)もくちおしく侍るなり。此ところすぎにし十とせあまりのことにや、しかるべきかんたちめのみやこよりくだりはんべるが、此ちやうじやになさけふかくて、御文をかよはしなどありしほどに、しのび〳〵のいろにいで、わすれがたみいできさせたまふとて、つねは物おもひのみにてはんべるとかたりけり。

繪　修行者が烏帽子をつけた人と相對するところ細字にて次の如く記す。

小書　これは三井でらほうしにて候。はじめてしゆぎやうにいでて候。

さるほどにむねさはぎ、あ[磨損]とおもひ侍りし夢のかたちも心うくて、やがてそのあね本ノマヽ)たちよりみはんべるに、しばかきのもとにて見るに、是ならんとしるくみえけり。

いかなるむくひにかとつく〴〵[あん]じわづらひ、おもひけるやうこそかなしけれ。はうべんのせつしやうは、ぼさつのまんぎやうにもこへはんべるなり。しば



修行者

しかの人をがいしてごしやうぼだいをふかくとぶらはんと、じやけんの心ついて、いかに申し候、みやこよりくだるしゆぎやうじやにて候が、人の御かたにて候御ことづて候とて、する／＼とはしりより、とりてひきおろし、さしころしにげうせにけり。

絵　修行者、乳母の手より子どもを取りてつるぎもて刺すところ

絵　母にいだかれてゐる子に典薬(女)が薬を與へるところ外に、女二人、細字にて

小書　これはゆめかうつゝか。

さても此ひめぎみ、つゆのいのちきえやらでとて、いたはりはんべるおりふし、て



子をいだく女

んやくとやらんいふ人の、みやこよりくだりあづかり申ていろ〳〵にいたはり候ほどに、とりなをしはんべりけり。はやめのとのよろこびなか〳〵申もをろかなり。かの人々をよろこびのあそびは、いにしへいまにたぐひなくこそおぼえけれ。

繪小書　喜びの酒宴のところ
ことばもをよばぬられしさにてこそ候へ。あら〳〵めでたや。

此ひめぎみ十六になりはんべるに、ちゝの御ゆくゑもこひしくなどといふにつけて、さらばみやこへのぼりたまふいにしへ人のようすがをたづねたまへとて、し

かるべきたよりにつけて、みやこへぞのぼられける。

繪　姫手輿にかゝれ行く、弓薙刀もつ從者めのと小者等數人。

小書　さきをふらぬやうに御かき候へ。

うれしや京がちかくなるげな。

みやこにて、いつくしきまれ人見つけ、ゐなかのさがなものにいとまくれん。

さてもきやうへつきて、御よすがにたづね、心しづかにすみはんべりたまふに、三月十日あまりのころ、きよみづへまいり、つやしはんべるに、十七日の月かげ、をとは山のこずゑに、ほの〲とにほひいで、おりしもすみわたりたるよのけしき、たぐひなくながめいりたるに、おなじくつやの人のなかに、いかなる人にやありけん、とりあへずたゝうがみにかきて、

おとなしのたきだにあるを、おとこは山
ながれいでぬるそでとだにみよ。

これも、さすがうちをきがたくして、

かことゝもなにかたのまん山みづの

あさくやをとにたてんとおもひし。

此返しをみるにも、いまはひたすらにこそおもひはんべりけり。

繪　清水寺の景。
同じく堂内通夜の人の體。姫、姫の下仕、若き男二人、外に巡禮者、僧侶など。

夜もすがら、とかくいひかたらひ、あけゆけば、ひめぎみのかへるかたをしらんとて、つれたりしわらはをつけて、ともなる人にすみかをたづねさせければ、

繪　わらは、下女にもの問ふところ。
小書　なふ〳〵物申候はん。いづくよりの御物まいりぞや。又御やどはいづくのほどにて候やらん。
なに事にてさふらうぞや。御すみかはしか〳〵のところにて候。身づからがなをば、まつかぜと申て、とはずがたりのにく物とも申候。はゝは女にて、ちゝはおとこにて候。としは四十九になり候。としくれ恭にもなり候はゞ五十とや人の申候はんずらんきやう
□なる御人かな〳〵。

さるほどに、けんがくは人しれずしのぶにむすぶつゆのいのちもいかゞと思ひて、此まつかぜをたよりとして、たび〳〵文をかきつかはし侍れば、もしほぐさつもる

しるしにや、かずならぬなかにも、よるべありて、いかならん水のそこまでもちぎりはんべらんとぞおほせける。あるとき、ゆふ月夜かげまつほど、えだをかはし、すぎにしかたの事をかたりたまふうちに、身づから十よりうちの事やらん、ふしぎの事はんべりつる。めのといだきて、まがきの花あひせしに、しゆぎやうじやのやうなる物、みづからをがいして、にげけるとやらん人々申はんべるなり。ゆめのやうにて、さだかにもおぼえずとかたりたまふ。さてはうたがふところなし。とにかくにのがれざりけるちぎりなり。かつうはふしぎ又はあさましくて、ありしゆめの事ども、しか〳〵とかたりける。女もいとゞちぎりふかかりとぞおもひける。のちにおもひあはすれば、よしなきゆめうたがひ、はる〳〵とくだりし事、かやうにはんべるらんしゆくせなりと、をろかにおぼえず、みし夜のゆめどもあんじわづらひはんべりけり。

繪　賢學と姫としめやかに物語るところ。

小書　われもちにすまばふかくとこそのみはんべり。
てんにあらば、かくとこそおもひ、おもひはんべりけれ。

けんがくつく〲とあんじはんべるに、されば此たびぼんなうのきづなをきらずんば、又いつの世にかしゆつりしやうじのゑんともなりなむとおもひきり、ひめぎみに申けるは、さても此よの中はゆめのうちのまぼろし、きのふはあれど、けふはなし。ゑだをならぶるいもせも、をくれさきだゝん事、まことにもとのしづくのすゑのつゆ、あだなるよの中にてはんべるなり。　きみもまことのみちにいりたまふべし。このほうしもいまゝでうかりし一ふしのちぎりのすゑを思かへし、ふかき山いかなるこのもと、いはのかげにもひきこもり、のちのよのつとめを申べし。　心よはくしてはかなふまじと、いとま申て、うちいでんとしければ、あさましや、かやうになるまじきちぎりにや、あさからずおもひまゐらせ候。　いかならんのゝすゑ、山のおく、ひの中、水のそこまでも、をくれさきだゝじと、ちぎりまゐらせ候つるかひもなく、はやくもすてたまふものかなと、ふししづみ、なきかなしみたまふ事かぎりなし。　さるほどに、そのまゝおきもせず、うちぬるよひのゆめにもわかれし人におくれじと、のをわけ、山をこへ、したひゆくとおぼえはんべるなり。　かやうにあくがるゝたま

しゐ、いづくとかまどひゆくらんと、身ながらゆくゑなしとなげかれて、たゞわれにもあらでなげきふしぬ。

繪　賢學、姫に別れようとするところ。

小書　まづ〳〵御はなし候へ〳〵　まことに心にまかせぬはいのちぞや。

けんがくは、ひとみちにおもひなつて、しゆぎやうにいでけるが、まづみくまのにまふでん心ざしいで、きのぢとをりを心しづかにあゆみゆくにも、おもひすてし人のたもとにとりつきてうらむるとおもひ、かへりみれば又ゆめのやうになりはんべるほどに、身ながらもすてかねて、かやうにやとなげきてなちにまふで、たきもとにまいりたきにうたれければ、まぼろしにうらむるおもかげ見えにける。

繪　賢學那智の瀑に打たれてゐるところ、姫岸に立つて怨む體。

七日たきにうたれて、しゆくぐわんはたしてげかうするに、なをかげのやうにはなれず、ひたさらうつゝのやうにおぼえゆくほどに、きのくにひだかがはらといふところにつきにける。　ふなわたしはんべるにうちのりてゆけば、あとよりさだかにかの人のこゑとして、なさけなし、われをもふねにのせたまへ。　などうちすてたま

ふぞや。のくれ山くれこれまでまいりたる心をば、いかばかりの事とおぼしめして、かやうになさけなくしたまふぞや。ふな人も心してのせ給へ。かくなみにいりても、などかおくれん。みづのあはのうたかた人にあはではきえじ。

繪　姫、水に躍入つて、舟を追ふところ。

小書　こゝなる女ばうのおよぐ、きどく也。みづのうへを、ふねにをひつかんと見え候ぞや。あらこはや〳〵。をともせで、たゞ御こぎ候へ。身はけんがくにては候はぬと申候へ〳〵。

いづくまで御いそぎ候や。いまはいかににげさせたまふとも、にがしまゐらせ候まじきなり。いとけなきいにしへ、なにのひが事もなきに、がいしたまひしうらみはいかに。すてたまひ候はゞ、そのまゝすてたまひ候へかし。がいしたまふ心こそのがれぬちぎりとはおぼさずや。をろかの心や。ふな人もこがばこげ、おんばうもにげばにげよ、やり申まじ。あらうれしや〳〵。

繪　姫、額に角を立てて舟を追ふところ。

なにのいんぐわに、かゝる人をふねにのせけるぞや。なむ大しやうふどうみやう

わう、三じよごんげんたすけたまへや〳〵。　けんがくもふな人も、きもたましゐも身にそはず、なにとかして舟をきしへつけ、けんがくふねよりとびあがり、あしにまかせてにげゆけば、いまはさながら大じやとなりて、のがすまじひといふこゑは、百千のいかづちのなるかときこえて、にげんとすれど、一ところにあるやうにて、さらさらにげゑず、こはいかになりぬるぞや、たゞたすけたまへや〳〵といふよりほかのこゑもなし。　はじめのほどは三じよごんげん、ごんがらどうじなどゝとなへけるが、のちはかなしや〳〵とばかりにてをどるやうにぞにげにける。

繪　賢學岸に上つて遁げ、大蛇之を追ふ所。

小書　なむ三ぼうかなしや〳〵〳〵。

あまりのかなしさに、てらのありけるに人わけ入みれば、つきがねおろしをきたるしたへ入かくれけれど、いかにしてしりけん、かねをまきて、いかに御ばう御にげ候ものも、さしもおとなしのたきとやつゐにながれいでんとある事、おもひよせしことのは、おもひいでたまはずや。

繪　大蛇撞鐘を取捲いてゐるところ。

かねはみぢんにくだけて、けんがくをとりて、やがて、ひたか川のふかきに入にけり。

繪　大蛇賢學を抱いて行くところ。

此事かくれなかりしかば、けんがくがでしども、あとにたづねゆきて、あとをとぶらうべきためにきやうをよみ、ねんぶつを中事かぎりなし。

繪　諸僧讀經のところ。

小書　たどらんざやう□したるわざぞや。（終）

卽ち一とせ都から東の方へ旅行した上達部の一人が、遠江なる橋本の宿にて、遊女と馴れ睦んだことがあり、後都に於て、剃髮染衣の身となつたが、或夜の夢に、かの遊女の腹に設けたわが女が、自分の修行の妨をなす由を見て、坐ろに東の方が覺束なく思はれ、前の年よりは五とせ六とせ後に尋ね下つたが、夢に見た通りなるに驚き、方便の殺生は菩薩の萬行に勝るとて、乳母の手より其の女を引きおろし、刺殺して遁げるのである。折よく都から下つた典藥の力で、女は辛くも一命を取り止めた。それより十年を經て都に上り、その修行者卽ち賢學と淸水寺で邂逅して、深き

契をこめ、賢學が悔過の念に堪へかねて熊野參詣に行つた跡を追ふ。さうして日高川で大蛇となり、撞鐘の中にかくれた賢學をとり殺して日高川の淵に伴ひ入るといふ筋である。「餘りの悲しさに寺のありけるに人わけ入みれば」とあるだけで、まだ道成寺だとは見えてゐない。今國寶になつてゐる道成寺緣起なるものは、古い頃からの說話で、それに朝鮮の義湘や元曉の華嚴經將來の說話もて潤色したものであることは、曩に「道成寺藝術の展開」の中に詳述したが、直接には此の日高川雙紙に導かれたもので、日高川雙紙は道成寺緣起に對して最も力ある先行者であつたのである。

藤井博士の藏本には、惜しいことに二三の誤記があつて意の通じない箇處もある。此の雙紙の古體は疑も無く卷物であらうが、どこぞより其の古繪卷の現れ出づることを切望する。

第二 演 劇 篇

一　能狂言の説明

これは雑誌「歌舞伎」に歌舞伎劇前史と題して連載したものである。演劇史としての記述ならば、もつともつと斯道の人の類別に則つて、演出上より見て説くべきである。これはテキストだけ見る人の一助になるやうにとだけ心掛けたので、面や服飾に關しても説いてゐないし、笑を構成する原理といつたことにも深く解明を試みてない。周匝と深酷とは總べて後年に出す日本演劇史に讓つてある。

1　はしがき

我が日本演劇は、其の莊嚴味に於て、典雅や均齊の點に於ては、到底希臘劇との比較に堪へ得ないが、其の進化の獨自なる點に於ては、決して彼に劣るものでない。我が一般文藝に於ての如く、劇に於ても亞細亞大陸文化特に支那文化の影響を被つたが、支那が劇の國でなかつただけに、此の方面では手を引かれたことは少い。舞踊本位の默劇を含む舞樂だけには、彼から輸入したものが遠い〳〵過去に於て

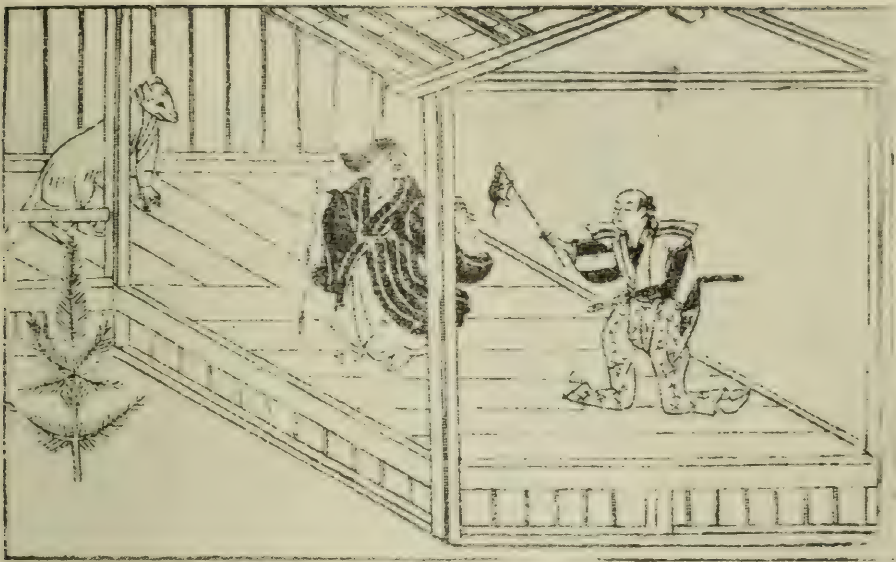
あつた。けれども、默劇が樂劇に、また科白劇に進むに就いては、彼から何の導きをも受けなかつた。ひとり支那からばかりでなく、他のどの國からも教導の手は延べられずに、近く明治の初年迄、獨自で拓いた途を進んで來た。

我が日本演劇史の起點を阿國歌舞伎の發生に置く人がある。演劇を歌舞伎劇の意に狹めて考へれば、勿論それで差支ないことであるが、其の歌舞伎劇の大成には、遠く上代からの歌舞、古猿樂や、延年舞曲や、降つては田樂劇や能樂劇・能狂言劇、傍系ながら幸若舞曲、說經節の木偶劇等が規範を垂れたものであり、並行藝としては淨瑠璃の木偶劇が仕組や演伎術に關して、少からぬ帮助を與へたものであつた。近代文藝として取扱ふべきは、固より元祿時代に入つてからの歌舞伎劇からであらうが、我が劇が獨自に展開したものだけに、歌舞伎劇以前の進化狀態の研究も忽諸には附し難く、これが歌舞伎劇前史に筆を着けた所以である。前史としては當然上古歌舞から能狂言劇や幸若舞曲あたり迄を取扱ふべきであるが、特に重要な

ものは、能樂劇と能狂言劇と幸若舞曲との三つで、これが元祿時代に一先づ大成された歌舞伎劇の源泉をなす三大湖沼であつた。こゝには其の湖沼生成の原因や、それへ流れ込んだ細河に沿うて水源地に遡ることは避けて、單に其の湖沼觀察と、此の湖沼から次の歌舞伎劇と呼ぶ一大湖海へ流れ行く河に就いての觀察だけを略述しようと思ふ。

2 能狂言の意義

能樂は大和平野に產れた民間藝で、諸大寺の保護の下に生育した猿樂である。それが觀世觀阿彌と其の子世阿彌とによつて大成されたのである。世阿彌が十二歲の時、將軍足利義滿に寵愛されて、父は同朋の列に加へられた。これが、武家の保護を受けた抑であつた。藤原公忠は之を聞いて、猿樂なんどは乞食の所行である。將軍が其の子どもを寵愛して、席を同じうして、器の請渡をなすとは何事だ。全く欣奇といふのであらうが、感心出來ない話だと記した(後愚昧記)彼等は河原者



釣狐

と同一に見られてゐたのである。世阿彌が天與の大藝才は、こんな批難の聲を絶滅させて、能は遂に幕府の式樂の如くになり、室町末の亂離、百事弛廢の時代には公卿連中に翫ばれ、次いで豐太閤も酷愛し、徳川幕府に至つては、式樂に用ひて、其の五流の家元には祿を與へて手厚い保護を加へたことは、室町幕府以上であつた。其の結果は能師も狂言師も、三絃樂による踊を卑野な俗舞だと輕侮し、歌舞伎役者などには言葉を交へても身の汚れになると考へてゐた。狂言師は能師よりは輕く取扱はれたが、それでも歌舞伎役者と交つて其の藝を傳へでもすれば忽ち問題となつて仲間の者から絶交されるの

であつた。これが明治に入つても相當に守られて、狂言の一派たる鷺流の服部彦七は九代目團十郎に風流を教へたといふので、遂に能舞臺へ上ることを禁ぜられたことがある。けれども德川幕府の瓦解と共に、能樂や能狂言は解放されたわけで、明治の十幾年といふ頃からは、能からは鉢の木・望月・土蜘蛛・茨木・紅葉狩の類が續續歌舞伎に取入れられ、狂言からは新十八番の一と稱へられた釣狐を始として、釣女・瓜盗人・二人袴・素襖落・武惡・墨塗・花子等、秘曲扱にされたものが些少の歌舞伎化の下に何の遠慮もなく演じ出された。さうしてそれ等は何れも歡迎されたが、それは餘りに技巧的に馳せた、複雜な歌舞伎劇から目を轉じて、素撲ではあるが、短時間の中に身振や場面の可笑味、言葉や性格の可笑味にまで觸れしめる、纏つたものを見得るが爲であつた。

かう說いて來れば、歌舞伎劇によつて得る感傷氣分を轉換する上に大効のある狂言が、永く貴族の專有であつたことを遺憾に思ふ人もあるであらうが、法令は如何に嚴密であつても、其の裏を潜る者の絕えないが如く、能も狂言も、大びらに外題

から演伎迄を同一にしない限りは默許されたので、作者は之を歌舞伎風に化して挿入することに拔目は無かつたのである。彼の山姥物や道成寺物にしても、石橋物や隅田川物にしても、皆狂言よりはやかましい能樂から生れたものである。まして能よりも輕く扱はれた狂言が、淨瑠璃や歌舞伎に取入れられるのに、巧妙に行ふ限りは何の支障も無かつた筈である。殊に歌舞伎劇の黎明時代には歌舞が重んぜられて、それは狂言の小舞と稱するものから多く出た。女太夫だけは能がかりで行つたが、男優は狂言風の陽氣な輕い物を多く演じた。當初歌舞伎狂言と稱したのでも知られようが、歌舞伎は全く能の狂言の系統に立つものであつた。けれども歌舞伎劇前史としては先づ能樂から說き起すべきであるが、能樂に關しては諸家の研究が發表されてゐることであれば、こゝには狂言から始めることにする。

狂言はもと、支那に於て狂夫の言又は理に戾る言の意に用ひた語である。我が國に弘まつたのは、嵯峨天皇の御代に白樂天の文集が渡來して、其の香山寺白氏洛

中集記の中に

願以今生世俗文字之業、狂言綺語之誤、飜爲當來二世讃佛乘之因、轉法輪之緣。

とあるのから出たものと思ふ。平安朝中季以降の道俗の文に、此の語が散見するが、此の語の流布には、此の一節が朗詠の句として用ひられたことが與つてゐると思ふ。當初は必ず原意に使用されたであらうが、後には地口や洒落を交へて、面白く且つ可笑しい言立をすることを、かう呼ぶに至つた。次いでそれが或出來事を模して行動するに至つて、低級ながらも劇の形を爲すに到つた。能狂言なるものは、此の劇形成に達してからの稱呼で、能樂が大成された時代には、これも立派に成立してゐた。

狂言師は能師よりも待遇は菲薄で、樂屋に於ても揚幕に近い、最も端近な部屋をあてがはれたものである。さうして能一番の中に加つて登場することはあつても、從者・船頭・里人のやうな端役を勤めるに過ぎず、どうかすれば能のシテ(主人公)の

出に先立つて口明をなし、時々はワキ(シテの對手)に向つて、名所の由來を語り、中入(シテが服裝改めの爲一寸樂屋に入ること)の間には、稍長時間を使用して、能に關係した社寺の緣起や昔語をするが、これも重く視られた爲でなく、後シテが出る迄、舞臺にアナを明けない爲の手段として語らしめられるのである。序にいふが、此の能一番の中に加はつて演ずるのを間狂言といふ。

狂言は又能と能との間に入つて、能五番に狂言四番といふやうに組合せられるのが、古くからの慣例であつた。さうしてこれには、能に何の關係もない獨立したもので、時には發端と展開と結尾とを有するものが演ぜられた。我等が普通狂言と呼ぶのは、此の一類を指すのであつて、價値は多くこれの上に存し、歌舞伎先行藝として尊重すべき狂言もこれに限られてゐるのである。

3　能狂言の詩材

狂言に出る人物は低能にして貧しい大名である。破戒無慚の貪慾僧である。非力無驗の山伏である。すり盜人である。訴訟人である。下尅上の冠者である。强慾の目代である。弓馬の術に拙い武士であり、秀句好であり、不具者であり、儀禮を辨へない低能者であり、醜婦であり、鬼であり、雷であり、神でありする。よつて之を演出上より分類した類別法とは離れて、大名物・出家山伏物・すり・すつぱ盜人物・低能者物・不具者物・醜婦物・神佛鬼畜精靈物・唐人物の八に分けて說明する。

イ　大名物

能や狂言は總じて將軍以下大小名の觀て樂しむものであつた。然るに狂言に出て來る大名は揃ひに揃つた馬鹿ものばかりで、いつも使用人の太郎冠者にしてやられるのである。諸大名に取つては、自分自身が侮辱されるやうな作意のものであつた。それを見て當然憤るべき筈の大名連が、どうしてそれに娛樂を感じたことであらう。狂言の大名物に關しては、これが第一に起らなければならぬ疑問

である。此の問題は、幽玄な深沈味に富む調べにつれて、古雅な典麗な舞を悠々と演じた能の優人が、足取り徐かに舞臺を去つて、觀衆のすべてが、何となく感傷的氣分になつてゐる。そこへ腰桶一つが持出されて、橋懸りから、能に幾倍する速さで一二の優人が出て來る、其の素襖烏帽子に小さ刀をさしてゐるのが大名、半上下に腰帶姿が冠者である。どちらの一人が口を開いても、其の調子外れの高い頓狂聲が先づ滿場の笑を呼ぶ。さうして「太郎冠者ゐるか」「お前に」「念なう早かつた、汝呼び出すは」と、さつさと運ぶ其の早さも亦笑を持續させる。さうして腰桶一つが樽にもなれば、柿の木にもなり、烏帽子が昆布にもなれば雁にもなる。又扇が銚子にもなれば盃にもなるといふ簡易さ、それが既に滑稽的でといふやうな説明を下して見たくなるでもあらうが、必ずや何人も此の説明には滿足しかねるであらうか。うした場面は、狂言全體に見出される光景であり、行き方でありして、何も大名物にのみ限られたことではない。又「大名の三代目」といふ諺によつて、當時大名には眞に魯鈍な者が多くて、それで自ら譏られても氣附かずに喜んで見てゐたことであ

らうと、輕く取扱はうとする者もあらう。いや、さう說いた者もあるが、大名にさう馬鹿者が多くては、二年三年の短時日にしても社會の秩序が保たれる筈のものでない。さうして諸種の記錄はそんな事實を示してゐないのである。他には之を快活な好笑な國民性の上から說明しようとする者もあるが、我が國民は如何に好笑でも、自己飜弄を娛樂にする程の快活さや好笑さを有してゐたとは考へられないのである。私はどうしても以上の他に原因が潛んでゐなければならないと思ふ。先づ當時の大名なり殿なりに就いて、其の正體を檢べて見よう。

大名とは元來名田(私有地)を多く有する者を指して呼んだ名で、藤原明衡の新猿樂記に出てゐるのが最も古い。これが鎌倉時代に入つては、名田でなくても領地の大なるものを大名と呼び、小なる者を小名と呼ぶことになつた。さうして南北朝から室町時代の中世にかけては、諸國の守護をも大名と呼び、莊園(貴族の私有地)の地頭迄も大名と呼ぶことになつた。法師でも領地を多く有する者は之を法師

大名と稱へた。

大化の改新以來は、土地公有制度であつたが、奈良朝より私有をも認めることになり、平安朝の中世からは莊園が諸國に起つた。さうして其の莊園の所有主は公家の人達であつても、之を經營する者は土着の有力者又は武士であつた。此の經營者は所有主から見れば下司であつたが、農民からいへば殿樣であつた。それがすなはち地頭である。地頭は莊園ばかりでなく、もつと小さい鄕や保にもあつた。これが實に姦曲を平氣で行つたもので、文覺上人の歌に、

世の中に地頭盜人なかりせば、人の心はのどけからまし。

とあるが如き厄介な者であつた。

諸國の守護は追捕使と同じで、土地人民を守護して、奸盜を防ぐのが其の任であつたが、自分で行かずに、代りの者を任地へ遣つて、一切の事を處理させる者が多かつた。それが守護代又は代官であつた。其の守護や守護代は後に世襲となり、地頭も承久以後は多く世襲であつた。さうしていつしか其の管理する土地は彼等

の世襲領地の如くになつて、これ等が皆大名と呼ばれることになつたのである。地頭にも代官があつて、それがやはり代官又は眼代と呼ばれ、他に國司の代官に目代と呼ばれる者もあつて、此等は皆大名と呼ばれ、殿と呼ばれたのであつた。さうして此等の中には、隨分如何はしい者が居つたのである。

莊園鄕保の數は、全國を通じたら恐らく幾萬にも達したであらう。それに所有主があり、代官があり、地頭があり、眼代がありしたので、其の關係は實に紛雜を極めたものであつた。それが建武の中興に一層紛雜を增大し、足利將軍の世に及んでは、ます〳〵亂離に流れた結果、腕によつて勝手に領地の切取をすることになつた。さ茲に名だけは大名で、其の實力の伴はない、憐むべき弱者大名が所在にあつた。さうして領地の大半は奪ひ去られても、衒氣と横柄とだけは失はなかつた者が多く、狂言の大名や殿は實に此の手合であつた。

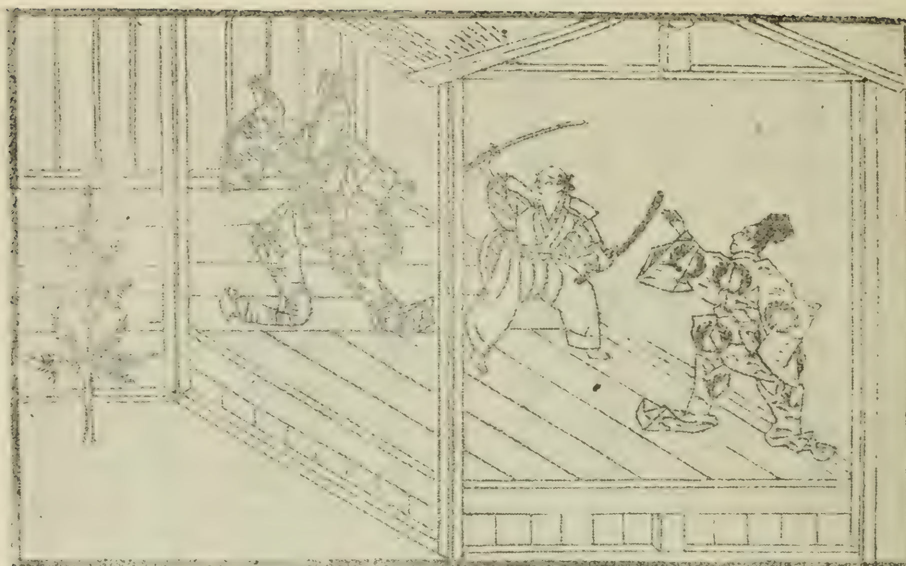
罷出でたるは隱れもない大名、かやうに過は申せども、連るゝ下人な唯一人。一人の下人めが、某に暇をも乞はず何方へやら下りそへてござる。

と心細いことをいふのが「二千石」の大名である。新しく奉公を望んで來た者に誇らうとして、開えよがしに、

侍ども矢の根をみがけ、奥州から牽かせた百匹の馬に湯洗をせい。鞠のかかりへ水を打たせて置け。

とたつた一人の冠者に命ずるのが「鼻取相撲」の大名である。一つしかない烏帽子の剝げたのを修繕にやつて、正月元旦の出仕に間に合ふの合はぬのと騒ぐのが「烏帽子折」の大名である。此等の大名は指笑の料を提供するだけで、更に罪を構成してゐないのであるが、「雁大名」のそれに至つては、太郎冠者と計つて店頭から雁のかつぱらひを敢行するのである。

彼の「大名の三代目」といふ諺は、恐らく此の時代に成立したのであらう。無學無趣味で、內では太郎冠者に飜弄され、外では太郎冠者に離れると、忽ち失敗が續出するといつた大名が多く狂言に出る。和歌一首を記憶し得ず、結びの「萩の花かな」の句につかへて、「太郎冠者が向臑に茱が鼻の先」といつて、花園の主人に追出される「萩



二人大名（狂言記）

大名、舟かな舟かの爭に證歌を出しかねて冠者に負けてしまふ「舟ふな」の大名。かうした手合がいくらも出る。　最も手酷いのは「二人大名」であらうか。　左京右京の大名二人がお伴無しで北野參りに出て、下京の町人を捉へて太刀持にした。それ迄はよいが、持方をやかましくいふので、町人が腹を立てて、太刀を拔いて嚇すと、大名二人は地に蹲つてわび、雞に似てゐるとて、其の眞似をさせられ、烏帽子を脫がせられては赤禿頭が起上り小法師に似てゐるとて、小歌の

京に〳〵はやる起上り小法師、よい殿見れば、
殿さへ見れば、やよは合點かつひころぶ

に合せて頭を振らせられ「此の太刀がほしいか」

「おんでも無いこと」「ほしくば夜さりの星を取れ」で、太刀の持逃をされるといふ始末、太郎冠者どころか、町人に迄翫ばされるのである。「昆布賣」はもう一層之を誇張させたもの、「禁野」も此の類で、大名が里の百姓に刀上下小袖迄を奪取られて丸裸にされてしまふのである。　總じて闇愚魯蒙と迄は行かなくても、貧で、放心で、非力で、我儘で、其の爲に下層の者に弄ばれるのである。

此の下剋上は實に當代の世態であつた。　將軍は管領に、管領は其の被官に實力を奪はれてゐた時代である。　守護地頭よりも代官に實權があり、本寺は末寺に、師家は弟子に勢力を取去られた時代、下層民が上層階級に反抗心を抱いて、それが發しては一揆となつて、德政令を布かしめた時代であり、甚しきは土民連が國內に武士を置かぬと奮起して、とう〳〵豪雄の赤松氏をも打破つた時代である。　此の時代に於て冠者や町人百姓に飜弄されるといふ筋の大名物の演ぜられるのに、何の不可思議も無く、これが當代の世相を反映してゐるものと考へなければならぬのである。　けれども世相反映が必ずしも大名に娛樂を感ぜしむべき理由はなく、こ

れが爲に先の疑問が解決されるわけのものでない。此の解決はもつと〳〵大名物を說明した末に讓る。

幾千の大名が悉く下人に尅されたので無かつたが如く、狂言の大名のすべてが冠者や町人に弄ばれるのでは無かつた。「入間川」に於て、入間詞の逆用に隨從して、船頭に與へた扇太刀上下小袖を、入間詞で取返す大名は、永々在京して訴訟に勝つだけの者であつた。あかがりを苦情にして、殿を負うて川越をするを肯じない冠者を、殿が負うて渡して、深みで投げて、冠者を濡鼠の姿にした「あかがり」の殿は決して愚でない。又酒にくらひ醉つて道端に寢てゐる冠者に鬼の面を着せて、散々になぶる「ぬけがら」の殿は拔作處でないかなりの惡戲者である。

大名必らずしも愚でないやうに、太郎冠者が必ずしも賢くなく、又强くもない。日頃手柄を述べ立てたが爲に、主にためされて醜を暴露してしまふ「杭か人か」の臆

病冠者もあり、これと同型の「腥物」の冠者は、人の許に返しに行く太刀を、假裝して來た主に奪ひ取られて尻尾を出す。「空腕」は更に／＼一段の巧を弄したもので、此の類の冠者は世襲制度になつてゐた地頭や代官の下に數多仕へてゐたことであらう。勿論大名に劣らない放心者がゐて、買物の名ばかり聞いて、物は知らずに町へ出て、すりにしてやられる「末廣がり」や「栗田口」の冠者のやうながあり、健忘を見事に發揮するものには「糠糊」や「伊文字」の冠者がある。

通觀するに、大名物には遊獵・遊山・物詣・連歌・秀句の如きに日常を送り、かひもない寶比べに身を入れる大名ばかりで、武藝の修練に努めるやうな奇特者は一人も出てゐない。公方以下諸大名連の娯樂に供するには、戰爭物・武勇物は禁物であつたのであらうか。此等の人は賢い大名の出るを喜ばず、太郎冠者に臆病者や健忘性の者の多いのを歡んだのであらうか。否々そんなことがあらうとは思はれない。又狂言は能の間に挾まれて、之を觀る者は必ずしも武家の富裕者のみでは無かつた。室町時代の中世にあつては、勸進能以外に、社寺の祭祀や法會の後にも張行さ

れて、普く諸人に腹を抱へしめたのである。 町人百姓は我等に苛税を課する大名連の弱點を遺憾なく暴露したものとして、笑ふ中にも痛快の情に堪へなかつたであらう。 それにしても諸大名は武家の式樂ともいふべきものの中に演ぜられる狂言の大名物を、果して何と感じて觀てゐたことであらう。並みゐる者の中には、本當に狂言の中に出る者以上の低能者もあつて、成程其の手合は自己が演じ出されてゐるとは氣づかず、大口を開けて哄笑してゐたでもあらうが、他の實力あり思慮ある大名連は、どう思つたことであ



靫猿

らう。私は、彼等は狂言の大名に比して、自己が優越の地位に立つを感じて、極めて得意の態度を以て見物したのであると信ずる。冠者に飜弄される處に、事相の顚倒によつて生ずる笑を味ひ得たにもせよ、それよりもむしろ自己の優越感の下に娯樂となし得たものと考へるのが至當であらうと思ふ。但誇張による笑、例へば「靫猿」の大名は猿曳に猿の皮を貸せと迫り、斷られて果ては刀に手を掛けたが、猿の藝に感じて、物を與へ與へした末に、自分の方で丸裸になる。これも顚倒よりも誇張の上に笑が產み出されたものと考ふべきであらう。此の類も亦尠からずあつて、我等は二千五百二十年の昔に於て、アリストテレスが、

喜劇は人間をまのあたりの人々よりもより惡しく描き、悲劇はよりよき人間を描き出さうとする。

と道破したのに服しなければならぬのである。

かう考へる上に、更に考へなければならぬことは、當時の公卿連の逼迫情態は、大小名中の弱者の地位に立つものの以上であつたにも係らず、何が故に狂言の詩材に

用ひられなかつたかの一事である。當時實力が無くて、家柄位階を誇りとするものは、實に公卿を以て第一とした。自然諷刺劇の材には、絶好のものであつたが、之を露骨に示せば、直ちに嚴罰に處せられるのであつた。應永年中伏見御香宮の樂頭矢田が能を興行した時、公卿嘲笑の狂言を演じたが爲に、きびしい糺明をされたことがあつて、公卿の現實を暴露することは悲慘でもあり、同時に禁物でもあつたのである。何位何納言の堂上家に於て、今なら家從とでも呼ぶべき長門介や阿波介が仕へてゐないにも係らず、珍しい來訪者があると、長門はゐないか、阿波はゐないかと呼んで、見えを飾つたが爲に「幽靈長門」などの諺は生れたと聞く。狂言の「二千石」や「鼻取相撲」の大名なるものは、實は大名でなく、此のお公家様たちを諷したのであつたことを考へなければならぬ。から考へると、大名達が喜んで見た所以がよく知られる。それにしてもアリストテレスの道破したことはやはりあてはまつてゐると思ふ。

ロ　出家・山伏物

花の三月、菊の九月と時を限らず、公方の邸や諸大名の屋敷からは、猿樂の笛鼓の音が洩れ、六月の祇園會の風流の囃子は滿都の士女をひきよせても、勸進能や勸進田樂乃至曲舞が張行せられる毎に、棧敷に見物は滿ち溢れても、由緒ある寺社の堂塔が荒れるに任せてあつたのが、室町幕府の中世である。公家一統の沈淪時代で、武家も其のすべては權勢や威福を恣まゝにはなし得なかつたことは、前に大名物の部に細述した如くであつた。まして下層の者にあつては、家を出でて、斗擻行脚の旅に上る者の多かつたのも理りであつた。一度德政の令が下れば、貸借關係は消滅したとは何といふ不安の世であらう。土一揆は時々起つても、重税の課せられることは止まなかつたのである。かうした亂離頽廢の痛ましい世に、稅は取られず、人夫には徵發されず、ともかくも生命を安全に維ぎ得る者は僧侶であつた。自然到る處に托鉢僧を見たが、硏學と修道とは彼等の爲さうとすることでなく、求

める物は衣食の資であつた。彼等の念頭を往來するものは、布施の多少といふことだけで、一部の經を讀むにも、施主の意を體して追福作善の營みに合ふやうに誦したものは尠い。まして經義に通じて、化導の爲に一席の法談をなし得るものは、百人に一人も得難く、彼等は形だけが法體で、心操は卑俗極まる乞丐者であつた。狂言の「路蓮坊主」のいひぐさを聽け、

これは東國邊に住居致す者でござる。某世の中を味氣なう存じ、かやうの態になつてござる。これより國々修行致さうと存ずる。先づ上方へのぼり、此處彼處を見物致しませう。そろ〳〵參らう。まことに出家程世に樂な者はござらぬ。どれへなりとも行きたい方へ、心任せに參ることでござる。

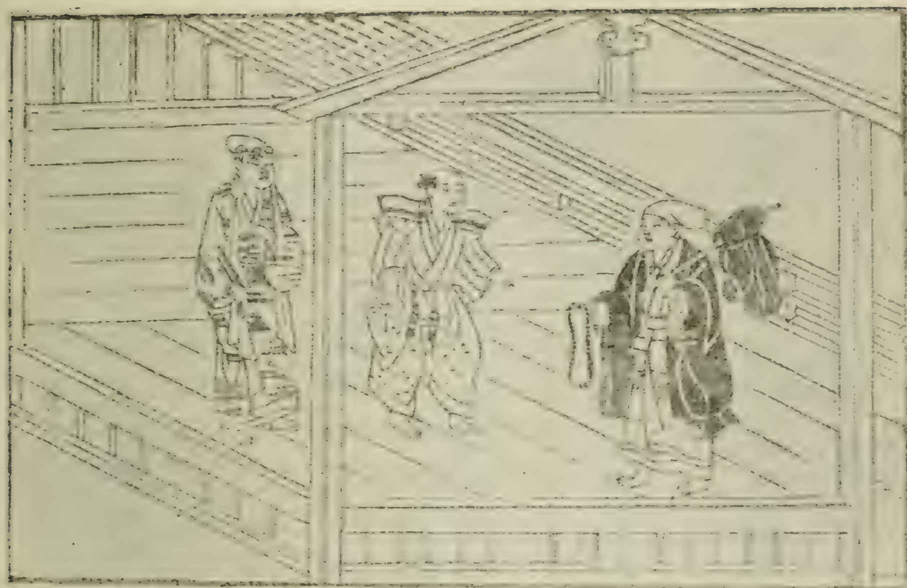
卽ち修業よりは見物や放浪が望みであつたのである。狂言の出家物三十篇は、此等非修非學僧の失敗面を遺憾なく暴露したものである。

見よ「鹿狩」を、又「公事新發意」を。獵師と道連れになつた僧は「山の彼方迄ちと用あ

りて參る惡僧」と名告る通りの惡僧であつた。獵師におどされて、魚を食ふこと、內儀を持つことを白狀させられ、しまひには弓矢まで持たせられる。旦那にならうか、取らうといつて協和が出來た迄はよいが、法問になつて、僧は散々に愚弄されてしまふ。僧は淨土、獵師は禪意で爭ふのだが、其の果てに、僧が鼻を捻ぢられて、けりになるのである。武士には禪が喜ばれて、往生思想もどうやらぐらつき出してゐた世相がよく知られるであらう。これが「鹿狩」で、まだ／＼侮辱されたといふ程でもないが、「公事新發意」に至つては、師の住持が地頭の前で小僧に女犯をすつぱぬかれるのである。此の他「骨皮新發意」「雪打合」は、何れも老僧の女犯、「寢代」に至つては、女の許に忍入つた僧が、寢代つてゐた太郎冠者に、散々に弄ばれて、烏の眞似から狐や川獺の眞似迄させられるのである。師の僧が既にこれである。住持を欺いて、淸水のほとりで、門前の女と出合ひをする「水汲新發意」のあるに何の不思議もないといふべきであらう。況んや「腹立てず」の僧の立腹や「笠の下」の僧の浮かれ出す位は破戒の部には入れられさうもない。

當代の凡僧の如何に無學であつたかは、宿の主人を剃り立ててやつたが、命名が出來ずじまひになる「路蓮坊」これと同型の「比丘貞」や、田植歌をお經節にしてごまかす「小傘」の僧に見るべきである。　後醍醐天皇時代の二條河原の落書に流行物を擧げて、「生頭還俗自由出家」とあるが、こんな手合なら、朝に頭を圓めて、夕に俗に還るべきである。　沙門の淨い行ひを修める爲でなく、勝手に袈裟衣をつけた自由出家・俄出家が元來世に多かつたのである。　名に負ふ「俄道心」に見るがよい。　出家も面倒になつて還俗した者が、有徳な人の許へ料理人となつて住み込み、又一方には漁夫が後世が心許なさに、頭を圓めて來て、同じ家で落合ひ、俄の客來に業を取りかへて露顯するといふ筋だが、隨分當代にはありふれたことであらう。

更に無學の例は、名高い「宗論」がよく之を語る。　都本國寺の法華僧と、黒谷の淨土僧と會して互に誹謗を事としたが、法問の段になつて法華僧が五十展轉隨喜功德を說くに、芋莖を以てし、淨土僧は一念彌陀佛即滅無量罪を說くに、無量菜を以てし、



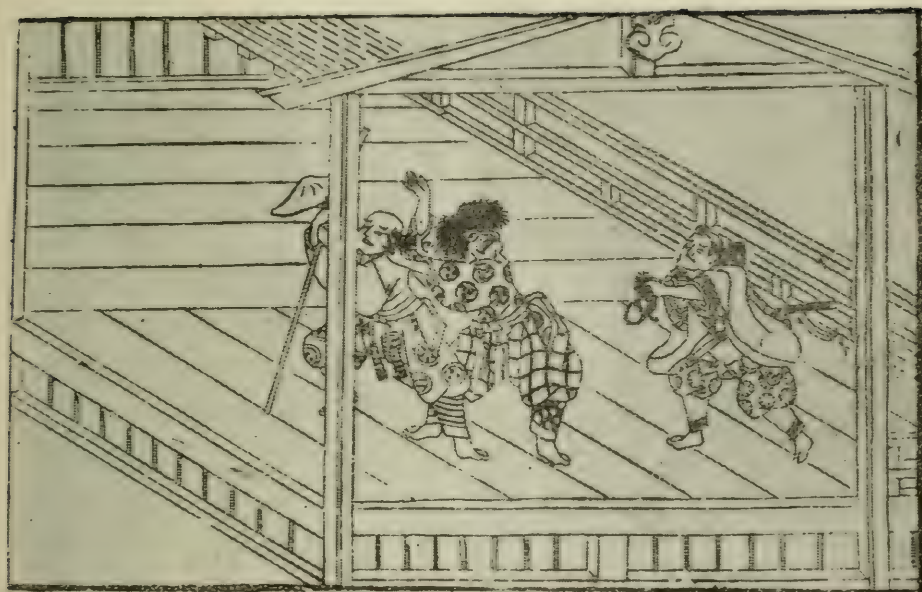
路蓮坊

更に爭つての果は、踊念佛となり、互に稱名と題目を取違へて、はつと氣附くといふ笑劇に過ぎないが、齋や非時にばかりあり附かうとした餓鬼の坊を諷する深意のこもることは、敢て說くにも及ぶまい。但禪僧だけは機智があつて、ぼろを出さない者として「惡坊」に「杜杖」に好意を以て取扱つてあるのは、當代武士間の禪の愛好に迎合したのであらうか。但又禪には比較的に墮落者が少かつた爲であらうか。恐らく物外に逍遙するを能事とした禪僧は、詩文や茶事に日を送つて、漫罵の種を蒔くことが少かつた結果であらうか。

無學に貪慾はつきもので、「布施無」の僧はたつた十匹の布施の催促に智慧袋の底を叩いて飜弄せられ、布施と常齋の二つにありつかうとした「どちはぐれ」の僧は兩方に外れてしまふ。又「泣尼」では法談僧が肝心な處に泣かしむべく尼を雇つて行つたが、とんでもない處で泣き出されて、忌々しさに、布施を山分けにするとかしないとか爭ふ。まことに以て言語道斷の手合のみが狂言には取扱はれた。以上の劣僧どもに比すれば、まだ／＼渡舟の中で秀句に詰まつた「薩摩守」の關東邊の愚僧や、己れの名を忘れた「名取川」の希代坊や不祥坊の方が罪が無い。

狂言の出家物には勿論誇張してある。それにしても大名物が大名に對する以上に、一般僧侶界に取つては、現實暴露の悲哀を味はせられたことは、決して少くはあるまい。山伏物にあつても全く同樣であつたと思ふ。

衣體法具はどんなに異つても、山伏も亦密教の一部を修するもので、無明煩惱の敵を降伏させる筈であつたが、却つて其の犬となる者が多いのが、當代の樣であつ



蟹山伏

た。　僧と同じく修行の心から樣を變へたのでなく、生の不安定から脱出せんが爲に、野に伏し山に伏さうと迄したのであつたが、山林靜寂の地に住むどころか、法具をも滿足に持たぬ手合が多くて、起首の名告りにいふが如く「貝をも持たぬ山伏が道々うそを吹かうよ」で嘯ならよいが、虚言を吹いたのである。「行力さへ叶へば空を飛ぶ鳥も祈り落す」と慢じて見せるが、其の行力が叶はず、國廻りをする伊勢のお師や、凡僧に負けてしまふやうな山伏ばかりが材料に供されてゐる。　此の山伏手合の祈る詞として擧げてあるものが、また隨分嘲弄を盡したものである。

それ山伏といつぱ、山に寢臥をする故に山伏と申す。頭巾と申すは、布切れ少しを眞黑に染め、ひだを取つて戴くによつて頭巾なり。又此の珠數はいらたかではなうて、むさしとしたる珠數玉つなぎ苛高と名づく。かほど尊き山伏が、一祈り祈るなら、などか奇特の無かるべき。ボロオン〱〱〱、いろはにほへと、ボロオン〱〱……橋の下の菖蒲は誰が植ゑた菖蒲ぞ。

である。固より强ひて智能を低めて叙してはあるが、此の程度の山伏が相當にあつた結果、笑劇に作り出されたのであつて、作者の惡戯ばかりとも思はれない。

木に登つて柿を盜む處を發見されて、猿だ犬だ鳶だと散々になぶられ、一々其の眞似をして「鳶なら飛ばうぞ」と責められて、飛んで腰をぬかす「柿山伏」、强力が蟹に挾まれたのを祈り退けてやらうとして、己れも亦耳を挾まれる「蟹山伏」梟の啼き聲をする奇病を退けてやらうとして、自分も奇聲を發する「梟山伏」、氣の毒な程に山伏は嘲笑の標的と見なされてゐる。

唯一の除外例は「腰祈」であらう、山伏が祖父の腰の曲つたのを直さうとして祈るのだが、祈りすぎて背り過ぎ、祈直したら屈み過ぎ、今度は冠者に程加減に抑へさせたが、祈る内に驗があり過ぎて、とう〳〵三人で躍り出すといふのである。「苞山伏」は一層適例であらうか。大峰葛城參詣をすまして下向した山伏が涼風の來る木の下で晝寢をする。そこへ柴刈が來て、これも其處で横になる。侍が來て柴刈の晝飯を平げて、山伏の口の端に飯粒をつけて、これも其處へ横になろ。目をさました柴刈が晝飯の詮議に、山伏が先づ疑はれて、憤懣の餘り例の珍奇な詞で祈る。侍が狂ひ出して罪人はそれと分つたが、柴刈は何のかの仰しやつても、おらが晝飯はよそへずいだといふ。やるまいぞ〳〵でなく、淋しい苦笑に畢る所が面白い。

狂言に出る山伏は、どれも〳〵出羽の羽黒山から出て、大峰葛城を經廻つた者としてある。當時特に羽黒山伏が多く、其の上、東北一流の木強な點が殊に都人士の眼についた爲であらうか。思へば能に出る行脚僧は、實に名もない諸國一見の沙

門でありながら、古名將・好士の幽靈をして頓證菩提の域に入らしめるに反して、狂言に於ては出家と山伏とを全く嘲笑漫罵の材に供してゐる。強ひて顚倒させて其處に笑を呼起さうとしたこともあらうが、末世濁惡と、戰亂の禍害による生の不安と相依つて、俄出家・俄山伏を生んだ結果、かうした笑劇が作り出さるべき種が社會に充ち滿ちてゐたことであらう。それにしても山伏は女關係の不始末を摘抉されなかつたことを、まだ〳〵喜ぶべきであらう。

ハ　すり・すつぱ・盜人物

すりとすつぱとは同一で、狂言の「長光」に、すりが自ら名告つて「かやうに候者は此のあたりのすつぱにてござる……」とも言つてゐる。今のそれのやうに、人の隙を窺つて機敏に懷中物を拔取る者でなく、人をたらし欺いて金品を掠取る者にしてある。すりといふ語は山科言繼卿記にあるといふが、もつと〳〵古くから此の業を爲す惡漢があつたに相違ない。人類が、集團生活をなし市場なるものが設けら

れて物々交換の營まれた雜踏場には、此の輩の潛行してゐたことが想像される。我が國でいへば大和國に市場の起つた頃、山城の賀茂の祭の起つた頃にはそろそろ放心な者が辛い目を見せられたことであらう。文學の上では遙に後れて、狂言に至つて始めて材料に用ひられた。すつぱは甲陽軍艦に間諜又は盜人の意に用ひてあるが、其の語義は明でない。凡そ室町幕府時代の戰亂期に生れた語であるらしく、素破拔といふ語も、すつぱが人の物を拔くやうに、不意に隱事をあばくが爲に成立したのである。

すべて狂言に出る大名は富と明と力とあるべくして無く、出家が學と德とあるべくして無く、山伏に驗があるべきで、さて無いが如く、すりや盜人も慧黠で、目ざした者に遺憾なく狡技を揮つて、甚しい慘害を與へないことにして作つてある。ベルグソンの說く場面の可笑味を構へ出さうとしたものが多く、それも反復やはき違ひに基く處の作が多い。笑つた後に道德感情が許さなくなつて、何となく不快

に感ずるといふことのないのが特色である。狂言に出るすり・すつぱ・盗人の類は前に説いた俄出家や俄山伏と同様、生活の不安を免れようとして墮ちて行つたのであつて、人の隙を覘つて持逃をするといふ程度の輕い犯罪で、現代の新聞紙の上に報導されるやうな、憎むべき心情の所有主の所業としては仕組まれてゐない。惡戯が稍殘酷過ぎたといふ度合のものである。



末廣がり

先づはき違ひが笑の種になるすり・すつぱ物から説き始めよう。末廣がりを扇だと知らない冠者が大名の

命を受けて都へ出たが、買入れに窮して、呼賣にまねて、末廣がり買はうと呼買をする。「罷出でたるは洛中に住居する心も直にない者でござる」と名告るすりが、からかひ半分に古傘を賣りつける。地紙よく、骨磨き、要元締めてと條件にはとも角も合し、戯繪ざつとといふ難條件も、傘で打擲するのが戯柄だと附會せられ、冠者は九千五百匹といふ高値で求める。けれども笑を呼ばうといふ狂言作者は、決して結末に破綻を生ぜしめようとせず、すりをして冠者に、大名の機嫌を直すべき囃子を敎へることにした。其の結果は大名をして浮き立たしめて前代未聞の冠者だと冠者を叱り乍らも「買物には抜かれたが、先づこちへ轉け入つて、鰻の鮨をばえいやつと頬張つて、ようか酒を飲めかし」といはせて、和解に終ることにした。これが祝言に用ひる「末廣がり」である。

「張蛸」は全くこれと同型で、蛸を振舞の高盛に用ひる肴物とは知らず、すつぱに破れ太鼓を張太鼓と附會せられて冠者は歸るが、やはり敎へられて來た囃子物に機嫌を直して大名が「泥鰌の鮨を頬張つて諸白を呑めやれ」といふ仕組で、泥鰌の鮨で

笑はせてゐる。

右の二作は振舞用の買物に於けるはき違ひで、すりからいへば、ほんの惡戯であつた。自然代金の授受は三條の大黑屋でと約束するだけで、實際には演じて見せず、主の大名の損害も朧に燻してあるので、滿座が笑つてすまし得るが、同じ惡戯でも「粟田口」は念入で、結末が破綻に終る。是は買物も宜しく念入りであるべき寶比べ用の太刀で、粟田口鍛冶の打つたものといふのであつた。例の粗忽な冠者が呼買をすると「洛中に住居するすり」と名告る惡がしこい奴が、自身を粟田口だと稱して、冠者と大名の許へ同行する。大名は伯父御から渡された書附を出して、冠者を仲介に資格調をするが、鋤本が黑いかに對しては、穿いてゐる繻子の脚絆を示し、身が古いかには、つい湯風呂に入つたことが無いとすりが答へる。刄が堅いかには、今でも茶臼の二つや三つは嚙み割るといひ、兩銘があるかには、上京の姉、下京の妹共に娘を持つてゐるので兩姪もござると答へてまさに合格、さて大名がすりを作

れて伯父御を訪ねるのであるが、其の途中に於て、すりは持たせられた大小の持逃をするといふ仕組である。

すりの失敗を綴つたのも亦多く、それは同一事を反復することによつて觀者に笑を惹起すことにしてある。適例は「長光」であらう。田舍漢の佩びてゐる黄金造りの太刀を奪はうとして、帶取を解いて自分の腰に結びつけた迄はよいが、强請の果は目代の裁きを受けることになる。目代が先づ出處と銘とを問ふ。すりは持主の答を反復して備前長光と答へる。肌を訊ねられてもすりは持主の口眞似をする。そこで田舍漢も氣づいて寸尺の問には目代の耳に口をあてて小聲に答へた。すりはこゝで口眞似が出來ず騙りがばれて遁出し、やるまいぞ〳〵に終るといふ筋である。「茶壺」もこれと同型の作。

念入りなのは「擦過(さつくわ)」である。主と頼んだお方すなはち大名の伯父さんを都へ迎へに行つた冠者が、呼問をすれば、すりは伯父だと稱へて同道して來た。大名は隙

見をして、驚いて冠者にいふ「おのれまづあれを連れて來るものか。あれは都にかくれもない、見乞の擦過というて、大の盜人ぢや。汝は見乞といふ謂は知るまい。總じて世の盜人は人の目顏を忍うで取る。あれは人の物を盜みても取る。乞うても取る。それ故見乞といふ。擦過は盜人の唐名ぢや」冠者が憤つて、そんなら搦めようといふのを、後が恐ろしい、賺して歸さうとて、內に入れ、馳走することになつて、大名が冠者に眞似をせよといへば、冠者は用のないことまで眞似るので、大名は腹を立てて冠者を踏轉かして入れば、冠者は擦過を踏轉かして「それに緩りとござれ。お振舞申しつけう」で終りとなつて、名代のすりが散々に弄ばれてしまふ。此等は事相の顚倒が呼ぶ笑とでもいふべきであらう。

盜人も亦すりの如くに取扱はれた。垣を越えて忍び入つたが、目をさましてゐた子どもの愛らしさに、それをあやしてゐて見つけられてしまふのが「子盜人」二人連で忍び込んだが、床掛物の句の面白さに、それを本にして連歌を始めてゐて見つ

けられ、結句太刀や刀を貰つて謠つて歸るのは「連歌盜人」。これに型を同じうするものに「蜘盜人」があり、失敗に終るものには、盃山を盜みに入つて、見つけられ、犬や烏から猿の啼聲の眞似迄させられ、しまひに鯛の眞似をさせられ、その泣聲を强ひられて「たひ〳〵〳〵」と泣くのでばれるといふ「盃山」、何れ知人の家に忍び込んで、見つけられては笑ひで終るといふ仕組。德政令が出れば、貸借關係が一時に消滅するといふ時代であれば、所有とか領得とかも輕視されて、竊盜やかつぱらひの多かつた世相は、此等の作の裏面に潜んでゐるのである。

狂言の山賊は一段と愛嬌味を包有する。髭くひそらして山刀、身ぐるみ脫いでなどと歌舞伎芝居の場面から想像したら、全く的が外れてしまふ。適例は「手負山賊」、長刀をひらめかして、山中で道行く僧を脅した山賊は、路銀を取上げる代りに肩の按摩をさせるが、僧に剃刀で咽を切られ、おまけに前の谷へ踏落される。痛手をこらへて麓の家に歸れば、先の僧が宿を借りてゐる。僧は逃げる。山賊は妻と共

にやるまいぞ〳〵と追ひかけるといふ仕組である。類型は「女山賊」であらう、劫かした女に長刀を奪ひ取られて、山賊が丸裸にされてしまふ。此の他に老住持が苦心して作つた花を、尼に盗まれて、折檻を加へたが爲に、尼の一群に押寄せられ、住持は檀家の武士を頼んで防いだが、遂に敗亡してしまふ。他には「若市」があつて、これも盗人の方が勝つが、總じて强かるべき者が弱い處に笑は生れるのである。此等は下剋上の世相の反映とは見ず、事相の顚倒によつて笑を惹起さうとした作となすべきであらう。

又彼の「兄弟諍」に於て、弟が兄の舊惡――天目と牛を盗んだことを――素破拔くが、これも舍弟とは盗人の唐名だと敎へられて、平素から呼ぶ處の兄を怨み、兄に向つて聲高に舊惡を並べ立てるのであつて、隱すべき弟が發く處にやはり顚倒が笑を呼ぶのである。

通じて、すりと盗人は博徒の果としてあるが、ひとり室町時代に止まらず、現代も亦賭博と强窃盗の間に此の接續關係が保たれてゐることであらう。

二　低能者物

大名に冠者に何れ狂言に出るものには低能者が多いのであるが、こゝには特に童話に於て馬鹿婿と稱する一群に酷似するものを低能者物と呼ぶことにする。多くは婿入の際に於ける出來事を仕組み、低能は健忘と魯鈍とによつて現されてゐる。健忘物の代表は岡太夫に八幡聟であらう。「岡太夫」は昔話の馬鹿聟が團子を忘れたといふのに恭いたのらしいが、自ら「舅にいとしがらるゝ花聟」と名告る男で聟入をして蕨餅を出され、珍しさにそつと懷中する。さうして其の物の名を尋ねて、「延喜の帝の御寵愛なされたによつて、官を下されて、岡太夫とも申します。即ち朗詠の詩にも載つてござる」と敎へられて歸つた。間違へて藤太夫といふ物をつくれ、らうしにも載つてあるといふ。妻は心得て、朗詠の詩句を誦しては記憶を呼出さうとするが出ない。夫はぢれて妻の手を打ち「まことに紫塵の懶さは蕨一手をとる」と妻の吟ずるに、それ其の蕨餅だといふに分つて「喃々いとしや〳〵、此方

へおりやれ」と女を負うて這入るのに終る。懐にしてゐるのであれば、出して見せればよいのを、長々と問答をする處が見物には可笑しかつたのである。尤も夫が無學健忘で、妻が朗詠の句迄暗記してゐる所に事相の顚倒が呼ぶ笑も加つてゐたであらう。元來狂言に朗詠の句の出ることは極めて稀で、年若な女には、不似合な知識だと考へる人もあらう。けれども當時朗詠は讀書習字の教科書として、まだ上流の間に用ひられてゐたので、中流以上を主要な觀客とする狂言に此の句があつても、物議を惹起す程の事でもなかつたであらう。却つて「紫塵の嫩き蕨は人手を拳るが如く」とあるべきを「紫塵の懶さ云々」ともじつたのが人々には面白可笑かつたことであらう。

八幡在に美人の娘をもつた者が、一藝ある者を聟に所望する由を記した高札を立てる。入聟希望の男が萬能足らうた者に指南を頼み、弓を携へて行くが、舅に放生川で鳥を射させられる。いふ迄もなく命中しない。舅は笑ふ。聟は「いかばかり神もうれしとおぼすらむ。八幡の前に鳥居立つたり」と吟じて褒めて貰ふ筈で

あつたが、此の一首が思ひ出せず、散々に訛つたり外れたりした果に、終句を「どう龜ごた〳〵」とどまぐれて、追ひかへされるのが「八幡聟」である。

魯鈍物は「吟聟」と「口眞似聟」とを代表作とすべきであらう。　前者は聟入指南所で、挨拶應答の後には「ファラノ〳〵フン」を附けよと教へられた聟が舅の許へ行けば、舅も冠者も聟に合せてフンを附け、目出度三々九度を了へ、聟舅が合舞で分れるといふお目出度物で、反復が笑を催さしめるもの。　後者も其の名の如く、一切舅の眞似をせよと指南を受けて行つた聟が、「內々待受けまする處、早々お出で」から「冠者盃出せ」をまで、悉皆眞似るので、舅が腹を立てて聟と摑み合つて、聟をぶつ倒して入り、聟は冠者の耳たぶを取り、引廻して打轉して「お手」といつて這入るのであつて、これも同じく反復と凝滯即ち融通の利かぬ點に滑稽味は湧くものであるが、共に式例に通じない爲に失敗するのである。　一面には當代の成上り者が舊慣古例に通じないのを諷したものと見るべきである。　除外例としては「相合袴」を擧ぐべく、これ

には下層社會の簡素生活が現れてゐるともいふべきであらう。聟に袴がなく、仲人と二人で一着、片足づつを入れて行けば、舅も冠者もこれに合せて二人一着で對面し、連舞でめでたく分れることにしてある。明治二十七年櫻痴居士によつて新作された歌舞伎の二人袴は、之を少し派手にきらびやかにした迄で何れも形と場面の可笑味を主眼にして居るものに屬する。

狂言にあつては、上に說く聟入物一切を聟舅物と稱するが、笑を構成する所因を考へず、單に資材の上からのみ見れば、かう名づけるのが最も中つてゐる。但さうした稱呼に對しては、上述の作品だけではまだ悉して居らず、それには少くとも「水論聟」「船頭聟」「樽聟」の三を入れて考ふべきであらう。

水論聟では、聟と舅との間に我田引水の論が昂じて、水の掛合から、砂の掛合に入り、泥の掛合に移つた處へ女が出て、夫に加勢して父を倒し、「喃々父樣、祭には來ませうぞや」「何の祭に呼ばうぞ。いたづらものの め。やるまいぞ〱」の追入りにしてあ

り、船頭聟では、一樽を携へて都から矢橋へ向つた聟が、大津松本から矢橋への渡舟で、船頭に強請られて、樽を半分空にする。　舅は其の船頭であつた。　船頭は今のが聟と分つて、逢ふまいとしたが、妻の入智惠で、髭を剃つて若く見せて初對面の挨拶をすまして酒になる。　盃が廻ると聟は「やい矢橋の船頭め又此處へ酒を強請に出たか。おのれは髭を剃つてうせ居つて、憎くい奴の」と散々になぐりつけ「どちへ行くぞ、人は無いか捕へてくれい」と、聟が



口眞似聟

舅の後を追つて入る。　どの狂言にも共通な形の可笑味、ものいひの可笑味以外に

顚倒と反復とがやはり興味を呼ぶ。樽聟はやや異つて、聟に頼まれて樽持となつて行つた淸六といふ男が、祝の酒に醉つて、聟へ引出物の太刀を横取りし、聟を投げ倒して歸る。聟はそれならせめて樽でも持つて歸らうと「無緣の、餘つた聟は入らぬか」と囃して入る。やはり顚倒によつて生ずる笑が基礎になつてゐる。

以上說く他に、算勘聟・鷄聟等なほ二三あるが、特に取り立てて述ぶべき程のものはなく、多くは古來の說話殊に座興譚に屬するもの又は諺の類を劇化した迄で、喜劇といふ立派な名は附し難く、低級な笑劇と見なすべきものであつたことは否まれない。

ホ　不具者物

不具者としては、現今盲人が其の大多數を占めてるといふが、古代にあつても同樣であり、殊に狂言が作成された室町幕府時代は平曲流行のために、怪しげな勾當や座頭が都鄙に彷徨してゐたからでもあらうが、狂言の不具者には平家語の盲人

たる檢校勾當、下つては座頭が多く取扱はれてゐる。之を二つに分けて嬲られ物と嬲り合ひ物とにすべきである。

嬲られ物の代表作は、どぶかつちり・鞠蹴座頭・猿替勾當(花見座頭)月見座頭の類でもあらうか。小石を川へ投げ込んでどぶりと音のするは深い處、かつちりは淺瀨と探つた弟子が、師匠を負うて渡らうとすると、惡戲好な通行人がそつと師匠の代りに負はれ行つた。二度目に濡れ姿となつて師匠を渡し、先づ一杯と、腰の竹筒を開けば、惡戲者が横から取つてみんな呑んでしまひ、終りに氣づかれて追入りになるのが「どぶかつちり」これと同型で、もつと場面を賑かにしたものは「茶かぎ座頭」である。平曲の總檢校の許に行はれる妙音講に集つた檢校や勾當連が數獻の酒に醉うて、小歌や、もじり平家や、さては小舞などと藝比べをなし、盃が納つて、「世上に茶の湯がはやるが、盲目の悲しさには道具の見分けがつかぬ。よつて立てた茶をかぎ廻して、かぎ當てた者には一袋づつ進上しよう」といふ總檢校の發案に、一同は「珍

しい御趣向一段とようござりませう」と答へて、總檢校の弟子の菊市が茶を立てる。隣家の惡戯者が之を見て、菊市の立てた茶にそつと胡椒の粉を入れる。　かぎ廻し



鞠蹴座頭

て檢校連が總檢校にくつてかかり、總檢校は訝り乍らかいで見て菊市を叱る。　惡戯者は更に檢校と總檢校の頭を張り廻るので、一座は大混亂に陷る。　惡戯者はそつと逃げ、一同は總檢校を打ちのめして逃げ、追入りで終るといふ、見物に笑が湧かずには濟まないものである。

茶の湯は當代貴賤僧俗を問はず行はれたので、それを材とした迄で、强ひて諷刺と見るにも及ぶまい。やはり顚倒と反覆とが呼ぶ笑で「鞠蹴座頭」も略同一事に成る。すなはち座頭同士が鈴をつけた鞠を蹴てゐると、惡戯者が鞠を横取して、此處彼處で鈴をならし乍ら樂屋へ入れば、座頭四人がアリ〳〵アリ〳〵といつて音を追つて入るといふ仕組。又清水寺の花の下で、女房を帶で身に繫ぎ止めて勾當が酒盛をしてゐると、猿曳が來て女をたらして、猿とすり替へて逃げる。かくとは知らぬ座頭が、もつと注げと帶を曳けばキヤア〳〵いつてかきつくといふが「猿替勾當」。「月見座頭」は珍しくも不具者同士間の惡戯で、下京の勾當と上京の座頭と月下に會飲して、座頭が勾當にぐる〳〵廻しに逢はされて方角を失ふが、杖を川水に流して見て、どうやら行手に見當をつけると、今度は犬の泣聲の眞似におどされて、助けてくれ〳〵と叫ぶといふ笑はせ物。

結構が少し變つてゐるのは「琵琶借座頭」である。たつた一面しかない琵琶を勾當と座頭とで借入れを爭ふ。持主は何か勝負をして勝つたものに貸さうと調停

し、盲人同士は相手を歌の上で嬲るが、埒が明かぬとあつて、相撲できめることになり、座頭が勾當を投飛ばしてしまふといふ筋である。嬲り合ひの部に入れても見られる作であるが、先づは持主に嬲られた氣味合の物である。

嬲り合ひの物の代表作は「聾座頭」である。留守を預つた聾と座頭が互に飜弄し合つて、聾が座頭を投げこかして逃げるを追つて入る物。また盲人外では「脛薑」が適例であらう。下京の癩人で指の落ちてゐるものと、上京の跛の者と攝津の芥川天神へ詣る道でつれになる。口慰をすることになつて、癩人が「津の國の難波入江にあらねども、あしのもとこそ可笑しかりけれ」と笑へば、跛が「芥川ちりかき流す手を見れば、あしのもとよりなほぞ可笑しき」と返歌をし、手を見せろといはれて、癩人が敗亡するといふ感じのよくない穢い話。

不具者物の總ては右の如く結末がおほむね破綻に了り、除外例としてはおめで

た物の「瞽女座頭」と「川上座頭」との二つを擧げ得るのみである。先づ中夫をしに清水に參つた瞽女と、妻定めの願に出た座頭と參籠して、法樂の爲にとて座頭が擬ひ平家の後に越天樂の歌「山川に水出でて朽木流れたり。どぶり／＼と流れたり。小猿取付き流れたり。ふきといふも草の名。茗荷といふも草の名……」と謠へば、瞽女は「たゝほゝたほゝ。それ神の代すでに十二代。人王の始りは神武天皇と申し奉る……福德自在圓滿」と御奉禮（祭文）を讀んだ後に「おれが殿御はお茶山に／＼。緣なつきせぬ此の茶園／＼。茂り茂れる葉も茂れ、二人隱れて見えぬ程に／＼」と頗る近世味の小歌を謠ふ。さて二人とも御夢想を蒙つて西門で行合ひ、一人が杖柱とも賴むといへば、一人はよをこめて契らうといふことになり、五百八十年七まはり添はう、めでたい／＼いざこちへ來さしめで結ぶのが瞽女座頭である。

序にいふ、狂言には末永きを祝つて五百八十年といふのに屢出逢ふが、其の由來が明らかでない。狂言不審紙には彥火々出見尊の御壽命に因んだので、人壽はこゝに定まつたのだと記してあるが、傍證が無ささうで信じ難い。

「川上座頭」は奈良の座頭が吉野の川上地藏へ參詣し、蜂に酷く螫されたと思つたら目が明く。さて下向道で見舞に來た妻と行合ひ、妻が持參の竹筒で喜の酒盛を開くが、二人とも上機嫌になつて、互に得意な小舞を舞ひ、さあ家に歸らうといふ段になつて、夫は始めて見た妻の不器量さに厭氣がさしたか。妻に腹は立てぬと誓はせて「御地藏の御示現には、和御寮と今迄の如く添うてゐたならば、又眼が潰るゝであらうと仰せられた程に、是からは夫婦でない」といふ。妻は「其の樣な示現のあらう筈はない。地藏を摑み裂いて來る」と腹立て「子中迄成いた者を離別せいとあるは胴慾な」といきり立つ。夫は「酷う離別もなるまい。是非に及ばぬ、示現に背く」といふと共に、兩眼は又見えなくなつてしまふ。妻は慰め、夫はあきらめ、宿習拙し又元の眼に奈良の葉の馴れにし竹の杖を持ち、夫婦諸共打連れてわが家をさして、戻つて來るといふ筋。前者とは事變つて、可笑しいよりはかはいさうだと同情したくなる。けれどもそれでは笑劇として不成功に陷るので、強ひて仕方で笑はせたであらうが、ほろりとした者も尠くなかつたことであらう。

総じて不具者物にあつては、彼等が飜弄されるのを見て観衆は哄笑するのであつて、如何にしても人情に背くのであるが、同情はどこ迄も笑の敵である上に、見物は自己にはあゝした失敗や不幸に際會することはないといふ一種の優越感の下に腹筋をよつたのである。元來狂言には血を見る迄の凄さ、絶望の果の悶死といふが如き刺戟性の物は絶無で、其の悉くが笑つて直に忘れ去るといふ程度のものであつたのである。

さう罪の無い隱匿の露顯は確に人に笑を惹き起すものである。露顯物には惡意の潛在が強ければ強い程面白いことは、後の歌舞伎芝居の御家騷動物に於ける被告が恐入る場面によつても了知し得られるであらうが、狂言は何處にも深酷味を缺いてゐるので、一家の盛衰や興亡に迄觸れて仕組んだものは一篇もない。もしそれが作者の期待する處であつたら、宜しく猿樂の能に仕組むのが當に踏むべき途であつた。さうして狂言には極めて罪の無い「三人片輪」だけが作り出された。

物に不足を知らない大富豪が、不具者を收容して保擁するといふ廣告を出した。といへば、如何にも現代式に聞えるであらうが、室町時代に於ける廣告は高札であつた。それにしても生存競爭裡に於ける弱者を養育しようといふ文面は、人道に合するものとして、あらゆる宗教家、あらゆる倫理學者も賛すべきものであつた。然るに救を求めて來た者は揃ひに揃つた賭場の敗亡者の三人であつた。一人は座頭、一人は膝行者、一人は啞者だと僞つて來て、何れも抱擁せられることになつた。富豪は戸外散歩に行くとて、座頭には輕物藏の番を、膝行者には酒藏、啞者には金藏の番を命じて行つた。不良の三人は相棒があるとは知らなかつたのであるが、座頭が先づ本體を現して、膝行者を見て之を誘ひ、ついで啞者と合して、第一に酒藏を開いて、散々あふつたが、果は夢中になつて、謠や小舞で浮かれてゐた。富豪が歸つて來て、そつと覗けば此の體で、三人共に何處に一つ不具を見せてゐない。「やいやい己等」とどなれば、狼狽へまはつて、座頭は啞を、膝行者は座頭、啞は膝行者を眞似て、富豪に、あの横着者奴やるまいぞ〳〵と追はれて局を結ぶのが三人片輪である。

不具者を仕組んだ狂言はざつとこんなものであつた。轉じて醜婦を材にしたものに就いて説明を試みるであらう。

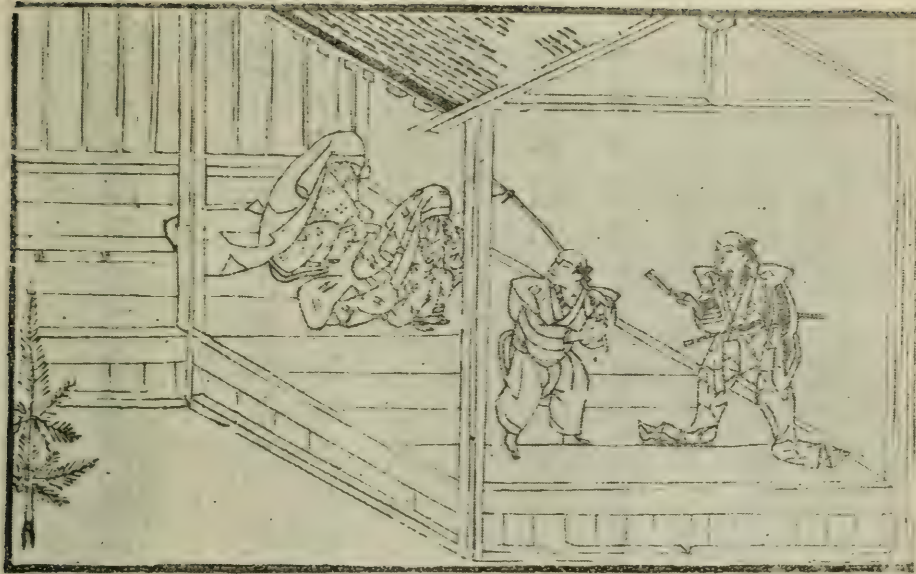
（ヘ）醜婦物

容貌だけは天賦で、如何なる富も如何なる力も之を改造し得るものでない。然るに之を笑劇の材料に使用しては、ひどく人情に反するが如くであるが、同じ醜婦の中でも、乙御前と稱する三平二滿の福女だけは、滑稽以上の愛嬌に富んで、必ずしも人に不快の情を催させるものでない。狂言に於て醜婦を福女に限るのはこれが爲でもあらう。醜婦物は合せては十篇程もあらうが、代表作はかくすい・釣女・枕物狂・金岡の四つであらう。

有福者が一人娘に聟が欲しくて、何でも一藝ある者を望むと高札を立てると、自薦候補者が諺通りに三人來る。舅が對面して盃が出、順の舞が濟んで、何か外に藝

をといふことになり、一の聟が「播磨紙如何なる人がかくすいて、筆は走れど文字は止まる」と詠めば、二の聟が「信濃なる淺田の小田をかくすいて、一本植ゑて千本をぞ刈る」三の聟は「西の海千尋の網をかくすいて、水は漏るれど魚は漏さじ」と詠む。舅はどれも一段出來ました。振舞を申しつけます。其の間に娘に對面あつて、緣のある方が止まらつしやれと言つて入る。さて一の聟二の聟が嫌はれたといつて逃げ、三の聟が「これは如何なこと身どもを思召すか」と得意になつて被衣を脫つたが、御面相に驚いてあゝ悲しやで終るのが「かくすい」で、三人の歌に此の語があるので、此の外題が生れたのである。

これと類型は「算勘聟」で、算勘に達した者を聟にといふ高札面によつて、やはり三人が相次いで來る。一二の聟は形の如く落第して三の聟が及第。さて、舅に引合せられて、聟がちと御見參申さうと恥しがる娘の被衣を取つたら大へんな乙御前。ちと用がある程にと聟は逃げ、娘はやるまいぞ〳〵の追入。


釣女

比較的に構造が複雑で、よく演ぜられるものは「釣女」である、奪掠結婚の遺風でもあるべく、戰亂時代の室町期には隨分行はれたことであらう。今も僻陬の地にはまだ〳〵遺つてゐる。但狂言のやうに釣針に引つかけるのでなく、甘言を以て誘ひ出して、同棲した上で、父兄の承諾を求めるといふやり方で、これには共謀者を要するといふが、狂言でも太郎冠者が參謀役を勤める。先づ妻を持たぬ殿と冠者と西の宮の夷殿で通夜をして、二人とも西門の一の階にあらう程に伴れ歸れと御夢想を蒙る。その階で殿は釣竿を拾ひ、冠者に命じて釣らせる。冠者が「釣ろよ〳〵御かつ樣釣ろよ」と囃子にかゝつて

下女づきの上﨟を釣る。輿乘物はなし、各々が背負つて行くことになり、冠者は下女の被衣を取らせて、思の外に美しいのに喜んで、饗應の用意の爲に急ぎ還る。殿が上﨟に被衣を取らせたら、御約束の乙御前、殿は「冠者おかつ樣が換つたぞ、其方を返せ」と追ひかけ、上﨟がやるまいぞで追入り。顚倒が呼ぶ笑だが、趣向が面白いだけに、淨瑠璃類に作り込まれ、近く明治十六年に河竹默阿彌が花柳壽助の爲に、常磐津を地にした一場物に仕組んだ。それには大名は上﨟を、冠者は乙御前を釣るが、奪合をして、冠者が上﨟の手を引いて逃げることに裏表にしてある。請けたので座敷にも劇場にも度々出ることは周知の事實。

仕組がもう一層複雜なのは「業平餠」である。活版本の狂言記に載せてないので特に詳しく筋を述べる。一切が能がかりで「和歌の心を友として〳〵玉津島詣急がん」といふ次第に起つて「是は在原の行平でござる」と名告るシテが相手を二人連れて出かけたが、草臥れて茶屋に入つて休む。茶を呑んでから行平が淋しうなつ

たといふを、冠者が心得ず、ひだるくなつたのだと聲高になるを、おひもじいとあるかと取りなして、茶屋に有合せの餅を上げる。行平は幾つか食つて甘い餅ぢや名があるかと問ふ。茶屋は一とせ在原の業平卿が此處で召上つてから業平餅と申しますと答へる。それならもう一つと望むと、もう無いといふ。それならと行平は茶屋を立つ。亭主が代物を請求するが、行平も從者のアドも持合せてゐない。明日都から屆けようといへば、亭主は私どもの營みは、右から左へ取らねばならぬ。御人體ともおぼえませぬ。先づいかなる御方でござりまするぞと詰寄る。アドが「何を隱さう在原の行平卿でおりやる」と明かせば、それなら代物の代りに歌を一首といふ。アドがさう取次げば、行平は「今日は腹工合もよくない、後日にせよ」といふ。アドはさうもいへまいと迷惑がるので「都へ出た時紫宸殿や清涼殿を拜ませてやらうといへ」といふ。茶屋は御殿を拜みたうない、一人娘を召仕つてくれと賴む。行平は喜んで玉津島詣を中止して、娘を連れて都へ引返したが、都へ着く迄を待兼ねて、途中で娘に對面しようと、アド二人を酒肴を調へにやる。さて、ほつそり

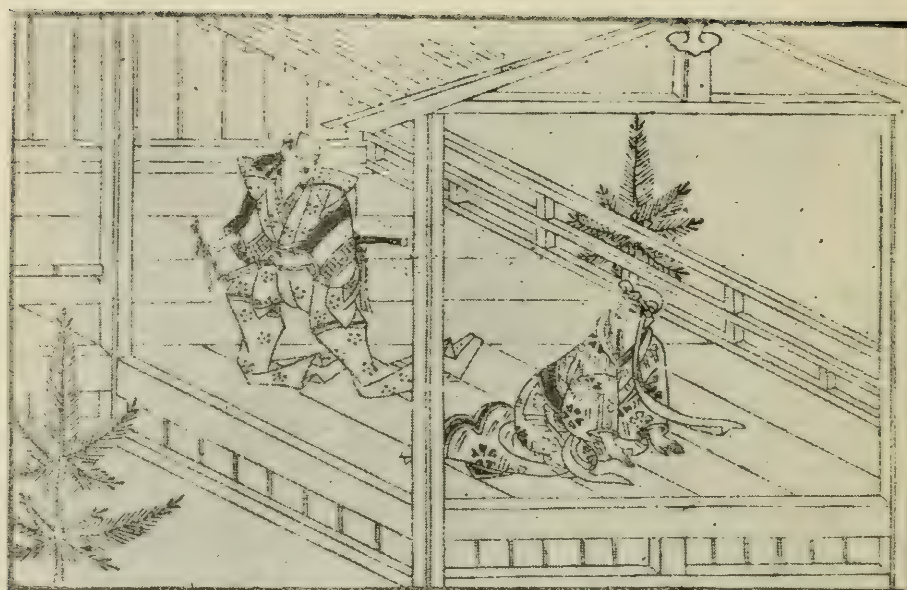


餅　平　業

すわりの柳腰、立姿の樣子、都にも珍しい取りなりでおりやると、期待を大にして被衣を取つたら大へんな乙御前。申し〳〵行平樣と娘が濃厚に出るを、先へ行て待つてゐる程に、和御寮は後から來いと逃げ、娘が追ひ込んで終局となるのである。元和か寬永の頃に大阪に餅業平大小狂言の上手と呼ばれた傳助といふ男があつた。出雲の阿國が創めた踊が、低級ながらも劇の構造を取るやうになつたのは、能の狂言師が身を落してそれへ加つたが爲であつた。餅業平は必ず此の業平餅に關係があるべく、ちとくすぐりは多いが、一場物として今

でも歌舞伎に演せられさうに思ふ。

以上の外、二九十八・吹取・岩橋等があるが、總べて皆期待の裏切られる處に笑が喚び起されるのであつて、觀者からいへば、不知不識の間に己れの妻と比較して自己優越感の下に笑ひこけるのである。ただ此の間にあつて、觀客に笑と共に哀愁の情を抱かしめる作は「枕物狂」であらう。地藏講に行つて、其の家の乙娘を見染めて來て思ひ惱む老翁を、孫ども二人が慰めて自白させ、乙娘を伴れて來て喜ばせるといふだけの筋である。名高い枕物狂の謠をうたつて、苦しい胸を和めてゐるので、孫どももどんな美人かと思つたら乙御前だといふ笑はせものだが、老翁が孫の爲にせず、孫が祖父の爲に働くといふ顚倒が喚ぶ笑のみを味ふべきであるまい。此の作の底に潛む中年者又は老年者の戀の哀愁を現す處に注目すべく、自然演者に於ても至難の藝で、秘曲として取扱はれるものである。此の狂言を見て笑つてすます者は恐らく年少者に限るであらう。人は四十五十の齡に於ては勿論のこと



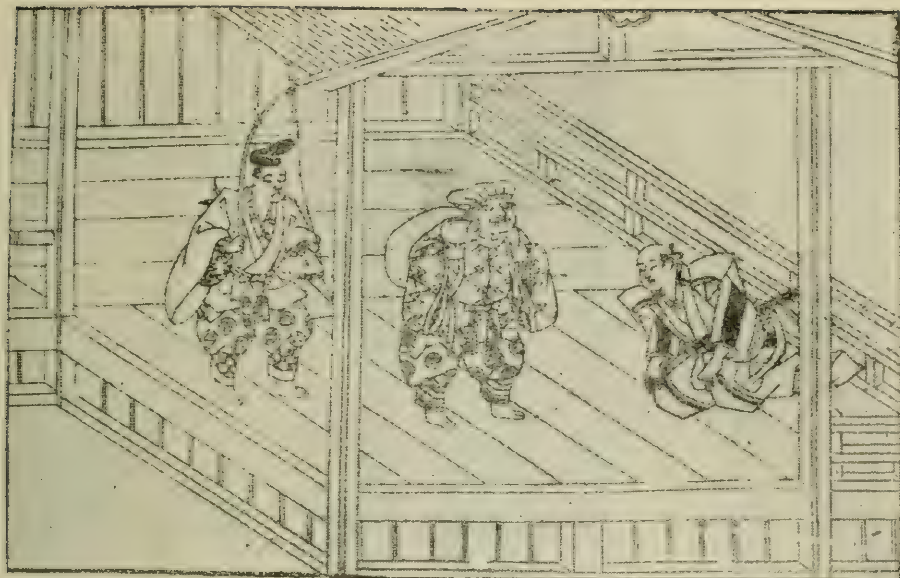
金岡

六十七十に至つても息の通ふ間は戀心を有するものである。性的行爲の能不能は人々の體質と健康とによつて差異があるであらうが、「庶幾するの情はそれはある」と老人から聽くことは珍しいことでない。「此の年をして何の」といふは概ね自己を僞るもので、少くとも年少者が相愛する樣を見ては、嫉妬はしない迄も羨望の情を抱懷することは事實であらう。枕物狂は自己を僞らざる老翁であつたのである。もし戀した相手が十人並の女であつたら、何の奇もなく、劇に仕組まるべきでもなかつたが、醜婦であつたが爲に、笑劇を構成し得たのである。但其の裏面には形

骸は枯木の如くになつても、衷に異性を愛するの情を有する點が人間の强みであつて、これが萬億の生靈間に優勝者たりし所以の一つであることを語るのが此の劇である。　かう考れば笑ふよりは沈思させられることになるのである。

もつと〳〵考へさせられるものは「金岡」であらうか。　内裏で上臈を見そめた畫家の金岡は、醜い妻の面貌を見るを厭うて、京の町を放浪する。　妻が捜ねあてて、いはれをきき、それなら私の顔を上臈のやうに彩れと提言する。　金岡はそれは面白い事を氣附いた、隨分描いて見よう、似たらお互の仕合せだといふので歸宅する。さて妻に坐らせ、紅と白粉とでいろ〳〵と塗るが「何と彩れど此の面が戀しき人の貌には似いで、狐の化けたに異らず」と女を突倒して逃げてしまふのである。　全く所作の面白さに笑ひこける劇で、倫理觀の上から彼是論ずべきではあるまい。　但如何に、笑ひに同情の介在を許さないにしても、容貌だけは人力や金力で如何ともなし難いことを考へれば、金岡の妻に對して哀愍の念を禁じ兼ねる。　これは私ばかりでもあるまい。

狂言に出る神佛は能のやうに威嚴を具へてゐるものでなく、惠比須や毘沙門の如き福神に限る。　興趣は何れの神佛も人間味を帶びてる處に湧出でる。　勸請に應じて、西宮の蛭子と比叡の大黑天と來て、問はれる儘に身の由來を舞語りにして、持寶を與へて其處へ納まるのが「蛭子大黑天」で、至極おめでたいものである。「連歌毘沙門」はこれに比べては稍笑をそゝることが多く出來てゐる。　二人で鞍馬の多聞天へ參詣して、一人が梨を賜はるといふ夢を見て、下向道で拾つた。　それを二人に賜つたに相違ないと他の一人が爭ひ、多聞天の御前へ戾つて連歌をして、其の句柄によつて領得者を定めることになる。　一人が「毘沙門の福ありの實ときくからに」と出し、外の一人が「くらまぎれよりむかで食ひけり」と附けた。　いふ迄もなく鞍馬を闇紛れにいひかけ、剝かでを多聞天の御使の百足に言懸けたのである。　多聞天がそこへ現はれて、梨は鉾で割つてやらうが錆が來さうだ、其の研賃を出すかと



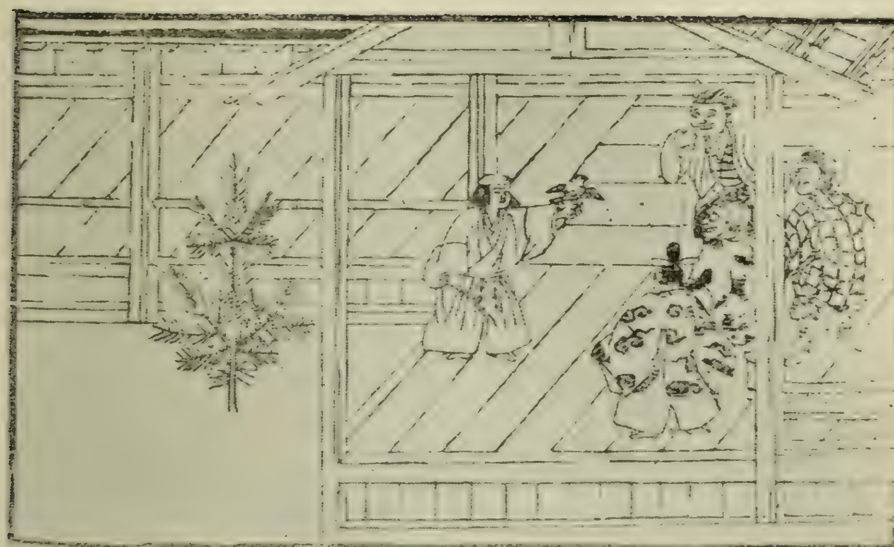
蛭子大黒天

いつて笑はせ「うまく割つた、此の酢溜は自分の得分にする」といつて更にくすぐり、もう一返連歌をさせて、其の面白さに舞つて見せた上、悪魔降伏の鉾と兜を二人の者に與へるのである。

此の二つの狂言から生れたのは「恵比須毘沙門」である。先づ大果報者が娘に聟をほしいと高札を立てる。毘沙門が望に應じてやつて來る。これがアドで、次いでシテの惠比須がやつて來て、互に雜言をしあつて、「西の宮の三郎かやい」「鞍馬の毘沙かやい」と下司言葉になつて爭ふ。舅の仲裁で、互に氏素性を物語ることになり、又惡口をいひ合ふ。此の惡口が興をひくのであつて、神佛ともあらうものが「舅殿お聞きす

い」だの「來たかやい」だのといふのだが、果ては舅に「まことの聟になりたくば寶を我に賜び給へ」といはれて、アドは鉾と兜、シテは釣針と烏帽子を與へて、其處へ納まるといふもの。

摩利支天や不動明王の如く恐れられる方もおはすものを、福を與へる神佛だけは狂言に於て散々に甘く見られておはします。但「福の神」に於ては、人間を弄び給ふ處に顚倒より湧く面白さ可笑さは、泉の如くに感ぜられる。利兵衛八兵衛の二人が出雲の大社へ參つて「福は內、鬼は外と」はやして豆蒔をすると、福の神が現はれて「本當に富貴になりたくば御酒を上げろ」と促す。次いで金銀を請求しておいて、謠のフシで「此の序に樂しうなるやう語つてきかせん。朝起をして慈悲あるべし。夫婦の中に腹立つべからず。人の來るをも厭ふまじ。我等がやうなる福傳に、如何にもお餅を結構して、さて中酒には古酒をいやといふ程盛るならば、〳〵、樂しうなさでは叶ふまじ」といふので終る。神佛にも油斷の出來ない世の有樣は遺憾な



餌差十王

くこれに現れてゐる。

福神の外には地藏菩薩の功德を述べた「八尾地藏」がある。六道の辻に罪人を待つ閻魔王が亡者の持つて來た地藏の文を見て、許して娑婆へ歸すといふ筋だが、其の文に「ゑんもじ樣まゐる、地より」とあるなど飽く迄人間をくつてかかつた物。同じ類に「餌差十王」がある。かの古くは古事談に、近くは常磐津の關扉にも出る、鷹使の名人出羽守源齊頼が餌差竿を手に持つて娑婆から來る、閻魔王は鬼どもに責めさせて、地獄へ送らうとしたが、甘々と齊頼にたらされ、鳥を捕らせて味はつて見て娑婆へ歸すことにな

り、閻魔は名殘を惜んで玉の冠をやるといふのである。鬼どもの責める時の言葉にも「如何に罪人、地獄遠きにあらず、極樂遙かなり。急げ急げとこそ」とあつて、どこ迄も顚倒が呼ぶ笑である。

顚倒の例は更に鬼物に於て多く之を見る。印南野に出た鬼は、子持女を引捕へたが、子供は養子にするといつて自分の肩にのせ、女房に囃させて行く。いゝ氣になつてゐると、女房に後から引倒されて子供を取返へして逃げられてしまひ、女房の落して行つた笠を拾つて追入るといふのが「鬼の養子」で、「首引」では鬼の娘が爲朝に負けてしまふ。「節分」では蓬萊の島から來た鬼が、一人で留守をしてゐる女房に宿を賴み、うまくたらされて、三つの寶を與へ、節分の豆で追出されしまふ。

更に笑はせるのは「針立雷」である。夕立の折、雲を踏外して武藏野の眞中へ落ちた雷は、したゝか腰を打つた。幸ひ通りかゝつた藪醫者に治療を賴み、針を打つて貰ふが、人を威嚇する鬼が小さな針に苦しむ處が面白い。藥代を請求されて、持合

せが無いといつて侘る所がもつと面白い。結局旱損水損が無いやうにするといふ約束で天上するが、雷がぴつかゝぴつかゝ〳〵といへば、醫者は桑原々々々々でおしまひになる。



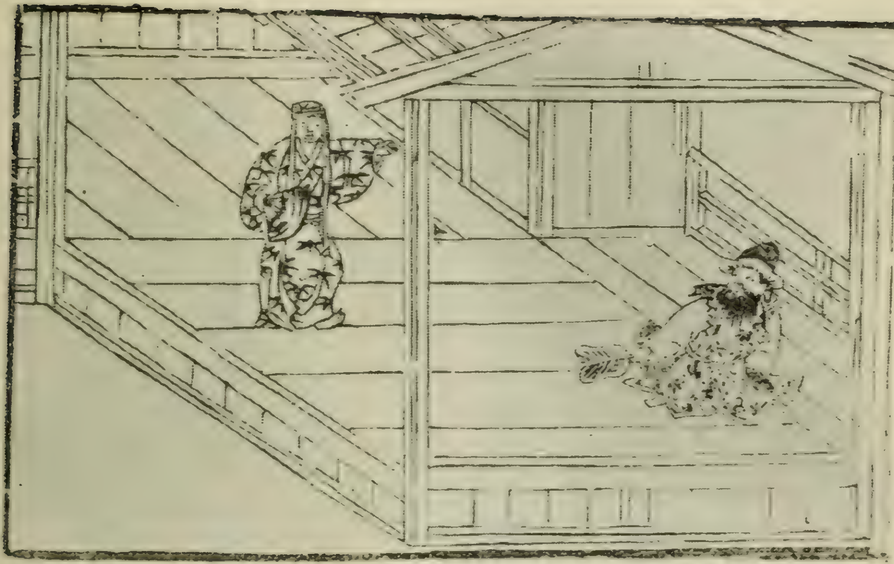
首引

精靈物も極めて陽氣な明るいものに仕組んである。能の高砂にあつては、松の精が尉姥となつて出て、和歌の道の尊さを說くが、狂言の松の精にあつては松脂となつて正月の松囃子を習つてゐる處へ現れ、望まれて弓の弦にひく藥煉（くすね）を煉り「天下を治むる弓の弦、家を治むる弓の弦、引くも久しき松脂かな」

の地謡につれ「やに、やに、やにや」と呼賣をして入るのである。
幽靈も古名將勇士では無くて、浦人に捕られた蛸や、雙六に身を果した僧である。それ等が鉢開きの乞食僧に濟度を求め、其の身の最期物語に觀客を笑はしめるもので、精靈物鬼畜神佛物一切を通じて能の後シテのある幽靈物の如くに、陰森や凄愴の感を抱かせるものは一つもない。

チ　唐人物

前述の神佛鬼畜物はすべて其の服裝の奇異なのが觀衆に與へる興味の一半を占めたであらうが、此の意味の下に考ふべきものは、唐人を仕組んだ作である。唐の王に仕へてゐた日本の相撲取が暇乞の時、王と力を角して振飛ばしてしまふのが「唐人相撲」で、これは科以外に出たら日の唐詞で笑はせたものである。「茶盃拜」も此の趣向に成るもので、妻の日本人に、夫の唐人があちらの小歌を謠つてきかせ、望まれて舞樂をなし、日本人無心自我唐國妻戀と、舞樂の詠や囀に類似の句を吟じる



茶 盃 拜

のが面白く可笑しかつたらしい。此の唐人が「これは唐土茶盃拜と申す者でござる。我十ヶ年以前に日本へ捕はれ、筥崎の浦に住居せり」と名告るのを見れば、應永二十六年に入寇して捕虜となつた一人に就いて仕組んだのではあるまいか。此の時の外寇は、かの蒙古襲來の時程では無かつたが、かなり京都表を震駭させたものであつた。能の白樂天は此の時氣休めのために作り設けられたものではないかと思ふが、茶盃拜はめでたく之を撃退して後に作り出されたものとして考へたい。唐土人が日本に住みついて日本人を妻とする趣向は、後の近松の國性爺合戰を俟

たなかつたもので、夙く此の事は當時の堺港あたりに於てはいくらも見られたことであらう。

茶盃拜に併せて述ぶべきは「唐人子寶」である。日本人の許に雇はれてゐる通事の許へ、唐土から其の子が訪ねて來て、遂に父を作つて歸ることを許されるといふ話で、能の唐船を俗化したものであり、國性爺の趣向の據つて起る處のものである。これもいゝ加減な唐音と、土産として持つて來た物を拍子にかかつて述立てるところが面白いのである。近松は、國性爺合戰やこれに連る作品に唐土の語や小歌を挿入して、時人に喝采せしめたが、それにはかうした先蹤が存するのである。但唐人相撲は能の白樂天と共に、對外心の發露で、或は應永入寇當時の作であらうか。かう考へれば唐人物の作も笑を呼ぶだけでなく、隨つて輕く看過してはならないことになるであらう。

人體上から見て狂言の詩材を說けば、ざつと上述の如くになる。大名以上神佛

迄も出るのに、公卿だけはただの一度も現れない。これは制裁が嚴しかつた爲であつた。應永三十一年三月伏見の御香宮の猿樂に於て、公家困憊の體を狂言に演じたが爲に、樂頭以下が咎められた。かうしたことが度々あつた結果であらう。看聞日記に「當所皇居也。公家居住之在所に、公家疲勞事種々狂言。不存故實之條尾籠之至也」と後崇光院がお記しになつてゐる。なほ此の條に比叡山で猿のことを狂言にして刄傷された事があり、仁和寺で聖道法師の事を演じて罪せられた先例を引出されて、樂頭が重々恐入つたと記してある。後の歌舞伎狂言や淨瑠璃劇には、かういつた制裁は度々あつた。遡つての室町幕府時代にも勿論あつた筈であるが、こゝに生ずる疑は、何故に大名物に就いては禁止令が幕府から出なかつたかである。餘りに事實に近さに禁止しかねたのであらうか、それとも武家は公家に比して神經質でなかつた爲であらうか。私は狂言を見て樂しんでゐた武家は公家程に生活の上に不安を感じてゐなかつたので、あれは自分達には關係の無いこと、あれは、位倒れの貧乏公卿のことだとして解して問はなかつたのであらうと思

ふ。

4 能狂言の構造

イ 語り物

能の狂言は能と能との中間に挿まれて、其の前後に立つ能とは何の關係もない獨立したものと、能一番の中の中入の時に、舞臺が空虚になるのを塞いで、其の能に關係ある其の地の由來又は古傳を物語らせるもの、世にいふ間(あひ)狂言と以上の二種がある。恐らくは此の間狂言の方が發生上からいへば古いのであらうが、それが擴張されて、遂には能と關係の無い某事件の進行や結末を對話によつて示すやうになつて、玆に始めて狂言の獨立を見るに至つたのであらうと思ふ。一先づかう推定して、間狂言以外の獨立してゐるものに對して、其の構造を說いて見ることにする。

獨立狂言として取扱はれる作の中にも、當初の古型を保有する一人狂言が遺存

する。通常之を「語り」と稱して、七騎落・生捕鈴木・那須與一の三作を其の代表者とする。七騎落は能のそれを其のまま獨演獨白にしたもので、平家物語の記事を口誦する處の何の滑稽味をも有するものでない。次の生捕鈴木は、梶原が御前眞近に參つて「只今すずきを生捕つて候」といふ。賴朝は魚と解して「それは調法のものよ。猫の食はぬやうにして置け。後程に芥子酢にて辛辛として戴かん」といつて景時にたしなめられ、鈴木を呼出しては散々に言返される。賴朝は返す詞の無さに、毛拔で髭をぬき乍ら「汝は心中のよき侍かな。あの梶原といひつる者は、一門の內を切つて出る者と聞いてある。汝今日よりも判官に奉公すべからず、賴朝に奉公肝要なり」といつて許してやるといふ筋を、狂言師一人で獨演するものである。賴朝を魯鈍扱にして、梶原に面目を失はせる處に、笑ばかりでなく、判官贔屓即ち弱者に對する同情に關しての滿足が觀衆の間に湧いたであらう處の作である。其の笑は全く顚倒が呼ぶのであつて、第三の與一も平家を殆ど其の儘でやり、終りに判官餘りの嬉しさに、小額はたと打つて「いとうしの與一や。ようう射させた。

けなもの。　此方へ來て、餅を飲うで、酒を食へ」と御諚あつた。

と、義經を甘い者にして、辛うじて滑稽味を産ませてゐるのである。

右の三作をもう一段進めて、觀察と表現の上とに一層の可笑味を練合せたものは「見物左衛門」である。　加茂の競馬を見に出た男が、九條の古御所や御馬屋を見、子供相撲の場に割込んで喧嘩をした果てには追出され、祭見物はふいにしてしまふことを獨演するもので、出家物の「どちはぐれ」と共に此の部の中へ入れて考ふべき語り物である。

ロ　語り物に首尾を附したもの

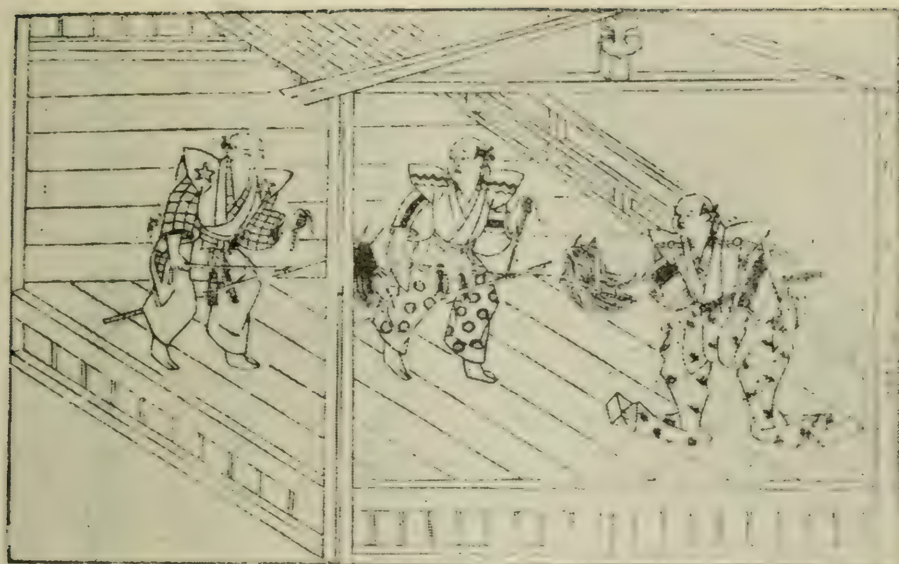
健忘質の冠者に思出させる爲に、殿(大名)が平家物語の處々を長々と語つて、忠度最期の條に至つて、やつと思ひ出すといふのが糅糊(ひめのり)で、これと同一の構造に成るものは文藏(ぶんざう)である。　冠者が殿の伯父御の許で旨い物を食べたと聞いて、色々にして尋ねるが、どうしても思出せないといひ、しまひに「殿様の四疊半座敷へ取籠らしや

れまして讀ましやれまする物の本の内にしかとあるかと存じまする」といふ。そこで殿が源平盛衰記を取出して「扨ても石橋山合戰といつぱ……」と讀み出して、あれかこれかと尋ねるが分らない。眞田與市最期の條に至り「股野はきつと見て、御分は誰ぞと問へば、苦しうも候はず、眞田殿のめのとに、名をぶんざうと答ふ」と讀めば「その文藏のことでござりまする」といふ。殿が「いや汝が食べたは溫糟粥(味噌と酒粕とを入れて煮た粥)であらう」といひ「いよ〳〵溫糟粥でござりました」で終るもので、ひめ糊と同じく、シテとアドと二人して演ずるものである。やはり語りが主體で、これに首と尾とを附けて、シテアド兩人の對話で事件の進行を示すだけのことである。

此の他、地獄に落された「朝比奈」は鬼に和田の軍の樣を物語つて、鬼を道具持にし、「二千石」の殿は、暇も乞はずに飛出して、京内參りをした冠者の手打に向ひ、冠者が習つて來た二千石の謠を謠はせ、其の謂はれを長々と語り聞かせて冠者を手打にしようとする。處が巧妙な冠者のそやしは十分に殿をたらしてしまひ、殿は太刀も

やらう、刀もやらうと、やつての果ては和解の笑で終る。

かうした仕組の下に、笑倒味は次第に増大するが、其の極致に達した作は「鱸庖丁」である。鱸庖丁のシテは伯父、アドは甥である。淀に住んでゐる甥が伯父から官途成に用ひる鯉を求めてくれと頼まれたが、何一つ調へもせず伯父の許へ行つて面白可笑しく申譯をする。「方々才覺して淀一番の鯉を求めまして、とてものことに生鯉に致して持つて參らうと存じまして、藤蔓につなぎまして……」などといゝ加減なことをいひ、獺に片身食べられてしまつたので持つて來ないと跡方もないことをいふ。伯父は、いや方々から魚は貰つてあるからとて、甥を上げ、自身で鱸を料理して饗應してやらうといつて、甥に料理を望ませた。さて希望する打身の由來を長々と語つて、鱸には打身のないことを敎へる。それでは料理の手前を拜見したいと甥がいへば、伯父は急いで洗へと、厨に向つて聲を掛け、それからの仕方話といふものが大きに長く、式例を事細かに說いて、酒の强ひぶり、酒の後の茶など一切を述べて、終りに暇乞の仕方迄を敎へる。さうして、



牛　　馬

「今日はいかい御馳走でござる。殊にお茶と申し、御酒と申し、忝う畏り候。重ねて鯉をこそ持つて參らずとも、鮒なりとも鮠(はや)なりとも持つて參らう。さらば／＼」とおしやる程もてないて戻したいが、和御寮が鯉は獺が食うたとおしやる。某が鱸を庖丁が喰うたといふ。今の物語を喰うた心をして、とつととお歸りそへ。

と結ぶもので、伯父の方が一段と凄く、見事に裏をかくのである。此等の外「語り」を含むものには、

土産の鏡　雁かりがね　鎧　蛭子大黒夫
鈍根草(どこんさう)　こんくわい　横座　枕物狂　牛馬
膏薬煉

の類十餘番もあらうが、就中注意すべきは終りの二篇であらうか。
牛馬は新市場に、一の杭を爭ふ馬博勞と牛博勞とが、目代の前で、各牛馬の系圖を述べ立て、目代が裁きかねて、駈競べをさせて、きめることにした。當然のこと牛の方が負になるといふ仕組で、當代に於ける門地爭の如何にやかましかつたかを物語るものである。力次第の世の一面には、家柄の貴賤が問題視され、家筋のみが舊くて、處世上には實力を有してゐなかつた者に取つては、家柄系圖がせめてもの慰安であつたのであらう。此の系圖爭を東西兩武權の勢力爭に比擬して仕組んだのが膏



膏藥煉

藥煉である。鎌倉の膏藥煉と京のそれと互に藥力を角せしめる目的で出發したが、うまく道で出會ふ。迭に系圖を述べ立てて、鎌倉のは生喰(いけづき)が虚空を指して飛ぶのを手もなく吸寄せたといへば、京都のは淨海入道が庭造の時に大石を吸寄せたと語り、果ては藥種の珍奇を明かしあひ、いよ〳〵效能比べとなつて、兩人共に鼻の先に小粒程づつ附けて引合ひ、京方の勝になつて鎌倉方が「も一度勝負をせい。遣るまいぞ〳〵」の追入りに終る。

鎌倉と京都との對立は頼朝以來のことであるが、能狂言の行はれた時代からいへば、それは遠い昔のことである。狂言は其の當時に材を求めて、娯樂と諷刺と穿ちとをねらつたものであれば、膏藥煉の包藏する時代は、頼朝時代より下げて考へるのがよいであらう。幕府の創建時代よりは北條の執權時代、いや、それよりも寧ろ足利義詮が關東管領となつて、上杉憲顯を執事に任じた時代、乃至は義詮の弟基氏が管領となつてから、氏滿・滿兼・持氏の三世が相承けて、其の權威が京都の幕府と頡抗した時代の作として見たい心地がする。彼の希臘の喜劇にあつては、當初か

ら政治又は社會上の出來事に對する諷刺を籠めて仕組み、日常茶飯事を材とするはメナンドロス西紀前二九〇歿に起つたといふに、我が國に於ては、古説話や笑話の類を採り用ひて、政治上の事相は此の作に於て、それが比擬を肯定し得るだけである。彼の大名物や出家物や山伏物は、勿論社會相の一部一面の現れではあつても、大きな時事問題に觸接してゐるものではなかつた。元來希臘は奇蹟的に劇の發達の極到を示したものであり、我が狂言は劇に入るの第一關門を通過しただけのものであるとはいへ、其の懸隔の餘りに大きなのには何人も驚かざるを得ないであらう。

八　一般構造

戯曲構造の單複は必ずしも作中に現はれる人物の多少によるものでないが、二人三人といふが如き少數に限られるものにあつては、到底複雜な仕組を立てることは許されない。殊に三方丸あきといふ舞臺に、背景としては板壁に例の松一株、

他に何の舞臺装置もなく、固より幕も無い劇場には、如何にしても複雜な進行を示すべき劇の演ぜられよう筈はない。能と狂言とは相共に此の制限の下に立つ劇で、特に狂言にあつては、演出時間に迄制限があるので、能よりも更に〳〵簡約でなければならぬ。自然中入を設けて、能の如くに複式の構成にすることは許されない。もつとも四五の除外例はあるが、後シテとなすべきものが、一度樂屋に入つて服装を改め、ワキの待謠の後に悠々と現はれるといつたやうなものは先づ無いといつてよい。

羅馬のホラーツは、一の劇は五幕より成立すべしと唱道した人で、登場人物の數に關しては、第四の人物に餘り科や白をさせず、會話は三人の間に限るのが最も效果があると說いてゐる。確かに名言で、法則に近いものとして考へられてゐるやうであるが、我が狂言には自らこれが實行されてゐた。いやもつと緊縮した形で演ぜられた。即ち「語り」にあつては一人で演じ、語りを含むもの又は簡單な構造になるものは二人、やゝ複雜なものに至つて三人、如何に多くても登場者の總數が十

人を超えることはなく、會話は二人又は三人の間に限られてゐた。

同一の舞臺に於て演ぜられるのであれば、能と狂言との構造は相類すべきであるが、兩者は全く對立の地位にあつて一は嚴肅味、一は滑稽味、一は悲劇に近いものが多く、一は悲劇の低級なものたる笑劇が多い。又一は古典的で、一は當代式で、其の狙ふ處、與へる處は全く相反してゐた。自然其の構造も行き方も別であつた。

四五のもの、例へば

通圓　祐善　樂阿彌　蛸　榮螺　瞽女座頭

の如きは、ワキ次第・名ノリ・道行・問答・舞・キリといふ順を取つて、能の某々の曲と同一構造であつて、劇一篇中の主役をシテといひ、これが相手となるものをワキと呼ぶ。

又

笠の下　こんくわい

の如きは、ワキに當るものをさう呼ばず、アドと稱へてゐるが、筋の進行や順次はざつと能の如くである。笠の下を例にしていつて見る。シテは旅僧で、アドは宿屋

の主人」僧が次第から名ノリをなし、道行の文句が「住み馴れし我が古寺をひよつと出て、〳〵足に任せて行く程に、そんじよう其處に着きにけり。急ぎ候程に、何處ともなく着いてござる。日の暮れて候程にあれなる在處に立寄り、一夜を明かさばやと存ずる。ものも。」とあつて、さつさと運ぶ。舞臺に背景も何も無いのであれば、山邊とも川邊とも何處とも固着させてない。飽く迄普遍性を有せしめてある。さてこれから宿屋の主人との問答になつて、一人出家に宿貸すは禁制だと斷る。それでは笠だけを預つてくれと頼み、笠の下は自分の自由だと理窟を述べてとうとう泊る。そこで亭主のなぶることがあつて酒盛りになり、亭主が小舞をすれば、僧は拍子にかかつて踊出し、三味線の組歌風の小歌を謠ふ。次いで地藏舞を舞つて、ホッパイヒャラロノヒッを切りにする。詰り能を俗化して、もぢつて、其處に滑稽味を涌かせようとしたのであつて、此等は狂言本來の行き方ではない。狂言はもつと緊縮的であらねばならぬ。

能も狂言も劇としては低級なものであることは否むわけに行かぬ，能は樂劇としては餘りに不純な成分を含み、狂言は餘りに小規模に失してゐる。相共に發端と展開と終結の三部を有してゐても、其の展開部の構想や變化にはどこ迄も不十分を感ぜしめられる程度のものである。但狂言が事件の進行や解決を一切對話で示す所は劇の正態に合して、此の點では能よりも遙に劇の性質を具備してゐるといふべきである。

狂言の初頭の、次第から名ノリ道行迄はいふ迄もなく發端部である。最後の叱り。笑ひ又は追入り等は終結である。さうして此の二つの中間は展開部で、此處に葛藤の增大と昂進と局面の轉換とを示してあるものが最上乘の作となすべきである。けれども簡約を旨とする狂言にあつては、此の約束に合する作の多くは固より求め難い。しかし

武惡　花子　靭猿

等には明かに之を見出し得る。就中武惡は變化に富む。すなはち、大名が太郎冠

者に命じて無奉公者の武惡の首を打ちにやる處が發端で、冠者が武惡が十分身構へて油斷しないのを欺いて「殿の御機嫌が直つた、今日は川狩の日故、其方も雜魚をすくうて御前に持參せよ」と川の中へはひらせ、いきなり首を打たうとする。武惡の悲しみ方がひどいので、冠者は同情して都落ちをすゝめる。武惡は都の名殘りに清水の觀音へ參詣する。此處迄が展開部の第一段で、ここで一度中入りになる。第二段は冠者が仰せ通りにしましたと復命すれば、殿は大きに後悔して、物忘れに清水詣をしようと冠者を伴れて行く。と向ふから武惡がやつて來る。殿が見つけて訝り出す。冠者は此處は六道の辻(今も此の稱呼が殘つてゐる)なれば、迷つてゐるのであらう。見て參るといつて、武惡の側に行き、樣をかへて幽靈になつて出よと教へる。又中入り。三段は冠者が殿に「武惡を追つかけたが、見失つた」と語つてゐる處へ、武惡が白小袖にさばき髮、額に三角の紙をあて、杖をついて出る。冠者は「武惡の亡靈が出て何かいふ樣子故聞いて參る」とて行き、冥土の祖父御樣から武惡が使に參つたと復命し「祖父御樣が朝夕閻魔樣へ出仕の用に入る程に、太刀と素

袍と袴と扇をよこせとの事だ」と僞つて、殿のを脱がせて武惡に渡す。武惡はぢきぢきお目にかゝつていひたいことがあるといふ。それを冠者が取次いで「狹い娑婆を棄てゝ早く冥土へ來い」との祖父御樣の仰で、「武惡に殿の手を引いて來いとのこと早くお逃げなされ」といつて殿を遁がす。さて武惡が冠者に後の事を頼み、さらば〳〵で冠者に別れるのが終結で、花子でも靱猿でもかうして三部の區分だけは附けて見ようと思へば附け得る。此の三部に就いて、もう少しく説明を添加するであらう。

發端に於て、主要人物のシテ・アドの出る前に、劇以前の出來事を物語らせる爲のもの、歌舞伎劇でいへばシダシのやうなものも出さず、いきなり

○罷り出でたるは山の彼方迄ちと用ありて參る愚僧でござる。まづそろそろ參ろ。

△罷り出でたるは此の山下に住居致します左近の三郎と申す狩人でござる。又今日も狩に參らうと存ずる。先づそろ〳〵參らう。さても〳〵狩の門出

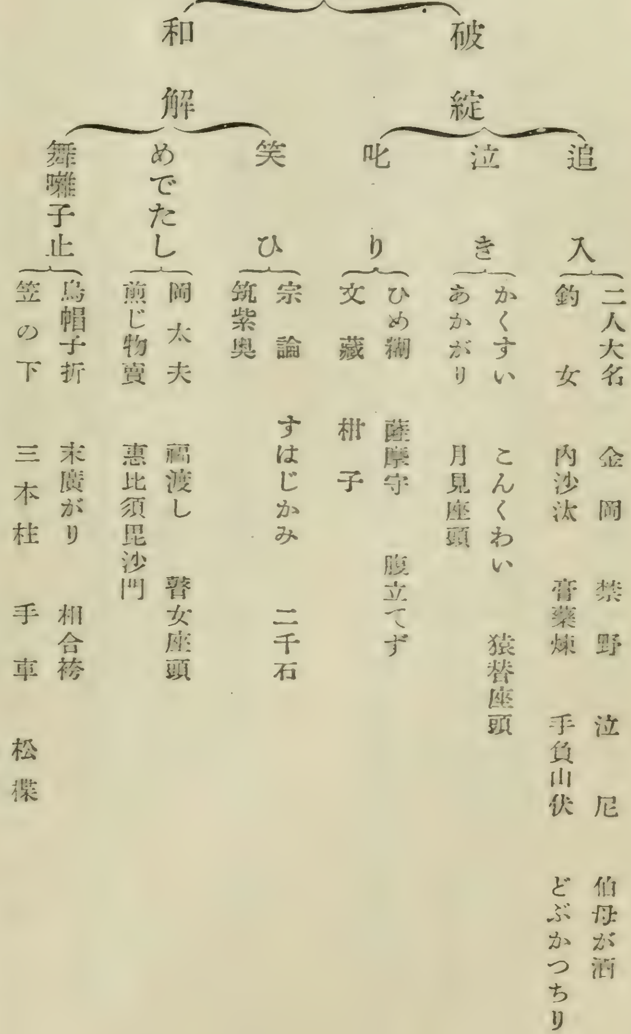
に見とむない奴めが行き居る事ぢや。やあ彼奴呼びかけ、なぶらうと存ずる
なう〱御坊(鹿狩)

の如くにして、直にシテとアドに問答をさせてしまふ。三人出る物にあつても、
○罷り出でたるは隠れもない大名、太郎冠者あるか。
△御前に。
○念無う早かつた。汝を呼出すは別なることでない。
と直に用向きの話に入る。即ち能でいへば名ノリからすぐに問答に入るのであつて、道行もなければ一セイも無く、サシも無いのが普通である。甚しいのになると、
○冠者ゐたか。
△お前に。
○汝が知る如く、此の年迄定まる妻がない儀ぢや。……
と簡約の極を示したのもある。

二　能狂言の終結

能の狂言は性質上より見て、健忘物・惡戲物喧嘩物・機智物・舞囃子物・聯物・詐僞物・お目出度物・露現物等に分つべく、此等は展開部の情態によつてかう分れるのである。總じて能の如く序破急の破卽ち展開部を更に序破急の三に分つて、歪曲を五部より成立するものとして作られてゐない。隨つて葛藤の昻上・頂點・轉換等は一々の作に就いては指摘し難く、多くはだら〳〵連つてゐる迄のことである。「富士松」などは此の形式に於ての好適例で、結局一場限りの笑劇たるに過ぎないものと見てよいのである。

終結には陰事露顯の破綻に終るものがある。「花子」は其の適例である。又和解に終るものがある。「靱猿」は此のよい例で、凡そは此の破綻と和解とに限られて、破綻に追入り・泣き・叱りの三種があり、和解に笑・めでたし・舞囃子どめの三種がある。各四五の例を附して表にして示せば次の如くになる。



最も多いのは追入りである。これは幕の無い爲であらう。もし又別に類型の上より考へて、

柹山伏――寝代り　　文相撲――鼻取相撲

二人大名――昆布賣　　栗田口……鎧――張蛸

鹿狩——惡坊。

末廣がり——目近大名

——寶の笠。

長光——連尺——茶壺。

餅酒——松楪——昆布柹。

二王——佛師——金津

地藏——六地藏。

口眞似聟——いろは。

の類を統同し、更に其の構造の單複を調査して見たら、日本笑話の構成法と日本人の笑の哲學とを究める上に於て得ることが必ず多いことであらう。



茶壺

二 近松忌

大阪朝日新聞が昨大正十二年から今年にかけて營んだ記念講演と、演藝と、展觀と、木谷蓬吟氏の大近松全集の出版と、東京方面では、帝劇の記念興行と講演と、黑木勘藏君と共に私の校訂した近松門左衞門全集と、これだけでも近松の歿後二百年の記念事業として、決して淋しいものではなく、實質に於ても相當に富んでゐるものの如くに考へる。

けれども近松の歿した十一月二十二日を今の新曆に當てると、十二月二十九日になるのである。此の當り日に何もしないのは物足りないといふので、水谷不倒・三田村玄龍・黑木勘藏の三君と私と春陽堂の主人とが發起者になつて、心ばかりの法事をしようといふことになつた。寺は新宿のさきの淀橋の常圓寺、やはり近松の宗旨の法華寺である。法事は讀經が主で、其の後に古偉人に對する追憶談をしあはうといふが趣意であつた。

時節柄御迷惑であらうと思つて、四十名ばかりの方にだけ御案内をした。歳末繁多の際で、おまけに風の寒い〳〵日であつたが、內田魯庵翁・內藤鳴雪翁・和田萬吉博士・伊原青々園氏・松山米太郎氏・都一中太夫・河竹繁俊氏等が續々燒香の爲に來集された。此の他好學好古の方で、御案內をした方は殆ど皆會せられ、實業方面の人では、義太夫通の副島八十六氏も見えれば、江戶藝を通して近松の宏業を謳歌される田中雨村氏も見えた。合せて三十幾名に上つて、發起人一同は之を以て偏に巢林子の遺德の致す處と考へた。

佛前の追善作業は午後二時に始まり、及川僧正は衆僧と共に懇に讀經され、一同が燒香を終へて、書院の大廣間へ集つたのは三時に近い頃であつた。發起人を代表した私の挨拶の後に、特に內田魯庵翁に願つて、武藏屋本と世に稱する近松の作品飜刻の初頭に立つ物の出た由來を語つて戴いた。翁の話は詳細を極めたもので、始めて耳にすることが多かつたが、約めれば、

明治十四五年頃と記憶するが、やまと文範と題して、義太夫節の名高い語り物數

十段を載せたものが出た。これがそも〳〵淨瑠璃飜刻の始めで、次いで近松著作全書と題して上下二册、いはゞ博文館の帝國文庫といつたやうなものが出た。これが近松の作を飜刻した始めだと思ふ。共にそれが今の丸善書店が發行したと聞いたら、恐らく奇異に感ずるものが多からう。今洋書の取次販賣と工業書の發刊とを表看板にしてゐる丸善がとは何人も思ふ筈だが、當時此の書店に早矢仕民治といふ義太夫狂があつて、此の人が勸めて發行せしめたのであつた。夙くも近松の作に傾倒した早矢仕君の熱心努力は非常なものであつた。當時丸本の價はごくやすくて、一册は五錢そこ〳〵であつた、近松の作となると、さうどこにもあるといふ譯には行かず、東奔西走の後に、彼處に一册、此處に一册と購求し借覽して、ともかくも七十幾種を六十册許りにして出した。これが世にいふ武藏屋本である。賣れることは賣れたが、費用もかゝつたので、結局は損失に畢つた。根が痼癖持の逆上屋であつたから、功勞はあつても、見落されるといふ種類の中に入つてしまつたけれども、功勞は功勞で、かの讀みにくい假名書を漢

字にするだけでも大したもので、さう學問のない男であつたから、一一人に相談しなければならなかつた。 羣庭篁村君や自分は何時も其の相談をうけたのである。 隨分間違もあつて、高野君などにも小言は食つた。（これは翁の誤解である。 私などは其の頃やつと十三四歳で、武藏屋本は十七八歳の時に始めて見たのである。 さうして間もなく帝國文庫の近松淨瑠璃集が羣庭さんと水谷さんとの校訂で三冊出たので、それによつて通讀した。 また武藏屋本の方が忠實であつたことは固より認めてゐたが、其の頃にはもう原本たる正本を見てゐたので、別段武藏屋本によりもせず、隨つて其の攻撃などもしなかつたのである。 但明治三十年代に出た近松集に對しては其の誤謬を指摘したことがある。

しかし此の後に出たものは、どれも〳〵此の早矢仕君のやつたのを底本にしたものだ。 大體院本を讀める者がなくなつたのだ（篁村翁が生きて居られたら、これは〳〵といはれさうな所、私もひどくこれには恐入つた攻撃はしても早矢仕君のやつたのに據つてゐたのだ。 其の後の者は一切それだ。 何でも近松の

作は最近の說では百二十幾つかあると聞くが、それはもうとうに早矢仕君が調査しつくしてゐた。其の書留は現に自分の手許にある。

此の功績者早矢仕君は次第に否運の人となつて、東京書籍組合の書記になつてゐて、大正十一年に故人となつた。

これが魯庵翁の話された梗概で、早矢仕さんの功績が近松忌の席上で語られたのは最も自然で、隨つて來會者の腦裏には十分な印象を止めたやうに見受けた。但し自己防衛として少し許り書くことを許して貰ひたい。私と黑木君とで校訂した近松門左衞門全集十册百四十七篇には、武藏屋本を底本にしたものは一篇もなく、必ず近松當時の原刻によつた。さうして、武藏屋本や帝國文庫とは方針を別にして、重要な曲節附一切及び句切り等迄悉く原本の儘にして、多少なりとも其の語り口を想像し得るやうにと力めた。又參考になる挿繪や版式や奧書をもうるさい迄に表して置いた。假名を漢字に改めたものには、其の誤謬を發見したし、校正上の粗漏にも氣づいた處があつて、近い將來に訂正することにしてゐる。かう書

き立てては翁にはすまないが、自分の氣にすまないことを、ぢつと耐へて、其の場は苦笑してすまし、あとで蔭口をきくよりは、かう書く方が遙によいと信ずるのである。書いた處で、早矢仕君の功績を輕減する譯でもなく、魯庵翁の話は光輝を増すの手段として、此を抑へて彼を揚げられたに過ぎぬと誰も解するに相違ない。

翁のお話の後に、睡餘小錄所載近松翁の肖像の原物所藏者たる松山米太郎君が、近松好きになられた起り、肖像入手の由來を詳細に說明して下すつた。肖像はもと京都建仁寺松原、中谷氏の藏で、文政六年十一月近松翁の百年忌を大阪で行つた時には、金屋橋の熊野屋某の手に轉じてゐたらしいのである。それがいつしか江戶の本所の木場の鹿島屋清左衞門の藏に轉じてゐた。松山君は此の鹿島屋から貰ひ受けられたのであつた。さうして鹿島屋で見出してから後のことだけを述べられた。

松山君の父は書畫の鑑定に長じてゐられて、故井上侯が鹿島屋の書畫を引取られる時に、其の鑑定者となられた。一日米太郎君が見に行かれると、出たのはかの

近松翁の肖像であつた。先年京都にゐられた時、建仁寺の松原で捜して見たが、中谷といふ姓の人もなかつたので、最早睡餘小錄所載の原物は無いものとあきらめてゐたのに、意外にも東京でそれを發見したので狂せんばかりに喜ばれたとのことである。さあ家へ歸つても、そればかりが目先にちらついて眠ることが出來ない。そこで翌日鹿島家を訪ねて懇望されると、何でもない



近松門左衛門肖像

事だが、家憲として何一品手放すにも、親戚會議をしなければならないのだから、追て挨拶するとのことであつた。どうも不安でたまらなくなつて、いろ〳〵考へた末、故原田次郎氏に相談すると、引受けた心配するなとのことで、或は吾が有となし得ようかと考へるに至つた。原田氏は當時鹿島家の相談に加はる人であつたが、其の力は驚くべきで、數日の後、書畫鑑定の報酬として一封の金子と、此の肖像の幅とを贈つて來たとのことである。翌日之を蓼庭篁村翁に示すと、雀躍をして、これは實に吾黨の大曼荼羅と稱すべきものであるとたゝへて、床にかけて御酒を供へて、肖像と獻酬をされた。爾後此の幅の爲に、自分は光榮を有したことは何回だか知れない。これが松山君のお話の大略である。

當日も之を書院にかけて下すつて、內藤鳴雪翁から

知らぬ世の魂にも香を焚く日かな。

普陀落や波の音澄む月の秋。

と献句があり、又道行の男女を描いて、

　糸柳や亂れてこゝに二百年。

と賛をしたものを供へられた。

　松山君のお話の終つた時には、もう日がすつかり暮れてゐたので、近松忌は二百年の今回に限らず、かの人丸忌や貞德忌・芭蕉忌などのやうに、年々執行することにしたいといふ發起人の提案が、何とも極められずに散會になつた。　當日又京都の本國寺の近松遺跡保存會から懇切な書面を送つて下さつたが、それを來會者諸君に報告するだけの時間もない程に話に花が咲いて、寺では雨戸をしめ、發起人からどうぞ御散會にといつても、人々はやゝ暫く歸らなかつた。　發起人の一人たる私がいつては可笑しいが、寄る人數は少くても、慥に盛會であつて、これは全く近松翁の遺業が然らしめたものと考へる。

（大正十三年一月東京朝日新聞所載）

三　近松の作品

（昭和四年四月東京三越名作展覽會に於て講演）

一　總説

元祿時代に於ける文學者といへば、通常誰も誰も漢學者や國學者を考へずに、松尾芭蕉・井原西鶴・近松門左衞門の三人を擧げるのである。此の三人は各異つた方面に其の才を伸ばして、不朽の名を遺した處の尊敬すべき人達である。其の作品からいへば、芭蕉は俳諧、西鶴は小說、門左衞門は戲曲と、全く其の性質が異つてゐるので、此の三人の中、何れが最も高い天分を有してゐたか、又其の作品は誰のを以て最優等となすべきかといふが如き比較的の品評は、容易く試み得られさうもない。相共に天才であつたに相違なく、しかもそれは氣の向ふがまゝに動いたのでなく、作品の執筆に際しては、努力を厭はなかつた天才者であつたかと思ふ。けれども、

西鶴は五十二歳で元祿六年に歿し、芭蕉は五十一歳を以て翌七年に歿して、二人共にまだ〳〵惜しむべき年配で此の世を去つた。隨つて本當の老熟の作は、此の世に遺されなかつたといふべきである。然るに、近松門左衛門は此の兩人よりはざつと十年後れて生れ、三十年程も後に殘つて、享保九年に七十二歲といふ高齢で歿した。其の製作期間も三人中最も長くて二十歲前後から歿する年迄の凡そ五十年間にわたつて、百四五十篇の戯曲を出した。さうしてそれは今雜誌や新聞に揭げるだけのレーゼドラマでなく、舞臺の上で實演せられたものであつた。これが驚くべき點であるが、單に作の期間の長きと、量の多きとに就いて見るも、後の馬琴や、默阿彌がこれに對抗し得るだけである。

此の元祿時代の三大文學者について、天分の高き低きを論じて、西鶴を第一に推す者があり、芭蕉を更に高く据ゑる者がある。俳諧と戯曲とは全く別の軌道を走るものであれば、芭蕉と近松との比較は暫く措くとする。戯曲と小說との距離は俳諧との距離よりは近接してゐるので、西鶴と近松とはまだ〳〵比較してもよい。

西鶴を首位に置くものは、其の觀察の奇警と叙述の清新と、もう一つ簡淨とを賞揚して、近松の筆を平俗だといひ、想は荒唐だといふ。さうして總じて作り物で、定型の人ばかりを出すといふ。誠にその通りである。私をしていはしむれば、當然さうあるべきだつた。西鶴の小說は之を世に出すのに多くの費用を要しない。極めて少數の知己即ち經濟方面を分擔してくれる處の讀者が三百か五百もあればよかつたのである。隨つて自儘に作つて出しても、迷惑は版元にかゝるだけで、一圍幾十人の人達を饑や寒さに泣かしめるといつたやうな深刻な虞がなかつた。近松のはさうでない。人形芝居や歌舞伎芝居といふ大袈裟な興行物の脚本を書くのであつた。一座尠くとも八九十人の生活費と、多少の利益とを產むべき作品でなければならぬのであつた。蓋しこれは容易ならぬ費用で、それを一般觀客に負擔して貰はなければならないのである。パンといふ必死な問題が附きまとつてゐるのである。作者の責は重且つ大で、座の持主即ち興行者から注文も出ることであり、太夫や人形遣の特技を引立たせるやうに工夫してやつても、更に〳〵色

色勝手な注文が續々と出たことであるべく、一世の風尙を看破して、老若男女の視聽を驚かすと共に、此の多くの注文に順應しなければならぬ。此の作者の苦心は到底旅行によつて自然の懷をさぐり、筆鋒によつて人の肺腑を突くといふだけでは能事終れりとはなされない。所謂神祇釋敎戀無常の一切にわたつて、甘酸を嘗めた苦勞人が、義理人情のぶつかりあひを描き出して、其のさまを人形といふ無生物を通して示すのでなければならぬのであつた。さうして其の見物といふは、元祿時代といふ太平の世の美酒に醉つてゐる人達であつたのである。目に文字の無いものが七八分を占めてゐたのである。其のくせ操芝居や歌舞伎芝居に對しては、見巧者・聞巧者であつたのである。此の人たちが喜んで、芝居の經費を分擔してくれるやうに仕向けるのが作者であつた。當然のこと平俗といふことも緊要の一要素であつたといはなければならぬ。當時の人は、又からくり芝居に巧妙な奇技を賞讃してゐたので、これと姉妹藝とも見るべき地位に立つ操芝居は、其の奇技をも取入れて見せることが必要であつた。近松はよく此の成功し難いことに

成功したのであつて、作者の氏神といふ、當時に於ける絶大の讃辭を捧げられたのであつた。さうして特に尊敬すべきは、晩年の作程圓熟したことであつた。五十一歳の時にお初德兵衛の心中を材料にして曾根崎心中を作つてから、ます〳〵人情の機微を穿つて、其の七十一歳の時の作、心中宵庚申あたり迄全く階段的に進歩の痕を見せてゐる。私が近松を以て努力を惜しまなかつた天才者となすのは實に此の爲である。

2 淨瑠璃

近松の作品は分つて歌舞伎劇の脚本と操芝居の脚本即ち淨瑠璃とに二大別すべく、淨瑠璃は更に之を時代物と世話物とに二分すべきである。世話物には天の網島や、梅忠くはしくいへば冥途の飛脚、丹波與作や、槍の權三重帷子、博多小女郎波枕、女殺油地獄の類、傑作として推されるものは幾つかあるが、時代物はどれを以て秀作とすべきか俄に定められさうも無い。けれどもいつの頃よりか國性爺合戰・

曾我會稽山・雪女五枚羽子板の三を傑作として數へ立てることになつた。雪女はさう面白い作でない。曾我會稽山はまとまつてゐるといふだけで、此の中では國性爺合戰が傑出してゐる。時代物は概して大味で、荒誕無稽で、劇中の人物に超人間的所行を何の遠慮もなく爲さしめる。もと〳〵娯樂本位に立脚して、必ずしも觀衆に對して冥想的思索や心の淨化を求めなかつたのである。このことは作者も觀客も全く同樣であつた。但此の國性爺の如きは求めざるに其の淨化の行はれたもので、此の點から見ても、時代物中の傑作となすべく、一般に歡迎された結果、興行期間の永かつたことは實に十七ヶ月間にわたつて、一日も休まなかつたと傳へてゐる。まさに空前であつた。恐らく絶後であらう。此の名作展覽會に此の國性爺合戰の樓門の場を選んで、人形にして見せられたのは誠に當を得てゐる。

國性爺合戰が歡迎されたのは、其の時代に於ける日支交渉事件とでもいふべき材料を取扱つたのが確に一因であつた。即ちわが國生れの者が、支那の國土を舞臺にして活躍するといふ仕組である。多少根據のあることで、全くの假空譚では

ない。支那の明末に鄭芝龍といふ男があつた。一たびは府吏ともなつたが、亡命して海賊の群に入つたらしい。その男が、臺灣を經て、わが平戸に落着き、領主の松浦侯から邸宅を賜つた上に、藩士田川某の女を娶せられた。恐らくは内密に貿易をさせる爲であつたであらう。此の芝龍と田川氏の女との間に、寛永元年に長男福松が生れ、次いで次男七左衞門が生れた。當時彼の土では、明朝は清の爲に追詰められて、天子は諸方を逃げ廻つてゐたが、その天子から平戸にゐる鄭芝龍に援助を求めて來た。芝龍は同志を率ゐて歸國し、明兵を援けて、功によつて都督に任ぜられ、日本に居る妻子をあちらへ呼び取らうとした。妻は先づ長男を渡航せしめ、次いで次子は長崎へやつて、わが姓の田川氏を嗣がせて、自分だけあちらへ渡つた。中々のしつかり者で、芝龍が平鹵侯に封ぜられてからは侯夫人として敬はれた。長男は國姓を賜つて朱成功と稱へた。其の後、明の形勢は日ましに惡く、芝龍は招かれて遂に清に降參した。まづ支那人根性といふべきである。然るにわが國人の血を享けてゐる成功と母とは、泉州に居つて降らなかつたので、清軍が之を圍ん

だ。士卒はおほむね遁逃して、侯夫人田川氏にも脱出を勸めたが、いや此の時に及んで一命は惜むべきでないと、城樓に上り日本刀をぬいて喉を貫き、飛下つて深い池の中に身を沈めた。彼の土の人は其の義烈の最期に驚きの目を見はつた。長男の成功は其の後明朝の恢復を企圖して、一時は福建により、後には臺灣を根據地にして、わが日本に二度迄も援兵を求めたが、それも行はれず、明の帝から延平王に晋められ、人々からは國性爺と崇められただけで、遂に志を得ずして、わが寛文二年に三十九歳でなくなつた。これが事實譚である。

近松が之を淨瑠璃に仕組んだのは、これより五十三年後のわが正徳五年のことである。別に此の時、日支交渉事件があつて、近松はそれに刺戟されて此の作を出したといふわけでも無く、全く唐土の人物風景で目先の變つたものを出したのに過ぎない。しかし當年六十三歳の近松は、昨正徳四年に永い間提携して來た竹本義太夫が歿し、其の後を嗣いだ竹本政太夫はまだ二十四五歳の若者で、大音の義太夫とは打つて變つて小聲の人ではあり、竹本座の存續もどうであらうかと世人が

あやぶんでゐた時だけに、大きに心配であつた。其の上、敵として立つ豐竹座の頭領上野少掾はまさに語りざかりであつた。內には竹本座の故老連が、若年の政太夫が義太夫の遺言によつたにもせよ首位に即くのを快しとしてはゐない。此の內外の不安を一掃する爲に、作者の近松は苦心に苦心をかさねたものと思ふ。さうして、すつかり行き方をかへて、舞臺面を外國に取つて、わが日本の勇士が彼の土に於て大いに武威を輝すといふ筋を立て、主人公和藤內の母が潔き死を遂げる處に最も力を用ひて、一面には義に勇むわが國民性とお國自慢の情とに訴へ、もう一つには伊勢太神宮の御神德をあらはして、觀客に滿足を感ぜしめようとした。さうして此の間に機關(からくり)や覗眼鏡といつた類の趣向をも取入れて、ともかくも珍しく且つ大きな場面を作り出して見せたのである。思ふに、近松の此の着想には何か一二の基礎となつたものもあるべきであらうが、今よりしては推察を下すべき程の文献が具備してゐない。作の中に出てくる虎の話も、何かいはれがあつたのであらうし、それよりもつと理由のあるべきは伊勢の御利益の事であらう。鄭芝龍

の二男七左衛門は前にもいふが如く、母があちらへ渡る時、長崎に從られて田川氏をついだのであるが、此の長崎表から寶永三年三月には伊勢へ拔參りをするものが夥しかつた。此の中に彼の七左衛門も居つて、それが近松の注意をひいたのではあるまいか。これは全く私の想像であるが、七左衛門は當年六十歳位であつて參宮は爲し得る年配である。それでなければ、長崎の人たちからこれにする咄をきいた事でもあつたであらうと想像したい。寶永は實に伊勢參りの多かつた時で、其の奇瑞談だけを載せた寶永千載記五卷五冊が刊行されてゐる。又正德四年十一月には、琉球人が來朝して、異樣な行裝をして、大坂を經て江戸に向つた。之を目擊した近松は、膝を打つて、おうあの異國情調を出して見よう。それには國性爺事件が一番よいと、かう思つて作つたのではあるまいか。

國性爺合戰は五段から出來てゐるが、面白いのは獅子が城と九仙山との場である。試にきはめて簡短に荒筋を叙べるであらう。

第一段

大明思宗皇帝の時、韃靼王より使を出して南京宮廷の寵妃華清夫人を貰ひ得て永く明朝と和せんことを乞ひ、皇帝は允さず李蹈天が一眼を抉取つて、韃靼



國性爺合戰番附より

王の使を宥めてかへす處に始まり、次で皇妹栴檀皇女の夫定の爲に、宮女二百人が花戰をすることがあり、梅の方勝つて、皇女は李蹈天を夫とすべきことにきまる。　李蹈天は內に逆心を藏する者で、皇女は之を忌み嫌つてゐる。　そこへ忠臣呉三桂が現れて、李蹈天の姦佞を說くので、帝は怒つて三桂を蹴る處へ、韃靼勢が押しよせて來る。　李蹈天は帝を弑し、三桂は懷姙中の后をまもつて逃げる。　道で后は丸に中つて死し、三桂は



國性爺合戰繪



入細字本所載

腹の子を取り出して遁れる。　又栴檀皇女は吳三桂の妻に伴はれて海邊へ遁げ、小舟にのつて浪のまに〳〵漂ふ。

第二段

肥前の平戸に住みついた老一官と日本の女との間に生れた和藤内三官が、濱で蛤と鴫との爭ひを見て軍法の蘊奥を悟り、明と韃靼と爭はせて、われ漁夫の利を得て支那を從へんと大望を抱く處へ、栴檀皇女が沖の方から漂着する。こゝに奇異な問、

日本人〳〵、南無きやらちよんのうとらやあ〳〵。

があつて、和藤内は皇女なるを知り、且つ明の危急を聞いて父母に告げる。　ここに妻の小睦が嫉妬する可笑しみの場があり、和藤内は皇女を妻にあづけ、父母と共に彼の土に渡つて千里が竹で會する事にし、着いての後は、老一官が本國において來た女が長じて五常軍甘輝の夫人となつてゐるといふが、それにたよることにして、道を別にして向ふ。　和藤内と母とは千里の竹で、李蹈天の

配下が虎狩をする處に行きあひ、きほひかゝる虎と格闘の場があり、母が取り出した太神宮の御秡に恐れて虎は猫の如くに變じ、和藤内の乘物となる。李蹈天の部下は降參して頭を日本風に剃られ、日本式の名をつけられる。こゝが當時盛行の伊勢參宮に持込んだのである。

第三段

和藤内親子は無事に相會して、甘輝が折ふし韃靼王に召されて留守の處へ訪ねつける。甘輝の妻錦祥女は騷ぐ士卒を制して、樓門に上り、老一宮に向つて、父とはなつかしい。されど證據を見せてくれといふ。父は一とせ明を去る時、わが形を繪にして、乳母の許に殘して置いたがといへば、それがはや證據と肌につけてゐた繪を取出し、月に映らふ父の顔を柄つきの鏡にうつしてそれを見分け、樓上で嬉しなきをする。こゝがかの樓門の場で、情景兼ね備る處。夫の留守に男は入れられぬとあつて、母は自らすゝんで縛につき、錦祥女が夫へのいひわけの途を立てて、城に入る。まもなく甘輝は歸つて珍しい親子の

對面。　母は辭を盡して賴み、甘輝は妻を刺殺して女の緣に引かれざるを示さうとし、母は之をかばひ、互に義理の立てあひがあつて、結局相談が出來ず、さらば紅を流さうと錦祥女が化粧室に入る。　母が城に入る時、事が出來れば白粉をといて流し、破れゝば、紅を解いて流すといふ約束をして來たのである。　さうして此の化粧室の下を流れる細き川は、城外に出でて末は黃河に注ぎ入るのである。　和藤內は岸の頭に紅白何れか流れ來るとまつ處に、紅の流れ來るを見て、怒つて門內に躍入り、甘輝に向つて、摑みかゝる。　此の時錦祥女は胸を開いて紅の水上を示し、母もその九寸五分は四百餘州を治むる基、此の上自分が存らへては、始の詞がうそになるとて、それを拔いてわが咽につき立て、和藤內が甘輝に擁護せられ、延平王國性爺鄭成功と改名して、大將軍となつた姿を見上げて、母と錦祥女とは息を引きとる。　こゝが紅流しの場である。

和藤內はどこ迄も江戶歌舞伎の荒事の勇士であり、金平うつしである。　母と錦祥女とは上方一流の義理の立てあひで、勇ましくもあり義理も人情もある

ので大いに受けた。

第四段

小睦と皇女の明への道行に起り、住吉の大海童子が小舟で渡すといふ趣向。つゞいて后の腹より取り出せし太子を守り育てゝゐる吳三桂は、九仙山に於て仙人から國性爺が四年の間の戰況を見せてもらひ、一時と思ふうちに五年の月日を送る。そこへ鄭芝龍が小睦と共に皇女のお伴をして來て、奇遇を喜び、よせ來る韃靼勢をみな殺しにし、相共に福州の城に入る。

第五段

幼太子永曆皇帝となる。屋上には伊勢兩宮の大幣を勸請し、敵と決戰の計を廻らす處に、老一官鄭芝龍一人南京の城に向ひしよし知らせて來る。國性爺等驚いて南京に到る。李蹈天老一官を捕へて栖にくゝりつけて出し、國性爺の態度一つにて父を害するといふ。老一官は、父の命は構はず戰へといへど、國性爺は途方にくれる。三桂と甘輝とは韃靼王に降參の態を示し、躍りかか

つて王を取りおさへ、國性爺は父の縛めをとき、李蹈天を取つて楯の面へくゝりつける。太子姫宮をこゝに御幸なし、韃靼王には散々に鞭打つて國にかへし、李蹈天の首を國性爺、雙の手を三桂甘輝が引きぬいて禍の根を絶ち、永暦皇帝御代萬歳。

ざつとかういふ筋で、隨分甘いものである。物はづくしもあり、道行もあり、勸進帳もどきもあり、景事もあつて、大きに盛澤山な作品である。かの世話淨瑠璃の引きしまつてゐるに比しては、散慢で、粗雜で、超人間式でと色々な評も下したくなるが、それが西鶴の鋭さに比して近松の平俗な所で、それによつて觀客をひきつけ得たのであつた。平俗といつても、目先が變つてゐるだけでなく、文字の上には奇智頓才が縱横に發揮されてゐる。世話物程の濡れ場や愁歎場がないが爲に、潤ひ氣が少く感ぜられ、文章もさう卓出してゐないやうに感ぜられもしようが、時代物としては最も文字の洗煉せられた作であることを感ずる。五段のすべてにわたつて筆にたるみがなく、くすぐりに陷つた處もなく、割合に洒落を少くして、きはめて正

面から力をこめて叙してある。時代物ではやつぱり第一の作品といふべく、彼が劇に對して虛實皮膜の間を行くといふ主義主張が、最もよく實現された作品である。かの樓門の場に於て、月夜に樓下の人の顏をいかでか鏡にうつすことが出來よう。出來ぬことではあれど、其の場面の情味がゆたかなるが爲に、人々は理屈を忘れて之を喜び、遂に忠臣藏に於ても祇園の場に使用されて、「おかるは二階にのべ鏡」といろはがるたにも用ひられるに到つた。九仙山の場にしても、覗き眼鏡ならぬ限りは見られない事であつても、觀客は其の趣向の奇拔を喜んで、事理に合するや否やを討究するの餘裕を有ち得なかつたのである。全く作者の手腕の結果で、同時にそのかげにひそむ大努力を、我等は想像すべきであらう。近松の手紙にかういふのが遺存してゐる。

唐音之書御かし。作中見申度候。デコデキノボフシヤノノ〵衣などの類。

詞の違は數多候事に候。委細は御面談に腹をかかへ可申候。かしこ

五日　　　　　　　　　　　　　　信盛

半醉樣

確に國性爺物の作をしてゐる時に友人に贈つたものらしく、此の手紙の所有者が國性爺の正本の繪表紙で表裝して居る。詰まる處、唐音などは怪しげなもので、陀羅尼や咒文をいゝ加減に入れて聽者觀者を煙にまいた。しかしそれが、人形芝居によく調和してゐたことが考へられる。但し今の正本には此のデコデキノボフといふ文句は國性爺合戰にも其の續編たる國性爺後日合戰にも、唐船噺今國性爺にも見えてゐない。察する處、唐音が人々の注意をひいた時代で、唐音和解といふ二冊物の書も正德六年の秋即ち此の國性爺合戰の興行中に刊行されてゐる。隨つてあんまりな出たら目は取除いて、世人の耳に近いもので、愛嬌になるものだけを殘して正本を公にしたのであらう。七行本即ち享保年中の板式のものが多くて、正德年中の物らしい八行本にはまだ出逢つたことがない。

さて終りに、此の作が三年越十七ヶ月といふ長年月の間興行し得たことは世界中の演劇にもさうは類例を見出せないであらう。試みに入場觀客の數の上から

して之を考へて見たい。一日如何にしても四百人の見物を要したことは、その劇場の廣さや一座の人員の上からしても判斷される。それが滿十七ヶ月續いたとして計算すれば、觀衆の延人員は二十萬四千人になる。當時大阪の人口は何程あつたか、まだ調べておかないが、文化元年の調査では三十七萬五千五百卅一人であつた。これよりざつと百年以前の正德年中には三十萬を超えなかつたであらう。さうすれば大阪人は老幼を問はず生れたばかりの乳呑兒達も入れて、三人に二人は見物人として入場したといふことになる。けれども十歲以下の子どもはあの複雜な筋、あの難解な語句を解する筈はなく、他に病人や老衰者で見物のできなかつた者があるべく、劇の見物に行き得る者は先づ以て總人口の二割にも達しないのが常である。さう假定すれば、大阪人は少くとも三度位づつは國性爺合戰を見物したとして考へなければならぬ。けれどもこれは許さるべき事ではない。今歌舞伎座以下の各座の觀衆に就いて考へて見るがよい。その大部分は東京の人でなく、地方人である。ひとり芝居ばかりでなく、一切の觀覽物興行物は概ねさう

である。思ふに正徳年中もさうで、常に大阪人よりも地方人の方が多かつたのであらう。元來商業地の大阪であれば、此の推定は許され得ることだと思ふが、特に地方人が此の大阪に集るか、又は此の大阪を經由したことがあれば、此の推定には根據があるといふことになる。私はそれを寶永以來の伊勢參宮の旺盛であつたことに結びつけて考へたい。伊勢へは、多い日には何萬人となく參つたが、それが人々から金品を惠まれて、何の不足もなく往還したのであれば、此の人達は芝居の觀劇料位には事を缺かず、此等の人によつて此の國性爺合戰も長興行が出來たのであると思ふ。元來元祿より享保にかけては、物見遊山の極めて盛んに行はれた時であり、開帳や物詣の流行つた時であれば、かうした觀覽物が榮えたのに何の不思議もないのであつた。國性爺合戰は實にいゝ時にいゝ趣向を立てて興行したものといふべきで、我等は改めて近松の慧眼に服せざるを得ない。けれども此の劇のあつたあとに、引續いて竹本座では國性爺後日合戰を出した。これはどう思つてのことであらう。俳人大江丸の「俳諧懺悔」に近松が國性爺のあとに更に工夫

をしようとすると、座主の竹田近江が、此のあとにはさらつとしたものがよからう、一年や二年暮す分はもう國性爺で儲けてゐる。まあ舊作でもくり返してゐるがよからう。その内には又いゝ趣向も出るだらう。あんまり上へ〳〵と趣向に趣向を重ねたら、此の家業はつきてしまはうといつたとかう記してある。これが事實だとすれば、近松は此の道理のある提言に隨はず、自己の才を恃んで、強ひて後日譚を作つて、強ひてそれを興行させたことになる。さうして其の後日合戰はあんまり當らなかつたのであつた。もし近松の主張の下に行はれたのだとすれば、作者の氏神にとつて、それは千慮の一失であつた。けれども此のあとに出した世話物には、實に傑作が多かつた。槍の權三重帷子や壽の門松や、博多小女郎等が引續いて作り出された。けれども作者にはまだ未練があつたのか、それとも世間からせがまれたのか、五年あひを置いて唐船噺今國性爺を出した。これも亦二月とも持ちこたへられず、きはめて不入であつた。不入の事は、すぐあと作が出來たのと、正本の傳つてゐるものが極めて少いこととによつて知られる。而して此の作を

出した後には、心中宵庚申と關八州繫馬とを出しただけで、近松は筆を擱いた。さうしてざつと一年をくらして歿した。今はの際に近松は作者としての五十年間を回顧して、何の遺憾もなかつたであらうが、もしあつたとしたら、それは國性爺の龍頭蛇尾に終つたことであつたであらう。しかしながら、これが歌舞伎にも續々演ぜられてゐたので、心中天の網島を作るころ迄は大きに自慢で、その上の卷のてんごう念佛の場にも出し、小春にもいやな客を李蹈天といはせてゐる。やはり誰人も過去のわが成功を思ふことは、不成功を思ふのに幾倍かするものであれば、此の偉人も國性爺物の蛇尾に終つたことに氣づかずに死んで行つたかも知れない。いや〳〵自己を見る目もあつた人と思はれる。決して成功ばかりを想起して、微笑して瞑目するといつた、そんな甘い人であつたとは思はれない。

3 歌舞伎劇脚本

昨日は淨瑠璃の方面に就いてのみ近松の作を述べたが、今日は歌舞伎芝居の脚

本の方面に就いていふ。近松が七十二年の生涯は之を作の上から前後の二期に分つべく、前半生は其の五十歳迄であつて、まだ京都に住んでゐて、都萬太夫座の爲には歌舞伎劇の脚本を、宇治加賀椽の爲には淨瑠璃に筆を執り、時には竹本義太夫の爲にも作をしてやつてゐたのである。さて五十一歳の時大阪に下つて、曾根崎心中を作り、其の頃から大阪に住みついて、此の大阪で歿するのである。先づ以て五十一歳以後の二十二年間を後半生と見るべきである。後半生は専ら竹本座の淨瑠璃に力を致し、前半生はむしろ歌舞伎劇の脚本に主力を用ひてゐて、その作品は多く京の都萬太夫座と早雲長太夫座とで興行された。總計幾篇の歌舞伎劇脚本が作り出されたのか詳かでない。けれどもざつと三十篇位はありさうで、其に私の編纂した近松歌舞伎狂言集にも其の二十四篇を收めてある。他に外題だけが知られて、繪入の筋書本に接しないものも四五篇ある。彼が二十五歳の時、都萬太夫座の爲に作つた「藤壺の怨靈」なども其の一つである。存在してゐる二十四篇は、時を以ていへば、近松が三十二歳の貞享元年から晩年の享保の初年に迄わたる

のであつて、主なる作品は元祿年中に作り出されてゐる。

かういはば、諸君は直に、あの町人全盛の世に、町人を目あての興行物であれば、定めつ濡れ氣澤山な色模樣づくめな物であつたであらう、おそめ久松・お夏清十郎といつたやうなものが一つの狂言に幾組も出たことであらう、觀衆はそれに目を細めて、唾をたらして、煙管の雁首を口にくはへて無中になつてなどと想像されるであらうが、事實はそれと違ふ。もしそんな場面だけなら、若女形と若衆方とだけあれば、他に立役も道化方も花車方も敵役も親父方も入らないことになる。然るに、主として善人又は正義の士に扮する立役が最も重んぜられて、これが第一の高給(上上吉、年五〇〇兩をとり、若女形がこれに次ぎ(上上吉、年三〇〇兩)若衆形や道化方は若女形のざつと半分、花車方や敵役は若女形の三分の一の給金であつた。此の俳優の給料の上からしても、芝居の仕組は想像し得られるであらう。主要の地位に立つものは立役で、若女形は其の相手といつた風で、敵役以下は其の取り合せといつた工合である。最も立役や若女形・若衆方等は一人づつにきまつてゐたので

ない。立役は五人も六人も出勤した。

金次第の世で、遊里が繁昌の世で、町人連が華奢を好んで、今に元祿模樣・元祿好みの語が行はれる程の派手な時代であり、山や舟や藥種の買置や、土地の賣買で成金の多かつたことは全く大正の初年と同樣であつた。成程廓場や濡れ場が必ずどの芝居にもあつたが、それが決して純世話物でなく、殆ど皆御家騷動物に作つてある。一見しては奇異にも感ぜられようが、それにはかうした理由がある。

義理と人情との衝突を說いて、しんみりとした場面を見せようといふには、人に想像の餘地を多く與へることの出來る人形芝居の方が却つて適してゐる。さうして元祿人に見せる歌舞伎芝居は、もつと大びらな、大がかりな舞臺でなければならなかつた。さうかといつて、人形芝居の時代物のやうに、時の古今や場所の遠近を無視して、大ざつぱに運ぶ事は、俳優によつて演じ出される歌舞伎劇には到底許され得べきことで無かつた。歌舞伎劇にはかなりの處迄社會の縮圖であるべきことが要求された。といつて、寫實本位で頭の禿げた家老や不器量なお姬樣や低

能兒と評定すべき面相の若殿様や、お白粉がどうしてものりさうもない部の娘や、ひつかぶつてゐる世話女房や、そんな人達ばかり出る芝居では、見た目が惡くて、觀衆の滿足を買ひ得べくもない。はやく能狂言以來夢幻式の仕組に馴されてゐて、實際以上の誇張に興味を感じて、所謂お芝居なるものは必ずしも現實に合するものでないと思つてゐる見物、單に娛樂の爲に觀る物だとして考へて來た因襲に支配されてゐる見物は、相當に誇張せられた、美しい場面を要求してゐたのである。殊に近松は昨日もいふが如く、藝は虛實皮膜の間を行かうといふが主義で、劇中の人物の詞遣ひなどには、身分階級の差別を明かに示さうと力めながらも、誇張の緊要なことは痛切に感じてゐた。此等の事は近松半二の父穗積以貫に語つたことがあつて、以貫の著、難波土產の首卷に詳細に記してある。此の趣意で、元祿町人の滿足を買ふべく歌舞伎劇の作を爲すとすれば、事件を一町人の上に假設して、起因と展開と結末とを演じ出して見せるといふことよりも、然るべき大名高家の上に組み立てて見せる方が、場面も大きく、各種の人物をも出し得べく、同じ遊里の場面

にしても、すべてが大びらで、花やかな寛濶ぶりを示し得る、さうして大名高家の若殿が浪費の果には落魄する處を見せるにしても、一町人の我儘息子といふよりは、對照が大きくて、一段と見物の同情をひくべき筈である。どうしても貴族の事にする方が邸宅・服飾・行裝より始めて、一切が美々しくすることが出來て、濡の場でも、廓の場でも、はた又斬合の際でも、大袈裟で、それが元祿人の好みに合した。まだまだ武道事も大きに喜ばれてゐたのである。但市井の事實、例へばお初德兵衞や小春治兵衞の心中、油屋與兵衞の殺人强盜、お夏淸十郞の淫奔、飛脚屋忠兵衞の遣ひ込み、お龜與兵衞やお千代半兵衞の夫婦心中といつたやうな事件は、時人が周知の事件だけに、大した誇張は許されず、かなりの處迄眞事實を寫し出さなければ觀客の滿足を買ひ得なかつたのであつて、到底之を大名高家の所爲所行とは爲し得なかつたのである。即ちこれ等は寫實を以て立たなければならぬのであつた。

近松が歌舞伎劇の作品を多く出した元祿年中は、此の人がまだ世話淨瑠璃に筆をつける前で、純粹の世話物即ち市井の出來事を、其の主人公の一族や官憲から故

障制裁の下らない限度に於て、綴り出して之を演出させるといふことはまだ試みられてゐなかつた。さうして時代と世話との中間といつた處で、作者も觀客も滿足してゐた。近松の歌舞伎劇の脚本はかういふ時代に、前述の如き理由があつて、御家騷動物としてのみ多く仕組まれたのである。

こゝに私は此の御家騷動の結構を述ぶべき順序であるが、それに先立つて當時の劇場や俳優に就いて略述しようと思ふ。之を豫備知識にして戴く方が、一二の作の荒筋を說くにしても御理解がよく下りさうに思ふ。

最も多く近松の作を興行した都萬太夫座の敷地は、表口東西十四間四尺、裏行南北三十間二尺で、四百五十坪弱、今の歌舞伎座の敷地に比しては、やうやく其の四分の一である。建築は棧敷だけが二階建であつた。平土間は固より詰込主義で、今の椅子席よりも多く入れ得たであらうが、收容し得た觀客は、今の半分以下に止り、舞臺の幕張は七八間、演出用の奥行は五間位であつたことと思ふ。

俳優の數は當時一座平均三十人强といふ處であつた。さうしてそれに立役・若

女形・若衆形・道化方・花車方敵役・親爺方等の區別があり、別に子方や口上方もあり、又此等に附屬してゐる番頭・若い者・見習及び床山即ち鬘方・大道具方・小道具方・囃子方・お帳場等を合せると、百人に近い人數であつた。此等の人の生活を保證する者は興行主であつたとはいへ、其の根源を爲すものは脚本であつて、近松は其の最第一困難な役を引請けてゐたのである。幸にして當時、

立役　坂田藤十郎　大和屋甚兵衛　柴崎林左衛門　片岡仁左衛門
　　　中村四郎五郎　藤川武左衛門　櫻山四郎三郎　山下京右衛門
女形　霧波千壽　水木辰之助　淺尾十次郎　岩井左源太　芳澤あやめ
若女形　袖崎いろは　袖崎歌流　瀬川竹之丞
若衆形　小野川宇源次　村上竹之丞　大和川甚之介
道化方　金子吉左衛門　天井又右衛門　福岡彌五四郎　山田甚八
敵役　三笠城右衛門　松永六郎右衛門

等の名手があつて、近松の作を巧に演出した。否近松は此等俳優の特技を觀破し

て其の所長を遺憾なく發揮せしめるやうに作つた。さうして此等の俳優も名を揚げることが出來たのである。今私は此等の一人々々に就いて得意の藝を說くべき時間は有たぬので、一切省略に附するが、最も深い關係のあつたのは坂田藤十郎と金子吉左衛門であつたことを述べたい。藤十郎はお家の若殿役を勤めて濡とやつしとに於て拔群の技を見せ、吉左衛門は趣向案出の上に參加して、自分の持場を活かすことに於て有力であつた。近松の脚本には、いつも阿呆が出て、際どい處で笑はせ、或はとんでもない破綻の生ずる一因をなして、觀客をして笑を禁じ得ざらしめる。さうしてそれが嘉すべき緩和をなして、觀衆の困憊を輕減せしめた。それには此の吉左衛門の藝が與つて力あつたのである。又立役の藝風と若女形の藝風とは、道化方以上に作に影響を與へたもので、それが愛着煩悶を演ずる場面には、作者も特に酌量や工夫をしたことであらうが、委しい書留が無いので、私は今力强き自信を以て、これに對する說明は下しかねる。情無いことには、現今のやうな詳細な脚本が出來てゐず、隨分その時その時によつて、臺詞や科も違つてゐたら

しい。即ち演出者に今よりも多くの自由が許されてゐて、脚本は當今の如く固定的のものでは無かつたらしい。脚本の詳しいものが刊行されるといふことは、ずつと後のことで、元祿や寶永の當時は、半紙本の十丁か十一丁程度のものに、挿畫が三四面あり、他は至極の細字で說明してあつて、極めて文字の小さきが爲に、貳本といふ餘り清潔でもない名を附けられてゐる。詰り繪入細字の筋書本で、通常繪入狂言本と呼んでゐる、それが稀に傳つてゐるだけである。それでも役人替名が全部あり、上本と稱して二冊になつてゐるものは重要な白(せりふ)や小歌や舞臺面の轉換等がよく記してあつて、劇の光景だけは想察することが出來る。出來ても脚本として見るには不完全なものである。不完全な物であつても、それが澤山遺存すればそれによつて的確な判斷も下し得るが、その傳つてゐるものはごく尠い。尠いのには道理がある。今でこそ其の一冊が百金二百金を値し、重要な典籍として特別取扱を受けるが、近松の當時にあつては別に珍しいものでなかつた。今の我等が十錢出して買ふ芝居の繪草紙と何等擇ぶ處の無いものであつた。自然置き棄て

にもし、之を持歸つたにしても子どもに與へてしまふといつたやうな處分をして、百年二百年の後に、好事の人にかうも尊重されようなどとは思はなかつた。其の結果は、今此の繪入狂言本を四五冊集めるとしたら、淨瑠璃の丸本百冊を集めるよりも遙に難事である。今日ここに一二冊持つて來たが、同好の諸君には之を見本にしてどこよりか之を搜ね出して、世に紹介して頂きたい。まだ〳〵かういふ類の書が好事家以外の山間僻地のどこやらにも埋れてゐはしまいかと思はれる。

近松の歌舞伎劇の概說はこれに止めて、代表作として見るべきものの梗概に移るであらう。

けいせい佛の原

元祿十年に京の山下座へ上つた江戸の名優中村七三郎が、自作の狂言「傾城淺間嶽」は好評嘖々であつた。是は十一年の二月、東山に淺間嶽普賢菩薩の開帳があつたのを當込んで、遊里趣味たつぷりの御家物に仕組んだのである。近松は是に對抗してやはり東山に箕面山の辨才天の開帳があつたのに結びつけて三都の廓を

見せるといふ趣向を立て、江戸歸りの若女形水木辰之助に奴高尾をやらせて、坂田藤十郎には最も得意の買手にならせたのであつた。けれども恐らく江戸へ來たことは無かりさうな近松であつたから、どうしても江戸情調は出せず、見事に失敗して、萬太夫座は不入であつた。次いで一心二河白道を出して張り合つた。これは時代世話の中間で、お家物でなく、珍しくも戀愛物語であつた。かの淸玄櫻姬の一件で、纏つたよい作であつたが、やはり七三郎一座の人氣には及ばなかつた。十一年は、それで暮れて、十二年の正月に至り、近松が苦心の作「傾城佛の原」を興行させると、これが京阪地方に大評判で、二年以來の不入を取り返すことが出來た。淺間嶽がもう鼻についてゐたといふこともあつたであらうが、此の佛の原の出來が甚だよかつた。さうして近松の代表作の一に數ふべきものと思はれる。ざつと其筋を述べるであらう。當時慣用の上中下三幕より成る。

第一

越前の國主、梅永刑部の總領文藏は三國の傾城奧州に溺れ、次には撞木町の傾城

今川に馴染んで一子をあげる。此の文藏は立花主計の女竹姬と許嫁の間柄である。今しも主計の家老の子藤脇一角が姬の伴をして梅永の館に來ると、城内より家老の望月が文藏と今川との間に出來た子をつれて出て、ぱつたりと出あひ、詰開きの末、和解が出來て、望月は一角と竹姬を自分の家に伴ふ。さて文藏の弟帶刀は、兄の追放を企て、浪人介太夫を雇つて、立花家の家老藤脇玄蕃と名のつて來て借金の催促をさせ、帶刀はそれを文藏の遊蕩費であつたと申し立てて、大殿即ち父に勸めて兄を阿呆拂にする。そこへ望月と一角と竹姬が來合せて、僞玄蕃が露現する。介太夫は今川の實父なのだが、帶刀も望月もまだ知らない。落ちぶれた文藏は紙衣編笠姿になつてゐる。一日、さる大家の下屋敷で歌ふをきけば、それは三國の奥州がふしをつけたものである。入り込んで樣子を伺ひ、腰元が月に供へた餠を懷へ入れる。次いで手水鉢と間違へられて頭へ御酒をのせた三寶をのせられて、そつと御酒を吞むことがあり、手に水をかけようとして頭をごつ〳〵やられる可笑味などがあつて現れて逃げる。その時、文をたく

さん入れた風呂敷包を落す。腰元がそれを拾つて、女主人の前に出して調べる。女主人といふのは奥州で、ひとに引かされて、今こゝにゐるのである。そこで文藏を呼び入れて身の上話をさせてから出て、これは〳〵。そこへ竹姫が來て、文藏をつれ去らうとして、門外へつき出されて氣絶する。さて奥州と文藏とで盃をすれば、竹姫の胸から火焔が舞ひ上つて奥州の盃に入り、奥州が竹姫に代つて文藏に怨をいふ、其處へ帶刀が來て、生きかへつた竹姫に事の次第を問ひ、侍どもに命じて侵入させる。奥州は文藏を屋根からにがし、侍を井戸の中へつきおとして槍で突き、文藏を突殺したといふ。そこへ侍どもが大殿をつれ來ると、介太夫がいきなり肌をぬがせて大殿の腹を一文字に切つて自殺の體にする所へ家老の望月が來て、竹姫を奪ひ取り、斬合つて帶刀や介太夫を追ひやり、奥州をも作つてわが家に歸るといふ筋。

文藏はいふ迄もなく立役の坂田藤十郎、家老望月は立役の柴崎林左衛門、傾城今川は霧波千壽、傾城奥州は岩井左源太、帶刀は敵役の三笠城右衛門、介太

夫は立役藤川武左衛門の持役であつた。

第二

遊里の場面で、文藏の下人阿呆の三五郎（金子吉左衛門が三國の揚屋柏屋へ幇間伽羅の佐七をつれて來て、いろ／＼吝い所を見せて笑はせる。傾城今川が抱主の息子玉屋新兵衛とこつそり出合をする爲に、柏屋へ來る。柏屋の亭主作右衛門が内の女郎との內證事は禁止されてゐると、やかましくいふ。新兵衛は焦れ死もすべき苦しさに、年季證文を盜み出して來た。之を渡せば他人、他人ならば差支あるまいといふ。作右衛門が承知して、二階へ上げる。今川がその後から行かうとすれば、阿呆の三五郎ひきとめて、文藏が阿呆拂にされたことと、國の騷ぎのあらましとを語つて、今川を恨み、文藏樣は今乞食の境涯で、一子藤松をそなたに渡したい、いやなら殺すといつてゐられる。今そこへ虚無僧になつてあひに來られる筈だといふ。そこへ文藏が來る。三五郎は子供と奥州とを作れに出かけて行く。文藏は上り込んで、布團をかぶつて炬燵をよそふ。さうしてそ

れにあたらうとする遊女二人をたらし込んで色事にもなりさうになる。そこへ今川が出て怨をいひ、朋輩の遊女は今川と新兵衞との出あひをすつぱぬく。文藏は散々に今川をあてこする。此のあたりが見せ處で、見物が最も喜んだと思はれる。今川は、これといふのも年季證文を取つて出て行き、文藏に一生添ひたさの爲だと語る。所へ奥州や子どもが三五郎と一しよに來て、和解は出來るが、奥州は念の爲にと證文を調べさせて見ると、意外にも、今川の父が乾介太夫であつて、一同はこれは／＼とあきれかへる。今川はそれを聞いて、親は親、夫は夫といふが、文藏は、

コレ今川こゝでこそ潔ういやれども、追附け親介太夫が首取つてそなたに見せたらば、嬉しうはあるまい。夫婦一所に寢ても、親の事を思ひ出した時は、口ではいはないでも、心に思ひゐれば、今の別れがいつそましぢや。子迄ある中を、何が別れたからう。今そなたと夫婦にならば、ヤレ女房と思ひかへ、敵の娘を女房にしたなどと取沙汰あらば、某が恥辱なり。何たる過去の因果かや。

とかく暇をやつた。さて此の藤松もそなたへ渡す。のち〳〵は出家にもしやれ、親子の縁もこれまで。

と涙ながら子どもを今川に渡し、

その方も親の菩提を弔やれ。幸ひ月窓寺は某が縁ある寺なれば、此の寺に行き菩提をとや。誠に此の所は昔祇王祇女佛御前三人の遊女の寺なれば參詣したまへ、最早歸る。

といつて泣く〳〵別れる。こゝが泣かせる處で、第二の前半とは打つて、變つて見物をしめらせる。かの祇王や佛の事蹟を作つた謠曲には「佛の原」と題してある。此の作を傾城佛の原と題するのも、此の月窓寺の沓はきの彌陀を東山で開帳するのに當て込んで作つてあるが爲である。

さて今川は藤松をつれて、夜ひそかに父介太夫の家を訪ふ。介太夫はそれと知らず藤松を斬る、斬られてよろぼふ處へ、文藏・望月忍び入つて介太夫と戰ふ。今川割入つて樣子を語る。介太夫は婿殿とは知らなかつたといふ。そこへ帯刀

が來たのを、介太夫はたばかりおさへて刺殺し、さあ我を斬られよといふ。文藏は親の敵覺えたかと、介太夫を太刀で打つまねをして、さあ敵は打つたと喜ぶ。そこへ奥州・竹姫・一角諸共に來て、皆々つきせぬ縁だといひ、介太夫も禮儀を述べて、再び治る梅永の家の榮ぞめでたかりけれ。

第三

竹姫・奥州・今川の三人が音樂の役人となつて、沓はきの彌陀の前で佛事供養をし、洛中の人が群集して櫻かざして幕毛氈、歌ふも舞ふも法の聲で終る。

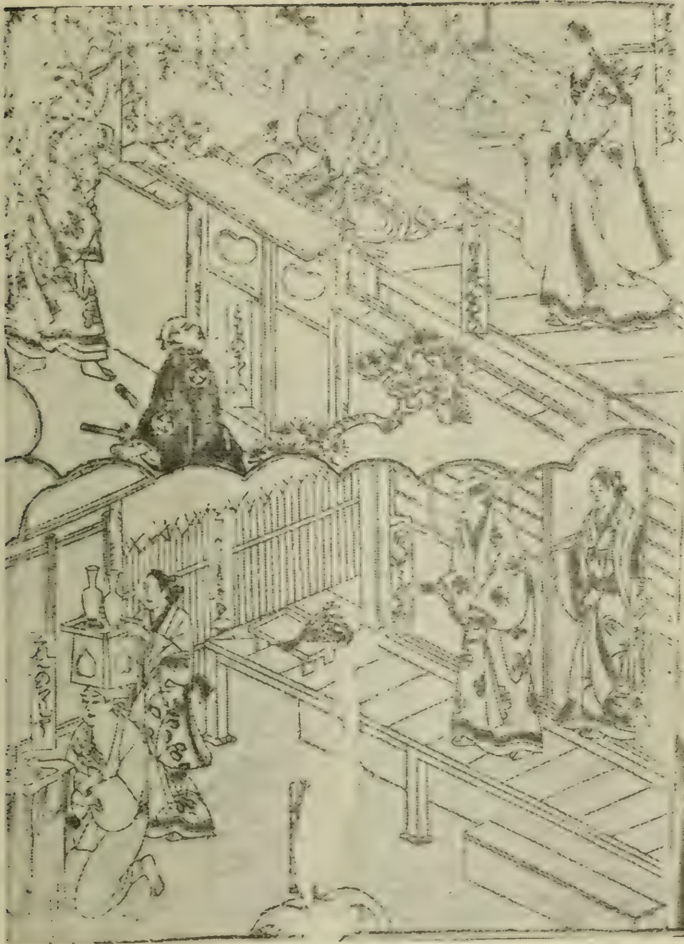
此の作は、作者自身も大きに自慢であつた。さうして之を自作の淨瑠璃「天鼓」の中へ作り込んで、竹本義太夫に語らせた。又役者の方からも此の後日譚を請求したのであらう、引續いて、

後日　龍女淵

三の後日　三階藏

の二作を出した。これがすべて近松と金子吉左衞門との合作であつた。龍女淵

はまだ見た事がないので、紹介は出來ないが、三の後日の「三階藏」の筋から判ずれば、今度は叔父の監物が梅永家の押領を企てて、竹姫を殺し、姫が龍女となつて苦しみを受けてゐるといふが立筋であるらしい。　三階藏は、監物等奸惡黨一派が文藏今川並びに家老の望月を毒殺しようとする處に始まる。　望月にあばかれて監物閉口の處へ、隣國よりの使忠太左衛門が來る。　これは奥州の兄で、奥州は今、家老の望月の妻になつてゐる。　其の使が、「乾介太夫が遣込をして出奔した、其の子の今川だ引渡せ」とい



天　鼓


挿畫

ふ。これは監物に頼まれての狂言であるが、看破されてしまふ。

第二は文藏がまだ奥州に未練があつて、家老望月の家に忍び入り、椽の下にかくれてゐて見つけられる。奥州は心配するな、來た翌日にもう去り狀を貰つてゐるといつて見せる。文藏が燈火の下で見ようとすれば、その火は消えて、去狀は火焔となり、竹姫の幽靈が現れて苦患を語り、人間と肌をふれねば歸らぬとて、蛇身となつて手水鉢に入り、文藏は絶死する。此の手水鉢の水を呑ませると、文藏は生きかへつて、水を吐き出

す。それが蛇になる。これで人間の肌にふれたわけで、竹姫は成佛をしたといつて消える。

文藏は監物の爲に志を得ず、又落ちぶれて順禮となり、今川は遊女となる。文藏がさる金持の女にたのまれ養子婿と遊女との緣を切つてやる爲に廓へ行く。行つて見れば遊女といふは今川。養子が遊女を身請の段になつて、養子といふは家老の望月の娘が變裝してゐたのであつたことが知れ、一同喜んで引上げる。

第三は一同歸國の上、惡人を亡し、一家中の者が流行浴衣を着て祇園踊をするといふので終る。つまり秋狂言であつて、佛の原では今川の父が敵の側にまはつてゐたのを、此の三階藏では奧州の兄を敵の側にまはして仕組んであつて、全く同巧異曲である。此の三の後日に、藤十郎が文藏として成功したことは吉左衛門の耳塵集といふ書に見えてゐるが、さう大して當つた作ではなささうである。かの國性爺も三の後日の唐船噺今國性爺迄出して、さう當らなかつたが、興行主も作者も今度こそは〳〵と思つて慾に目がなく、人の心にあきの來ることに氣づかなかつ

た詬を免れまい。併しながら、最初の佛の原は大當りで、藤十郎は其の利得によつて、風呂屋町に間口九間半奥行三十間といふ大きな屋敷を買つたとの事である。給金以外に利益配當をうけたのであるべく、御祝儀の蓄積といつた譯ではあるまい。

他にも傑作はまだ〳〵あるが、筋の紹介はこれで止める。さうして近松作の御家騒動物に結びをつける。お家物には、凡そ型がきまつてゐた。先づ或領主が早く歿し、嫡男は傾城に溺れて身を持崩す。後室は繼母で、其の生みの子に家を嗣がせようとする。それでなければ弟か叔父かが押領しようとする。家老以下の家來は正義派と奸惡派とに分れて、奸惡派は繼母や叔父の意を迎へ、正義派は御家の爲に嫡男の改心に努力する。さて嫡男には大てい許嫁の姫があつて、すでに嫡男の家に來てゐて空閨を守つて居り、それが惡人の爲に、非業の死を遂げるが、守り本尊が身替りに立つて下されるといつたやうに仕組む。又傾城はあく迄義理を立て意氣地を貫いて、落ちぶれ果ててゐる嫡男の爲に、身も命も顧ない。時々は身代

りにも立つ。此の間に正義派の人々の苦心や、道外方の爲に特に設けた阿呆の下人が出て來て笑はせることも仕組んである。結局は惡人亡びて御家は安泰といふことで、總じては遊里文學とでもいひたい程に、廓の處が見せ場になつてゐる。西鶴物や八文字屋物を見ると、遊里に遊んだものは町人が主であるが、大名高家の人たちも交つてゐた。恐らくそれが爲に騷動の起きたこともあつたであるべく、お家物はかなりの處迄實情を描いたことであらう。併しながら觀衆の見聞するのは、町人の家に起つた紛雜の方が遙に多かつたが、それでは、舞臺面が貧弱に陷るので、近松はお家物を選んだとかう見るべきであらう。さうして、それは元祿といふよりは數十年前の慶長元和寛永といつた頃の出來事を仕組んだものである。此の事は諸家の記錄の上からさういへさうである。

さて元祿は歌舞伎劇に取つても第一次の完成期で、あらゆる型は既に案出されてゐたといつてよい。さうしてそれには近松が大いに與つて力あるのであつて、

近松は淨瑠璃の上からばかりで評價すべきものでないことを述べて此の講演を了へる。

（明治三十九年三月稿）

四　近松が世話淨瑠璃の初作

竹本豊竹二座に於て操にかけたる幾百篇の淨瑠璃につきて、其の興行の年代を知らんとするには、其の當時の番附を除きては、一樂子の著今昔操淨瑠璃外題年鑑の類によるの他に途なきものの如し。而して、近松が初めて世話淨瑠璃に筆を染めたる元祿年間の番附の如きに至りては、未だ是に接したることなし。さればたゞ先輩の跡を追ひて、一に外題年鑑の類のみによれり。然るに頃日、近松の世話淨瑠璃につきて、先づ最も古しと稱せらるゝ長町女腹切より始めて、淀鯉出世瀧德、曾根崎心中

と時代順に通讀したるに、結構の巧拙は暫く措きて、長町と淀鯉との二篇が、文章のどことなくひきしまりて、然も華麗なる、當時の俗謠、謠曲、大黒舞等の詞を巧に點綴して聯珠の美をなせること、それより後年の作と稱せらるゝ曾根崎心中・薩摩歌等よりも却て一段すぐれたるが如きを感じたり。こゝに余は此の二篇につきて、其の內容の上より見て、其の興行の年代を明めんと欲し、再三これを通讀したるに、淀鯉は寶永六年頃の興行にして、長町は正德二三年頃の興行ならんと思はるゝに至れり。左に愚考を陳べて先覺の敎を乞ふ。

一　長町女腹切

これはかのお花半七の情死を仕組めるものなり。此の情死の實說につきては詳しきことを知らず。たゞ關根只誠の戯場年表に

元祿十二年八月七日　大阪にてお花半七情死。歌妓井筒屋かめ抱お花、情人道修町刀屋半七と云。此情死男は咽を突き死に切れずして三日目に死す。女は腹を切り、後咽へ突立即死す。
此事を同年十二月竹本座にて近松門左衛門作にて長町女腹切と名題して翌年五月迄興行。

とあるを見たるのみ。(外題年鑑には元祿十三年正月六日を長町女腹切興行の初日とし、淀鯉出世瀧德の初日を同年四月八日と掲げたればこれとは少しく相違せり)元祿十二年八月に情死ありて、同十三年正月より興行せられたりといふこと甚だ信ずべきに似たれど、此の作の中之卷に

紙屋で候のごふくやで候の。すのこんにやくのと借錢が今の金で七八兩。其上おやじも長者ではなし。あの子にかゝる身でないか。がらり二十兩まー年切まし。ゐなりにゐれば借錢も先其ぶん。賣買たかい此せつ二貫目ぢかい廿兩。そなたが手取にあたゝまれば……(山本九兵衞板八行本による。以下引用文皆然り)

と見えたり。元祿十三年の興行とすれば「賣買たかい此せつ二貫目ぢかい廿兩」の句あるはいぶかしといはざるべからず。二貫目はいふ迄もなく銀目にして二十兩は金二十兩のことなり。金二十兩が銀二貫目に當るといへば、銀九十幾匁が金一兩に當れること論なし。然るに元祿十三年は銀六十匁を以て金一兩に換へよと幕府より命じたる年にして、(元祿以前も大差なし)爾來寶永の初年まで銀高くして、幕府より屢金一兩に對して銀五十八匁より騰貴せしむべからずと命じたる程

なり。當時普通銀六十匁が金一兩に當りしことは、これを其の當時の戲曲小說類の上に幾多の例證を求め得べし。すなはち、傾城色三味線(元祿十四年刊)に「金子千兩にての身請。銀に積れば六十貫目なり。」と見え、心中重井筒(寶永元年興行)に「此のいへやしきさうおうに。三ぐはんめや五十兩はかしてやつてくださいやせ」とあるの類これなり。而して銀の下落したるは、寶永三年の寶字銀同七年の中銀、三寶字銀等の鑄られてより後にして、正德元年四寶字銀の鑄造せられたる頃最も甚しかりしが如し。經濟錄にも「四寶に至ては、其の色黑黯にして鏽を生じ、銀の本色を失ひて、鉛錫と少しも異なることとなし、民之を賤んずること土石の如し、國初以來の故銀は、銀六十錢(錢は匁)を以て金一兩に直し、一錢、銅錢百文に直するを常とせしに、四寶の惡銀に至ては、直ひ大に減じて、八十餘錢を以て金一兩に直し一錢を銅錢四十文計に直す、茲に至て土民の患ひ甚し、東國は金と錢とを用て、銀を用ふること稀なる故に、惡銀の害を被ることも輕し、京師より西は專ら銀を用る故に、惡銀の害を受くること尤も甚し」と見えたり。故に「二貫目ちかい二十兩」の句によりて判ずれ

ば、此の作は少くとも正徳元年より後の興行と思はるゝなり。　又同じく中之巻に

……扇屋の。中ゐのまんが供して通るあれは澤村長十郎。あつたら男をやがて大阪へ下り舟。歌流金子も難波津へ。さくや此花其花の。うはさも戀のたねぞかし。

と見ゆ。　元祿十三年正月の興行に係るものとすれば、こゝに澤村長十郎の名あることもいぶかしといはざるべからず。　初代長十郎は寧ろ正徳享保頃を盛時としたる立役にして、享保十九年五十五歳にて歿したる人なり。　元祿十三年は長十郎が二十一歳の時に當れり。　長町が果して十三年の正月六日より興行せられたりとせんか其の前年中の作と見るべく、すなはち長十郎が二十歳の時の作とせざるべからず。　然るに長十郎の直話として古今役者大全に

古澤村長十郎にあふて田舎より出し役者のあつぱれきようなるも見えたり、三ケ津のぶたいになれたるとなれぬは、何を以て見わけんと尋ねしかば、備中屋長十郎家名こたへて曰、……私もおよそ二十餘年のむかし京都山下京右衛門座二ノ替りよめかゞみの狂言に、くはせもの同前の立役是が本ぶたいのふみぞめ、太鼓を打て酒のゑひの仕内、其始二三年はことの外手に心有しが、手をわすれてより段々立身もいたせしと、是享保十二年三月大阪山本京四郎座のがく屋にての物語りなり。

と見えたり。享保十二年は長十郎が四十八歳の時にして、山下京右衞門座の二の替りによめかゞみを興行したるは、元祿十四年のことなり。「是が本ぶたいのふみぞめ」とあれば、此の年を以て實に長十郎が二十二歳の時なり。而して元祿十四年は初めて舞臺に出でたるものと見ざるべからず。またさきの「あつたら男をやがて大阪へ下り舟」とあるに合はず。こゝに「やがて」とあるは、女腹切の下之卷の始に「いそぐとすれど秋の日のみじかきあしのなにはがた。京橋よりくれかゝり……」とも見えて、九月頃の出來事として綴りたれば、當時の習はしとして、役者が十月晦日より翌年の十月晦日迄抱へらるゝをいへるにて、長十郎が京都より大阪の某座に約束の結ばれたるをいへるものと見るべきなり。元祿十三年には長十郎二十一歳にして未だ舞臺に上らざるなり。あつたら男云々といはるべくも思はれず。

又歌流といへるは、當時の女形の名手袖崎歌流のことにて、金子は道化形の名人金子吉左衞門のことなり。「歌流金子も難波津へ……」とあれば、此の兩人も京より大阪に行く約束の出來し時と見ざるべからず。よりて、こゝに長十郎・歌流・吉左衞

門三人の京阪に於ける移動を檢出せば、長町女腹切の興行時代をほゞ推定することを得べきなり。伊原氏の日本演劇史によりて、此の三人の移動を見るに、正德二三年頃が最もよくさきに引用したる文句に合せり。正德といへばあまりに後年にして、やゝ不安の念なきにあらねど、長十郎を「あつたら男」といへるには適す。

（追記）

其の後正德年中の役者評判記を見るに、長十郎・歌流・吉左衞門の三人は同二年の秋までは京都に居り、翌三年の四月には皆大阪に移つて居る。自然同二年の秋の作と定むべきである。

二 淀鯉出世瀧德

此の作はかの有名なる大阪北濱の富豪淀屋辰五郎の事件を仕組みたる物なり。外題年鑑は此の作興行の初日を元祿十三年四月八日とせり。されど辰五郎の事蹟と此の作の內容とは共に元祿十三年の興行を許さゞるなり。先づ其の實說よ

り陳べん。

淀屋本姓は岡本といふ。辰五郎の祖父三郎右衛門は大阪の北濱に住みて材木商を營みしが、大阪役の砌、茶臼山に陣小屋を建てたる功により、家康より山州八幡に於て三百石の朱印地を與へられ、且つ其の請に依て、大阪と堺とに來る干鰯の運上を賜れり。これに依て巨萬の富を致し、邸前に橋を架しては淀屋橋と名づけ、四十八戸前の伊呂波藏を立てゝは、珍寶奇品を山積せり。其子をまた三郎右衛門といひしが、老後古安と稱せり。古安奢侈甚し。百間四方の邸に金張付金襖の大小書院、硝子張の障子を立てたる四間四面の夏座敷は天井も同じく硝子張にして清水を湛へ、金魚銀魚を飼養すといふが如き有樣にて、高位大祿の者も到底及ばざるが程なりき。中國西國の大名にして古安より金を借らざる者なく、借りて返す者はあらざりき。されば家産は次第に傾きたり。古安四子ありしが、三子は早世して末子辰五郎のみ殘れり。辰五郎は古安が六十一歳の時の子にして、元祿四年十歳にして父に別れたり。辰五郎十七歳の時なり、手代等と共に新町に遊びて茨木屋の遊女吾妻に馴染み、翌年これを身請せんとして、身の代金二千兩の調達を手代某に命ず。手代證書に謀判して天王寺屋五兵衛より借りて辨ず。返濟の期に及び、天王寺屋より督促したるに、手代は金策に窮して出奔せり。事官に聞え、辰五郎は自ら知らざることなれど、罪せられて追放を命ぜられ、財産朱印等すべて官に沒せられたり。これ元祿十二年、辰五郎十八歳の時なり。これより辰五郎吾妻と共に奈良にあること數年、寶永六年に至りて江戸に下り、御朱印地の下附を乞ひ、江戸にあること七年、正德五年に至りて許さる。爾來八幡に住し享保年中に歿す(元正間記による)

實説は右の如くなるに淀鯉には江戸屋勝二郎即ち淀屋辰五郎奈良にあること數

年にして、めでたく官許を得たる迄の事を綴れり。更に内容の上よりして元祿十三年の興行にあらざるを證せん。

此の作の下の巻に

　此なつこゝのしばゐへ、竹本が弟子がくだつて、重いづゝをかたつた、是から夕ぎりかはつて、重いづゝこたつのだん。（山本九兵衞板十行本による。以下皆然り）

と見ゆ。こゝに、こゝのしばゐといへるは奈良の芝居をいへるなり。これ明に寶永元年（一說寶永四年）にはじめて竹本座に於て興行せられたる心中重井筒よりは後の作たることを證するものなり。又同じく下之巻に

　なんにもよくはなけれ共、坂田藤十郎が夕ぎりをま一ど見たひと思ふたが、此かみ子で手夕ぎりを仕る。太夫又あひにきたわいの。

とあり。これ坂田藤十郎が存生中の作たるを證するものにして、藤十郎は寶永六年十一月一日に六十五歳を以て歿したる人なり。

故に此の作は寶永元年の重井筒よりは後にして、同六年十一月よりは以前の作たらざるべからず。更に内面よりして詳しく興行の年代を定めん。

下卷の結尾に

五畿内五ケ國神々に先。願ほどきに悦びのへいはくをあげかぐらをあげ。參り治る八はた山此なにはづのゑはう神たみあんぜんこそめでたけれ。

とあり。これ其の興行の年に石清水八幡が大阪の惠方に當りたるをいへるなり。石清水八幡は大阪の東北方即ち凡そ寅の方にあり。東北方にありて惠方に當るは寅卯の間に限り、寅卯の間に惠方のあるは甲(きのえ)及び己(つちのと)の年に限る。外題年鑑に揭げたる元祿十三年は庚辰の歲にして、惠方は申酉即ち西南の方にあり。而して辰五郞の追放せられたる元祿十二年より巢林子の歿したる享保九年迄の間に、甲(きのえ)、己(つちのと)の年は、元祿十二年の己卯、寶永元年の甲申、寶永六年の己丑、正德四年の甲午、享保四年の己亥、享保九年の甲辰の六回あり。かりに右の結尾の文を以て、其の興行の年の惠方が八幡の方に當れりと定めんか、其の興行は以上六ケ年の中ならざるべかず。さて此の間に竹本座一連が夏奈良に下りたることありや、外題年鑑によれば、元祿十三年の夏、寶永五年の夏、正德元年の夏の三回あり。而して又下の卷に、手代新七の詞の中に、

親だんなの十七年忌はないせうでおまへから遊ばすと申なし。おそらくゐどやのついぜんとわらはぬ程のほうじを致……

とあり。親旦那は卽ち元祿四年に歿したる古安にして、其の十七年忌は實にかの寶永五年に當れるなり。

よりて思ふに此の興行は寶永五年の冬、又は同六年にはあらざるか。五年の冬とすれば、大阪より惠方が八幡の方に當るは其の翌六年のこととなれど、翌年の暦は今年の十一月より世に廣まるものなれば、やがて間もなく來べき翌六年の惠方をのべたるものと見るを得べし。又外題年鑑竹本座寶永五年の部を見るに、此の年はたゞ四月十六日を初日とせる酒呑童子枕言葉を前にし、心中萬年草を切にしたる一興行あるのみにして「當夏奈良伊勢へ行、秋より冬備中宮內、藝州宮島へ行」と見えたり。此年四五の興行をなせる竹本座としては、極めてさびしきに、其の翌六年には、正月三月四月九月四回の興行ありて、かなり賑しき年なり。此の上より見れば、むしろ五年の冬に、中國筋より歸阪匆々其の年の打止めに興行したりと見るを

可とせん。されど實說上より考ふれば、淀屋の闕所追放に關しては、元正間記に「此騷動半年に及ぶ。大阪中の騷ぎにて、辰五郎身に覺なきものなり。皆これ手代の仕たる儀なれば、何卒別條無之樣にと願はぬ者はなかりける」と見えたり。かく人に同情を得たる名家淀屋が、寶永六年願の爲め江戶に下るに際して、其の前途を祝ひたるが此の作にはあらざるか。結尾の文といひ淀鯉出世瀧德の外題といひ、皆これを證するものといふべし。

當時辰五郎の事蹟を綴りたるものには、此の淀鯉の外に棠大門屋敷（寶永二年刊、錦文流作）風流曲三味線（寶永七年刊、八文字屋自笑作）等あり。棠大門屋敷は辰五郎の追放を以て終り、曲三味線は辰五郎の歸宅の悅、吾妻の嫁入を以て結べり。前者は此の淀鯉の作と關係なきに似たれど、後者の曲三味線は其の趣向が此の淀鯉より出でたりと思はるゝところ多し。

以上述べたる余の考にして誤らざらんか、近松作の世話淨瑠璃は曾根崎心中に始まりたりといふべく、比較的に信用すべき操年代記が曾根崎を世話物の最初な

りと傳へたることの誤ならざるを認むべきなり。

（大正四年四月稿）

五　淺間淨瑠璃

我が歌舞伎の中に淺間物と稱する一群がある。通し物の劇としては曾我物や判官物程は多くないが、振事即ち世にいふ所作物としては、道成寺物や石橋物の類と共に幾十回ともなく繰返して演ぜられた。道成寺物と石橋物とは共に能から出たものであるが、淺間物は源を支那の反魂香傳說に發したもので、此の傳說は能の蘭曲にも作られてゐるけれど、中幕に用ひられた淺間物はこれに直接の關係はなく、元祿十一年正月江戶の名優中村七三郞が京都の山下半左衞門座に於て演じた「けいせい淺間嶽」の上卷奥州執念の場から出たものである。此の淺間嶽は七三

郎の自作だといふことであるが、眞に當代の名作で、翌十二年江戸に歸つて、山村長太夫座で「京みやげ淺間嶽」と題して演じ、爾後享保十五年迄凡そ三十年の間に三ヶの津に於て、役者こそは違へ十六回までも興行して、何れも大入大當であつたといふ名劇である。先づ序から執念の場までの梗概を述べて見る。

諏訪家の若殿利根五郎、堺の乳守の傾城三浦に馴染み、身請して自分の屋敷へ伴れ行かうとすれば、いやだといふ。利根五郎は憤つて三浦を縛し、封印をして歸る。廓の者之を諏訪家の家老花岡和田右衛門に訟へて出る。(此の時京都の東山に信州淺間權現の開帳があつて、廓の者は所願成就の守札を戴くことがある)和田右衛門が三浦を呼出して見れば、自分が夫婦約束をした遊女の葛城である。怒つて其の不實を詰れば、葛城改名三浦は、利根五郎樣を此の家の若殿と知らずに逢つたが、分つたので身請を拒んで此の縺目、これも誰の爲ぞと怨む。利根五郎は怒つて和田右衛門を追放し、和田右衛門は利根五郎は後室の連れ子で、素性の賤しい者、親子で總領の香羽の前を殺し、家を押領しようとして居ると其の密計を訐き、三浦をつれて立退く。

和田右衛門は落ちぶれて駕籠舁の作兵衛となり、相棒の七兵衛と乳守の禿文字野を乘せて行くと、妻の三浦が迎へに來たので、七兵衛に任せて行き、七兵衛が文字野を背負つて行くと、路次の中で江戸弄齋の「にくやにくしと。思へばいとし。我にひとしき。人しなければ」と歌ふ者がある。七兵衛文字野にすゝめて、「今日とくらせし飛鳥の川の、ならさて、幾夜なん〳〵馴染もかはればかはるよの、朝別れ」とうたせると、路次から局が出て來て、今の歌を姫君樣にきかせてくれと、二人を内に伴ふ。姫は即ち諏訪家の總領香羽の前で、七兵衛が所望されて傾城買の

振をする。文字野は振はよいが、姿が似合はぬ、之を貸さうと、持つて居た包から着物を出す。見れば七兵衛が過ぎし頃馴染の傾城奥州に形見に見よとて遣つた小袖である。(以下當時の臺詞のまゝ)「是はおれが紋ぢや、やい禿、太夫が名は何といふ。」「云ふことならぬ」「おれさいて見せう、奥州とはいはぬか」「いかにも則わしは太夫様の禿ぢや」「うそをいふ、奥州が禿は、式部といふのぢや」「よう知つてぢや、其の式部様は去年の御影供から出やしやつて、今は八重桐様といふ太夫様ぢや、それでわしが奥州様について居ます」「む、此の小袖は形見に、太夫におれがやつたのぢや、おれは小筐といふ者ぢや」「扨は太夫様の戀しいとおつしやる巴様か、こなさまに逢ひたいとの願に、此の着る物を淺間の開帳へ上げさつしやる」「扨は太夫はまだおれを思うて居るか」といふを姫君聞き「お前が小筐巴之丞様か」と抱きつき給へば「巴之丞でござるが、こなたは誰ぢや」「お前といひ名づけのある香羽の前でど



けいせい淺間獄挿畫

ざります」「む、すれば是は諏訪殿の屋敷か」と駈け出づる。 人々引きとめ「なぜ左樣には仰せられます」「さればそなたと云名付あるに、傾城に戯れしゆゑ、親の勘當をうけ、此の姿となり、今なんと逢はるゝ物ぞ」姫君聞き、「それは聞えませぬ、お前の行方知れるやうに、淺間へ願をかけ、開帳に參り、此所へ宿を取り、是で御目にかゝるは、偏に淺間の御利生ぢや、いなしはしませぬ」「すれば此身になつても、某と夫婦に成る心底か」「何が、二世迄でござんす」「おう嬉しい、然らば足を止めう、偏に淺間のおかげ、南無普賢菩薩〳〵」と拜み給ふ。 所に禿は「喃悲しや」と氣を失ふ。 人々驚き、やれ文字野〳〵と呼び生ければ、心づき、「喃あつや、襟にかけた物を取つて下され」といへば、巴そのまゝ取り「是は守ぢや」と云へば、局手にさへ「喃あつや」姫君も觸り「あゝあつや」巴は「めいよな事をいふ」と守りをいらひ「扨もあつい」と棄てれば焔出る。 はて不思議なといふうちに焔止めば



けいせい淺間嶽挿畫

取つて見、最早あつさが止んだと守りを開き見れば、「是は皆起請ぢや、是に願文があるは」と讀みて見れば、「敬つて申す願書一通、僞のなき世なりせばいかばかり、かく我が罪のおそろしからん、とても憂世に生れなば、士農工商の家にも生れず、殊にためし少き川竹の、遊女は何の報いならん、浮れ女に實なしとの御疑を晴さん爲、指を切り髮を切り、起請さへ此の春まで七十五枚書きたう〳〵、あさましや悲しや、我故に知行に離れ、親の勘當うけし人の、執心、夜な〳〵枕に立添ひ、我が指返せ、爪返せ起請の報、噓の塊り、思ひ知らずや思ひ知れと枕にかゝる血の涙、夜に三度畑とたつて此の身をやく、夜晝の苦み、此の身も焦るゝばかりに候。去によつて多くの起請を集め、淺間のお山に納め、後の世の罪を助からんと願ふ、仍而願文一通如件、乳守の遊女奧州敬つて申す」「扨は起請に執心宿つて燃えたるよな、あゝ恐ろしや〳〵。おれも奧州がくれた起請を持つて居る、そなたと夫婦になれば是もいらぬ物、此の起請共に一所に皆燒いてのけう」と懷より取出し、側なる火鉢へ投げ入れ燒きすてる。煙の中より奧州が立姿現れ、怨しさうにすつくり立てば、姬君局腰元禿は是を見「喃おそろしや」と倒れ伏す。巴之丞は何をいふぞと後向きはつと驚き、太刀に手をかけ、「やあ何物ぢや〳〵」小歌へとうてたもつて嬉しやな。とはれて今の恥しや。浮名にもかへ身にかへて、いとしき、殿のいとしぼく。たんと心をつくしたわいの」「む、扨ては奧州か何とて迷うてこれへ出た」「そなたいとしさに、逢ひたうて見たうて語りたうて來たわいの」巴は夢ともわきまへず、あさましの姿やと抱きつけば、ぱつと消え、褄や袂を打ちふるひ見れども人の形もなく、こはそも如何に不思議やと立つたり居たり身を悶え、あきれ果てたるばかりなり。又形現れ出で、小歌上り へ怨も戀も殘りねと。もしや心のかはりやせんとの思ふ疑はらさん爲の誓紙をば、なぜに煙となし給ふ。うらめしや。相ノ手へ胸のほむらは夜に三度、こちの思は日に三度。煙比べん淺間山。あれ御覽ぜよあさましや 相ノ手へ邪淫の惡鬼は身を



景政　雷

責めて。なら劔の山の上に。戀しき人は見えたり。うれしやとよぢ上れば。思は胸をくだく。こはそも如何に恐ろしや。花の姿もよわ〳〵と彼所に立ち。行かんとすれば此所に消え。あるかなきかの春の夜の。朧月夜に果敢なくも消えて形はなかりけり。巴は「扨は起請の一念であつたか。是々」と人人を起し、「兎角女は執心をのこさぬがよいぞ」姫聞召し、「よく〳〵お前を大切に思はるればこそ太夫の姿が現れた。此の上は請出しお側でお使ひなされて下されませ。そなたさへ其の心なら請出してたも。先づ禿には人を添へ送りてたも。いざ先づ後室へもお目にかゝらう」と皆打ちつれ奥へ入り給ふ(下略)

此の時奥州に扮したのは岩井左源太で、七兵衛即ち巴之丞に扮した者は實に七三郎であつた。七三郎の技は神に入つて、當時天下第一と呼ばれた傾城買の



問答挿繪

名人坂田藤十郎をして天晴の上手と感ぜしめ、江戸に比して遂に見巧者であつた上方の人々を驚倒せしめて、百二十日も打ち續けたのであつた。就中右の奥州執念の場が最もうけたものと見えて元祿十七年(寶永元年)刊行の落葉集にも中興當流所作の中に收められて、爾後永く京阪地方に歌として謠はれたものである。序にいふが常磐津の戾駕も此の音羽の前閑居の場から出た仕組である。

扨て宇治加賀椽の門人富松薩摩の正本に傾城淺間嶽と題するものがある。是は七三郎の演じた淺間嶽の中卷以下

を淨瑠璃に綴つて操にかけたものであるが、此の他の淨瑠璃で、苟も淺間嶽と名のついてゐる物は、皆此の上の卷執念の場の趣向ばかりをうつしてゐる。最も名高いのは富本の其俤淺間嶽であるが、これの前後に十幾篇の淨瑠璃が出てゐる。以下序を追つて說明を試みるであらう。最も古いのは外記節の

奧州淺間嶽懺悔之段

である。元祿十三年正月江戶の森田座で、景政雷問答(かげまさなるかみもんだふ)を出した時、奧州を子四天王時代に作りこみ、權五郎景政は市川團十郞、三浦和田左衛門爲宗は宮崎傳吉、傾城奧州は上村吉三郞といふ顏觸で演じたが、此の芝居い詰に、くつわの茨木屋傳左衛門桔梗屋九左衛門夫婦が太鼓持を伴れて奧州の菩提を祈る爲に、信州淺間の普賢菩薩へ參詣し、途に迷つて、とある草屋に一夜の宿を求めると、奧から奧州が出て、これは久しやよくこそと奧へ消えると、奧より主の入道が出る。奧州はと尋ねられて今は此の世にない筈だと入道が答へ、確かに今見たといふので、それでは此の繪像があらはれたのであらう、執念がおそろしや、奧州と取りかはした起請もあるが、こ

れも最早入らぬ物、此の圍爐裡で燒いてしまはうといつて投げ込めば、不思議や、煙の中に奥州の立姿といふことになつてゐる。此の芝居では、奥州は疑をうけて笄で自害をする筋になつてゐるのである。芝居作者は三升屋兵庫即ち市川團十郎である。淨瑠璃の作者も恐らく此の人であらう。「こゝにてあさまけぶり外記上るりあり」と其の當時の筋書に載せてあるだけで、詞章は傳つて居らぬ。

文化年中柳亭種彦が常磐津・富本二流の淺間淨瑠璃によつて淺間嶽面影草紙を編み、ついで奥州執着譚を作つて、其の卷頭に外記節の懺悔の段を抄出してゐる。參考のため之を掲げる。

げに天竺にてなつかしき。思ひの山をかさねては。けいせき山によぢ上り。驛路[ゑきろ]の鈴を振[ふる]とかや。わが里ゆめもろこしの物語。それは煙の中よりぞかをりゆかしくたちのぼる。奥州が立姿ありしにかはらず道中をあゆむがごとく見えたるはさながら姿も廓にて。くるは誰ゆゑそさまゆゑ。

二上リへ恨も戀も殘らねど。もしも心のかはりやせんと思ふうたがひはらさん爲のせい紙をばなぜに煙となしたまふ。(中略)ムスビへ遊女の地獄さりとては。二六時中にはやひきかくる三味線の撥も君とはよい中〳〵よ。あいとかん酒のすさまじさ。たゞ熱鐵をのむごとく。其日の酒宴かたきはたれ。相手はたそ。あら物ものし。かねて手くだはしつゝらん。いで物み

せんそこひくなと。名のりかけ。小づまかいどり袖うちかざし。
歌へ・ト振袖の花に見まがふそのおもはくを。
……(下略)



傾城淺間曾我挿繪

假に大成された淺間淨瑠璃を富本の其俤淺間嶽だとすれば、外記の此の淨瑠璃は餘り大成に與つたものといふことは出來ぬ。流儀は固より別系統であり、詞章の上にも何等の關係を見出すことは出來ぬのである。

元祿十二年に七三郎・左源太が「京土産淺間嶽」と題して演じた時には、殆ど原作の儘であつたであらう。同十六年正月再び山村座に於て、曾我の中へ作り込んで「けいせい

淺間曾我」と題し、曾我の十郎は中村七三郎、大磯の虎は岩井左源太で演じた。これにも勿論淨瑠璃はあつたのであるが、何流でやつたのか少しも分らぬ。筋は略原作と同じである。

外記節に次いで古いのは一中節の淺間物で、享保九年の二月森田座で中村七三郎の十七回忌の追善興行をした時、二代目の七三郎が巴之丞、嵐和歌野が奥州で淨瑠璃は都一仲の

追善淺間嶽

であつたが、詞章は傳はつて居らぬ。これより十年を經て、享保十九年中村座に於て春狂言「十八公今樣曾我」の大詰に、太夫は秀太夫千中、スケは金太夫三中、役者は澤村宗十郎が京の二郎、瀨川菊之丞がとぎれの小まんで、

夕霞淺間嵩

を出して大變な好評を博した。中古戲場說にはそれを次の如くに記してある。

大詰は路考訥子、夕霞淺間嶽といふ千中ぶし淨瑠璃、所作は不得手の訥子故に、如何と見物も評せしに、案に相違し、訥子至て大樣にて、ゆつたりとせし所作の相手却て能く、大當にて七月まで入り落ちず、江戸中に鼠の糞と夕霞の淨瑠璃本のなき本はないと云ふ位、よし原揚屋町に油紙の多葉粉入に路考訥子が夕霞の畫すりしを持たぬ人はないと云ふほどの事なり。

夕霞淺間嶽は淺間淨瑠璃中の傑作である。富本や常磐津の淺間物は此の文句を其の儘借り用ひてゐる所が多い。先づ

ウタヒ シテへあはれ古を思ひ出づればなつかしや、行く年月に關あれば花にあらしの 上ルリへせき守もツレへよひ／＼ごとの白雪は茜さす日にとけて行く。イロ詞シテへ夫婦が中のうらみごと、かたくも岩にはなれをし、京の二郎すけしげが名殘男鹿の命毛や、かく姿繪の其の中に、取りわけてかなしさは涙ぞくもる雨雲のとぎれの小まんと名に立て、思はぬ難に大磯の露と消えしも我からと我を苦む思の火、消えぬをふじの煙とは、香のかをりにひかれ來る、魂は昔の一つ前、ありし廓を其の儘に、奧州が立姿　二上リ ツレへうらみも戀ものこりねの、もしや心の、かはりやせんと思ふ疑おもはぬ人の　合へむごやつらやと泣く涙、身にも覺えぬなき名をつけて、なぜに煙となし給ふ………。

に始まつて、次いで本調子のナゲブシの歌があつて口説(くぜつ)に移り、

羽織かくしてとめた時、恩にきせるのあとのつき ワキへその夜のかたみこれ此所に紫にほふ深い中、拜む／＼が曉のかねてさうとは知りながら、ツレへまだその絆が大淀のせきも出ぬのに重

ね夜着、ないて見せるをのぞいて見たり、うたうて見たりひくばちの、ひぢで返事を菅掻の十に一つもいふことを、シテへきいてもらへば遠山の松はツレへいろこき夕霞淺間が嶽に比べこし胸の時計の車の輪、めぐり〳〵て明六つの、別れに立てし誓文は、千も二千も三千も世界に一人の男ぢやと、樂む中の若紫たつといふ名も因果どし云々



正本繪表紙模寫

の口説の末に、

追へば消え行く朧夜の手にも取られずちら〳〵と、花壇の蝶のおしろいも、羽根に殘して草がくれ、見失ひてぞ立ちにける。

と結んである。即ち原作よりも一段と遊里趣味に富んでゐて、口説場を主眼とした作である。原作には別に奥州の身の落ちつきを示してないが、これには「思はぬ難に大磯の露と消えし」と

あつて奥州に當るときれの小まんが非業に死ぬことに改めてある。又起請を燒くと奥州が現れるといふ筋であつたが、これも「香のかをりにひかれ來る魂はむかしの一つ前」とあつて、所謂反魂の香をたくによつて、小まんの亡靈が現れるといふ筋に作り改めてある。かく改めながらも、原作の俤を殘さうとしたのか、注意の周到を缺いたのか「奥州の立姿」とあり「身にも覺えぬなき名をつけて、なぜに煙となし給ふ」とあつて、朧氣ながら起請をやく意も見え、大分辻褄の合はぬ所もあるが、後の豐後諸流の作に比べれば、詞章の優麗、情味の豐富は日を同じうして語るべきものでない。幸にして此の夕霞は今でも一中節に語り傳へられてゐる。

享保二十一年春、中村座の「遊君鎧曾我」に宗十郎は曾我の十郎で、櫻の枝へ銚子を吊り、林間に酒を煖めるとて櫻を折つてたくと、煙の中から姉川千代三が大磯の虎で現れ出で、淺間模樣の淨瑠璃「家櫻傾城姿」、太夫は都千仲で、評判はよかつたと傳へてゐるが、此の家櫻の詞章には所謂淺間物の匂が乏しく、後の淺間物に影響を及したとは認められぬので、敢て說明を省くことにする。

前述の諸作に次いで古いのは常磐津の元祖文字太夫が、まだ宮古路を姓にして居た時の元文元年に市村座で語つた

小夜中山淺間嶽

である。「寶船盤額女御所」の第三番目淨瑠璃で、後には「傾情小夜の中山」と題を改めた。此の時の役者は瀨川菊之丞・市村竹之丞で、菊之丞は岡崎、竹之丞はにいがた次郞はるつぐを演じたのである。文字太夫は此の年の二月初午から宮古路豐八をワキに、片岡四郞三郞に三味線をひかせて語り續けてゐたが、三月二十七日に至つて、北町奉行稻生下野守の命で、此の淨瑠璃の興行は禁止されてしまつた。題を改めたのも一度禁ぜられた爲であらう。同年九月に至つて「宮古路淨瑠璃太夫共芝居興行の儀は苦しからず」と許されたが、やはり「自宅に於て稽古相成らず」といふ官命であつた。豐後節の全く禁ぜられたのは後の元文四年であるが、此の元年の時から挑發的の此の流儀はひどく時好に合して其の筋に忌まれてゐたのである。

文句の上だけでは、此の小夜中山は左程刺戟を與へるものとも見受けられぬ。「思ひきや、命なりけりうば玉の。戀のくらがりくらきより云々」の枕があつて、

小夜の中山中々にかはすまいもの新枕。にいがた次郎はるつぐは。忠義の刃に身をさきて血はたく鹿のたんぼ道。下やの野邊の草の原。血しほの露と消えてだに。消えぬ輪廻の冥土まで有りし廓の其の形。羽織に防ぐ戀風や口說に焦す胸の火を。今も下げたる煙草盆。けぶり比べん我が思ひ。

と續き、平家ガカリで、

富士と淺間の山風も。吹きときかねて八重霞。迷の雲にへだつれど耳には近き戀慕の木だま。修羅の太鼓のうつつなや。ありしながらの風俗に。生きての顏は水鏡流れもやらで九月。夜泣の石のわれからと袖にかゝへし泪の露。岡崎が立姿。

と出になり、これから二上りの「うらみも戀ものこりねの。もしや心の」になり、次いでナゲブシの「なれし廓もはや昔」と一切夕霞淺間嵩の段取で運び、口說になつては、

顏に羽織の袖笠や。しやうの惡さに忍ぶずり。みだれ鳥まで大もんにつけて亂してふつつりと。つめりし痕がこれこゝに紫匂ふ深い中。拜む〳〵と曉の。かねてきうとは知りながらいく年月を重ね夜着。泣いて居るのをのぞいて見たりうたうて見たりひくばちの。あたれとこそは思はねど。夜ごとに立てし誓文は。千も二千も三千も。水にせまいと腹帶をしめてうねらねおひしげる。

と夕霞に眞似た文句で進み、「慕へば消え行く朧夜の。手にも取られぬ雲間にもただ有明の月一つ。ふたりの姿は草がくれおく白露の玉しひも殘るばかりぞはかなけれ」と結んだ作である。盤額女御所の筋が分らぬので、にいがた次郎の亡靈が廓の姿で煙草盆を提げて出、岡崎も例の立姿になつて出る筋合はよく解しかねるが、此の淨瑠璃に「くわいたい淺間の石夢の段」と題せるものがある。此の二人はともに夢の中に出るものらしく、それではじめて、終の「二人の姿は草がくれ」といふことも會得されるのである。此の男と女と二人で出るのを、女のみ二人出ることにしたのが卽ち常磐津の二人淺間、委しくは

妹春塚松櫻

である。寶曆七年の春中村座に於て「日本塘鷄音曾我」興行の際、曾我十郎は中村七三郎、八つ橋の亡魂は中村富十郎、淸玄の亡魂女姿は市川團十郎で演じたもので、一名を「八つ橋」とも呼ぶのである。作者は壕越二三治、太夫は初代の常磐津文字太夫

ワキは志妻太夫ツレは造酒太夫、三絃は佐々木市藏同市之丞であつた。先づ一中の謠ひがかりよりも一段くだけて歌ガカリに「春の湊は何々迸る。花をからげて筏へのせて。浮氣な波の追風待ちて。戀の重荷を積み並べ云々」と置淨瑠璃があつて、色詞の

閨怨燈暗うして心いよ／＼寂寥たる。曾我の十郎祐成が義理も情も一重帶。めぐるゑにしの仇心。焦るゝ胸の埋火やひさ。げの水のわく火鉢げに春ながら雨冷の……戀ひ慕ふ身は渡り川。これぞきやくしやうそくぼうを悟りもやらずうか／＼と迷ひそめたるうかれ妻。八つ橋が立姿。



妹脊塚松櫻の錦繪

と富十郎の出になり、次いで清玄の亡魂、八つ橋其の儘の女姿に扮せる團十郎の出

になり「顔も其の儘に。いづれあやめと杜若。色を爭ふ風情なり」に、

祐成はぎよつとして、コリヤどうぢや。こちらも八つ橋そちらも八つ橋。顏形なら衣裳なら寸分かはらぬ二人の八つ橋。はてめいような。

と驚いて、二人の八つ橋から口說のせり合ひを聞き、眞實の八つ橋には廓ではやる早言を敎へて置いた筈と、それをいはせて見るが、それでも分らず、「おれが作つた歌に振を付けて敎へておいた。サアそれが踊られうか。サアそれは。なんと」で三下りの歌となり。

櫻ぞめきの朝がへり。見初めて今は淵となる。そりやほんかいな。ほんに浮世に川がな二つ。思ひ切る瀨と逢ひなれし夜は五月雨の水も洩さぬ中々は。そりやほんかいな。ほんにわたしが心は二つ。逢はぬつらさと戀しさと。思ひ積りし文月の星の契りは開くもうし。そりやほんかいな。ほんにつとめとまことと二つ。日本堤と名に立て。身はあさがほの露と消え野邊につま戀ふ蟲の聲。そりやほんかいな。霜夜ぞすだくきり〴〵す。鳴く音や袖に氷るらん。

右の歌一ぱいに踊ること宜しくあり「是でも知れぬ。幸ひ〳〵奥に櫻姫がござる。どちらがどうか見分けてもらはう」といふをきくより一人の八つ橋、我はこれ淸玄が亡魂なりと奥をさして入る。あとには、まことの八つ橋と祐成との間に怨言と

慰藉とあつて、八つ橋の姿は消え、次いで清玄と櫻姫との間にも清玄の戀の恨の繰言があつて、遂に骸骨となつて種々の所作あり「とても叶はぬ戀の闇共に奈落へつれ行かん」と立寄るを、櫻姫が名刀友切丸を投げつければ、恐れて清玄の亡靈は消え去るといふ筋である。中々の大物で、平家ガカリ、江戸ガカリ、タヽキ、和讃など種々の曲節を用ひたものである。思ふに富十郎と團十郎とに踊りぬかせようとして立案したものであらう。一心二河白道の清玄櫻姫を淺間の中へ作り込んだのはこれが始で、かの常磐津の葱賣は直接にはこれから出たといつてよい、古く近松の雙生隅田川にある趣向だが。

二十幾年を經て安永元年七月、常磐津の一派富士岡若太夫は森田座に於て「けいせい紅葉襠」興行の時、

其圖畫松楓

を語つたが、これは八つ橋と清玄との幽魂を高尾と清玄との幽魂にかへただけで、

同じく二人淺間と俗に呼ばれて居る。參考の爲當時の番附の繪を出して置く。



其圖畫松楓

これより先寶暦四年中村座で「百千鳥艶郷曾我」を興行した時、奥州と曾我十郎とに仕組んだ一中淨瑠璃に

名香淺間嶽

といふが出て居る。太夫は都秀太夫、ワキ都千國、同八重太夫、三味線都八十次郎、又

十郎は中村七三郎、奥州は中村富十郎であつた。繪表紙の薄本が傳つて居るといふことであるが、まだ見たことはない。こえて同じく九年中村座に於て同じく一中節の

姿見淺間嵩

が語られた。これは五郎時致と少將との事にしてあるが、享保の夕霞淺間嵩を寶暦時代の世好に合ふ様に改作したと見ればよいもので、夕霞よりも幾層倍か妖冶幽婉の趣致に富んだ作である。一中の語物としては、他に比類がないと思はれる程なまめかしい作である。枕は夕霞同様シテの謡ガカリで「思へば蝶の夢なれや思へば蝶の夢の世に……」と出て「有りし廓を其の儘に少將が立姿」で少將の出となり、「二上りに始まつて、

二上りへ恨も戀も殘りねの若しや心の替りやせんと思ふ疑はらせん爲の誓紙をぼなぜに煙となし給ふ。恨めしや早くも替る飛鳥川昨日の誠今日の嘘なげの情の恨をもいはで焦るゝ胸の火の煙比べん淺間山 ナゲブシへあさい心と白絲のへ染めてくやしき馴衣有し乍らの一つ前。小褄

揃へてしどけなく風の柳の吹くまゝに任せる箸の勤ぢやとても。いやな客にも比翼蓙。思ふ男は山鳥のおろの鏡の影をだに見ぬ日にくもる薄月夜。かやの一重に影もれて妬るまいぞや變らじと筆の命毛神かけて墨と硯のこい中を誰が水さして濡衣のなき名を立てて無理な事。ゆふべの床の夜すがらに。シテ背中そむけて物いはぬしじまのかねの煙草盆きせるにとがのあろかいな。ツレこち向かんせと寄り添へばひんと振切る袖の香は ワキ誰と棄て來た移香のしらべの絲の胸づくし、雞のなく迄口舌して。つめつた跡が是爰に シテ紫式部の筆の跡。女の上の品定も悋氣は下品下生ぞや ハツア いたらぬ〱こゝ放せ。ワキイエ〱〱なんぼでも放しやせぬ。やりやしませぬとじつと引寄せほんにまあ ツレにつくいおさんがあるわいな。此の頃のしなしぶり聞いたよすがもよし夫とても。花染の移ろひ易きくせぢやもの。露のかごとの樂しみならば。だんない〱せきやせぬと、をさめて見ても落付ぬ。八聲のとりのとり〲に、よそはきぬ〲これからは間夫の晝ぢやと短夜の。夢も結ばぬ睦言に。恨いうたり笑うたり。果は涙の山郭公。鳴く一聲に曉の別に立てし誓文は。千も二千も三千も世界に一人の男ぢやと。樂む中を村雲のにくや思はぬ疑に。あかぬ別を浮世の名殘。をしの劔羽我からとつらぬきとめぬ玉の緒の シテ苦しい ワキ悲しい ツメ口惜しい ツレだまされた身は何が成る。

と遺憾なく口説の情味を述べ、遊女生活のかくれたる一面を示して、妖婉人を惱殺せしむるが如き筆の痕、淺間淨瑠璃中の秀作といふべく、後の富本・常磐津の類皆之を殆ど其の儘に語つたのも敢て怪しむには當らぬのである。なほ續いて、

しかも其の日の巡り來て今日と知らでや忘れてや。せめて未來は逢ひなく蓮の臺に二人乘の誓を賴む誓紙をば煙となして後の世は添はぬ心か胴慾な。

と恨の文句は止る所なく、「情ないぞと身を悶え。歎けば共に涙ぐみ。やがて此の身も裾野の露と消えて行く身ぞ二世かけて誓し起請は。是此の胸に有明の月は曇らぬ西の空尊い國で添はうぞや。待つてゐやい」と五郎が慰めて亡靈の手を取れば、恨をはらして身の上の苦を語り「見えつ見えずみまぼろしの姿は消えて。かげろふの小野の淺茅の朝ぼらけ。思へば蝶の夢かとよ。時致一人茫然と現に殘る月の色」といふが結である。年代順で行けば、次に擧ぐべきは常磐津の

留袖淺間嶽

である。これは明和元年市村座で「江戸染曾我雛形」を興行した時に出した淨瑠璃で、作者は並木良輔、太夫は文字太夫、ワキ志妻太夫・造酒太夫、三味線佐々木市藏・同市之丞・同長藏といふ連中で、河津の三郎と白拍子の風折との上に仕組んであるが、河津の幽魂に扮した者は市村羽左衛門、風折の幽魂は瀨川菊之丞であつた。小夜の

中山風のもので、先づ始に「茂り合ふ草も梢も心なき云々」といふ枕があつて、

宇佐美くずみを領したる川津の三郎祐安は。遺恨の矢の根鋭くも赤澤山の露と消えてだに消えぬ輪廻にひかされて。ありし姿の悄然たり。

と川津の出があり、次いで「きくや初音にしたひ來る風折が立姿」といふ白拍子の出になり、口説の問答、形の如くあつて、

花の外には松ばかり〳〵松は千年と壽げど。殿御待つ身はつらうて長うて。文書きさして筆のさや焚いて待つ夜の。蚊やり草。粹な男のくせとして。思はせぶりがにくらしい。悪性さんすを附けて見出してふつつりと。つめりし痕がこれ爰にむらさき匂ふ深い中。

といふやうな洗煉された文句、又は例のきまり文句の「夜毎に立てし誓文は。千も二千も三千も三千世界を尋ねても。こんな男が有らうかと樂む中の手枕も云々」とあり、川津だけに「お前の戀は手だれ者。土俵の數は十六七娘年增の嫌なく色と相撲の物語」が長々とあつて、「二人の姿忽ちに文珠普賢の二菩薩とあらはれ給ふぞありがたき」といふ結になるのである。まさに常磐津式の淺間であるが、河津衛名香、風折蝶名香と角書にしてあるので、一中節の名香淺間嶽と關係があるのではな

いかと思ふ。

明和六年春中村座で、久しぶりに奥州巴之丞の昔にかへつた淺間淨瑠璃が演ぜられた。外題は

容觀淺間嶽

で、太夫は常磐津若太夫ワキは左名太夫・百合太夫、三絃の立は佐々木幸八で、上調子は佐々木市之丞、また役者は瀨川菊之丞の奥州に、市川八百藏の巴之丞であつた。文句は夕霞の「あはれ古」以下を其の儘借り來り、夕霞には京の二郎祐しげが云々とあるのを

曾我の十郎祐成は。名殘男鹿の命毛も。昨日の露とはかなくも消えて此の世になきつまの。胸に思のけぶりとは。香のかをりにひかれくるたまは昔の一つ前ありし廓の其の儘に虎御前が立姿

と改めただけで、二上りの「うらみ」も以下は一切一中節の姿見淺間嵩の文句其の儘である。

以上述べたのは一中と常磐津との淺間に限られたが、時順でいへば、次には富本の淺間物を說くべきである。 斯流にあつては、安永二年森田座で「色蒔繪曾我羽觴」興行の時に出した

卯華姿雪曙

が最初のものである。 作者は壕越菜陽、太夫は富本家滿登太夫、ワキ津根太夫、島太夫、照太夫、三絃は宮崎秀五郎、上調子は宮崎庄五郎、振付は西川扇藏、奥州の幽魂は中村富十郎、巴之丞實は結城の七郎は嵐三五郎であつた。

春日野の若紫のすり衣しのぶのみだれ。 限り知られぬ。 物思ひ。 妻故迷ふ小車のめぐりあひたさなつかしき二人が中のかねごともあだにならばや仇枕。 心にすてぬ契とは我が身にならで白玉の露の命と消えて行く其の俤のあり〱と奥州が立姿

といふ枕で、在來の淺間とは全く違つた文句で起してある。 結構は他流の物と同じく、「逢ひたさのつもると書いてしやくとよむ」の如き富本一流の文句が目立つだけで、結の「手にも取られずちら〱〱〱花壇の蝶の白粉」の所の句も一中のそれと

同一で、詞章の上だけでは特徴のない作である。曲節は今傳つて居らぬので、何とも評は出來ぬ。翌安永三年春中村座で「御誂染曾我雛形」を興行して、二番目に

主誰戀山吹（ぬしやたれこひのやまぶき）

を出して居るが、これもやはり淺間物である。巴之丞奥州を清十郎お夏に改めたまでで、結構は前の卯華姿と近く、常磐津の容觀には離れた作である。太夫は富本豊志太夫、伊津喜太夫、豊太夫等三絃名見崎徳治、上調子同喜惣治、與惣治振付は中村彌八、役者は松本幸四郎の清十郎、岩井半四郎のお夏であつた。淨瑠璃の作者は櫻田治助。先づ枕があつて出となり、口舌となつて「清十郎どうしやかうしやと。心で拜んでいうて居た。今更さうした隔のことば。こちやいやいのと身をそむけ。ひんとすねるも戀の意地。いはぬ色なる山吹も言葉そへたき風情なり」の所へ市川高麗藏の影勝團子賣十五や庄吉、中村七三郎の團子屋女房おいしが出て、二上りの

仕出しだん子のになひ賣わしらめらとは〳〵夜すがらひめもす臼と杵。腰拍子そろへて。足拍子そろへて。かたせい〳〵召しませ〳〵とび團子。ふうみよしのの花まさり女夫がもとも臼と杵。ころびあひたる中々に。色でまろめしいし〳〵のいしこらしそなり形。ひこそ頭巾やわた帽子粹な所體をつくろうて。

の次に臺詞があり、次いで歌になつて、

今の世の中になかだちは入らぬ。しつちくばつちく繼ぎせる刻煙草がなこどする。やれもさうやれやれさてな。

が終ると、ウレイの口說となり、慰めとなつて終つてゐるが、此の影勝團子を出したのが面白く、後の清元の「玉兎月影勝」は全くこれから出たのである。

安永八年は二代目瀨川菊之丞の七回忌で、菊之丞の當り藝は淺間の奧州とこれに續けて演じた石橋とであつた。淺間の後に石橋を出したのは能の精靈物の穴に狂言を出すと同じ行き方で、哀愁の緩和に外ならぬのであるが、元祖菊之丞が、享保年中夕霞淺間の後に相生獅子卽ち石橋を演じてからは瀨川の家の藝となつて、必ず續けて演ずるやうになつてゐたのである。こゝに此の安永八年江戸の市村座は二月八日より曾我の新狂言我榮(わかやぎ)曾我を出して好評であつたが、三月に入つて

は、菊之丞追善として、

追善 其俤淺間嶽

の淨瑠璃を差加へ、小柴の掃部實は京の小次郎は澤村四郎五郎、傾城奥州は三代目菊之丞で演じさせ、菊之丞に石橋の所作迄勤めさせた。其俤の二字には極めて意味があるのである。太夫は富本連中、

富本齋宮太夫　富本富太夫　三絃 名見崎德次

富本豐前太夫

同　三津太夫　同　喜惣次
同　豐喜太夫　同　奥惣次
同　久太夫　同　仙調
同　豐名太夫
上調子

富本曾根太夫　富本志名太夫　三保崎東巴

であつた。淺間を以て殆ど富本物の如く世人に思はせたのは、實に此の時にはじまるので、右は當時の番附によつて連中の名を悉く擧げたのである。

淨瑠璃の作者は增山金八であるが、文句は全く常磐津の容觀淺間嶽と同一で、全

部借用物である。たゞ容觀では役者の臺詞になつてゐる所を、其俤では淨瑠璃で語ることに改めてあるだけである。卽ち二上りの「恨も戀も殘りねの……煙比べん淺間山」の次に、

ヤア〳〵そなたは奥州ぢやないか。どうしてマヽアこゝへはおじやつたぞいの 〽たゞ忘られぬは互の戀路。お顏が見たい。こひしい。ゆかしい。なつかしい思ひこがれて。これまで參りましたわいの 〽ヲヽよう來てたもつたのう。アノそなたは人手にかゝつて死にやつたと聞いたによつて。おりやもう大抵や大方案じて居たのに。マアよう顏見せに來てたもつたのう。〽わたしは此のやうに思うてゐれど。水臭いはおまへのお心。ほんにあんまり。〽ソリヤ何がいのう。〽何がとはアレあの。〽エヽ起請の事か。〽アイナア

の掛合があつて、これから「淺い心と白絲……」の歌ガカリとなり、進んで「つめりしあとがこれこゝに。紫式部が筆の章。女の上の品定めも悋氣は下品。下生ぞやいたらぬ〳〵」の次に、

〽コレ〳〵奥州。そなたも其のやぼはぬけさうなものぢや。ちつと粋になりやなりや 〽なんぼ其のやうにいはしやんしても。うつちやつて置いたなら惡性のしあきであらう。ほんに油斷がならぬわいなア。〽ソリヤ誰がいのう。〽アノおまへが。〽なんと。〽これ。

が挿入されて、これから「じつと引きよせ。引き寄せて」のクドキになるだけの相違



寛政十年芝居繪草紙より

である。一切は常磐津の儘であるが、二代目豐前太夫の美音が終に淺間をして富本特有の物とならしめたのである。

これより菊之丞の追善には之を出すのが例になつて、寛政元年の二代目菊之丞の十七回忌追善にも之を出して澤村宗十郎三代目菊之丞で演じ、寛政十年の元祖菊之丞の五十回忌にも之を出し、文化九年の三代目の三回忌、文政十二年の二代目の五十年忌等にもすべて之を出したのである。尤も安永には次の如き役割で原作の音羽の前閑居の場を演じたのであつた。

一けいせい奥州幽魂　瀬川菊之丞
一音羽の前　瀬川菊三郎
一局なぎさ　中村歌七
一禿もじの　澤村鐵之助
一腰元若柴　小佐川七藏
一腰元夕汐　瀬川三代藏
一普賢院　尾上雷助
一腰元玉笹　瀬川雄次郎
一同　松枝　松本米三郎
一同　千鳥　岩井代太郎
一駕かき作兵衛 實は和田二郎　市川男女藏
一駕かき七兵衛 實は巴之丞　澤村宗十郎

淺間淨瑠璃は以上を以て略說明を終へたのであるが、こゝに閑却してならぬのは、近松門左衛門作の傾城反魂香の系をひく二三の作物である。近松の作は寶永

二年に大阪の竹本座で操にかけたのが最初である。京都の宇治加賀掾方でも演じたが、是は少し後れて居るらしい。是には狩野四郎二郎元信と遊女の遠山(後には、やり手のみや)との事に作つてあるのを、お七吉三にし、一切を淺間模様にして、安永四年の春江戸の森田座に於て、「信田楪蓬萊曾我」興行の時第二番目に、

戀櫻反魂香

と題して、珍しくも江戸太夫河東の連中で出した。文は全く豐後節の諸流とは別である。安永六年には中村座に於て「嵐三五郎大阪表より罷登り申候に付名殘狂言に夕がすみ淨瑠璃所作相勤奉入御覽候」とて

反魂香名殘錦畫

と題して出した。狩野四郎次郎は三五郎、けいせい遠山は富十郎、太夫は富本豐前太夫、ワキ富本齋宮太夫、同美津太夫、三味線は名見崎徳治等であつた。此の正本は

まだ見たことはないが、番附の上で見れば、全く淺間物である。殊に「夕がすみ淨瑠璃所作」とある以上は、疑もなき淺間物で、偶以て淺間と反魂香との關係を示すものといふべきである。寛政九年の春江戸の都座に於て「江戸春吉例曾我」興行の時、二番目の大詰に、

初櫻淺間嶽

を出した。一名を遠山とも呼び、人物は反魂香の遠山と四郎次郎にしてある。太夫は常磐津政太夫ワキは左代太夫、若太夫、三絃岸澤古式部、上調子同市曉で、役者は市川八百藏の四郎次郎、中村のしほの遠山であつた。文句は增山金八の作で、書起しのあたりは悉皆其俤のまゝで、次の二上りの末のあたりから少々づつ改めて、所所に一中の夕霞の文句をも挿み、又結尾のあたりも其俤通りで、長さは大分短くなつてゐるが、行文は拙劣で、淺間物の中の最も不手際な作である。これより五年前一中節の淨瑠璃に、

けいせい淺間嶽

といふが出た。これは寛政四年中村座に於て「隅田川劇場縁日」を出した時の淨瑠璃で、奥州の幽魂は松本米三郎、小笹巴之丞は市川高麗藏であつた。作者は初代の櫻田治助で、「花巾上に散りぬれば」と、出からして違つて居る。きまり文句は多く夕霞から出てゐるが、他の諸作とは全然趣を異にして、一向しんみりとした所はなく、口説でもクドキでも、

きせるで癪を押しながら。ついそれなりにうたゝ寐の。裾へ禿がほとゝぎす布團かけても寐られねば。またひきよせて硯箱。胸にある事愚痴な事。書きつくしてもみちのくの文であかして夜ぞ知らぬ。もちこし酒の二日醉。さめてうつつや居續の床に朝日を彌陀如來。

といつた調子で、あとは鳥づくしの洒落から「別れに立てた誓文は千も二千も三千も世界に一人の男」の定文句に入り、櫻づくしで終るといふ。大分陽氣な、一風かはつた作である。

太夫は一中、ワキは春太夫に森太夫であつた。さうして、三絃に鳥羽屋里長のあ

るのは注意すべきことであつた。　里長は此の前年まで常磐津の三味線彈で、此の年には富本に轉じて居たが、元來作曲に長じて、諸流から相談を受けてゐたといふことである。　此のけいせい淺間も或は此の人の作曲であらう。
天保五年の春市村座で「三幅對書初曾我」を出した時、第二番目の四立目に「いにしへを思ひいつも其儘に」を角にして、

初霞淺間嶽

と題して淨瑠璃を出した。　これは清元連中で、太夫は清元延壽太夫、ワキ政太夫、鳴尾太夫、三味線は清元齋兵衛、同榮次郎であつた。　これは曾我狂言の時とて京の次郎と奥州とにしてあつて、次郎は市川海老藏、幽魂は尾上菊五郎であつた。　文句は富本の其俤淺間嶽と全く同一、曲節も殆んど富本の儘で、所々清元化されてゐるだけで、其儘淺間嶽と呼ばせたい程である。
以上述べた所の外記物一、一中物三、常磐津物六、富本物四、清元物一、河東物一、計十

六で、淺間淨瑠璃の主要な作は擧げつくされてゐるのである。淺間物は元祿の芝居に起り、享保の夕霞に成り、安永の其俤に完成されたといふべきで、最も此の完成に貢獻してゐるのは一中の夕霞と姿見の二篇である。

淺間物は、いはば遊里文學、わけて、遊里淨瑠璃の精髓ともいふべきである。遊里に於て、特に金力萬能であつた元祿時代に生れ、遊里趣味が江戶に旺盛であつた寶曆明和安永の當時に榮え、爾來近く天保弘化の頃迄行はれて、明治維新後はぱつたりと廢つて、歌舞伎の所作事にも絕えて出たことはない。

今なほ曲節の殘つてゐて、黑人筋の間に賞翫されてゐるのは一中の夕霞と傾城淺間の二曲、富本の其俤、淸元の初霞位なものである。其俤は此所ぞといふ聞き所はなく、全曲すべて傾聽に値する淨瑠璃である。骨の折れる割合には、うけないので、斯道の人まで語ることを避けようとするが、飽くまでもしんみりとした古風な哀婉の趣致に富むもので、富本一流に取つて名曲である。どうぞして淺間群を代表する斯曲と其の根源たる一中の夕霞とだけは永く癈ることなく傳へたいもの

である。

（追記）

大正十四年六月古舞踊復興の意味で、若柳流舞踊研究會で、其俤淺間嶽を演じた。富本の家元も出演して、古風にと心掛けたのであつたが、幽婉な趣致は見られなかつた。淋しいだけで、味のあるものとは思はれなかつたやうに見受けた。もう素語りのものとしてあきらめなければならないのであらうか。

（昭和二年十二月）

六　竹の屋劇評集

團十郎・菊五郎・左團次の技が圓熟を極めた明治の二十年代は、疑ひも無く劇の煥發時代である。活歷の創始、新派劇の勃興、新劇場の建設、新作家新批評家の出現は、國會の開かれた政界ほどでなくても、隨分多事で、それで觀衆の入のあつた時代で

ある。この時代の劇をあくまで享樂的の如くに見せて、實は至純嚴肅な態度で論じたものは、東京朝日新聞に掲げられた饗庭篁村翁の評言であつた。それが今回本間久雄君の校訂の下に標題の書となつて世に出た。

當時の劇評家は五七人に止まらないが、私は翁の外には幸堂得知・永井素岳の二翁と、三木竹二氏とだけに相識の間であつた。共に皆私等の先輩であるが、その評言にはこいびりつくところのあつたことを遺憾とする。幸堂翁は系譜故實に、素岳翁は音曲に、竹二氏は氏一流の尺度の下に、動もすれば好惡をあらはにした弊があつたが、篁村翁のは考證にも型にも墮せず、極めて淡白に敍し去るが如くで、さて滋味に富む言辭であつた。さうしてそれが明るい、輕い、洒脫だ、皮肉だとはいへても、卑野だ、偏頗だ、曲阿だとはいひ得ず、諧謔のうちに諷刺以上の戒告の潛在することは見落し難い。歌舞伎座を起した櫻痴居士に對して、團十郎の上古かぶれと實地がりとに制せられて作意を曲ぐるを責め、團十郎に對しては芝居にならぬやうにと力めるを笑つた活歷への批言、能樂出の作を本行がかりに演ずる者への排擊、考

證高上の二癖を極論した「良門討伐」のあたりには、當代の餘人の筆に求め難きもののあるを痛感せしめられる。「我等はホンの分まはしで圖を畫くのと同じこと、團十郎はヱライ、菊五郎は細かい、左團次は活潑だ、福助は美しい。サラ〳〵としてよし。この所大出來などと同じ詞を繰返すのみ。一向榮なく又効能もなければ、元より毒なし」と卑下してはあつても、我等は少からぬ毒と効能とを認めるのである。

竹の屋翁の得意は院本物に對する解説的の批評であつた。近松の作に初中後の三時代あるを知悉せる翁は、歌舞伎座が出し物に出世景清を選べるを笑ひ、活歴の不徹底を責めて、「近松の出世景清は古代の日本風の建家、それをばら〳〵に打破して煉瓦石やブリキ板をそこへドッサリ擔ぎ込み、請負普請に西洋風に建直させたるが今の歌舞伎座の出世景清なり。これを添削といはれては、古家の迷惑いかばかりぞや」といつてゐる。又女楠に至つては蚊いぶしにしたもの、添削者は近松にいかなる宿世の仇かあると詰寄せ、先代文學家に禮儀を守れ、渡世のため又は金がほしさに古作をあなぐり、ほしいまゝに切り接ぎするは人道に戻るにあらずや

と櫻痴居士に迫るなど、三十六七歳頃の翁の元氣には當るべからざるものがある。然しながら是是非非主義の翁は、居士の日蓮記に感服し、俠客春雨傘には謳歌の聲を大にして、そこに左顧と右眄とを見出されない。この主義は勿論俳優の演技批評にもおよんで、團十郞に對しては演說癖と活歷とを攻撃する他面に、大芝居ぶりの演出や純世話式の物には絕大の賛辭を惜んでゐない。菊五郞には寫實の精緻を賞して幕間の長きを責め、左團次・福助以下の諸優より子供役者までに對して、更に好惡の情を抱かず、どこまでも白紙主義で進んでゐる。さうしてその評に洒落や通の連發があつても、根が內氣で、生眞面目で、見識高で、淚もろかつたといふ此の翁の素質が表れて、どことなく高雅な趣が浮かんでゐる。

團十郞でいへば河內山、地震加藤、勸進帳に道成寺、春雨傘に大森彥七、菊五郞でいへば鹽原多助に雪踏直し、魚屋(ととや)の茶碗に皿屋敷、左團次の大盃に、團藏の佐倉宗吾といふ類、六十幾興行かの評言を輯めたこの書は、その時の芝居を見なかつた私等に取つても、面白い讀み物であり、それと共に、貴重な明治の演劇史料である。

短所は音曲通で無かつただけに、地ばやしのある所作事や舞踊はおいて問はずといつた態度のその點にある。この失は輕視すべきでないにも係らず、私は翁の明治三十年代乃至はそれ以後の評の續刊せられることを切望せざるを得ない。個人の劇評として刊行せられたものの初頭に立つこの書に對して、世に愛讀せらるべく、その前途を祝福するものは、決して私等同好の者ばかりでないことを確信する。

（東京朝日新聞所載）

七　歌舞演劇書追憶

（昭和二年一月稿）

其の一

西鶴の一代男や一代女が、たつた數圓で賣買されたといふことは、私どもが古書に交渉を有するずつと前のことである。それで世にいふ公平本や舐本が今の何

十分の一かで買ふことの出來た時代には出逢つてゐた。神田の村口半次郎君が下谷廣小路の代々餅の隣に店を出してゐた時だから、明治三十一年の事だと思ふが、繪入細字の六段本「鉢被き姫」が此の店にあつた。御伽草子を淨瑠璃に用ひた證本として尊重すべきものであつたが、それがたつた六十五錢かであつた。今ならどうしても此の五十倍は拂はなければなるまい。もつとも今五六圓する近松の丸本が十錢か十五錢位で買へた時代だから、細字本の六十五錢は決して低廉すぎた譯ではない。



明治三十三年の北清事變後は物價が騰貴して古書類も高くなつたが、それでもまだ〳〵安かつた。三十五年の夏、やはり村口書店が裏神保町へ移つてからだが、當時村口は奮發して高値で引取るといふうはさがあつた程で、勿論賣物も安からう筈はないが、それでも今から考へると、うそのやうな値であつた。古書通として相當な書肆であつたといふふみ屋の主人が、公平物五冊に公平一代記と命名して、

公平誕生記　公平大酒論　源氏筑紫合戰　賴義北國落　公平最期を收めて一部としたものがあつた。北國落の如きは寛文年中の板で、其の掛物揃の所だけに、後年近松は作者として其の名を署した。それが例の大掛物十幅一對で、輕くは取扱ひかねるものであり、筑紫合戰も挿繪の卓逸してゐるものであつた。但し痛みのひどい本もあつたので、まけて貰ふ積りで價を聞くと、五冊で九圓ですといふ。まるで一冊の値だと思つて買つたが、當時四十圓の月給取の身分では、奮發し過ぎたものだと友人達に評をされて、默笑してゐたことを記憶する。此の書と一緒に井上播磨椽の語り物の中から忍の段と四季の段とだけを拔き出して一冊にした延寶二年版の繪入細字本をも求めた。それが刊行後間もない頃の火災に板木が燒けて本當に稀覯書扱をすべきものであつたから、小踊をして買つたが、何でも四圓か五圓位であつたであらう。今なら二百圓だといはれても尻込みをしては居られさうもない物である。

當時芝の村幸は珍本商で、同時に高いので知られてゐたが、それでも聲曲類纂に

引用されてゐる國性爺合戰の繪入細字本を七圓半位で賣つてゐた。稀書複製會で出した書物の中には、此の店で寓目したものが隨分ある。去る十一月、名古屋で行はれた平出家の賣立に三十五冊が三千圓とかで賣れた舞の本の中の敦盛が、たつた六十錢で此の店頭で賣渡されるのを目撃した事もある。

日露戰爭後は一時大景氣で、古書の價は確に此の時一躍した。丁度村口君等が德富蘇峰さんに珍書を賣込む最中であつたが、明曆板の京童に跡追づきて何圓戴いたらいゝでせうと相談をかけられて、一冊二圓の十六圓かといふと、とてもさうは貰へませんといつて、十二圓かに書出すのを見たことがある。人倫訓蒙圖彙も三十圓かであつた。しかし草露貫珠といつたやうなものは、ざつと今の三分の一で、十二三圓位であつたであらう。

かう書物の値ばかり言ひ立てては、古本屋の小僧であつたかと疑はれさうだが、非常な苦しい算段をして買求めたことが、私をしてかうよく記憶せしめてゐるのである。明治四十年に私が近松世話淨瑠璃詳解の第一卷を出して、卷首に引用書

八十部の刊行年月や著者を明示したら、それを出版した春陽堂の番頭が來て、あれを見て高野斑山は古本屋かといつた作家がありますといつたので、さうかそんなことをいふ人もあらうが、そんな事を取次いで愉快がる君のやうな男のゐる本屋からは、もうあの續きは出さないといつて、第二巻以下はどんなに頭を下げて來ても出さなかつた。　出さなかつた私もちと小さ過ぎたが、當時の作家諸君には、古版物などをてんで作の參考にしようといふ考へなどの無かつた人のあつたことも之で分るであらう。　古版物は幸堂得知や宮崎三昧の玩弄品位に考へてゐた作家は決して少くなかつた。　唯後藤宙外君だけは早稻田の近松研究會で、如何に語釋や出典に關して苦惱したかを知つてゐられただけに、春陽堂に勸めてあの書を出すやうに慫慂してくれられたのであつた。　私はそれが處女著作ではなく、それより十年も前に此の書肆から淨瑠璃史を出してゐたのであつて、「書出すは恥しきかな、美しき女あるじを訪ふ日の心」と詠んで笑はれたこともあるので、別に著書による滿足や誇りに就いて、さう夢中になつてゐた譯でも無かつた。　けれども孫引の

人を誤ることの多いのを知り始めてゐた結果は、一々原文に當らうとして、古書の捜索に苦しみ拔いてゐただけに、引用書を正直に列擧して、却つて創作家の某々君達に笑はれたのであつた。



世界戰爭後の三四年間に於ける財界の好況は、當然古書の價をも高くした。それは骨董品として收藏の豐裕を誇る富豪や會社員の、時價を無視した購入が一大原因でもあつたが、もと〳〵需要に伴ふだけの供給があらう筈はなく、それが價を高からしめたのであつた。結局近代文藝の研究に從事するには、金のある者でなければだめだといふことになつた。けれども富裕者は學問に對しては執著心の淡いのが常で、此等の人は、買入れれば、棚か土藏かへ片づけてしまふのであつた。どうしても一見しなければならなくなつて、折入つて賴むと、安田善之助さんなどは快く見せて下すつたが、何かと口實を設けて見せまいとした人もあつた。殊にそれは京阪地方に多いなどと聞かされたこともある。最も物數奇や、ひやかし氣

分で訪ねるものは、古書の取扱方を知らず、古新聞でも繰るやうに手荒なことをするので、斷つた方にも七分の理由は存するのであつたが、學問の研究者に取つては慨はしいことであつた。



大正十二年の大震災後は、古書尊重の念が一世を支配した。さうして大正年代の作家はもう浮薄な寫實や戯作者氣分などを有して居らず、ひそかにそれを熟讀して、いはゆる自家藥籠中のものとした人もあつたので、もう古書を蒐めて研究する者に嘲弄を加へるやうな創作家は存在しなくなつた。正直にいへば、古本專門の書肆經營者は勝手に、いや共同して價値の釣上げ策を巧に行ひ續けた結果、古書の價は月々に騰貴したのであつた。さうして買手に對して、あんな無法な値の物を買ふ者の方が惡いとも評したが、それを研究の資料としなければならぬ學究は、無理な工面の下に泣いてそれを求めるのであつた。私なんかも全く其の一人であつた。本屋にいはせると、金に糸目をつけない買手が惡いのだといふが、學問の

進歩は、そんな賣手や買手によつて妨げられるのである。

◇

大正年代の古書の賣立としては、先づ大野酒竹君の藏、次いでは永田有翠さんや渡邊霞亭さんの藏、近くは平出家の藏を以て人々の血を湧かせたものとすべきであらう。　大野君のは俳書の豊裕に於て知られたが、他に著者の自筆物や古版物に於て、また稀覯本に於て、いはゆる軟派物も硬派物もあつまつてゐた。　さうしてそれが十分選擇されてゐたので、酒竹文庫の印をおしてある物は今も喜ばれて、價も高い。元來同君が時價以上で求めることをいとはなかつたことが、書肆に好感を與へた結果でもあらうが、書物それ自身が良好であつた結果に外ならないのである。

◇

有翠・霞亭兩氏の藏は、好色物や遊里物、淨瑠璃本や歌謠書・古地誌、誰も〳〵ほしがる物が多かつたので、その行方は大いに注意された。　私なども酒竹君からは別に借用はしなかつたが、此の兩氏の藏からは間接に恩惠を被つたので、成るべく大し

た散逸狀態にならないことを祈つたのであつた。幸にして酒竹君の俳書一切は東京帝國大學の國文研究室に備へ付けられて、大震災にも取出され、霞亭さんのも凡そは一纏めになつて、同じく此の研究室へ買入れられた。東大の圖書館へは、山梨の青洲文庫本も購求された。これには漢書類も史籍も法帖も雜書も豊富なので、帝大の藏は地震によつて燒け太つたといふ說を立てる者がある。成程洋書に於ても過去よりはずつとよく大物が蒐集されたのであれば、さう考へても間違ひはないことであらう。

十二年の震災には都下の古籍珍本類が烏有に歸して、下行文學研究の上に被つた損害だけでも莫大なものであつた。天金池田金太郎君の古版だけでも大した物であつたといふが、損害頭は何といつても安田松廼屋君であらう。歌舞伎關係の物から能樂書類や唐本類に迄わたつて、隨分結構なものが蒐めてあつた。それが横網町の本邸で、一切の物と共に灰になつてしまつた。世阿彌十六部集の原本、同じく本願寺から出た宴曲集、繪入細字の狂言本、古番附・古謠類、思出すだけでも苦

痛で、列記するに忍びない心持がする。淺草の黑川家の書庫は淺倉書店の燒亡と共に、いつ迄も歎惜せられるであらう。どうしても古書古玩の蒐集には、先づ安全な蓄藏所から著手しなければならないことを痛切に感ぜしめられた。東大の圖書館は立派に復興するし、上野の帝國圖書館は災厄を免れて、今各方面にわたつて幾十萬冊を有してゐる。又內閣記錄課の保管する書庫には、世に類本のない貴重書を合せて、幾十萬冊か藏せられてゐる。大塚の高等師範の書庫にも相當にあり、早稻田にも大分蒐めてある。學者の急は此等で救はれもしようが、其所に求められる物でも、座右に置かなければならない、有り觸れ物と見下される物迄高いので、學問する者が泣くのである。もう金の無い者は學問をすることが出來なくなつて來たのである。しかしながら、學問を富豪が道樂氣分で骨董的にするやうになつては一大事である。まさかにそれ迄には墮ちて行くまいとは誰人も考へるであらうが、近來の形勢では何ともいへまいと思ふ。活版本だけで一切を辨ずる人に取つては、こんな事も信ぜられないであらうが、孫引や複刻本に據ることの如何

に危険の多いかを知つてゐる者に取つては、古書の高い程困らせられることは無い。高いのは忍ぶにしても、品少なのには買手も賣手も困る。古書は須らく複刻すべく、其の校正は嚴密にすべきである。こゝ三四年來、全集や叢書が續々出るのは大いに歡迎すべきで、それと共に精選と嚴密と低價と堅牢とを此の事業の上に希望すべきである。古書の集成複刻はもつと〳〵盛んにすべきである。古書の價の高いのは、これで調節するより他に方法は無い。

大正年代の珍値は何といつても最近の平出家の賣立であつたと傳聞する。此の家の藏本には面白い由緒があり、私も曾ては借用したことがある。其の十一月二十日の入札には、東京の書肆と上方の書肆と大いに競爭したので、さまざまの珍談もあると聞いたが、それは他日稿を改めてまたいふことに致したい。

（國民新聞所載）

（昭和二年三月稿）

其の二

古書賣買家諸君は、昨年十一月二十日に行はれた名古屋の平出家の賣立の結果

に對して、近年での珍値だといふ。其の珍値は直接の買手であつた諸君がせり上げて珍値にしたのであつて、必ずしも前以てさう多くの注文があつたわけでは無かつたとのことである。入札者は三都から集つたので、意地張が手傳つた珍値なることは到底否むべくも無いが、しかし本も決して惡かつたのでなく、山梨の青洲文庫のやうに一代で集めたといつたやうな物でない。日本風俗史の著者として知られた鏗二郎君の曾祖父の順益、其の養子の延齡(此の人も後に順益の名を襲いだが)此の二代間に大いに古書を蒐集したのであつた。累代醫者であつたから、勿論醫書も多いが、遊藝が旺盛の名古屋であつただけに、其の集めた書は大部分今いふ軟派物で、しかも至軟に屬するものが多かつたのである。

延齡の順益は熱田で生れて、平出家に養はれた者であつた。同じ熱田生れの笠亭仙果は、順益に學んだこともあつたといふが、家産を破つて江戸に出る時、多年苦心して蒐めた書一切を順益に預けて金を借りた。まづ質入れをしたものらしい。仙果のことだから、當然淨瑠璃や歌舞伎の繪入狂言本又は小歌の書、せい〲で俳

諸書といふ類であつた。江戸へ出ては黒川春村の許に寓居してゐた仙果から、其の書物の中十五六部を一時借用させてくれといふ手紙を送つたのが、平出家に保存してあつた。その十五六部が概ね珍書で、近松の作の石橋山七騎落といふ淨瑠璃もあり、狂言本には閏正月や新淺間、また小歌やくどきの類には、中將姫開帳、だうねんぶし・小歌總まくり・踊口説や歌祭文、小歌揃もあれば、諸國盆踊歌までであつた。さうして是非貸して貰ひたいといふのは俳書の、つしまぶえ・古わたり集の二冊と諸國盆踊歌とであつた。仙果も餘程いひにくかつたか、「尤もあまり蟲よく思召候へば、其内○印は御なさけに御こし被下候樣ひたすら奉願候」といつてゐる。これは順盆が貸惜しみをする人であつたからといふよりは、仙果の方に賴みかねる弱味があつたからだと解すべきであらう。さて右の申出はどの位採用されたものか、○印の外にも貸渡されたかと思ふものは小歌揃である。明治四十一年かに「此ぬしせんくわ」と二行に割つた朱の長方形の印を捺した小歌揃が淺倉書店へ出たことがある。これは平出家へ申送つた中に、豆本小歌ぞろへ寫本とあるに合する

ものであつた。多分仙果が借りて返さずじまひになつたものか又は返さなくてもよいことになつた書物かと思はれた。それは小寺玉晁が延寶頃の板行らしいといつたものだが、挿繪から見ると、もう一寸古さうで、新なげぶしや當世かゞぶしや弄齋節の小歌やを集めた珍しいものであつた。後京都帝國大學の有に歸したとかで、藤井乙男さんが藝文の紙上で之を紹介されたことがある。諸國盆踊歌は種彦が紹介して、寛文年中後水尾院の撰に成つたといふが疑はしいといつたそれに紛れも無い書だと思ふ。種彦も山家鳥蟲歌と題して明和八年に刊行されたことは知らず、寫本として紹介したが、仙果が借りにやつた此の書も寫本であつた。種彦と順益との間には、仙果が仲介者となつて藏書目錄の交換もしてゐる程であれば、仙果の舊藏本が種彦によつて世に紹介されたのではないかと思ふ。七騎落や道念節や歌祭文や小歌總まくりの類は、今度の賣立目錄の中に見え、大部分東京商人の手に落札したから、多分貸さなかつたのであらう。珍しいものは七騎落で、近松の作だが外題替であるが爲に、入札の時に注意されなかつたらしい。

仙果の別な手紙に「舞のさうし今以返上得不仕大延引御免可被下候」とあるが、これが、今度高値になつたといふそれである。所謂舞三十六番揃つてゐたのであるが、先年一冊だけ出てしまつて、三十五冊しかなかつたといふが、揃つてゐた頃、内閣の藏本と比較して、よく鏗二郎君と話題にした書物である。今では國書刊行會本に入れてあるので、騷がれもしまいが、其の前は大分珍書扱にされたもので、私なんかは特に古寫本について其の全部を筆寫したのであつた。國書刊行會のは平出家のと同樣の寛永板によつたもので、和泉が城の卷が缺けてゐる。これは殊に尠いものだが、筑後の大江の幸若連中の間には章をさしたものが傳つてゐて、私もそれを寫させて一本を藏してゐる。何かの機會に活字にしておきたいと思ふ

平出家の藏には、唐本も、國學書も、連歌俳諧隨筆類もあつて、合せては五千餘部に達してゐたのであるが、賣立目錄には其の七八分の一しか載せて無かつたので、後で事情に委しい人にきくと、平出家にあつた目錄のまま印刷したのであつて、目錄中のものにも無かつたものがあり、目錄外に貴重なものが多くあつたとのことで

ある。昨年の十一月から十二月にかけて、古書の同好者から受取る書信中に此の賣立の事を書いてないものは無い程であつたが、何れも珍値だといふことばかりであつた。鳥居清信の四方屏風が二千圓、明應板の論語が千幾百圓といつたことは誰やらの手紙にも見えたし、書肆から聞かされもしたが、それよりも驚かされたのは、目錄に無い島原物の

朱雀　目鏡　半紙本　二冊　延寶九年板

朱雀諸分鑑　同　同　上

朱雀しのぶずり　同　貞享四年板

の三部六册が七百五十圓で落札したことや、東海道分間圖が二百圓だ、吉原十二時と高尾年代記とで七十幾圓だと聞かされたことである。大した內容がある譯でも無く、今の活字板になつてゐるものもあるのだが、一切が骨董扱にされて、古書の價は何處迄高くなるのか私などには分りさうも無い。堅實だといはれる書肆の主人などは、高くなり過ぎたと考へてゐるやうだ。古書の價が年々騰貴して、底止

する處がなささうな此の現象に對して、その原因と其と影響とを細密に考査して學問藝術の進歩發達に對しての關係を檢討することが極めて大切な問題として考へらるべき時は既に來てゐる。同時に古書購入者の心理狀態も究明されるであるべく、どうかしたら古書好きの私なんかも、其の材料に使用されるかも知れないが、さうしたら如何にひどい工面をして求めるか、それが全く後年の利益を豫想するのでもなく、珍書の藏を誇らうといふのでも無く、當面の研究に必要であるが爲だといふ實情を披瀝したいと思つてゐる。歌謠や演劇や古音樂に關する研究なんかは、如何にも派手で、潤ひに富む仕事のやうに思はれさうだが、やつて見ると全く意外で、これ程骨の折れる割合に成績の擧らないものがない。つく〴〵と洋書か當代印刷の活版本だけで用の足りる學者の境遇が羨しい。高いといつても洋書や洋製本の方がまだ〳〵大いに安價なのである。

平出家賣立の札元になつた人の手では大したことではあるまいから、全目錄を作つて貰ひたい。さうして落札値段迄示して貰つたら、書史編纂に心掛けてゐる

者ばかりでなく、學問をする人々に取つても、大した參考となるであらう。値段迄出すことは迷惑なら、書目だけでも列擧して何かの雜誌にでも寄せて貰ひたい。目錄以外に私の知つてゐる貴重書も五十部や百部でない。目錄にはありふれた漢籍や佛書や近松の丸本などに一行を與へてあつて、古說經や、古淨瑠璃や、古狂言本類は載せて無かつた。昨年十二月十七八日兩日の古書卽賣會で人目をひいた「木やりづくし」といふ十幾丁位の小冊子、たしか赤表紙で、挿繪は二三面位であつたと思ふが、賣價五百圓也に驚いて、手を引込めた者が多かつた。私も其の一人であつたが、それが間も無く四百圓とかで同業者の手に渡つたさうである。それなんかも目錄には載せて無かつた。東京から行つた者では、村口書店の外に、下谷の竹田書店や吉田書店の手に落ちたものにも珍書が少からずあつたが、それも多くは目錄に載せて無かつた。其の中に私が先年借用した書が幾冊となく混在してゐるので、愛惜と熱望と怨恨と慨嘆といろ〳〵の念ひの下に一覽したことであつた。其の十幾冊かを手に入れる爲に、金策に散々奔走した上、家族に着替の衣類を買つ

てやれなかつたなど、餘程昵近の間でも本當にしさうも無い程の苦痛をなめた。吹聽ではない、愚痴である。震災後どうやら藏書家が貸惜しみをする風が增大したと聞いては、無理な工面をしても買はなければならぬのである。目下の私は官立學校の敎員を勤めてゐる身であるが、どこの學校にも圖書購入費が少くて、珍恠本の二三冊を買入れるとしたら、他の科の擔當者に迷惑を及ぼすことが大變だといふのが現狀である。

平出本の目錄を見た時、是非ほしいと思つたものは桂川地藏記といふ寫本であつた。これは應永年中の著で、前田侯爵家に結構な古寫本があり、史籍集覽にも收めてあるが、讀みにくい箇處があるので、參考用に手に入れたかつたが、それは橫へそれて入札には廻らなかつたとの事であつた。これに次いでは今源氏六十帖であつた。これは近松門左衞門が元祿二年に京の都萬太夫座の爲に書下した狂言繪入本で、二十幾年間もさがしてゐたものであつた。水木辰之助の當狂言として名高い猫の所作のあるものである。それが幸に石田元季さんの一方ならぬ盡力

の下に、知人の有に歸することになつて、早速一讀させて貰つた。古活字本や古版地誌、擬古物語や西鶴物にもほしいものは幾十部かあつた。あつても高嶺の花であつた。いや見ることも出來ず、風のたよりに想像して見るだけである。



古書典籍類が富豪の手に買入れられることは、學問や藝術の進歩を妨げない範圍に於て、決して問題とすべきで無い。たとひそれが所有慾を滿足せしめる爲であつても、獨占の誇を示したい爲であつても、富者の權利として强ちに非難すべきものではあるまい。購入者自身も確にさう考へてゐるであらう。古書賣買者が富豪へ持込む物は必ず稀覯品で、半ば以上骨董として扱ふべき物の部類に屬する。慶長板や嵯峨本、遡つては五山板、古筆古寫本古寫經といふが所謂硬いもので、繪卷物や繪入淨瑠璃本・好色本・浮世繪本、演劇や歌謠關係書といつたものは軟派と稱せられて、是が金廻りのよい、さて忙しくて、時々披いて見る時間を割り出し得ない人人に喜んで買はれてゐるのが現狀である。さうして、それが價をどこ迄高くする

かわからない所の一大原因を爲してゐるのである。

これが果して學問や藝術の進歩を妨げないであらうか。所有者は恐らくかういふであらう。「然るべき人の紹介の下に來い。快く見せもするし、貸しもしよう。決して學問や藝術の妨をしてまでも所有慾や獨占慾を滿足せしめようとは思つてゐない」と。如何にも結構な公開的態度だが、さて愈〻それを拜見させて貰ふといふことになると、場所と時間との上に制限を附せられて、四五時間が極めて大切な學究や學生等には、其の恩賚を享受し得ない場合が多い。或所有者は貸すべき義務を有してゐないと放言したと聞く。勿論さうでもあらうが、物によつては貸すべき義務があるともいへさうに思ふ。唯一無二の原稿本などは、貸さないなら、何とかして公開すべきが至當である。書畫類ならば、相當な設備の下に、衆人に縱覽せしむべく、美術館の一室を借用しても、一日によく幾百人にも觀覽の便を提供することが出來るが、書物だけはさうはゆかぬ。一人が一冊を手にすれば他の幾人は全く袖手傍觀するよりほかに策はない。こゝにそれを救ふ手段として古書の

複製を希求せざるを得ない。

富豪にしても、せめて其の藏が幾千冊にでも達しない限りは、圖書館を健てて特志者に觀させることはしまい。しかし其の幾千冊に達するは十年二十年を要して、其の人の生存中には實行されないであらう。其の子は必ずしも父の趣味を繼承せず、折角の蒐集は便佞者の甘言裡に四散して、學究連に憤懣せしめないとも限らない。さうしてそれが何の禍にならないとも限らないであらう。そこで望むことは、どうか所有慾の一半を公開慾に轉じ、十分なる用意の下に複製を遂げて、なるべく廉價で頒布するといふことにして貰ひたい。まことに勝手な申出だが、さうして貰はなければ、古版や珍書を資料にすべき、近代の民衆文學や民衆藝術の研究は完成されさうも無い。稀書複製會古典保存會を始として、何々刊行會なるものの經營の下に、月々複製はされても、五百以内の會員に頒つもので、それからの收入によつて幾名かの關係者が衣食しなければならぬので、肝心の價が下らないので困る。此の意味に於て前田侯の尊經閣叢書刊行の美擧を讃歎したいと思ふ。

一宵の佳會に幾萬金を費さうとも、それには誰も異議を唱へまい。富豪の消費は一種の調和増進である。しかしながらそれを古書複製頒布といふ質實な方面に轉じてもらつても、決して調和を減退せしめる所以でなく、譏よりは譽を遺すことになる。此の位のことは、世間知らずの學究がいはずとも、十分御承知のことであらう。けれどもそれを事新しくいはなければならぬ程に、古書の價が騰貴して、學藝の研究者が忍耐しきれなくなつて來たといふことと、時々怨恨や憤懣の聲が聽かされるやうになつてゐることをお知らせ申したいのである。（大調和所載）

（追記）

朱雀遠目鏡は稀書複製會から、又前田家所藏の桂川地藏記は尊經閣叢書として刊行せられました。又前述の小歌揃には落丁がありましたのを他本によつて補つて、私の日本歌謠集成の中に收めました。

著者既刊歌舞演劇研究參考書目錄

〔著　作〕

淨瑠璃史	一卷	明治三十三年十二月
近松世話淨瑠璃詳解	一卷	明治四十年一月
歌舞音曲考說	一卷	大正四年八月
日本歌謠史	一卷	大正十五年一月
名曲選	一卷	大正十五年六月
日本演劇の研究	第一集	大正十五年七月
日本演劇の研究	第二集	昭和三年六月
日本歌謠集成	十二卷	昭和三年四月――四年六月
民謠童謠論	一卷	昭和四年三月

〔校　訂〕

近松門左衞門全集	十卷	大正十一年八月――十三年一月
元祿歌舞伎傑作集	二卷	大正十四年六月
近松歌舞伎狂言集	二卷	昭和二年九月

【附錄】

第二の元祿時代

これは大正九年の好景氣時代に、東京市の松阪呉服店から、其の店員幾百名に、興味本位の修養談をしてくれと依頼されて、演べた時の筆記である。大震災後、殊に昨今のやうな不景氣な時に於て、呉服店員にかう話したら、奇異な感を抱くかも知れないが、當時に於ては少からぬ同感を呼び起して、他からも求められて繰返したことであつた。

1 元祿時代の意義

德川家康が天正十八年を以て江戸城を立てた當時にあつては、後世四里四方と稱する江戸の町も誠に淋しい處で、今の下町一帶は潮入りの荒地、いはゆる葦原(よしはら)で、城下にはたつた百戸許の人家があつただけだと申します。それが、家康の勢力が加はると共に繁昌し出して、一年ましに軒並は美しく賑やかになつたのですが、其の江戸創建の際に、先づ此所へ移住したのは、當店に因縁の深い伊勢の國の商人で、

あつて、彼の江戸に多いものは「伊勢屋稻荷に犬の糞」といふ諺のことは最早此の時に起つてゐるのだと申します。

德川の勢力は三代將軍家光に至つて確定しました。やゝもすれば面倒を惹き起しさうな諸外國との關係は、貿易だけに限ることにして、それも長崎港だけですることに定め、當方から外國に向つて出かけて行くことを嚴禁してしまひました。これが名高い寛永の鎖國令であります。其の後諸大名は、其の家の古老が死ぬと共に、太平の美酒に醉ふやうになつて、幕府の命令には善惡共に隨ふことになりました。自然戰爭がなくなつて、一般に農工商が落ちついて家業に從事することが出來ましたので、生産が一年ましに增加し、慶長以來掘り續けた金銀の山では絕えずよい鑛脈に掘り當てて、金銀貨がどし〳〵と造られ、それが世に流通貨幣となつて現はれましたので、自ら一般のくらし向きが派手になつて、衣食住の上に前代未聞の豪奢を極めることになりました。それと共に文學や藝術も榮えることになりました。世にいふ元祿時代は實に此の最高潮時であります。

元祿といふ語には廣狹の二義があります。狹くは五代將軍綱吉時代の元祿十六年間をさしますが、廣くは其の前後十年ばかりに亘つて、上は延寶から下は正德あたりに至る迄の四十年間を元祿時代と申します。今諸君が元祿模樣といひ、元祿袖といひ、元祿踊といふのは、皆此の廣い意味の時代に行はれたものといふ意でありります。さうして私が此所で申す元祿もやはり其の廣い意味であります。

2　元祿時代と現代との類似點

元祿は町人全盛の世でありました。都會全盛の時でありました。祿高の定まつてゐる武士の困窮な時でした。遊里や芝居が榮えた時代で、敵討が減じて、心中のふえた時代でありました。人でいへば、初代の市川團十郎や坂田藤十郎、水木辰之助や芳澤あやめ、此等名優の出た時代であり、音曲界には竹本義太夫の出た時代、小說家には井原西鶴・江島其蹟、淨瑠璃作者には近松門左衛門、俳人には芭蕉、畫家には菱川師宣・尾形光琳・英一蝶等の輩出した時代であります。詰り平民的藝術の榮

えた時代で、町人が金の威光で勢力を有した時代であるが、押しならしては武士も百姓も町人も相共に太平を樂んだ時代であります。もつと穿つていへば、成金連が衣食住に贅澤を盡した時代、それが一代か二代かで多くつぶれた時代、衣服の模樣や色合などの流行の變遷が急激であつた時代流行のもとは遊里や劇場にあつた時代、金銀貨がどし〳〵と外國へ流れ出して、緊縮の必要が目の前に迫つて見えた時代であります。成金などといふと、如何にも現代風に聞えるかも知れませんが、元祿時代に成金のあつたことは事實で、それは大阪に多かつたやうですが、多くは銅山・鐵山・漆屋・舟問屋・土地家屋の賃貸借や賣買等による成金で、元祿元年に出た日本永代藏といふ書に「近代の出來星商人、三十年此方の仕出しなり」とありますから、やはり此所にいふ元祿時代になつてからの成金であります。

から申したら現代が如何によく元祿時代に類似してゐるかが御了解になりませう。現代は實に鐵成金・船成金・石炭成金・土地成金の時代で、此所に第二の元祿時代といひましたのは申す迄もなく、現代を指したのであります。日露戰爭後の日

本わけて世界大戰爭後の日本は、實業家の時代で、都會全盛の時代で、官吏教員軍人は貧乏で、遊里や芝居は際限もなく繁昌して、女優が歡迎されて、富豪は人の思はくも構はず贅澤をして、衣服の模樣は派手で、流行の變遷が劇しくて、女は老若共に白粉を濃く塗ることが行はれて、成るべく人目をひくことに骨を折るやうになつて、商取引の上では投機が盛んで、戰爭が止むと直に輸入超過で、金銀貨がどし〳〵外國へ流れ出しさうで、如何にも以て元祿時代に類似してゐるのであります。

近年機械工業が勃興して、機械を買入れる資力のある者が工場主となり、其の機械を運轉する者が雇人となつて、一は資本家と呼ばれ、一は勞働者と稱へられて居るが、近頃其の勞働者が、俄に勢力を得出して、世の有樣は一變しさうです。これも元祿時代に町人が俄に勃興したと同じことで、元祿時代と現代とは飽くまでも類似してゐるのであります。

しかし元祿は流石に趣味の時代で、床しい處があるやうに思ひます。若い婦人は人目をひくやうに惣鹿子の振袖を着て外出するにしても、脚布(きやふ)には鉛のしづを

着けて、裾の開かないやうにしたと申します。それを今はどうでせう。四十近い婦人までが、緋縮緬や紅羽二重ではない、メリンスの赤い襦袢を見せたいのでもありませうか、外八文字ではない外わくで、大股に歩いて、成るべく裾を開いて、人目をひくやうに、男の情を挑發するやうにと致してゐるのを多く見受けます。これはほんの一例ですが、趣味に於ては、現代はまだ元祿時代程純熟してゐないやうに思ひます。元祿と現代と違ふのは此の點であつて、世界共通の今日に、元祿の如き趣味の固定を求めるのは無理なのでもありませう。さうして大正の御代の和洋折衷の新趣味は、今より二十年三十年後に求めなけ



元祿人行樂

ればならないのかも知れません。よつてそれはそれとしまして、今日は特に元祿當時の商人の生活や、成功談や失敗談の中から、趣味のあるもの四つ五つを述べて、それを聽者諸君に然るべく現代に引合せて御一考を願はうと思ひます。元祿當時の財政・經濟・商取引等に就いても、申せば申すことも



圖（五人女）

澤山ありますが、何れも數字や計算を要しまして、話は趣味本位にしてくれと申されたた御注文にも違ひますし、又私自身の不得手な事にも屬しますので、元祿當時の商人の生活を描寫した小說の中から例を拾つて、成るべく趣味のある話で、しかも當時の實相に觸れたものを申し上げようと思ひます。

3　元祿商人の驕奢と現代實業家の豪華

元祿時代は今申した如く、都會全盛の時代で、都會といへば三都が主で、その三都にもそれ〴〵の特色がありました。京都はどうしても公卿や社寺が主で、大阪は商人本位で、江戸は武士と町人とが對立してゐたのであります。けれども元祿時代の三都を代表するものは、やはり町人で、大名氣質を帯びた江戸の町人と、金の爲には隨分何事をも忍ぶといふ大阪町人とが、此の時代の金の勢を代表するのであります。井原西鶴の世間胸算用といふ書に、年の暮に迫つた江戸の繁昌を寫して、「錢は水の如く流れ、白銀は雪の如くで、日本橋の人通りは百千萬の車が轟くやうで、魚市の賣上高を見ては、かう捕つてよく海の魚が盡きないものだと思ひ、須田町の青物市場へ運ぶ大根はまるで畠が歩いてゐるやうである。盤切の唐がらしは秋の最中の龍田山を武藏野へ移したやうで、麴町や瀨戸物町の鴈や鴨は雲が地へ下りたやうに見える。本町の呉服物、五色の京染、屋敷模樣の散し形を四季一度に眺

めるのは姿の花の色香ぞかし」と敍して、「諸職人が年末の買納は雪踏と足袋だが、宵の程に一足七八分の雪踏が、夜中過には一匁二三分になり、夜明頃には二匁五分にもなるが、買ふ人ばかりで賣る人がない。一年、橙一つで金二歩した事がある。それでも高いといつて買はない人はない。京や大阪では如何に祝儀用の品でも、相場違の物は決して買ひはしない」などと記して居ります。金二歩は今の十圓程に當ります。橙一つが十圓などとは、ちと誇張が過ぎてゐようかと思ひますが、江戸の人と上方の人とは、大阪在住の西鶴によつて斯樣に說明されて居るのでありります。さうして西鶴はこれだから江戸の町人を大名氣質だといふのだと附記して、京や大阪に住馴れて氣の小さい男でも、江戸へ來ると忽ち其の氣になつて、錢もよんで見ないやうになり、小判も秤にかけて見ないやうになると述べて居ります。といへば京や大阪は江戸と全く違つて、誰も彼もしみつたれであつたかといふに、決してさうではなかつたのであります。江戸の紀國屋文左衞門や石川六兵衞等がやつたやうな驕奢は淀屋辰五郎や難波屋十右衞門等が致してゐたのでありま

す。紀文は江戸の本八町堀一町を占めて、宏大な屋敷を構へ、疊屋七人を常雇にして置いて、一度客を通した座敷は直に疊の表替を致したと申します。此の一つで他の衣食の上の奢り工合もお分りになりませう。俳人の其角等を取りまきにしての吉原遊は名高い話で、其の子の代に身代限をしたことも世人の聞知る處でございます。淀屋の贅澤はこれに勝る程で、此の當時に於て、壁や天井をガラス張にして、それに水をたたへて金魚を放すといふやり方、幾十かある書院造の座敷には渡り物の氈を敷詰め、器具調度は金銀づくめで、一切皆名工の作品といつた驕りぶり。これも新町狂をして三代目につぶれてしまひますが、彼等の奢の上にも、江戸と上方との氣質の相違は明瞭に現れてゐます。詰り江戸は目立たない處に金を使ひ、上方は成るたけ見える處に金を使用したといふことになります。元祿時代に於ては、現代よりももつと江戸趣味と上方趣味とは明に分れて居たやうに思ひます。上方の難波屋十右衞門の妻と江戸の石川六兵衞の妻とが、衣裳比べといふ前代未聞なことを致しました。此の彼等二人の服裝の上にも、上方趣味と江戸趣

味とはあり〱と區別されてゐます。

當日難波屋の妻は、緋綸子に金銀絲で洛中の圖を總縫にさせた上着を着て、多くの侍女にも極めて派手な着物を着せて、約束のあたりを逍遙して、思ふ存分都の人の目を驚かしたが、待つても〱相手の石川の妻の姿が見えない。とてもかなはぬと見て逃げたのであらうかなどと噂をしてゐる處へ、石川の妻が女中を一人つれてやつて參りました。尋常一樣の黑羽二重の上着に、南天の立木の模樣があるばかりでございます。見物の者迄が、石川の妻は聞きしに劣つた見すぼらしい姿、金をかけぬにも程があると、さげすみ乍ら近寄つて見ますと、驚いたりな南天の實、其の當時に於ては一粒をだに得難い古渡の珊瑚珠、それを成るべく人目に立たぬ樣に裏から覗かせてあつたが、其の數は幾百とも知れぬ程着けてあつて、名人の工夫に成つたと見えて一向うるさくない。南天もやはり名畫工が苦心の末の圖だと見えて、石川の妻の身の形にしつくりと合致して、何處に一分の隙もなく、見かけは質素で、實質は豊富で、おまけに味があつたので、誰一人異議を稱へるものがなく

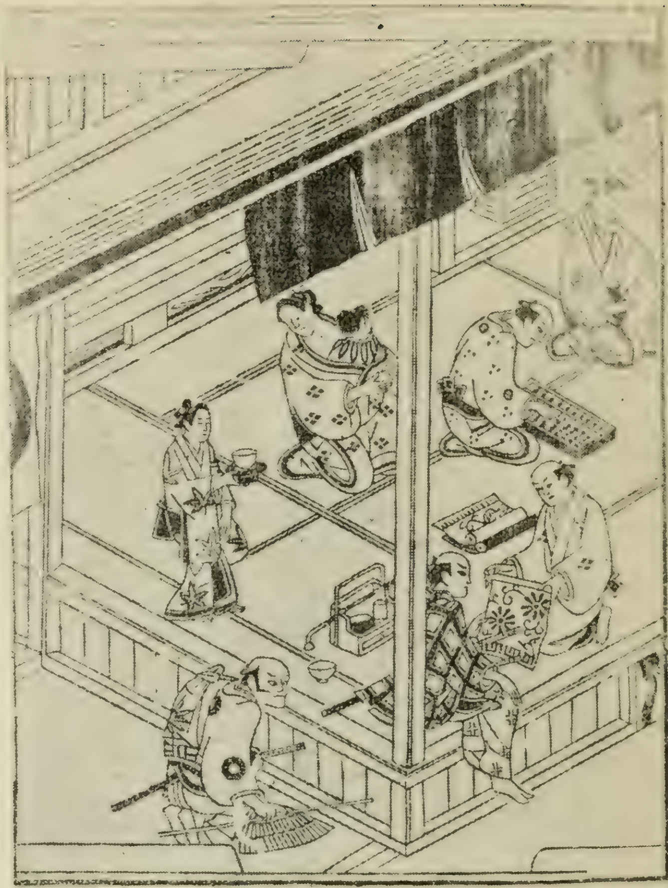
て、石川の妻の勝になつたといふことであります。江戸は全く底いたりで、着物の裏に金をかけるのを自慢にしたのであります。これは江戸の町人が武士と對立して氣性を研いた爲に得た所の氣質であつたらうと思ひます。此の相違は今もまだ多少あるやうに思ひます。一二年前に大阪での話だとして人から聞きましたが、或成金が千兩振舞だか千萬兩振舞だかをする時に、生きてゐる鯛を水をたたへたガラス箱に入れて引いたといふことであります。又或者は客一人前の料理に七十幾圓かを投じたことを自慢にし、床の掛物には五千圓出したとか一萬圓出したとかいつて誇るので、それは誰の筆かと聞いたら、買ふ時に骨董屋から聞いたが、何でも伊達樣だか仙臺樣だかのお庫にあつた品だといふことで、繪かきの名は忘れてしまつた。大幅で、色が澤山ぬつてあつて、何しても綺麗なものだと答へたといふ話も傳聞致しました。いやはや元祿の出來星其の儘であります。東京は流石に違ふと人は申します。幸にしてこれと違へば多少なりとも江戸趣味が東京に遺つてゐるものと見てよからうと思ひます。

元祿時代は豪商ばかりでなく、中通りや小前の者迄も小成に安んじて身分不相應な生活をしたものであります。此の當時に出た日本永代藏に、總じて大阪の金持商人が何代か續いたことはない。大低三助や吉藏の成上りで、そいつらが金持になると、忽ち詩歌・鞠・揚弓・琴・笛・鼓・香・茶の湯と、いやに高尙ぶつて、昔の片言もなくなるが、さうなれば金もなくなると說いてゐますし、新永代藏といふ書にも「嫁とり頃の息子のある家では、まだ十分住める家を取毀して新築したり、諸道具をかへたり、下女下男の數をふやして、富貴に見せかけ、よめの持參金をあてにして商賣をしようといふのだが、其の心根は實に恥しい。世間の見えばかりに送迎の駕籠の數をふやして、一門緣者の奢比べの果は、無用の物入りが重つて、程なく穴のあく屋根を葺くことは出來ず、家の破滅の基となつてゐる」と記して居ります。よめの持參金は特に上方に多かつたものらしく、贅澤のあげくにはみんな之を喜んだものと見えます。當世はよめを呼ぶのでなくて、金を呼ぶ積りなのだから、塗長持には銀、雜長持には錢を入れてやるがよい。なあに娘の顏などはどうでもいい。少々蟻

燭の火では見せにくいやうな顔だつて構ひやしない。持參の三十貫匁今の一萬圓)に花が咲いて、結構花嫁御樣ともてはやしてくれる。頬先が飛び出してゐる圓貌も見よくなるだらうし、額が突出してゐても、被衣の着振がよいものだ。何さ髪の少いのは夏涼しいし、腰の太いのは裲襠（うちかけ）を不斷着てゐればよいさ。爪外れの逞しいのは、取揚婆の首筋へ取りつくにいいと、十難を一つ一辯護してくれるものだ、金、金、金に限るといつたやうな事が此の當時の書に見えて居ります。さうしてどの家も〳〵唐樣で書く三代目なら



立身大福帳



（元祿十六年刊）

よいが二代目の時に書いてしまつたやうであります。やはり永代藏に「町人も親が儲けて遺した金の利息や代代の商賣で、此の世をうかかと暮して、二十前後から入りもしない竹の杖をついて頭に置頭巾をして、後から長柄の傘をさしかけさせ、世間の思はくをも考へぬ僭上者が多いが、如何に自分の金を使つてすることとは云ひ乍ら、天命といふことを知らないといふものだ。人は十三歳迄は辨へがなく、それから二十四五迄は親の差圖をうけ、其の後は我と我が世をかせいで四十五迄に一生の家を堅めて、それから遊

樂をすることに極つてゐる。それを若隱居だなどと稱へて男盛の勤をやめ大勢奉公人に暇を出し、外に主人を取らせて思ひもよらぬ苦勞をさせるが、町人といふ者は下々を引立ててやるのが肝心だといふことを知らないと見える」と慨歎の意を述べて居ります。一體人間は働ける間はたとひ八十になつても九十になつても働くべきで、常に向上進取の念に富んで居つて、決して小成に安んじてはならないのであります。それを夫が此の通りなら、其の妻も妻で、何れも家政内助を疎かにするやうになるのは自然の理で、やはり同書に「當世の商人が身代を潰すのは多くは内儀のわざである。たとへ外に心があればといつて、我が夫より外には親しい詞を交してはならない身でありながら、身なりを浮氣に見せかけ、髮を茶屋女風にして、八文字をまねて鰐足に歩き、すわらない腰をそりかへつて歩くのは、まるで土佐繪に見る女其の儘である。しかも芝居を度々見物して心を淫奔にし、無粋な癖に流行詞を使ひ、役者の紋を櫛につけ、流行の繪草紙を世間憚らず買に出し、遊女模樣の染小袖を着ちらかして、家の世帶のことには手を觸れず、身嗜に一日かけて

出入の者にもろく／＼挨拶をせず、酒を飲みながら三味線をならし、兎角身を責る者の眞似をして、召使の者の身持まで惡くするが、さて／＼こんな女房を持つた者はどうしたつて借錢の淵にはまる。そんな女房はいつそのこと暇を取つて里へ歸るがよい。どうせ淫奔の名を立てずにはすむまい」と、目前に見るやうに叙して居ります。元祿時代には、實際こんな生活をした商人があつたのでありますが、現代にも隨分あるやうに思ふのであります。世話女房といはれ、世帶染みたといはれることを嫌つて、年にも似合はぬ派手姿、女優や藝者の眞似に憂身をやつして、芝居や小説に耽る位ならよいが、どうかすると、芝居の中の濡役をも勤めて、自ら進んで小説中の人となる妻君連もあるやうに思ひます。男子の遊惰放蕩も固より宜しくない。又女の虚榮心も亦甚だ宜しくないもので、これが爲に家産を失ふ者の多いことは申さずとも諸君は熟知して居られるでありませう。

元祿時代は町人と其の内儀ばかりでなく、其の娘にも同樣な身持の者が多かつたと見えて、世間娘氣質(せけんむすめかたぎ)といふ書の卷頭に「男を尻に敷金の威光娘」と題して其當時

の娘の心持や態度を描いてこんな事を申して居ります。「昔は律義千萬なのを娘氣質といつたが、近年は人の妻も娘もおとなしくない。傾城遊女や芝居の女形の眞似をして、帯を胸高にしめ、男のやうに袖口を廣くし、腰を据ゑて裾を蹴出して道を歩くが、人に見られることを心がけて、自分の身を自分の勝手にせず、脇顔に生れつき痣のあるのを隱すやうにしたり、足首の太いのを裾を長くして隱したり、口の大きなのを急にすぼめて見て、いひたい事をいはず、思の外に苦勞をするのが今の女である。つれ添ふ男さへ勘忍したら、鼻の穴の內つらまで磨をかけないでもよからう。一體當世の娘の風俗がしやれ過ぎて、遊女のやうに見えるのは、母親の鼻先知恵の結果である。娘が十人並の器量だと、目立つ着物を着せて、人立の多い寺社へ連れて出て、浮氣男の見かへるのを悦んで、恐らくこんな娘はあるまいがと鼻を高くする母が多い。これはまださう憎い程の者でもないが、十三を頭に五人も子供のある母が、悉皆遊女の身なりをして、母様行かうと、後を追ふ子を內に殘して、子どものないやうな顔をして、人に見られに行くものがある。これではたとひ心

は貞女であつても、浮名の立つのは止むを得ない」といふことを長々と述べて居ります。斯樣な女は京都ばかりでなく、大阪にも、江戸にも、名古屋にも、金澤にも、和歌山にもあつたことと思ひます。現代にかやうな妻君や娘の有無は一に諸君の御判斷に任せます。若し其所此所にあれば、慥に第二の元祿時代だといつてよからうと思ひます。現代の實業家の一般が、他の職業に從事する者に比して、生活の餘裕のあることは事實で、人目をひく奢は必ず實業家のすることになつてゐますことは、やはり諸君の御承知の通りです。最近に於ても娘のよめ入仕度に何十萬圓を費して、紋服は六十襲、丸帶が百本で、中には一本で五千圓もかかつたのがあるといふことであるが、大呉服店の店員たる諸君は、私が申さずとも委しく御知りの事であらうが、單に衣服の上からいつても、現代の實業家の多數は、元祿時代と同樣に豪華を極めて居るのであります。豪華を極めることの可否に就いては、私は何とも申しません。現今の如く物價騰貴を人々の叫んで居る際には、たとひ幾千萬圓の財產のある富豪でも、相當に遠慮をするがよいといふ位にして置きます。もつ

といひたいのですが、諸君に取つては大事な御得意様で、かういふ人があるので、一時に利得を收めるのだといはれてしまへば、もうそれ迄です。けれども利得を一時に收めようとすることの危險で、やゝもすれば德義に外れるやうな事をしなければならないことは諸君も御承知であらうし、そんな事までしてはならぬ事も知り悉して居られることでございませう。

4　粗製濫造

商家の主人並に家族が遊惰に日を送つたのは、全く小成に安んじたのであつて、いはば島國根性の發露でありますが、これが對外關係に迄現はれて、輸出品の粗製濫造となつたのでありました。やはり日本永代藏に「外國人は約束を違へることはない。絹物に奥と口で品質の違ふやうな事はしないし、藥種にも他の品を交へるやうな事は決してしない。木は木、銀は銀で、幾年たつても變らない。然るに、ひすらこいのは日本人で、次第に針を短くすり、織布の幅を縮め、傘にもろくく油を

ひかず、價の安いので人をひきつけて、賣つた後はどうならうと一向構はない。小さい箱に入れた外國行の煙草が、一年非常に注文されて、大阪で製造したが、知れはしまいといつて、下積にはうんと手拔きをして、おまけに水に漬けて送り出したが、煙草だから溜らない。航海中に堅まつてしまつて、用ひることは出來なかつたが、其の翌年に又十倍からの注文があつた。慾に目のない商人は我遲しと爭つて製造させて、濱へ積上げさせたが、外國商人は幾日か受取らず、去年の煙草は水でしめされたが、今年も湯か潮につけて見たまへといつて、みんな突返したので、山と積んだ煙草は其の儘磯の土と化した」と記してあります。恐らくこれは事實であつたらうと思ひます。

元祿は鎖國時代ですから、小成に安んじて、島國根性を出しても、まだ〳〵恕すべき點もありますが、大正の現時に於て、それが盛んに行はれるのは實に慨歎に堪へないのであります。今回の戰爭中にも、露國へ輸出した鉛筆の中には、木軸の兩端にだけしか鉛の心のないもの、甚だしいのには全く鉛の心がなかつたといひます。

マッチ類にも同様なことがあり、インキにもこんな事が行はれて、使用に堪へない物がどつさりあつたと申します。南洋方面への輸出にも粗製が行はれて、糊着けの靴、コテで外見を整へた靴下・シャツ、おまけにそれの染料が惡いので、二三日用ひると褪色するやうな物が隨分あつたと聞いてゐます。腐敗した罐詰、途中で壞れる玩具、糊で體裁を作つた反物等一々擧げ切れない程であるといひます。

見本と少し違つても信用に關するのに、これでは純然たる詐僞で、我が國の商品が兎角外國市場で不評判なのも眞に尤な次第であります。現代の如く世界各國が競爭してゐる際には、需要者に選擇の自由があることを知らず、自己一人の目前の利にのみ走つて、國とか永久とかいふことに就いては、何事をも考へない所の結果であります。折角今回の戰爭中に獲得した商業上の勢力が、此の事の爲に失はれないとも限らない。

獨逸の商人は始から擬物安價品と銘を打つて出して、英國其の他の高價品を壓倒して行くといひますが、此の方がずつと男らしくて、むしろ我等日本人のやるべ

き仕方だといふ說(現今の實業道德所說)がありまして、私はこれに同感なのであります。南洋では狡猾な歐羅巴人は自分の國の粗惡な品と優良な品とを並べて、店先に飾り、其の粗惡品に日本製と銘を打つて、我が商品の信用を傷つけてゐると聞きました。これは我が國の製作品に粗製濫造の、弊の伴ふのを利用したもので、我が國に取つては、身から出た銹とはいひ乍ら、實にいまいましいことではありますまいか。

5 現金小賣業者の成功

元祿時代は流石に鷹揚で、商賣も多くは掛賣で、小賣といふことは餘り發達してゐなかつたやうであります。太平の美酒に醉つて、諸人が身分不相應に贅澤をした時ですから、後先構はず掛で買ふことは買ふが、支拂が惡いので、賣主は買入れの利廻りだけも受入れることが出來ず、爲に破產した者も澤山あると當時の書物に載せてあります。此の時吳服業者で「萬現銀賣掛値なし」で成功した者があります。

それは三井九郎右衛門で、日本永代藏にかう書いてあります。「九郎右衛門は江戸の駿河町へ表九間に奥行四十間の店を、棟を高く長屋作りにして、萬現銀賣に掛値なしと相定め、四十餘人の利發な手代を使用し、一人づつ分擔をさせて、たとへば金襴類に一人、日野郡内絹の類に一人、羽二重に一人、紗綾に一人、紅絹に一人、麻裃類一人、毛織物に一人といつたやうに手分をして、天鵞絨一寸四方でも、毛抜入の袋を造るだけの緞子でも、袖口にするだけの龍紋でも面倒がらずに賣つた。殊に武士が取急いで御目見えをする時の熨斗目や羽織などは、使の者を待たせて置いて、常雇の仕立方數十人がかりで即座にこしらへて渡した。こんなやり方をしたので、忽ち繁昌して、毎日金子百五十兩づつ均しに商をしたが、此の九郎右衛門を見るのに、目も耳も手足もすべて人並で、別に人と變つた所がなく、職業の上に於てのみ敏活である。大商人の手本といふのはまづこれであらう」と載せてあります。今日でいへば、一種のデパートメントストアですが、九郎右衛門は世の需要を見ぬく眼を有してゐたのであります。さうして此の人は身の儉約と生業との外には一向蕩

落氣のない極めて堅實な男であつたと見えて、新日本永代藏といふ書にも「三井某は二十年前迄は自分で袋をかついで、西陣へ買物に來たことは、人のみんな知つてゐることである。其の時分から他の絹買とは違つて、朝早く出て、暮に遲く歸り、芝居遊山には一度も行つたことはなく、祇園の土を草履に着けたこともなく、島原の門をくぐつたこともない、千貫目今の二三十萬圓の身代になる迄足袋をはかず、萬事儉約と勤勉とで、一生に五六千貫目の身代になつて、大商人の卷頭に据ゑられるやうになつた」と記してあります。實に脇目も觸らぬ勤勞の結果であります。

6 買占

然るに元祿時代一般の遊蕩の氣風は、手代若者にも身を持崩させて、品物の仕入れより前に、あぶない所へ入り込み、一杯やつた末には、仕入の上の秘密を漏して、遂に商機を失したやうな事は澤山あつたのでありませう、新日本永代藏にはこんな話も出てゐます。「江戸の呉服商大阪屋の手代が、大阪の北濱の浮世小路へ來て、か

ねて知合の女を呼んで樂しさうに飮んでゐる。北濱へ商業上のかけ引、金のやりくりの見覺えに來てゐた岡屋某が、壁に耳を寄せて、二人の話を聞くと、手代は今度お江戸にお悅の事があつて、諸大名から卷絹を献上になる。卷絹は追付直段が上がる。それを少し譯があつて、うちの親方が早く知つたので、上方にある唐織の買占をして、御用の節にうんと高く賣つて大儲をしようといふのだ。先づ京の品から買占めることにして、今夜夜舟で上る筈だが、まあ久し振だから一杯やつて、夜が明けてから上ることにしよう。大分の買物をするのだ、二百兩や三百兩の私商をしても心配はない。どうせ儲かるにきまつた事だ。其の時は一所にならう。其の前祝だといつて、ぱつぱと鼻紙入を出して金をまく。岡屋は此の樣子を見て、即刻夜舟に乘つて京都へ行き、かねぐ＼用意して置いた三百兩の金で献上用の卷絹を買取り、それを大阪へ下して二百兩で質に入れて、其の金で卷絹を買ひ、それを百五十兩に質入して卷絹を買ふ、百兩で買つては七十兩に質入れして又買ひ、次第に入れては買ひ、入れては買ひして、三百兩の金で九百十二兩の卷絹を買入れました。

さて御祝言の事が知れ渡ると共に、献上用の卷絹は暴騰して、岡屋はそれを三千二百七十兩に賣渡して大成功であつたが、それから次第に思入れが當つて、北濱に備前屋といふ大店を出した。彼の大阪屋の手代は、かの酒盛の晩、人と喧嘩をして、小鬢へ斬りつけられ、十日ばかり傷養生をして京都へ上つたが、岡屋が買取つた後なので、織模樣が一向氣に入らない。すべて上つ方の御用の卷物は、寶盡し・獅子牡丹・唐菊と極つた物で、蓮華や仙人や落花の模樣などは、何程あつても間に合はないのである。よい事を人よりも前に知つてゐながら、一錢も儲けなかつたが、これは遊びの方に心がひかれて、油斷したからである。商人といふものは、遊ぶべき時には遊んで、働くべき所では、一服の煙草ものまない程に働くがよい」と說いてあります。此の戒は千古に通じてあやまらず、中外に施してもどらぬ處の金言であります。之を一々現代の人々に引合せて說明せずとも、岡屋のやうな成功者、大阪屋の手代のやうな失敗者は、諸君のお知合の中にいくらもある事でございませう。

扨て此の岡屋と申す男は、買占をして成功したのであるが、買占は御承知の如く

十分用心すべきもので、元祿當時の書物にも、近年商人が身代限をするのは、多くは買置や遊蕩の結果だと述べてあります。元來買占といふことは、物價を人爲的に左右することで、需要供給の關係できまるべき物の價を勝手に動かさうといふのであつて、道德上からはよろしくないことに屬します。近年米穀・藥種・反物・其の他に買占が行はれて、一般の需要者を困らせてゐることは、諸君もいやな程知つて居られるであまりせう。かう申せば、諸君は「昔と今とでは商業道德が違つて來た。昔のやうな人情式でやれるものではない。營業は別だといふ考で、非人情だ、無法だといはれても構はない、どんなひどい事をしても、金さへ儲ければよいのだ。當節は金がものをいふ世でございましてへへ」と仰つしやるかも知れない。すればもうそれ迄ですが、それこそます〳〵以て第二の元祿時代になります。無理ではないのでせうが、商人利を重んじて名を輕んじで、遠い昔にあつてもさう、元祿當時にあつても全く其の通りであつたらしい。近松門左衞門が作つた山崎與次兵衞壽の門松といふ淨瑠璃の中に、淨閑といふ商家の隱居が、自分の息子のよめの父で

當時浪人をしてゐる者に向つて「侍の子は侍の親が育てて武士の道を教ゆる故に武士となり、町人の子は町人の親が育てて商賣の道を教ゆる故に商人となる。侍は利得を捨てて名を求め、町人は名を捨てて利得を取り金銀をためる。是が道と申すもの、如何なる大病難病も病には療治さま〴〵ある。國法で取られる命には、人蔘で行水させても、いかな〳〵助からねど、金銀では助かる」といふことがありますが、それにすつかり合するのであります。どんなに金が欲しくても、世人の恩はくといふことは考へなければなりません。如何に金がものをいふ當世でも、我利我利主義は程加減にすべきでございませう。

茲にごくひどい事をした商人の一例を述べます。近頃は書畫骨董流行で、品を引出す手段としては、隨分驚くべきことをする者もあると聞きますが、現代人のやり口は諸君の方が却つておくはしからうと思ひますから、元祿の昔から例を取つて申します。神佛詣などは思ひ出しさうにもない菊屋某が急に初瀨の觀音へ度度參詣をして、きつと御開帳を致しました。其の頃御開帳をするには、小判一兩出

さなければならぬのでありまして、人々は菊屋がよくあんな樂でもないくり廻しのうちから、一兩づつ出したものだと、其の信心の厚いのに感心致して居りました。ましで觀音樣の宿坊の人々は、奇特な仁だと申し合つて居りました。此の菊屋が或日觀音樣の御戸帳が大分古びましたので、如何にも勿體なく存じます。就きましては、新しく御寄進を致したいと、信心を面に現していひますので、坊さん達はいよ〳〵以て感心を致し、直樣京都から吳服屋を呼んで、新しいぴか〳〵するのをこしらへさせて掛替へました。すると菊屋はあの古戸帳を戴きたいと申します。何にするかと問へば、京の三十三番の觀音樣へ御戸帳にして上げますと答へたので、坊さん達は何の氣もなく渡しますと、菊屋は直に京都を指して馳せ上りました。諸君、其の御戸帳は何であつたと思召す。一端づゝ十反並べの大戸帳は、一切皆古渡の唐織で、柿地の小蔓に、淺黃地の花兎、紺地の雲鳳の類ばかりで、一寸何程といふ高價な名物裂であつたのであります。菊屋はそれを茶入の袋や表具の地として諸方へ賣りましたが、其の價は實に銀五百貫匁、今の十五六萬圓になりました。け

れども、もと〳〵體よく騙取つて暴富を致しましたので、因果は覿面、何事もあてが外れて、後には船に乘つて、燒酎や諸白の請賣をしたが、甘くても辛くても人は醉されない世で……といつたやうに述べてあります。

これ程ではありませんが、商賣は商賣だといふ考で、世人の思はくを考へない爲に失敗した者があります。大阪で銅の店を開いてゐる中島屋某が、京の大佛樣をごく安く買取りました。もつとも人は佛體を鑄崩すことを勿體なく思つて、中島屋と競爭をしなかつたので、途方もなく安い値で買取つたのであります。さて商賣でするのに、何の祟があるものかと、早速鑄崩しましたが、其の銅を買ふ者がありません。おまけに餘處の銅山から仕入れた地金まで、勿體ない扱にされて、少しも買手がなく、其の上あの男は不斷强慾非道だなどと評判を立てられて、商業上の取引はぴつたり止り、總領によめを貰はうと思つてもくれる者がなく、娘をよめにやらうと思つても貰手がないといふ始末、とう〳〵身代をつぶしてしまふと、長男は出し合の酒席で食つた鰒に中つて死んだ。其の上惡い事ばかりが重つてといつ

たやうに說いて居ります。これは決して教訓を本とした書物ではない。當時の小說にかう傳へて居るのであります。如何に利益本位の當世でも、人の氣受といふことを忘れて、非人情な事をしてはならぬのであります。

7　轉業の危險

封建制度の廢止と共に、職業世襲といふことは自然とすたれて、自由に何業にでも就ける世になりました。これは眞に有がたいことで、腕次第、力量次第で、どんな仕事でも出來ることになりました。とだけいへば、此の上もない結構な事ですが、家代々仕馴れた家業を替へるのは、餘程危險だといふことを忘れてはなりません。屢〻轉業した爲に零落した者は世間にいくらでもあります。私の知つてゐる者にも、洋物屋から酒屋、酒屋から荒物屋、荒物屋から古道具屋になつて、とう〳〵すつてしまつた者もあります。當今よりもつと一切が固定的であつた元祿時代にあつては、轉業は非常に危險であつたと見えて、こんな話があります。

大阪の大きな材木問屋の老主人が、三人ある息子の中で、一番才覺の勝れた者に跡式を讓らうと考へて、一日三人を呼んで、あの座敷の障子を明けて西南の野を見るがよい。儲かる種が見えてゐる。それを見つけた者に、此の家は讓ることにしようといひましたので、まだ二十歳より下の三人は、爭つて座敷へ行きましたが、間もなく歸つて參りました。先づ總領に向つて儲の種はと尋ねると、向ふに生えてゐる唐黍の根が、南の方へ高く生えてゐますが、あれは昔から風年のしるしだと米屋では申して居りますれば、北濱の米問屋と相談して、米を思ふ存分に買つておくがよいと申しました。次男は此の頃の天氣續きで、田畠の作物が燒けると見えて、百姓どもが井戸を掘つて水をやつてゐますが、見てゐる中に作物が生々とします。あれは掘出して儲けろといふ謎であらう。當世は人にぬかりはないといつても、奥山家へ行つたら隨分珍しい品もあるに極つてゐる。破屏風の煤けたのにも定家や西行の歌、狩野の名畫、祖師の墨蹟なども有るかも知れない。もし名物の茶器でも出て來れば、それ一つでも身代を起しますといひました。三男はと尋ねると、

私は兄さん達のやうに見極めがつきません。ただ南面の大角豆のからみついた垣に巣をかけてゐる蜘蛛は、時々飛んで來る蚊を餌にして、一向あせつて居らず。其の側の榎の木の枝から下の藪へ大きな巣をかけようとしてゐた蜘蛛は、糸筋を引きかけると、風の爲に吹き落されて、溝の中へはまつて其の儘流されて行くのを見ました。人間も此の通りで、大慾をかいて大きな事に手を出すのはあぶないから、地道にして損をしないやうに心掛けるがよいと悟りましたといひました。老人は之を聞いて、自分は六十になつて始めて運のよかつたことを知つた。若い時から慾が深くて、千里一飛の買置をして、どか儲をした事が度々ある。仕合せに當つて來たのだが、今蜘蛛の話を聞いて、身の毛がよだつた。二代目の者は手堅くしなければならぬ。上の二人は末の弟に習つて、決して買置をしてはならぬと有金二千貫目を二つに分けて、末子に千貫目と本宅を與へて材木商を讓り、上の二人には五百貫目づつ分けてやりました。さて末の息子は手堅くやりますので、ますます信用が高まつて、身代も次第によくなりましたが、總領は好きな買置をして大損

を續け、新田・鐵山・芝居、何事にでも手を出して、とう〳〵悉くすつてしまひ、小路の奥の棟割長屋に住む身となりましたが、無用の智恵有顔をして、訴訟の相談や、借金の言譯に雇はれて、虎落（もがり）といふ惡名をつけられて暮しました。　また二男は望の掘出を心がけて、道具屋連中が持込んで、正眞だとさへいへば、何でも買込みました。　三條小鍛冶の打つた鐵鍔、狩野古法眼の書いた六字の名號、利休の削つた牛の鼻ねぢ、後藤祐乘の彫つた印類のない珍物は集つたが、さて何にもならない品ばかりで、こんな物が庫一ぱいになると、銀箱がからになりました。　家屋敷だけは殘さうと考へてゐますが、道具屋連は押しかけて、古い五器茶碗を出して、是は東山殿が銀閣寺で、百服茶を立てられた時、高麗から取寄せられた品、お出入の屋敷から金五枚で賣つてくれとのお頼み、私に金があれば人手に渡さず、買取つて中の島の肥前屋へ氣永に賣れば、百兩には慥になりますが、私に金のないのがあなたのお仕合せ、お飽きになりましたら、何時でも五十兩には賣つて上げますと、旨いことを並べて五兩に賣つて行きました。　之を聞いて伏見町の唐物屋が、小さな古毛氈を持つて來て、神

功皇后三韓を御征伐の時、舟の中でお敷きになつた稀代な珍品だと吹きかけて、大分の金にして歸れば、夜市の手振の辯舌者が之を聞いて、古い紫竹杖を持つて行つて、これは神代に國常立尊が龍宮へ御來臨の時にお用ひになつたもの、人皇の御代の物ではござりませぬと、いい値に賣つて行きました。二男は狐に化されたやうに成つて、これ迄持耐へた家屋敷をも賣拂つて、終には其の日〳〵をも送りかねて、背中に三韓退治の時の古毛氈を着、左の手に銀閣寺の五器茶碗を持ち、右の手には神代の杖をついて、物貰に出たが、それでもまだ古物好の心がやまず、お助けに古錢のかはり物があつたら一枚下さいませといつて廻つたといふことですと世間息子氣質といふ本に書いてあります。

これは實によく元祿時代を現した話であります。買置や掘出しといふものは極めて危險で、ややもすれば產を破ることは昔も今も變りませぬ。家代々の職業を變更するのはよく〳〵の場合でなければなりませぬ。詰り永年の御得意と永年の信用と經驗とを悉く捨てることになるのであります。息子氣質の作者は、手

堅くやつた三番目の息子のことを「息子が智惠は上々箱入の銀持氣質」と申して居りますが、これは守成の上に成功した話で、二代三代と續くことの尠い當代にあつては、珍しい話であつたのでありませう。現代にあつても、箇人經營の商店にあつては、主人に此の心得のあることは極めて肝要であらうと思ひます。

8 驕奢の後に來る勤儉時代

以上述べたことは、身分不相應な驕奢をするな、粗製濫造は國運の伸張を妨げる。買占は罪惡である。金錢萬能主義ではいけない。轉業は危險であるといふ例話に過ぎないのであります。さうしてそれも殊更に二百年以前の元祿時代から材料を採りましたので、必ずしも現代には合しますまい。併し前車のくつがへるは後車の戒で、寓意の存する處は御了解下さつたことと信じます。如何に世が轉變致しましても、萬代不易の理法といふものがありまして、前に述べました例話に此の理法が相當に說明されてゐると信じるのであります。

近來の成金熱は人をしてます／＼買占に手を出させて、不自然極まる物價のせり上げをさせるやうになりました。世界戰爭の爲に、此の三四年間は輸出超過で、凡そ三十億圓程儲かつたであらうと申します。それを諸外國では三倍以上に計算して、いろ／＼な事を申込んで來るといふことであります。それも金が出來たからといつて、信用して申込んでくれるのならよいが、さうではなくて、暴富に對する嫉妬がもとになつてゐるらしいとの事であります。此の邊のことは、諸君の方がおくはしからうが、今年は最早輸入超過で、此の分では向ふ三四年の間に、此の戰爭中に儲けた金をみんな吐出しさうだといふことであります。

元祿時代は金銀貨がどし／＼外國へ流出した時代で、葡萄牙だけでも年々三百トンからの硬貨を持つて行つたとのことで、それを銀にすると十二萬貫目であつたと申します。慶長六年から元祿の中年迄に黄金では一千四百七十二萬七千兩、銀は目方にして百二十萬貫程貨幣を製造したが、金貨は其の半分、銀貨は其の大部分が歐羅巴へ持去られてしまつたと申します。其の結果流通貨幣が少くなつて

止むを得ず新に改鑄して貨幣の質を惡くしましたので、物價は急に高くなつて、人人は言語に絶する難澁を致すことになりました。米の如きは、一石銀百五十匁乃至百八十匁に上りました。一體銀六十匁と金一兩と引替へるのが成規でしたが、銀貨の質が惡くなつて、八十匁で一兩に引替へるやうになりましたが、百八十匁は金二兩一歩に當ります。純金にして凡そ九匁、今の相場にしたら五十圓程で、大正六年頃の米價と大差がないのであります。しかし其の價の高い原因は、元祿時代にあつては、貨幣の素質が惡かつた爲、現時にあつては、流通貨幣が多い爲で、其の原因は異なるものの、共に貨幣を尊重しない結果であります。此の物價の高いことは喜ぶべき事か憂ふべきことか、それは一に諸君の御判斷に任せようと思ひます。

元祿の後には享保といふ時代があつて、八代將軍吉宗によつて儉約令が極端に實行されました。一例をあげれば江戸の山王樣の祭の山車を出すことさへ禁ぜられました。現代に於いても今の成金全盛の次には、必ず大いに引締まる時代が來るでありませう。成金も、成金でない人も、今から十分に警戒することが必要で、

成金家にあつては人の思はくを考へて無闇な金を遣はず、非成金者は、成金者の贅澤をほんの一時だけの事と見て、無闇に羨まず、有無共に勤勉力行を心がけて、國富の充實、國運の振張といふことに力を致すやうにしたいものであります。娘の嫁入仕度に貳十萬圓を費すが如きは決して褒めた事でなく、之を無闇に吹聽するのも宜しくないと思ひます。華美豪奢は需要者にあつても節制すべく、供給者にあつてもやたらに煽り立てないやうにして貰ひたいものであります。金銀づくめ、ダイアモンドづくめの物が必ずしも高尙で優美で、而して穩健でないことは、日常衣服の地質や模樣や色合に心を用ひられる諸君の方が熟知されて居りませう。諸君、私の此の言を以て弱者の聲ときかれてはいけません。世間には弱者の方が多く、諸君の中にも相當に弱者が居られることを信ずるのであります。

終に臨んで更に一言したいことがあります。それは商店中で國民の趣味性を動かすに最も力のあるのは、呉服店が第一に位するといふことであります。近來呉服店に於ては、一切の道具類や裝飾品や食料品までも供給します。其の結果、衣

食住のすべてに影響を及すことになりまして、一般顧客の趣味を、高尚にも、卑俗にも導くやうになつて來たのであります。よつて呉服店員諸君に望むことは、國民一般の趣味を高尚な堅實な方面に向けるやうに努力して貰ひたいといふことであります。同時に又營業と道德とは別だといふ考を棄てて、人をだしぬいたり欺いたりの非人情な行爲はやめて貰ひたいといふ事であります。しかしそんな事では金が儲からない。金がものいふ當世に、そんな道學者一流の話には耳を傾けることは出來ないとおつしやれば、最早それ迄であります。それならどうか自己一身の利益といふことをもつと〳〵擴大して、せめては國富國益といふことに目を着けて下さいといふことを聲を大にして申します。（畢）

歌舞演劇講話終

昭和四年十月十五日印刷
昭和四年十月十八日發行

歌舞演劇講話
定價金四圓八拾錢



不許複製

著作者　高野辰之

發行者　大葉久吉
東京市日本橋區本銀町三丁目十四番地

印刷者　堀江關武
東京市小石川區諏訪町五十六番地

發行所
東京市日本橋區本銀町三丁目
振替口座東京二八〇番
株式會社　寶文館

關西專賣
大阪市西區阿波堀通四丁目
振替口座大阪四三番
株式會社　大阪寶文館

常磐印刷所印刷

文學博士 櫻井秀著（最新刊）

風俗史の研究

著者は我國風俗史研究の權威者であることは自他共に許すところである。風俗史の研究書は既に他にも隨分あるが本書は著者自身の研究慾のまゝに研究せしものである。元來風俗史は一種の趣味によつてなさるべきもので、研究者各自のそれ〴〵の興味に從つて其の研究も異るのは當然である。本書はこれ等諸研究家の研究に最も便宜を與へ研究の指針ともなる絶好の資料である。

菊版布裝全一册
定價金四圓二拾錢
送料金拾四錢

◇文學博士 清原貞雄著 日本國民思想史 布裝一册 定價金五圓五拾錢 送料金拾八錢

◇文學士 伊藤千眞三著 日本國體闡明史 布裝一册 定價金貳圓八拾錢 送料金拾貳錢

◇淺賀辰次郎著 日本文化の研究上卷 布裝一册 定價金貳圓八拾錢 送料金拾貳錢

◇及川儀右衛門著 國史上の思想問題 布裝一册 定價金三圓八拾錢 送料金拾貳錢

寶文館發行

文學博士 山田孝雄序 御橋悳言著（最新刊）

平家物語略解

菊版布裝一册
定價金七圓八拾錢
送料金廿四錢

本書は著者多年の研鑽に成る平家物語證註の略述でもと初學者の伴侶たらしめんが爲めのものなりと雖、山田博士が序文中に推賞されたる如く、世の所謂詳解に比して本書は寧ろ詳々解とも云ひつべきか、凡そ平家物語一部の中に事實の證據あるものはその記錄を拔き、詞句の典據あるものはその出典を擧げ、讀者の爲に解說をなすの要ありと思はるゝ語は、概念を得らるべきを程度として洩すことなく、從來の誤を訂せるものゝ僂指するに堪へざるものあり、實に平家物語詳解は本書によりて完せりといふも過言ならず。本書を讀まずして平家物語を學ぶは時代遲れも甚しく、又只に平家物語讀者に益するのみならず國文研究者にとりても必須の書たるは言を俟たず。

山田孝雄著

假名遣の歷史

日本文法界の最高權威山田博士の近著で本書は從來の假名遣の歷史中に誤られてゐる多くの點を指摘してこれを正したるもので、從つて假名遣の本質を闡明し從來誤考されてゐた假名遣の諸點を正確に認識することが出來るものである。邦語を語り邦語を書く者の何人もが必讀すべき必須の書。

菊判洋裝全一册
定價金一圓
送料金八錢

萬葉集講義 卷第一

近時萬葉集に關する著書尠からずと雖、本文語辭の解釋の穩健にして引證的確人をして言々首肯せしむるもの殆ど有る無し正確に萬葉を學ばんとする者は本書を措いて他に求む可らず。

菊判布裝一册
定價金三圓五拾錢
送料金拾貳錢

寶文館發行


EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 03027 2728